

俺の幼なじみ（響）は
ヤンデレです。

マツカーサ軍曹∠(?^?)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は戦姫絶唱シンフォギアに転生を果たした。響が幼なじみとして……

しかし、彼はその戦姫絶唱シンフォギアの知識も無く、力も無かった。そして、彼はいつものように日常を過ごしていた。

……ただ1つだけ俺でも分かることがある。

「ねえ？ りゆうくんなんで私を見てくれないの？ なんで他の女の子を見てるの？ 私だけでいいじゃん……私だけを見てよッ！」

「……どうしてこうなった」

幼なじみがヤンデレになっっていることだ……うそん。

響がヤンデレになった状態でオリ主を巻き込みながら始まる物語が今始まるッ！
……え？エロい描写？アルカモネー

《本編完結しました》

目次

無印

彼の幼なじみはヤンデレです | 1

彼は翼のCDを買わない | 6

彼は意外とびっくりすることに弱い

12

彼は流れ星を見る | 18

彼の家は色々とガバガバである

25

彼は誘拐される | 29

彼はやがて融合症例となる | 36

彼の精神はかなり強い | 41

彼のせいで物語は変わる | 46

彼はやはりヤンデレに愛されている

52

彼はいつも変わらない | 57

戦姫絶唱しない日常『運命から逃げれ

ない』 | 64

戦姫絶唱しない日常『監視デート』

69

戦姫絶唱しない日常『私の秘密』

74

G編

彼はまだG編を知らない | 81

彼はフラグ回収が早い | 86

彼は意外としぶとい | 92

彼はよく目立つ	96
彼は餌付けする	102
彼は巻き込まれやすい	107
彼は歌が下手である	111
彼は決闘の報酬になる	116
彼は食べられる	120
彼は目覚める	126
彼は違和感を感じる	131
彼は存在する	135
彼はネフィリムとなる	143
彼は人間を超越した	151
彼は雄としては立派である	157
戦姫絶唱しない日常『隆一と言う男』	

戦姫絶唱しない日常『未来のニヤン♪』	163
(前)』	168
戦姫絶唱しない日常『未来のニヤン♪』	
(後)』	173
GX編	
彼の記憶は不味い	179
彼は最短で誘拐される	184
彼はシャトーに慣れる	189
彼は選択を迫られる	194
彼は恐れる	200
彼はキャロルと過ごす	206
彼は奥の手を見せる	210

彼はラスボスとヤンデレにサンドされ	216
る	
彼は許された	222
彼はハートブレイクを起こす	227
彼は平穩を望む	230
彼は響の幼なじみである	234
彼は予想外の人物に出会う	238
彼は英雄を望まない	242
彼はただ変化を与える	246
彼は保護される	250
彼は生き抜く	255
戦姫絶唱しない日常『慣れって怖いよ	259
ね』	

戦姫絶唱しない日常『響と未来のささ	263
やかな願い：響』	
戦姫絶唱しない日常『響と未来のささ	268
やかな願い：未来』	
A X Z 編	
彼は外国に行かない	275
彼は説教される。	279
彼はどの状況でも誘拐される	283
彼は勘違いをする	287
彼はやつと真相に辿り着く	291
彼はまだマスター権限がある	295
彼は銭湯に行く	298
彼はヒッチハイクする	302

彼はやはり眼鏡に巻き込まれる

306

彼は振り回さる

310

彼は焦る

313

彼は撫でる

317

彼は首をやる

320

彼は覚醒した―に連れ去られる

325

彼は愛される

331

彼は助ける

335

彼は吸う

340

彼は謝罪する

345

彼は告白する

350

戦姫絶唱しない日常『彼女達から映る

彼』

356

戦姫絶唱しない日常『写真』

362

戦姫絶唱しない日常『ハードプレイ』

366

XV編

彼は寒いのが苦手

372

彼はお世話になる

375

彼はライブに行く

378

彼は誘拐されていた

382

彼は神様に出会う

386

彼は彼ではない何かがいる

390

彼はDSである

394

彼は名無しの神である	399
彼は信用されている	403
彼は見てしまう	407
彼は赤間隆一である	411
彼は誤る	416
彼はやつと出会う	421
彼は笑えない	425
彼のポジションは変わらない	430
彼の彼女はやはりヤンデレである	434
XD 編	
原作組との出会い	439
隆一の幼なじみはメンヘラである	

445	隆一のアイドルは独占欲が強い
448	R Y U I C H I の義理の妹は天使である
	隆一の姉弟子達は依存する
452	R Y U I C H I の博士はデレが可愛い
457	R Y U I C H I の義理の姉達はお節介
462	すぎる (前編)
468	R Y U I C H I の義理の姉達はお節介
472	すぎる (後編)

無印

彼の幼なじみはヤンデレです

? 皆さん、ヤンデレは好きだろうか……。

? ヤンデレとは、相手への好意が強く高まり過ぎた結果、病的な精神状態になってしま
うこと。もしくはそうした精神状態といった意味合いの言葉である。

? しかし、とは言ってもだ。それは相手の好意が成り立たない限りそれは起きないの
だ。簡単に言ったら猫が中々懐かないみたいなので、まあ、それは別にいいのだ。た
だ、俺が言いたい事は……

? ヤンデレは最高だ（白目

♪

? 俺の朝はいつもの縛られた手首の物を外すことから始まる。まず、それをしなければ
俺は身動きが取れないからだ。昔はガムテープやリストバンド、縄などのホームセン
ターで買えるもので何とか外すことが出来たが、最近は段々分かってきたのか、縄の中
にワイヤーを入れたオリジナルの縄で俺を縛っている。フツ、愛が重いな……

「今日はまた一段と強力だな」

——ガチャ

「あ、起きたんだ。りゆうくん」

「やあ、おはよう響。とりあえずこれ、外してくれないかな？」

「嫌ですよ。だって、りゆうくんは私がいないとすぐに他の女に手を出すんだから。いつものように私だけを見てくれたらいいのに……」

「そう言つて彼女……立花響は俺の提案を拒否する。響はそう言いながら俺に近づいてきて俺の隣に横になつて抱きつく。その後、響はいつものように俺の体を匂つて幸せそうにしながらどんどん体を密着していった。」

「りゆうくんりゆうくん……はあ、はあ……」

「響、何してるの。学校間に合わないよ？」

「ええ……ん……未来、もう少しで……私」

「はいはい。行くよ響」

「ヤダヤダヤダヤダヤダツ！もつとりゆうくんの匂いを堪能するのツ！もつとりゆうくんの匂いでイ」

——キィ、ボタン

？気がついた時には、いつからそこにいたんだと言わんばかりに響の親友であり、俺にとつての抑止力である小日向未来が響を連れてそのまま学校に行つてしまった。……

うん、いや、止めてくれたのありがたかったけどね？

「せめて、これを外してくれ……」

♪

？改めて自己紹介をしよう。俺の名前は赤間隆一、15歳だ。とは言ってもそれは肉体系年齢であり、精神年齢は23歳だ。その理由は至極簡単なことだ……それは、俺がアニメの世界に異世界転生をしたからだ。いや、じゃないとなんで俺が生きてるか分からないからね。

「あー。今日は遅刻だよ……」

？俺が転生した場所はどうやら俺が死ぬ前の友人が熱く語っていた戦姫絶唱シンフォギアと言うアニメ作品に転生を果たしたらしい。とは言っても俺は実は戦姫絶唱シンフォギアを見た事がないのだ。そして、1番の問題は友人が語っていた内容しか知らないこと……ただそれだけだ。

「おう。隆一今日は遅刻か？」

「ああ。今日はちよつとな」

？まあ、最初のアレを見た人はどう思っただろうか？どう見たって響はヤンデレになっているのだ。しかし、今の俺にとって日常と化しているのもまた事実。でも、何故響はヤンデレになっているのか、分からない人もいるだろう。

「隆一。お前また女の子と一緒にいるって聞いたぞ。そろそろリア充撲滅隊に制裁を加えられるんじゃないか？」

「いや、大丈夫。多分その団体が撲滅されるから」

？それは昔、俺はこの世界に転生して気がついた時には響と幼なじみの関係だった。しかし、俺は最初の頃は転生した時の嬉しさについて舞い上がって、自分が主人公ではないかと錯覚してしまったのだ。今思うと完全に黒歴史だが。俺は特に転生した時に特別な何かとか全くと言っていいほど無かったが、特技が1つだけあった。

「なあなあ。最近のエロゲーでさっ！最高の奴が出たんだよ」

「マジかッ！何のタイトルだよッ！」

？それはエロゲー攻略、それが俺の特技だった。友人からはこの作品がモブには厳しい世界だとは聞いていたが、まさか本当に簡単に人間が目の前で塵になって、消えてしまったのを覚えている。そして、俺は死なない為に、幼なじみである響に好意を持たせるために攻略を始めたのだが、あの時の俺はどうかしていたと思う。

「それでさっ！……っつてもう掃除終わるかよ。それじゃ帰ろうぜ」

「おう。分かった」

？最初の頃、響はあまり俺には好意を持つてはいたが、まあ友人以上幼なじみ未満な感じでそれが中学生まで続いた。そして、あの時俺はツヴァイウィングのライブには行け

なかったが、響が怪我をして入院したのだ。そして、退院した後……ここからが問題だった。

「いやー学校マジでダルいわー。しかも男子校だしよー。あー女の子と仲良くなりてえなあッ！」

「気持ちわかる。だが、俺は……」

？退院した後、響はイジメを受け始めたのだ。あの時は本当に大変だった。未来と力を合わせてイジメの主犯をなんとかしたり、被害を抑えたりと色々した。だが、ある時俺が不良グループに攫われてポコポコにされた後から響は変わってしまった。まあ、結局は何が言いたいのかと言ったら……

「りゆうくん？誰と仲良くなるの？」

「ツひ、響ッ!？」

「ツ……あ、俺用事を思い出したから……失礼ッ！」

「え、ちよっツ！逃げ」

「りゆうくん。ちよーつとお話ししようか？女の子って何？私だけで十分だよね？あ、もしかしてまたエロゲーの話？何処に隠してるのかな？……ねえ？」

俺のせいです、ごめんなさい。

彼は翼のCDを買わない

?俺は今日も、いつものように学校で授業を受けていた。俺の高校は響と未来が通っている女子校と同じように男子校である。……まあ、この学校を受けたのは響からある程度の距離を置く為があるのと、俺だけの自由な時間が出来るからである。実際、響とは学校以外のほとんどの時間一緒に過ごしているので思う所ではあるのだが、本当に1人の時間が作りにくいのだ。

——キーンコーンカーンコーン

「ああ……また学校が終わってしまおう」

「何絶望した顔になってんだよ。見てみる。あのクラスの男共の顔、お前を呪い殺してやるって顔してるぞ。まあ、確かに毎日学校が終わったら可愛い女の子2人が正門前で隆一を待つてるからそりゃ確かに恨まれるわ」

「いいか?確かにそりゃ一緒に帰るのは仕方ないよ。幼なじみと親友だしな……でも、考えてみる?俺の幼なじみはヤンデレだぞ?俺、死ぬぞ?」

「俺、ヤンデレでもいいから女の子と仲良くなりてえなあ……」

「駄目だこいつ……早くなんとかしないと……」

?そうして、俺は学校の掃除を終えて教室を出る。すると、待ち受けていたのは……

「リア充死すべし。慈悲はない」

「我ら、リア充撲滅隊。赤間隆一……貴様を断罪する」

?リア充撲滅隊だった。実はこの学校は裏の組織があり、それがこのリア充撲滅隊なのだ。俺はいつも帰ろうとする度に邪魔をされる変な集団だと認識していたのだが、最近
は……

「いや、断罪って……この前俺に手を出して響に殺されかけたのに懲りないな」

「フツ……分かってない。分かってないぞツ！赤間隆一ツ！貴様には分からないのかツ！あれは俺達にとってご褒美でしかないのだよツ！」

「そうだツ！貴様には分かるまいツ！あの響様の俺達に向けた蔑んだ目をツ！そしてあの時の『何私のりゆうくんに手を出してるの？害虫』って言われた時のあの快感が貴様には分からないのかツ！」

「その隣にいた黒髪の子のゴミを見るような目で見てくるのも……グへへ」

?ただの変態集団である。とりあえず俺はひとまず回れ右をして、リア充撲滅の信徒達に言った。

「俺を、断罪するのか？」

「……その通りだ」

「そうか。なら俺のとおつておきの策を出すしかねえよな」

「とおつておきの策だと?」

「そうだツ!とおつておきの策だツ!……逃げるんだよオオオ——ツ」

「なツ!?し、しまったツ!」

?そして、俺は急いで廊下を駆け抜けて昇降口で靴に履き替える。履き替えた俺は急いで正門に向かうと、そこには未来だけが俺を待つていた。あれ、響は?

「……あ、いっくん。つてどうしてそんなに急いで来たの?」

「はあ、はあ……い、いや急いでくるつもりは無かつたんだけどさ、あれを見たら分かるよ」

「あれ?つて何か近づいて……」

「未来。とりあえずあいつらが撃沈するようなことを言つてくれツ!じゃないと後々面倒だからツ!」

「え?あ、うん、分かつた」

?そして、リア充撲滅隊が俺に追いついた。よくよく考えたらあのリア充撲滅隊の中にはアメフト部や空手部、サッカー部も入ってるんだからうちの高校やべえよ、怖えよ。……まあ、響よりはマシだけどさ。

「赤間隆一ツ!貴様逃げるとは卑怯、な……」

「私の親友が何かしましたか？」

「ンツ！……いい、いや実は赤間さんにお話がありました」

「なら追いかける必要は無かったですよね？」

「そ、それは。俺達の気が収まらないといえますか……」

「なら、もう2度とこんなことしないでくださいね。変態さん♪」

「」「」「ゴハアツ!!」「」

？その瞬間、未来の一言により撃沈する信徒達。よく見るとめちやくちや血涙を流している奴や、なんか1部喜んでる奴いたのでゾツとした。

「それじゃ行こっか。いっくん」

「あ、ああ……未来」

？そして、俺と未来はいつものように一緒に帰ることになったのだが、そういえば響はどうしたんだ？いつもなら正門前で俺に抱きついてきて、10分程度ハイライトOFFの目でOHANASIをされるのだが、今日は珍しく響がいなかったのだ。

「いっくんもあんな学校で大変だね」

「まあ、あいつらも決して酷い奴らじゃないからな。あと、響はどうしたんだ？いつもなら一緒にいるはずだよな？」

「響なら翼さんのCDを買いに行くって言ったよ？いっくんも買いに行く？」

「いや、やめとく。今日はとりあえず帰りたいかな」

「ふふつ、いづくんらしい。……でも、これはダメだよね？」

「？そう言つて、未来が取り出したのは俺が隠していたエロゲーだった。な、何故それをッ！」

「とりあえず今日は響に代わつて、私がいづくんにOHANASI……するからね？」

「……はい」

「？そして、俺は未来と一緒に帰る。一応大丈夫だとは思うが、ダンスの裏も確認しなければ……」

♪

「……………」

「……………」

「ねえ？この手錠外してよ。私、早くりゆうくんの所に行きたいんだけど？早くりゆうくんにあいたいあいたいあいたいあいたいあいたいッ！早く外してよッ！政府の機関だかなんだか知らないけど、私の帰る邪魔をしないでッ！」

「あ、あの、緒川さん。本当に私があの子の隣に座るんですか？」

「………はい、そうですよ。翼さん」

「ああ……りゆうくんにあいたいよ。りゆうくんと一緒にご飯食べて、りゆうくんと一

緒にお風呂に入って、りゅうくんと一緒に添い寝して、りゅうくんと……」

「緒川さん、本当に……私、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。翼さん少しの辛抱です」

「……………」

彼は意外とびつくりすることに弱い

?……最近、響のスキンシップが激しい。いや、今までも確かにスキンシップは多かったのだが、この前響が風鳴翼のCDを買いに行つた日……その日から響と俺は一緒に過ごす時間が格段に減つたのだ。確かに俺としては減つたことに關しては自分の時間も出来る訳で嬉しかったのだが、その分の反動もあるわけで……

「ん〜、りゆうくん〜♡」

「……なあ、響。離れてくれないか？」

「や〜だ〜。りゆうくん1度離れたら、なかなか抱きつかせてくれないじゃん」

「いや、でも、な……？」

「私、最近ちよつとシン……ポランティアが忙しくて、りゆうくんをいっぱい堪能しないとおかしくなつちやうんだもん」

「分かつ、た、だが、響、く、くるし……」

?とまあ、最近はいつもこんな感じだ。未来から話を聞くと、響はここ最近は何故かポランティアをよくやるようになったとか。俺は響に理由を聞くと、響はギブ&ティクと言っていたが……最近は何故か最新のGPSやカメラなどの物が届くようになったと

未来から聞いている。……マジで響は何をしようにしてるとるんだッ!? それ、俺の部屋に設置しないよなッ!?

「ひ、響……もう、離れ」

「りゆうくん♡」

「あ、無理……」

? そうして、俺はあまりの響の抱きしめる強さに首が締め付けられ意識を失いかけてそうになった時、響のスマホに着信がかかる。すると、響は俺を抱きしめるのをやめて電話にでる。……うわ、響すげえ怒ってる……

「私が行く必要があります? 私、今りゆうくんの時間を楽しんでたんですけど……嫌です、行きません。では」

「響、誰と電話してたんだ?」

「ん? 大丈夫だよ。りゆうくんには関係ない話だから……それじゃッ! 私、学校に行くねッ!」

? すると響は、急いで荷物を持って学校に行ってしまった。……最近の響は何か隠しているのか? いや、まあ前の友人が言っていた話では響は主人公だから隠しごともあるだろう。

「……まあ、いいか。さて、俺も解放されたし、学校に……遅刻やんけ」

♪

? 結局、俺は学校を遅刻して先生に怒られた後、しばらくの間は学校で授業を受けて、平和な学校生活を過ごした。そして、放課後。俺はいつものように学校を出て家に帰る。この日は未来も用事があり、響からは連絡も無かったので1人で帰っていた。

「あー……今日は朝から響が激しかった。……色々」

? 俺はそう思いながら1人歩いていると、足元のアスファルトのへこみに気がつかなくて、通行人にぶつかってしまった。

「うわッ!」

「ん? なッ!? ガッ……いつ、てえ。何しやがるッ!」

「す、すいませんッ! 大丈夫ですかッ!……って女の子?」

「たく、なんだよ急に……ってああっ!」

? 俺がその女の子にぶつかった場所では、多分その女の子が持っていたであろうお弁当が2つ地面にひっくり返しになっていた。

「……全く、ついてねえ。このままじゃ、フィーネに叱られちゃう」

「……なんか、本当にすいません。今から新しいお弁当を買いに行きましょう。ぶつかってしまった俺が悪いですから」

「ッ! い、いや大丈夫だッ! あたしのことは気にしなくていいからッ!」

『ねえ？なんで他の女の子の匂いがするのかな？まさか私に黙って会ってたりしてる？……これは私とオハナシ……しないかね？』

「……これ、詰んだわ」

？後ほど、俺が響に搾られるのは少し後の話……

♪

——少し前の話……

「あなたと私……戦いましょうか」

「嫌ですよ。なんで私が翼さんと戦わなくちゃいけないんですか。私は早くりゆうくんに会いたいんで帰りますね」

「ツ……立花ツッ！」

「フッ！」

「なツ!?白刃取りだとツ!!」

「……翼さん。私の邪魔をしないでください。私は早くりゆうくんに会って、甘えたいだけですから邪魔するなら……」

「泣いてもやめませんからね？」

彼は流れ星を見る

？響がボランティアを始めてから1ヶ月が経った。正直、俺はかなりびっくりしている。何故なら、響が今までこんなに長くボランティアを続けていることに驚きが隠せないでいたからだ。普段の響なら大体のことは全て終わらせて俺の所に来るのだが、今は……

「ムー……」

「おい響、電話なってるぞ？相手はよく分からないけど」

「ヤダ、行かない」

「……これは今日は絶対に動かないな」

？絶賛、響が俺といふことを優先しようとして、ボランティアをボイコットしようとしている。しかし、響のスマホは一向に鳴り止まず、流星に腹がたつたのか、響はすぐにその電話にでた。

「もしもし、なんですか？私、りゅうくんの一緒にいる時間は邪魔しないでくださいって言ったはずですよね？……分かりました。後で行きます。……では」

「響、行くのか？」

「うん、大丈夫。りゅうくんには関係ないから……そろそろ私、学校に行くね」

？そう言つて、響はすぐに靴を履いて学校に行こうとしている。や、やばい……このままでは、あまりの怒りと自分の欲求を満たせずに、ヤンデレビッキーになつてしまつて、ボランティアの方達に迷惑がかかつてしまう。……仕方ない。

「なあ、響？」

「ん？どうしたのりゅうくん？」

「最近忙しそうだし、未来と一緒に何処か」

「えッ!?本当ッ！ヤッターッ！なら今日ここに来てッ！前々から未来と一緒に流れ星を見に行く約束をしたのッ！未来にも言つておくからちやんと来てねッ！」

「え、ちよつ、ま……」

？そして、響はそのまま学校に行つてしまった。その時の響はとても上機嫌で学校に行つたので、きっとボランティアの方達に迷惑はかけないだろう。なんかいいようにやられた気分だが、まあいいか。俺も学校に行くか……

♫

？そして、時は過ぎて夕方。俺は学校を終えて、響が指定した待ち合わせの場所に向かつている最中の時だった。俺は少し急ごうと、珍しく近道を使つて、小さな森を抜けようとしている時だった。

「確か、この道を抜けたら待ち合わせの場所だったよな」

「ここら辺だったら被害は最小限に……」

「ん？今、この辺りで声が……え？」

「よし。これならあの融合症例を誘導できるな。さて、あたしもそろそろ……」

「……………」

？今の状況を説明しよう。俺は確か森を抜けて待ち合わせの場所に向かう途中で、わけのわからないコスプレをした痴女が何かよく分からない杖を持って作戦を立てていた。な、何を言っているのかわからぬーと思うが、おれもどいう状況かわからなかった。あまりのエロさに鼻血がでそうだった。撮影会だとか演劇の練習だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。まるで、エロゲーみたいなハプニングを味わったぜ。……よし。

「ど、どうも……それじゃ、失礼します」

「え？あ、ああ……つてちよつと待てええええええええッ!!」

？俺はさりげなくこの場を去ろうとしたのだが、その痴女はDSが使ってそんなムチを使い、俺を縛った。このムチ硬いし、しかもガッチリ縛って……ついででででででッ！トゲがトゲがあッ！

「な、なんで一般人がここにいんだよッ！つてよく見たらお前……」

「な、何か………しました？いででででででッ！」

「………はあ」

？すると、その痴女は急にムチを解いた。そして、その痴女は急に胸ぐらを掴んで俺を脅した。

「死にたくないならさっさとここから離れろ」

「え、あ、はい………」

「………じゃあな」

？そう言つて、その痴女は森の中に消えて行つてしまった。俺はしばらくの間その場で座っていたのだが、俺はすぐに約束のことを思い出したのでその場所に向かつて急いで走り始めた。

♪

「それで？いつくん1つ言つてもいいかな？」

「………なんでしようか」

「約束の時間ちよつと過ぎてるよね？」

「で、でもまだ流れ星は流れてないから大丈夫でででででッ！悪いッ！悪かったつてッ！」

「いつくんのバカ………」

？俺は急いで約束の場所にやってきたのだが、残念ながら予定の時間を遅れて遅刻してしまつたのだ。俺が来た時には俺が遅刻したことに関して未来は怒っていて、俺が行くまでに起きた出来事を話したが、エツチなゲームのやりすぎと言われてしまい弁解の余地は無かつた。

「いつつ……未来悪かつたつて」

「いっくんは本格的にエツチなゲームは禁止しないとイケないね」

「それはやめてくださいなんでもしますからッ！」

「今なんでもするつて言つた？」

「ッ!?いい、今のはな」

「じゃあ……」

？すると未来は俺の手を繋いで笑顔で答えた。

「私と流れ星を見ることッ!……分かつた？」

「……分かつたよ、未来」

？俺はそう答えると、空に流れ星が流れ始めた。流れ星はとても綺麗で輝いていた。すると、未来は流れ星を見ながらスマホを取り出して、流れ星を撮り始めた。

「響の為にも流れ星撮らなくちゃ……」

「響来ないのか？」

「うん……ポランティアだって」

「……そうか」

♪

「あたしはフィーネに言われて、今回の目的である融合症例を捕まえに来たのだが、正直あたしは今なんで追い詰められているのか分からなかった。」

「はあ……はあ……融合症例がなんでこんなに戦えんだよッ！」

「……………」

「おいッ！その人気者ッ！あいつは駆け出しの新人じゃねえのかよッ！」

「……ああ、そうだ。貴様が言っている通り立花はシンフォギアを纏って日が浅い」

「だったらなんで……なんであんなにあたしのネフシユタンの攻撃を避けられるんだよッ！しかも、ノイズも倒されて……あいつは化け物じゃねえかッ！」

「？そう言いながらあたしは2人の攻撃を必死に躲す。確かにあいつは素人の動きしかしていないが、何かブツブツ言いながらあたしに殴りかかってきやがった。本当になんだよ、こいつッ！」

「……今日は未来とりゆうくと一緒に流れ星を見る予定だったのに。しかも、あの人からりゆうくんの匂いもするし……こんな……」

「な、なあ。あいつなんか黒くなってねえか？」

彼の家は色々とガバガバである

「——いっ——ん」

「……う……んあ？」

「いっくん起きて」

「うう……ん……おはよおく未来」

「おはよういっくん。朝ごはん出来てるから早く顔洗ってね」

「あ〜い」

？今日は土曜日。俺は今日ぐらいはゆっくり寝ていようと思っていたのだが、未来が俺のことを起こしてきた。起こされた俺は洗面所に行つて顔を洗った後、リビングに行つて椅子に座つた。

「簡単なものしか出来なかつたけどよかつたかな？」

「ん〜ありがと未来。……所でさ、未来！つ聞いてもいいか？」

「何、いっくん？」

「……なんでいんの？」

「んー……来ちやつた♪」

？そう言つて、笑顔で答える未来。まあ、こうした出来事は初めてではないのだが、一応説明すると俺の親は母がデザイナーで父が自衛隊の仕事をしていて、家にいるのは基本俺だけなのだ。だから基本は俺が全ての家事をやつて、鍵の管理をするのだが……

「ちなみにどうやつて入つたんだ？」

「いっくんの家のスペアーキーだよ」

「だよな」

？この通り、スペアーキーは未来が持つているのだ。改めて考えると家のセキュリティ未来と響だけにはガバガバなんだよなあ。あ、でも未来と響はなんだかんだで家事を手伝つてくれるからありがたいけど。俺はそう思いながらテレビをつけると、風鳴翼が入院したニュースが流れていた。

「風鳴翼が入院ねえ……まあいいか。そう言えば響はどうしたんだ？またボランティアしてるのか？」

「……えつと、響は修行してる、かな？」

「え？何それ。怖いんだけど……」

「大丈夫だよいっくん。響はいっくんに変なことはしないから」

「ならいいんだが……さて、俺も着替えるか」

？俺は朝ごはんを食べ終え、パジャマから私服に着替える為に洗面所にむかう。そし

て、俺は洗濯機にパジャマを入れようとしたのだが、あることに気がついた。

「溜めといた洗濯物がない……」

？そして、その後俺はあの後未来と出かけることになった。今日はあまり出かけたくなかったのだが、未来の無言の圧力によって行くしかなかった。いや、行く選択肢しかなかった。そして現在、俺は今……

「いっくん、この服どうかな？」

「……もうジャージでいいじゃん」

「ダメ。いっくんはそう言っつて、オシヤレしないんだから……」

？未来と一緒に俺の服を買っている途中である。確かに俺は大体着れるものならなんでもいいのだが、それは未来が許さない。だから、大体は未来か響が選んだ服をいつも着ているのが当たり前になってきている。

「はいッ！次はこれを着てッ！その後写真撮るからッ！」

「え、また？めんどくさいからやめ……たくありませんッ！是非着させていただきますッ！」

「よろしい。それじゃあ……うん。いいよ、いっくん」

「……もういいな。よし帰ろ」

「ダメ。今日は響もいないから少しぐらい私に付き合っつてよ……ね？」

「……分かったよ。全く、世話好きの親友だよ……」
「?しかし、俺は知らなかった。後、少ししたらえらいことに巻き込まれることを……」

♪

——デュランダル起動から8時間後……

「があああああッ!!」

「はあ……本当にダメな子ね。クリス」

「あああ……はあ……はあ」

「……仕方ないからもう一度チャンスを与えるわ」

「はあ……はあ、ファイ、ーネ。あたしは……」

「デュランダルはもういいわ。融合症例の資料も大分集まった……後は実験台が必要だ。次はこいつを捕まえてこい」

「ツ……ファイネ、こいつはッ!」

「分かったわね?私のクリス……」

「ツ!?!があああああッ!!」

彼は誘拐される

？俺はいつものように目覚まし時計が鳴るので目を覚まし、その後には俺はまず縛られていないかを確認する。……よし、縛られていないな。

「さて、今日も学校に行くか……ってあれ？」

？すると、俺の布団の横にあった机に一枚の紙があつてそれを読むと、その紙を書いた人物はどうやら響だった。嫌な予感がするんだよなあ……

『最近、全然会えなくてごめんね？今日は未来と一緒に学校に行くから早く家に来て朝ごはん作ってるから食べてね♪今日も未来がりゆうくと一緒に帰ろうって言うってたから未来と帰ってくれると嬉しいな。他の女の子なんてカエラナイヨネ？』

「よし、行こう。今すぐ学校に行こう」

？そして、俺はいつものように朝ごはんを食べ、学校に行く準備をして、家を出た。しかし、今日はいつもより10分遅く家を出てしまったので、走って学校に向かうことにした。しばらくして走り続けていると、突然車から誰かが話しかけてきた。

「はあ〜い。隆くん」

「はあ、はあ……え、誰？俺、急いでんだけど」

「あ、ごめんなさいね。私の名前は櫻井了子よ。実はちよつと君をたまたま見つけたから話しかけて見たんだけど……お姉さんと話さない？」

「いや、だから俺は学校が……」

「響ちゃんから話は聞いてるわ。せつかくだし、学校は私が送ってあげるわよ。君のことも色々聞いて見たいし……ほら入った入ったッ！」

「えッ！ちよつ、ま」

？そして、俺は知らない人に無理やり車の中に入れられて、後部座席に座る。俺を入れた車はそのまま学校に向けて走り始めた。え、何この状況……訳が分からないんだけど。

「んくやつぱり見た所普通の顔してるわね。響ちゃんが言った通りだわ」

「響ちゃん……つて響を知ってるつてことはボランティアの関係者ですか？」

「まあ、そうね。響ちゃんはいつもあなたのことばかり話すからどんな人かと思っただけ意外と普通なのね。逆にびっくりしたわ」

？そう言つて、車の運転を再開する女性。確か櫻井了子だったよな……つてあれ？どつかで聞いたことあるような……

「ねえ、隆一くん。響ちゃんつていつもあんな感じなの？その私達が所属している場所で響ちゃんはスマホで写真を撮ったあなたの顔見ながらデレデレしてるから……やつ

「……そうなのね」

？すると車が止まり、了子さんはシートベルトを外した。外を見ると俺が行く学校があたり、どうやら学校に着いたようだった。時間は……まだ間に合うな。

「了子さん、ありがとうございました。お陰で助かりましたよ」

「いいのよ。私もたまたま隆一くんを見つけたから手間が省けたわ」

「え？了子さんそのガスマスクは……つてうわッ!? な、なんだこの煙はッ！ゴホッ……ゲホツゴホツ……い、ったい、何が……急に、眠た、く……」

？俺は謎の煙によって段々眠気が襲ってきて、瞼が閉じてくる。そして、俺が最後見た光景は了子さんの髪が茶色から金髪に変わる瞬間に意識を手放した。

「ひび……き……」

「……眠ったか。まさか偶然このモルモットを手に入れることが出来るとは。このモルモットは今からネフシユタンの融合症例の実験体になって貰おうか。……これならもうあの小娘は用済みだ。しばらくはクリスマスにぶつけて……フフっ、フハハハハハッ
!!」

♫

？私は本部からの連絡があつて、現場に急行しようとした。けれど、その時に未来がそこにいて、クリスちゃんが私に襲いかかつてきて、未来に私のやっていることがバレた。

でも、私は今は目の前のクリスちゃんと同じく合わないと思わない……だからッ!

「うおりあああああああッ!!」

「ッ!? クソッ! もってけダブルだあああああああッ!!」

?今は全力でクリスちゃんを止める為にただひたすらに戦っている。クリスちゃんはネフシユタンをよく分からないけど、爆発させて今はシンフォギアを纏って戦っている。正直、今の私にとって不利な状態が続いていた。

「ッもらったッ!」

「しまッ!」

?そして、私はクリスちゃんの弾丸をモ口に食らいそうになった時に何かを私を守った。……これは、盾?

「なッ!? 盾だとッ! いや、これは……」

「剣だッ!」

「ッ! 翼さんッ!」

「遅くなつてすまない。立花」

「怪我は大丈夫なんですか? その、私……色々翼さんを殴りましたから」

「大丈夫だ。あの空気よりはマシだ」

?そう言つて、空を見上げる翼さん。あれ? 私、そんなに酷いことしたかなあ? そう

思っていると、クリスちゃんが私達を再び攻撃しようとしていた。

「ツチ、ならもう一発……」

「命じたことも出来ないなんて、あなたは何処まで私を失望させるのかしら?」

「ツ!? ファイーネツ!」

「クリス、あなたは失敗した。ただそれだけ」

「なツ!? ファイーネツ! あたしは確かにあいつを色々探したがいなかったんだよツ! だからあたしは融合症例の近くにいると判断して……」

? クリスちゃんはそのファイーネと言った人と何かを話している。その時に私は気がついた。あのファイーネさんの匂いから微かにりゅうくんの匂いがしたからだ。なんで、りゅうくんの匂いがするの……

「はあ……クリス。あの男ならもう私がしっかりと捕獲したわ。だからあなたにはもう用は無いわ」

「ツ!? 何だよそれ!?」

ファイーネと呼ばれた女が手を翳す。すると、周囲に散っていたネフシユタンの鎧の破片が粒子に変わってファイーネの下に集まっていく。粒子に変わったネフシユタンの鎧は全て回収されたところで何処かへ消え、ファイーネは持っていた杖のようなものに変わっていく。

「待てよッ！　ファイーネエツ!!」

？するとクリスちやんがファイーネを追いかけていく。私はそれをただ見つめ、立ち尽くすしかなかった。けれど、私には私なりの問題があつて、この後の、未来に隠し事をしていたことについて不安しか感じられなかった。

「未来に隠し事しちやつたから絶対に怒つてるだろうな。りゆうくんにも……」

彼はやがて融合症例となる

——ピッ…ピッ…ピッ…

？俺は意識が戻るにつれて目を覚ます。俺は周りを見ると、外の光は全てコンクリートによって遮られており、手足には手錠が施されていた。そして、周りをよく見ると沢山の機械がそこに置いてあり、その機械から緑色の液体が管を通して俺の体内に注入されていた。……え、薬物じゃないよね？やばい薬じゃないよねツ！

「え、なにこの状況。って痛ツ、さつきから胸が痛いし、急に吐き気が……」

「やつと目覚めたか。赤間隆一」

「ツ!?あなたは……え、マジで誰。俺の知り合いにこんな痴女なんて知らないぞ」

「誰が痴女だツ!……フン、まあいい。貴様は今私の融合症例としての実験体になって貰う。しばらくの間は吐き気や頭痛を引き起こすだろうが死ぬことはないと思うが、大体3割と言った所か……」

？その女性はそう言って、何かの機械の電源を入れて何かし始める。……え、ちよつ、注射器がこつちに向かって来るんですけどおツ!?しかも俺の体よく見たら胸の部分がないか入っちゃいけないデカイ欠片か何かがぶっ刺してあるんだけどおおおおお

おッ!!

「安心しろ。中身はただのLINKERだ。あのアメリカの実験はあまり気に入らなかつたが、まあこのような副産物があつたことには私としてはラッキーだったな」

「は、話をしよう。あれは今から……」

「話も何も、貴様はモルモットだ。口答えをするな。……それと、貴様の体に埋め込んだ物はさつきネフシユタンの鎧から少し拝借したものだ。理論上は問題ない。……それでは私は用事があるのでね」

「なッ!?ま、待ってッ!せめてこの注射器を止めてからでもッ!あ……」

?こうして、俺はモルモットとして実験が開始された。

♪

?1日目、俺ただひたすらに吐き気と頭痛、寒気が酷くて血を吐いた。血液の量半端ないぐらい口から出たんだが、これ貧血に絶対なるな。

?2日目、最初の頃よりも良くはなつたが、依然として状況は変わらなかつた。家が恋しいが、よく考えたら響やばくない?まだ2日だけど、響が暴走を始めたら色々やばいような……

? 3日目、頭痛や痛みも大分慣れてきて、余裕が出てくるようになった。多少の痛みがあるものの、何不自由なく過ごすことが出来た。しかし、娯楽ぐらいは欲しいよな。

? 4日目、遂に痛みや吐き気、頭痛などは無くなって元気になった。心做しか普段の疲れなどが大分ほぐれたような気がしたが、またその女性が現れて緑色の液体を俺の中に注入した。お陰でまた吐き気と頭痛が出てきてしまった。クソツタレ。

? 5日目、よくよく考えたら俺誘拐されてるんだよな。なんか手錠とか機械とか馴染みがあって、逆に違和感がなかったからその女性に言ってみただが「貴様はよくあの融合症例を制御出来ていたな」とため息をつきながら、俺を見ていた。慣れつつ大事だよ？

? 6日目、体が嘘のように馴染んできた。そしたら、その女性は急に俺の腕に切り傷をつけて様子を見ていたら、なんか勝手に再生し始めたのだ。しかし、その途中でクリスタル見たいのが出てきて、急いで緑色の液体を入れられた。もうあれ麻○の類か何か

だろ。

？7日目、体も何もかもが完全に馴染んできてしまって、俺は人間かどうか分からなくなってきた。一応逃げようと思っただが、下手に逃げたら俺が死ぬんじゃないかと
思つてやめた。……所でなんか上で音が凄いいけど何かあつたのか？

♫

？あれからどれくらい経つただろうか。この部屋には時計もなく、窓もないので昼か夜か待つたたく分らない状況が続いていた。俺の体感ではそろそろ2週間は過ぎている
と思うが、それでも俺は未だにこの部屋から出ることは出来なかつた。俺の体、遂には
胸にあつたデカイ欠片を飲み込んで何もなくなつてるけど、人間辞めちやつたかなあ
……

——ギイイ……

「……なるほどこの結果になつたか。まさか貴様がネフシユタンの欠片と融合するとは
思つていなかつたが、まあいいだろう。お陰で私も遂に力を入れることが出来た。
喜ぶがいい、終焉の巫女の力になつたのだから」

「えっと、1つ言つてもいいですか？」

「なんだ？早くしろ。貴様を誘拐したのでな、そのせいで私も色々忙しいのだ。カ・

ディングルを早く起動させなければ……」

「分かりましたよ。手短に言いますね？響、どうしてます？」

「お前を手当たり次第に探している。私としてはノイズを出す度にすぐにやってくる融合症例にはうんざりしてるがな。……行くぞ」

？この瞬間、俺はただ一言……それだけが頭に浮かんだ。

？うん。俺、見つかって響に捕まったら搾られるやつだこれ。

彼の精神はかなり強い

？俺はあの後、金髪の女性が強制的に謎のボックスの中に俺を入れて、身動きがとれない状態のまま何処かに移動し始めた。どうやら車を使って何処かに行くようだ。……しかし、この体制がキツイッ！変な液体ぶち込まれて、変な欠片を俺の中に入れて、挙句にはよく分からないボックスの中に入れて、俺の扱い雑じゃね？てかよくよく考えたら拷問だよ拷問。

(首が変な方向向いてて痛てえ……)

？そうして、しばらくの間俺はこの謎のボックスの中に入れていると激しい爆発音や瓦礫が崩れる音が聞こえてきた。マジで何が起きてんだ？俺の知らない間に一体……

「これ以上、は行か、せません」

「フンッ……人間風情が、思い上がるな」

「緒川さんッ！」

？すると、外から誰かの声が聞こえてきた。1人は多分あの金髪の女性でもう1人は男性だろう。そして、最後の声は未来？に似た声だった。まさか未来がそこにいる訳ない

「いや、めっちゃや、痛い。正直、涙腺ドバド、バで泣い、てるからね？ちよつ、いきなり、抜く、ツ痛い痛い痛い痛い痛い痛いッ！」

「……まあいい、今からカ・デインギルを起動させる。貴様にはあの融合症例の足止めをして貰うからな？」

？俺はクリスタル状のムチによって、俺は横腹を貫かれる。それを見た未来はその様子を見て泣きながらこつちにやっこようとするが、それをもう一人の男性が必死に止める。そして、金髪の女性が俺を引きずって目的の場所に連れて行こうとすると、ある男性の声が聞こえた。

「待ちな、了子」

？その瞬間天井が破壊され、ガタイのいいマッチョな男性が現れた。え、何そのかつこいい登場の仕方……惚れそうなんですけど。

「私をまだ、その名で呼ぶか……」

「女に手を上げるのは気が引くが、2人に手を出せば、お前をぶつ倒す」

？現れたガタイのいい男性は金髪の女性に向けて構えの姿勢をとる。てか、金髪の女性って櫻井了子さんなのッ!?茶髪はどうしたッ!あのアイスクリーム見たいな髪はッ!ウツ……まだ腹が痛……あ、治ってる。

「司令、彼をッ！」

「なッ!?!しまっ」

「ちよつとおッ!?!なん」

?俺と目が合った了子さんはムチを使つて、引き寄せてそのまま俺を盾にした。そして、その男性の一撃が俺の腹に綺麗に入る。その瞬間鳴つてはいけない音がバキバキバキとなり、その音はまるで重ねたせんべいを割つたような音が俺の身体から聞こえた。そして、それと同時に一瞬走馬灯が見えてそのまま意識を失つた。

彼のせいで物語は変わる

「やめ——だッ！立——ッ！」

「お——カッ！——ま——だとフ——の思うつ——ぞッ！」

「離——ッ！私——人を助け——だっ——ら——構わ——！離——ええええ——

——ええッ!!」

？俺はしばらくの間、あの男性の一撃を食らってからどうやら気を失っており、たつた今目が覚めた。しかし、まだ目覚ましたばかりで周りの音が微かにしか聞こえなかった。なんか聞き覚えのある声があるような……

「りゆうくんを離せッ！うおりやああああああッ！」

「この私を倒すのか？生ぬるいッ！」

「ッ!?!」

「下手に動かないほうがいいぞ？こいつの心臓を簡単に貫ぬくことが出来るのだからな。貴様ら3人は黙ってカ・ディングルにより月を撃ち落とす様をしかと見るがいいッ！」

？そう言つて、高らかに笑う了子さん。え？何、どうゆう状況ッ!?!いつの間にこんなラ

スボスシーンに突入してんのッ！てか、向こうにいる3人は歌手の翼さんに前の……
そ、そうだッ！弁当の女の子だッ！後は……響ッ!?ウツソだろお前……

「ああ、もうすぐ……もうすぐあの方に……」

「クソツタレッ！あたし達は黙って指をくわえて見てるしかないのかッ！」

「すまない奏。私にもっと力があれば……」

？もう勝ち誇っている了子さんに対して、あの2人は絶望状態に陥っていた。……もしかしてやばい？そう思いながら俺は響を見る。響は俺を助けようと機会を伺っているがそれが出来ない状態が続いていた。幸い、手足は縛られておらず、逃げようと思えば逃げれることに気がついた。この状況を何とかする策はただ1つ……

「逃げるんだよオ——ッ！」

「なッ!? 貴様、目覚めていたのかッ！」

「ッ!? 今だッ！作戦通り行くぞッ！」

「後は任せたッ！立花はあの男を」

「りゆうくうううううんッ!!」

？俺は了子さんが別の方に視線が向かっている隙をついて逃げた。体の方はあの時脊髄のほとんどが折れる音がしていたが、どうやら治っていたようだ。そう考えると完全に人間辞めることがはつきりしたが、俺が了子さんから離れたと言うことは、もちろん

ん俺は自由になったと言うことだ。だからもちろん響が助ける訳で……

「りゅうくんなんだあ……りゅうくんの声、りゅうくんの匂い、りゅうくんの感触、よかったよお……」

「ちよつ、響……くるし……」

「チツ、逃がすかッ!」

「させんツ!今のうちだ、雪音ツ!」

「これがあたしの全力だああああああッ!!」

「なッ?!しま」

?この時、弁当の女の子は急に歌い始めてどデカいミスイルを発射した。それを了子さんが止めようとムチで撃ち落とそうとするが、それを翼さんが近代的な刀でそれを防ぐ。そして、そのミスイルはそのまま、了子さんが言っていたカ・ディングルに直撃した。しかし……

「……フフ、フハハハハハハハハハハッ!!カ・ディングルはまだ崩れていないッ!そして、もうカ・ディングルの準備は出来たッ!私の勝ちだッ!」

?そして、カ・ディングルは月にめがけてもの凄いエネルギーが月へと発射された。それにより、月はそのエネルギーの塊を受けて3割程度が破壊された。正直、この事態に状況が追いついてないんですが、俺だけの凄く置いてけぼり感が凄いですがあッ!?

「月が……」

「チツ、もうダメか……」

？あの2人は月が欠けたことにとても悔しがっていたが、そんな中で子さんは目的を達成したにも関わらず、その表情はとても驚いていた。

「……何故だ、何故月が完全に破壊されていないッ！どういうことだッ！」

「……つてことは」

「まだ、私達の負けではないと言うことか」

「私の計算は完璧のはずだッ！何故月への軌道がズレたのだッ！」

？そう言つて、叫ぶ了子さん。俺はあの弁当の女の子のミサイルによつて傾いたことは分かるのだが、どうしてそのカ・ディンギルは逸れたのか、それはただ1つ……実は、知らない間に出来ていた地面のクレーターが1番の理由だったからだ。地面には沢山の殴った後や、蹴りによつて様々な場所がひび割れしており、それが原因だと俺は予想している。何故かつて？それは……

「おのれッ！まだだ、まだ終わっていないッ！次の装填を……」

「ッ!?させねえよッ！フィーネッ！」

「あなたを捕縛します。櫻井女史……」

「あの、ちよつといいですか？」

「「なんだッ！」」

「カ・デインギル倒れて来てますけど、大丈夫ですか？」

「……………」

「なんだとッ!? どうしてそんなことが…………ッ! この地面のクレーター…………そうか、貴様かッ! 立花響ッ!」

「えへへ♡りゆうくんであ♡久しぶりのりゆうくんの匂い♡♡」

「…………うん、響。とりあえず助けてくれたのは嬉しいけど、シリアスシーンではちゃんと戦おうね?」

? この発端を作ったのは響だったからである。俺は多分気絶していたから分からないが、多分俺が気を失っている間3人が了さんと戦っていたのだろう。しかし、了さんが俺を誘拐しているのを響が知って、暴走しながら攻撃を外す度に地面を破壊し続けて、このあたりの地盤が緩んだのが原因だと俺は思っている。まあ、当の本人はさつきからあの壮大なシーンがあつたにも関わらず、響は俺を抱きしめて戦いに参加せずに幸せそうに俺を抱きしめていた。結論から言わせて貰いますけど……

？
響、俺の知らない間になんでそんな強くなってるん？

彼はやはりヤンデレに愛されている

？現在、俺は今普通だったら有り得ない現場に立ち会っている。それは、本来ならこんなアニメ見たいなシーンが目の前で起きているからだ。本来、そのようなことに巻き込まれるのは大体がヒロインのはずなのに、そのポジションに俺がいること自体がおかしいのだ。ただ、そんな事態の中で場違い感が凄い人が1人いる。それは……

「カ・デインギルが崩れてゆく……やはり、最大の障害は貴様のようだな立花響ッ！」

「りゅくうくくん♡えへへ、頭撫でて♡」

「……うん。とりあえず後で説明してね？」

「ふぁ〜い♡」

「……この私を無視するとは余程死にたいらしいなッ！」

？響である。カ・デインギルが倒れ始めたあたりから了子さんは、さつきから響に対して攻撃をしているのだが、それを翼さんと弁当の女の子が防いでいるのだ。そして、当の本人はこの通り1度抱きついたら満足するまで離れないので2対1の戦いが続いていたのだ。

「ハアッ！」

「チツ、舐めるなツ！」

「りゆうくんのなでなで最高♡」

「ちよせえツ！」

「たかがシンフォギアごときにいッ！私が負けると思うのかッ！」

「はあ、はあ……りゆうくん、私もう幸せだよ♡」

「いい加減に戦え立花（バカ）ツ！」

？そう言つて、2人は響に戦いに参加させようと叫ぶ。しかし、響はそれを無視して俺に甘え続けている。……なんか、うちの幼なじみがすいません。

「響、そろそろ俺から離れてあの2人と一緒に戦わないのか？学校だつて、了子さんが壊したんだぞ。後、俺もそろそろここから離れて避難したいんだが……」

「……むー、分かった。了子さんにきちんと償つて貰う」

？すると、響は俺を抱きしめるのをやめて了子さん方に向かおうとする。できるだけ響にはあまり無茶はして欲しくないの、これだけは使いたくなかった最後の手段にでた。これを1度やって、響は今まで失敗したことは一切なかったのだ。俺から言わせて貰えば俺を対価とする最後の切り札つてことだ。

「よし。俺はとりあえず未来と合流するから、もし戦いが終わつて何もかもがハッピーエンドを迎えたら、響の言うこと1つ聞いてや「りゆうくん本当ツ！今なんでもするつ

て言ったよねッ！」あ、ああ。言ったから早くあの2人を助けに行ってきなさい」

「りゅうくんとお風呂……りゅうくんと(自主規制)……アハ♪分かったよ、りゅうくん。それじゃあ……イッテクルネ♪」

？そうして、響はあの2人と合流して了子さんと戦い始めた。俺はその間なるべく遠くに離れて、未来を探し始めた。途中で女子校の校歌が聞こえ始めたが、多分響のことだから大丈夫だろう。あの時、なんて言ったかあまり聞き取れなかったことが余計に怖かったが……

「大丈夫かな……色々」

？そして、俺は未来を見つける為に色々と探し回るのであった。

♪

「……さて、りゅうくんはもう行ったかな」

？私はりゅうくんがこの場を離れるのを見送って、戦いに戻る。翼さんとクリスちゃんは了子さんを必死に止めていたからだろうか、ギアはほとんどボロボロの状態で疲れているように見えた。

「翼さん、クリスちゃん、遅くなってごめんね？」

「はあ、はあ……たく、遅せえよ」

「心配するな。あの男が大切なのは知っていたから……行けるか立花」

「任せてください」

「? そう言つて、私は了子さんに向けて構えの姿勢をとる。正直、今の了子さんに勝てる方法は私には1つしかなかった。それは……」

「翼さん、クリスちゃんちよつと離れてて。私、今から暴走するから」

「はあ? お前それどうい」

「う、ヴツ……ガ、ガアルル……」

「なツ!? 立花ツ!」

「ほお? まさか自分から暴走するとはな。しかし、それでは自身の自我を持ってまいッ!」
「リヨウコサンハワタシニムケテコウゲキヲシカケテクル。デモ、ダイジヨウブ……ワ
タシハコノシヨウドウニヌリツブサレナイ。ダツテ……」

「リユウクンヲスキに出来るならこんな衝動なんかに負けるかあああああああああ
あッ!!」

「……ギアの色が、変わった?」

「いや、色だけではない。ギアの形状も変わつて……あの禍々しい力は一体……」

「シンフォギアが変化しただと? 貴様、その力……何を束ねた」

「この力は……愛だッ! 私の、私だけの愛だッ!」

「愛だと? 巫山戯るなツ! そんな愛が私のあの方の愛に負けはズがないッ!」

「私の愛はりゆうくんだけの愛だッ！邪魔する奴は私の拳でぶん殴るッ！」

♪

「……なあ」

「……なんだ」

「愛であそこまで強くなれるのか普通？」

「フツ……知らないのか？立花はそれで私に勝っている」

「はあ……あのバカは色々とツツコミ所満載過ぎるだろ」

彼はいつも変わらない

「未来ーッ！何処だーッ！」

？俺は響と別れてから色々な所を探し回っていたが、未来を見つけないことが出来ないでいた。いや、そもそもこの辺りでむやみやたらに探し回っても見つかるはずもない気がするのだが……

「一度戻るか？いや、でも邪魔になるしなあ……」

？そう思いながら俺はこの後のことを考える。今から未来を探すとして何処を探せばいいのか、手掛かりはないかと必死に悩んで空を見ると赤い何かがいつの間にか出来ていた。え、アレは何？あんなんエ○アンゲ○オンの使徒でしか見た事ない奴がいるんです。

「……いや、あれ使徒じゃん。どう考えても使徒じゃんッ！つてあの3人は……え、響？なんで空飛んでんの？訳が分からないよッ！」

？気がつけば赤い化物が響達と空で対峙していて、最終決戦感がとても凄かったのだ。そんな光景を見て、今すぐに町の方に避難しようとしたが、赤い化物の光線によって1部の町が吹き飛んだ。その瞬間、俺は町に逃げることをやめて再び考え始めた。

(いや、あれはやばい。あれは流石に死んでしまう。でも戻ったとしても邪魔になるだけだし、どうすれば……)

?俺がそう考えていると、いきなり目の前にノイズが現れた。その瞬間、俺は町に逃げることがやめて来た道に戻ることにした。いや、なんでいきなりノイズが現れるんだよおおおおおおおッ!

「ちよつ、やめ、痛ッ!つてしまった炭素化がッ!……つてあれしない。じゃねえッ!ノイズは俺のリアクションさえもさせてくれないのかよおッ!」

?そして、俺はただ走る。ひたすらにノイズから逃げることに徹つした。どうやら了子さんの実験によって俺はノイズに攻撃されても炭素化しないことが分かった。まあ、それでも攻撃だから痛いんだが……

「クソッ!結局戻つて来ちゃったよッ!つてしま」

?その時、俺は1匹と言つていいのかわからないが、空を飛んでいるノイズが俺にめがけて回転しながら攻撃をしてきた。俺はもうダメだとそう思っていたのだが、その攻撃に俺は当たらなかつた。

「……あれ?当たつてない、つてあなたは」

「すいません、赤間さん。今は急を要するのでこのまま失礼します」

「え、ちよつ、ま、ぎやあああああッ!」

?俺は急に現れた黒服を着た男性にお姫様抱っこされた状態で、ものすごい勢いで走り始めた。てかこの人未来と一緒にいた人じゃ……

「あのツ！未来は大丈夫なんですかッ！」

「ええ、今の所は司令と一緒にいるので大丈夫です。それとちよつとお願いがあるのですが……」

「お願い、ですか？」

「はい。今あの3人が了子さんの暴走を止めるためにエクストライブになっているのですが」

「えつと、あの飛んでた奴ですよね？」

「そうです。最初は響さんが暴走状態を制御して優勢だったのですが、了子さんがデュランダルとソロモンの杖によって赤き竜となったことで劣勢状態でした。しかし、あの3人は歌の力によってシンフォギアのロツクが解除され「わ、わかりました。とりあえずもう最終決戦つてことでいいんですよ？」……まあ、そうですね。私からは以上です」

?すると、その男性は急に止まって俺を下ろした。そこには何人か人がおり、その中には未来がそこにいた。……つてあれ?なんか走つてき

「いっく〜んツ！」

?そして、響が持った剣と赤い化物が衝突して、赤い化物が崩れ去っていく。この時、俺はふとあることを思った。

(俺、原作見た事ないけどーっだけいえるんだよな……絶対に色々違う気がするんだよなあ)

♫

?結局、あの後には赤い化物は倒れて了子さんは強制的に響が連れ戻していた。その間未来は俺から離れることはなく、ずっと俺のことを抱きしめていたが、後ろの響と未来の同級生だろうか……なんかニヤニヤしてて腹立つな。その後には了子さんが言ったことで知ったのだが、どうやら月の欠片が落ちてくるらしいのだ。

「え、月落ちてくんの?」

「うん。だからりゅうくんは待ってて欲しいな……あ、その間他の女の子と一緒にいるのはユルサナイカラ」

「あ、はい」

「それじゃッ!行ってくるね、りゅうくんッ!」

「ああ。行ってこい響」

?そうして、響は月の欠片を止める為に飛んで行った。まあ、響のことだから絶対に戻ってくるだろうとそう思いながら一息つくのだった……

「おい、赤間隆一」

「なんでしよう了子さん」

「何故私は生きています。普通なら死んでもおかしくないはずだ」

「知りませんよ。俺だつてまだ現状を理解しきれないんですから」

「……貴様は愛されているな」

「そりやそうですよ。だつて、俺の幼なじみがヤンデレなんですから」

「こうして、今まで何が起こつていたか知らないが、この戦いは終わった。今の俺が言うことではないのだが、本当に俺戦つてないんだよね。」

「所でいっくん」

「ん？なんだよ未来」

「響が言つてたご褒美つて何かな？私、知らないんだけど……ネエ？」

いや、俺の戦いはこれかららしい。

戦姫絶唱しない日常 『運命から逃げれない』

「と、言う訳で改めての紹介だ。雪音クリスマスくん。第二聖遺物のイチイバルの装者にして心強い仲間だッ！」

「ど、どうも。よろしく……」

「さらに本日をもって装者3人の行動制限も解除となる」

「師匠、それってつまりッ！」

「そうだ。君たちの日常に帰れるのだッ！」

「やったーッ！これで未来とも会えるーッ！」

？月の欠片を響達が破壊した後の2週間後……その日は特異災害対策課起動部二課であの弁当の女の子、雪音クリスマスの歓迎会が行われていた。しかし、気がついた人もいるだろうが、おかしい点が一つだけあるのだ。それは……

「響くん落ち着きたまえ。後、もう1人紹介しないとイケないからな……民間協力者の赤間隆一くん。お前達ッ！これで響くんのはなんとかなるぞッ！」

「いや紹介、雑ッ！てか、響のこと俺に任せる気満々じゃねえかッ！」

「よかったね、りゆうくんッ！これで、イッショダヨ♡」

「いや、急にハイライトOFFは怖いからやめて……」

？俺が二課に民間協力者として仲間となったことだ。月の欠片を破壊された後、俺はそのまましばらくは身体検査など色々して戻る筈だったのだが、響と一緒に融合症例となった体に二課の医療スタッフが気がついて、半ば無理やり仲間となったのだ。まあ、半分は響が原因だけだね？

「まあ、別にいいんだけどさ。どの道二課には定期的に通わないといけないからな」

「そうよ。あなたの体は私と一緒に不安定なんだから仕方ないわよ♪」

「いや、原因は貴方ですけどね？了子さん」

「了子さん、りゅうくんに次何かしたら……：：：ピーーーツ（放送・発言禁じられた音）ですからね？」

「りゅ、隆一くんッ！響ちゃんをなんとかしてッ！このままじゃあ私が響ちゃんにピーーーツ（放送・発言禁じられた音）されるわッ！」

「はいはい、響やめようねー。後、そんな汚い言葉を使わないで欲しいんだが……」

「ん〜♡えへへ〜、分かったあ。りゅうくん♡」

？俺はとりあえず響の頭を撫でて了さんに矛先がいかないようにしている。気づいている人もいるだろうが、何故了さんが捕まらずに二課にいるのか気になっている人もいるだろう。まあ、簡単に説明すると了さんの中のフィーネは激戦の後、魂ごと何

処かに消えたと言う設定にして、今は櫻井了子として生きているのだ。もちろん中身はフィーネなのであまり変化は無いのだが……

「あー、やつ……と、あのギスギスした空気が終わるんだッ！いよつしやあああああああああああッ！」

「ちよつと、朔也。嬉しいのは分かるけどそういうのはあまり言わないの」

「正直、響さんの隆一くんに対しての依存が凄かったですからね。僕には真似できませんよ」

「ああ、流石の俺もかなり手を焼いたからな。もし、隆一くんが二課に所属してくれなかったら響くんの扱いはさらに大変だっただろうからな」

「この二課に所属している。藤堯朔也さんに友里あおいさんと緒川慎次さん。そして、司令の風鳴弦十郎さんが多分、俺がまだ知らない間の響の行動について色々話していた。今、盗み聞きしてみたがやつぱり響迷惑かけてたんだなあ。そう思いながら俺は少し離れてジューズを飲んでいると誰かに話しかけられた。」

「少しいいだろうか赤間」

「ん？つて、翼さんと……ゆ、雪音さん」

「……クリスでいい。てか、なんで周りをさつきからチラチラ見てんだよ」

「ヒビキ、オンナノコ、ミツチャク、ダメ、ゼツタイ」

「なんで片言なんだよ。まあ、いいけどよ」

？そう言つて、話しかけてきたのは風鳴翼と雪音クリスだった。2人は響と一緒にシンフォギア装者なのだが、俺から見れば外国人ハーフの美少女と今大人気の歌手が目の前にいるのだから正直夢ではないかと思うほどだった。

「……その、すまない。立花の幼なじみである赤間を巻き込んでしまつて……」

「気にしないでいいですよ。後、赤間が言いにくいなら隆一でいいよ」

「ま、あたしは気にしてねえけどな。あたしはそつちよりも家のプライバシーの欠片もねえ状態に結構疲れてるんだが……」

「あー、分かる。でもいいじゃん。まだ、勝手に侵入されなくて……俺は毎日だからなッ！」

「雪音、案ずるな。お前よりも過酷な状況を生き抜いている奴もいるんだ」

「翼さん、サラッと酷くないですか？」

「りゆうくん♪ナニシテルノカナ？」

「ひ、響ッ!?いつからそこに……」

「今さつきだよ？はい、りゆうくんあくん♡」

「響さんッ！なんかその唐揚げ凄いい赤いんですケドオッ！翼さんッ！クリスッ！助け」

「あー……あたしはちよつとフィーネに用事が……」

戦姫絶唱しない日常『監視デート』

「……………」

「……………なあ」

「……………なんだ、雪音」

「なんであたし達はこんなことしてんだ？」

「仕方ないだろう。そもそも、あの状態の小日向を止めることは隆一以外は無理だからな。諦めるしかない……………」

「2人共静かに」

「……………はい（分かったよ）」

？私は今日、翼さんとクリスを連れてきて、その建物の角の所である人を監視していた。その人物は……………いっくんである。あの時、いっくんが響にデートをする約束をして、私は気になって着いてきた。……………別に羨ましくないもん。

「あたしらいらなくないか？なら帰っても……………」

「クリス……………一緒に最後まで見届けるよね……………ネ？」

「ヒツ……………わ、悪かった」

「2人共、立花が来たぞ」

?すると、いっくんが待ち合わせの場所に響がやって来た。響の服装はとても女の子らしい、いっくんを意識した服でデートに望もうとしていた。響も可愛い服着てるけど、いっくんのあの服……私を選んだ服だ。ふふっ。

「おまたせりゆうくん」

「お、やっと来たか響。……って何故抱きつくんだ?」

「えへへ♡りゆうくんの匂いが好きだからだよ」

「……まあ、いくか」

「うんッ!」

?そうして、響といっくんのデートが始まって、私と翼さんとクリスと一緒に後を追う。翼さんとクリスはとても嫌々そうにしていたが、なんだかんだ言っついてくる2人もやはり響といっくんのことが気になるのだろう。そうして、しばらく響といっくんの後を追っている店に着いた。それは……

「……すまない、小日向。これはあの2人のデートの筈だ」

「ええ、そうですね。それがどうかしたんですか?」

「どうかしたって、ここランジエリーショップじゃねえかッ!」

?クリスが言った通り、2人が入って行ったのはランジエリーショップだった。この状

況に翼さんとクリスは顔を真つ赤にしながら言っているが、正直私はあまりそんなに恥ずかしくないと思っていた。

「いいのかよツ！男と一緒にその、下着を、選ぶって……」

「同感だ。ランジェリーショップに男性が入ることはそれなりにも色々……」

「まあまあ。とりあえず入って見たら分かりますから」

？そして、私達はランジェリーショップの中に入って響といつくんに見つからないように監視する。すると、響が下着を選びながら笑顔でいつくんと話しかけていた。

「ねえねえりゆうくん。この黒のブラと黄色のブラどっちがいいかな？」

「ん？ああ、響は普段は黄色のブラでちよつと特別な日は黒とかがいいんじゃないか？ほれ、こっちの刺繍の入った白のブラも悪くないぞ」

「そ、そうかな？なら……買って見ようかな。ちよつと試着してくるッ！」

「おう。行つてらっしゃい」

？私はあまり気にはしていなかったけど、いつくんはこうした下着だけを見て興奮したりはしない。それを響や私が着ていたならそれなりに反応するんだけど、その原因はやっぱりあれだ。

「……隆一は恥ずかしくねえのか？あたしだったら絶対に恥ずかしいが……」

「いや、待て雪音、あの目は……プロの目をしている。私には分かる、隆一はきつとこの

状況を何かと重ねて自分自身を保とうとしているんだッ！」

「いや、わかんねえよッ！」

「あの目は……うん。いつもいつくんがエロゲーしてる時の目だ。いつくんは本当にエロゲーが好きだもんね……」

？分かつてはいたけど、理由はやっぱりいつくんはエロゲーの展開と似た境遇に出会ってしまって、いわゆる本気モードになっていたのだ。だから、いつくんはこう言った下着だけでは興奮もしないし、私や響は安心して買い物することが出来る。……って、いつくんと響が移動しちゃうッ！

「翼さんッ！クリスッ！次いくよッ！」

「まだいくのかッ!？」

「私はそろそろ帰りたいのだが……」

「ダメですッ！私だつていつく……じゃない、響が最後まで安心してデート出来るか監視しないといけないんですッ！」

？そうして、私と翼さん、クリスはその後もただひたすらに響といつくんを監視し続けた。ボーリング、ゲームセンターやショッピング、などを私達はただずっと、監視して、その日のデートが終わるまで私達は帰らなかつたのだ……

「どうしたの？ りゆうくん、さっきから後ろを気にして……」

「ん？ いや、なんでもないよ。響とデートだからちよつと緊張してさ」

「ほえ？ そうなの？ ……えへへ、嬉しいな♡」

（あの3人……翼さんとクリスに未来だろうな。未来は響に対して過保護過ぎるんだよな。後、目が据わって怖いんですが……）

戦姫絶唱しない日常『私の秘密』

？私には秘密がある……それはりゅうくんだけには絶対に悟られてはいけない日々の日課でもあるからだ。毎週の金曜日と日曜日は未来に許可をもらって泊まりすることが多い。そして、今日は金曜日で学校が終わった後に私はりゅうくんの家に向かう。

——ガチャ

「お邪魔しま〜すッ！」

？そう言つて、私はりゅうくんの家の合鍵を使って家の中に入る。りゅうくんの家は意外と綺麗なことが多くて、大体は未来が片付けをしてるからそれなりに綺麗だ。けれど、私が家の中に入ってもりゅうくんの声が全然しなかった。

「あれ？りゅうくん今日はいるよね？……もしかして」

？私は、玄関で靴を脱いである部屋に向かう。その場所はりゅうくんの寝室で私の予想ではその場所に絶対にいると確信していた。あ、やっぱりいた。ヘッドホンしながらまたエロゲーやってる……これはOHANASIシナクチャネ？

「よし、あと少して攻略度100%だな。やっぱりこのエロゲーは小ネタが結構あると聞いていたが、ストーリーもしっかり出来てるし、2008年に制作された神エロゲー

と言われただけはあるな。このまま後1時間……」

——ブチッ

「あ…そ、そんなッ！もうすぐエンディングだったのにッ！一体だれ…だ…」

「りゆうくん、何、してたのかな？」

「ひ、響ッ!?!し、しまったッ！今日は金曜日……」

「その女の子……クリスちゃんに似てない？キノセイカナ？」

「き、気のせいだッ！だからそんなに怒ら「正座」……はい」

？そして、私はりゆうくんに1時間程度OHANASIをした後に晩御飯を作り始めた。もう、りゆうくんはエロゲーが好きなのは昔から知ってるけどせめて家にいた時には気づいて欲しかったな……

「ん…これくらい辛さがちょうどいいかな？」

「ん？今日はカレーか？」

「うんッ！愛情たっぷり私のカレーだよッ！もうすぐ出来るからねッ！」

「ああ、分かったよ。所でさ、1つ聞いていいか？」

「何？りゆうくん」

「なんか当たり前のように家に泊まる気満々だよな。てか、俺の家の中って大体未来と響の物が多くなったような気が……」

「いーのッ！私はりゆうくんのこと大好きで、傍にいたいだけなんだから。それじゃあ、カレー出来たから食べよッ！」

？そして、私とりゆうくんは晩御飯のカレーをお皿に盛り付けて一緒に食べ始めた。今回作った私のカレーは結構上手く出来たと私は思ってるんだけど……実は私の味を知って欲しくて血を一滴入れてたりする。これをりゆうくんに言ったらかなり怒られるから言わないけどその、ちよつとりゆうくんを独占出来て嬉しかったりする。

「美味しいな。響、料理大分上手くなったんじゃないか？」

「本当ッ！えへへ嬉しいな……」

「……所で、なんで響は指を怪我してるのかな？」

「うえッ！ナ、ナンデモナイヨー」

？結局、私はカレーを食べ終えた後にりゆうくんに怒られた。でも、そんな状況でもしつかり手当てをしてくれるりゆうくんは優しいと思う。そして、私達は晩御飯を終えてお風呂に入ることになって私から入ることになった。

「なんでりゆうくんから入らないの？私は後でもいいのに……」

「いつも俺が風呂から上がった後に喘ぎ声を出す人は誰ですかねえ？それにまた凸られたら俺が恥ずかしいからな」

「わ、私だって恥ずかしいんだよッ！……あ、でも私りゆうくんのゴツゴツした体は大好

きだよ♡」

「……まだ、一緒に風呂に入るって言わないよりはマシか」

？その後、私はお風呂に入って体を洗い、湯船にしつかり浸かって体の疲れをとった後、お風呂から上がって体を拭いてパジャマに着替えた。その後に次はりゆうくんがお風呂に入ったので私は寝るための布団の準備や歯磨きをしていた。でも、その前に……

「これを準備しないとね。これをコップの水で溶かして……よし」

？私を取り出したのは睡眠薬だ。睡眠薬と言ってもドラッグストアで手に入るものだ。私はそれをコップの中の水に入れて睡眠薬を溶かす。実はこれが、未来も知らない私だけの秘密なのだ。すると、りゆうくんがお風呂から上がって、パジャマに着替えてこつちにやって来た。

「ふー……さっぱりしたー」

「りゆうくんッ！はい、お水ッ！」

「お、ちょうど喉が渴いてたんだよ。ありがとう」

？りゆうくんは私が渡した睡眠薬入りの水を一気に飲み干す。ここまで来れば後はりゆうくんが眠るのを待つだけだ。ああ……楽しみだなあ♡

「とりあえず、俺は今から歯磨きするけど……響はどうする？」

「じゃあ、この後眠たくなるまでゲームしよッ！眠たくなったらそのまま布団に入った

「らしいしッ！」

「まあ、暇だからやるか」

？私とりゆうくんはその後、一緒にゲームをすることになった。私はりゆうくと一緒にゲームをしている間は少しだけ、本当に少しだけ……この後のことを考えるだけでムラムラして、興奮していた。……1時間後、私達はゲームを一緒にやっていたんだけど、りゆうくんが眠たそうに目をこすりながらあくびをしていた。……そろそろかな♪

「りゆうくん眠たいの？」

「ん〜？ああ、もう眠いな。俺、そろそろ寝るわ」

「うん、ゲームは私が片付けとくから先に寝ていいよ」

「了解。おやすみ響」

「うん、おやすみ……りゆうくん♡」

♪

？……そして、りゆうくんが眠って1時間が過ぎた。時間は夜の10時頃、私はそろそろ自分でも待てないくらいに興奮していた。私は、自分の布団から出てりゆうくんが寝ている布団に近づく。もちろんその間に私はパジャマを脱いで下着だけの状態になる。最近はノイズばかりでもう我慢出来なくなっていた。りゆうくんのアレを見ちゃうだけでキュンキュンしちゃうよお♡

「りゅうくん……それじゃ、お邪魔しま〜す」

？そして、私はりゅうくんの布団の中に入る。その瞬間、りゅうくんの匂いが私の脳を余計に興奮させた。ああ……やっぱりの匂い好きい♡

「ごめんね、りゅうくん……んっ、んちゆるっ、れろっ、じゆるるっ、はむっ、あむっ、れるっ、んむっ、ちゆるるっ、んんっ……んんんっ……ぷはあ……はあ、はあ、はあ♡」

？私はそのままりゅうくんに濃厚なキスをする。初めてキスした時は1年前ぐらいだけど、そこから段々と歯止めが効かなくなってきた、今では入れることは無いが、それ以外のことをほとんどのことをやっている。もう……ダメ、りゅうくんの逞しい（自主規制）が欲しいよお♡

「りゅうくんごめんね？私、もう我慢出来ないんだ……それじゃ、ズボンを……あッ♡硬くて、おつきくて……すっごい匂い、結構溜まつてるよね♡」

？私はこの匂いを嗅ぐだけで少し濡れているのが分かった。その場所に、私はりゅうくんの手を移動させて準備を始める。多分、周りから見れば完全に（自主規制）なんだけども、私はまだりゅうくとそこまでの関係までいってはいない。自分で言うのもなんだけど、やっぱりゅうくんから来て欲しいって思ってるから……

「ああ……もう無理、もうこんなことやっちゃダメなのに……でも……」

「……………んう……響」

「こんなエッチな女の子でごめんね、りゅうくん……私もう我慢出来ないの。だから、りゅうくんの今まで溜まった濃厚な味を、いっぱい私の口で出してね♡それじゃあ……」

「あゝむ♡」

G編

彼はまだG編を知らない

「……侵食率はほとんど無さそうね。いいわよ、今日のメデイカルチェックは終わりよ」「やつと終わりですか？意外と長かったですね了子さん」

「仕方ないわよ。貴方はいくら天才であるこの櫻井了子が生み出した融合症例2号でも、響ちゃんと違って人為的なものだから何かあつてからじゃ遅いのよ……」

「あの事件から1ヶ月半の月日が過ぎた……実は、あの時の事件の名前はルナ・アタックと名付けられていて、今でもその場所での復興が進んでいるらしいのだ。俺はその間の中で、何度か二課に寄つてメデイカルチェックを受けながら日々、自分の体を元通りにする為の検査を受けていた。じゃないと了子さんが何されるか分からないからな。」

「さてと……それじゃ俺はこれで失礼します」

「ちよつと待ちなさい隆一くん。絶対に大きな怪我とかしたらダメよ？そしたらいくら貴方がネフシユタンによつて再生されるとしても、侵食は免れないから気をつけなさい」

「侵食したら、どうなるんですか？」

「死ぬわ」

「……怪我しないように気をつけます」

「それと、はいコレ」

？すると、了子さんは胸の谷間から一枚のチケットを取り出して、俺に渡してきた。いや、どこに入れてるんですか……

「翼ちゃんが貴方に渡してくれて頼まれたから渡しただけよ。まあ、翼ちゃんが貴方に渡したら響ちゃんや未来ちゃんが黙ってなさそうだものねえ」

「……予想出来てしまう俺が恐ろしい。ってこれライブのチケットなんですね。時間は……明日だ」

「その日は響ちゃんとクリスがソロモンの杖を山口県まで運ぶ予定だから気にしないでいいわよ。楽しんでらっしゃい」

「ありがとうございます了子さん」

？そして、俺はその部屋を出て家に帰る。しかし、明日かあ……明日は新作のエロゲーが届く予定だったんだが、時間を変えて届くようにしたらいいか。

「そう言えば未来が翼さんのライブを友達と一緒に行くとは言ってたが、明日出会ったら合流でいいか。ライブは実は初めてだけど人が多いだろうなあ……」

? 次の日、俺は了子さん渡されたライブのチケットを持ってライブ会場に来たのだが
……

「あの翼とマリアの初のコラボよッ! 楽しみッ!」

「だよねッ! だよねッ! 早く始まらないかなッ!」

「俺たちはライブを楽しみにして来たッ! 行けなかった同士達の分も一緒に楽しむぞッ
! うおおおッ! 翼あああッ!」

「隊長ッ! しかし、周りにはリア充がちらほらいま」私達はリア充撲滅隊ではないッ! 今
は……歌姫達のファンの一人だッ!」た、隊長ッ!」

「……うおおおッ!」

? ライブ会場は始まる前から凄まじい盛り上がりを見ていた。てか、なんであいつら
いんの? しかも、ガチのファンじゃん。

「……バレないように入ろう」

? そして、俺はライブ会場の中に入って席に着く。自分の席の場所は意外とステージの
近くにあつて、すんなりとそこに座ることが出来てしばらくライブが始まるまで待つて
いた。

「結局未来には会えなかつたな。まあ、そんなこともあるしな。確か今日のライブはコ
ラボって言ってたよな。確か翼さんともう人は…… マリア・カデンツ…… マリ

ア・カデンツアヴァタ……もうマリアさんでいいかな」

？そんなことを言っていると照明が暗転し、ライブが始まる。その瞬間、翼さんとピンクの髪の女性がステージに現れて不死鳥のフランメを歌い始める。その時、周りのファンは盛り上がりを見せて叫ぶファンが増えるこれが……

「ライブか……」

？俺もライブでの2人の歌を聞く度に自分の胸が熱くなるのを感じた。まるで、2人の歌が俺の体に反応するような……ん？そういえば了子さんがあの時何か言ってたっけ？

『……いい、くれぐれも装者達の歌を聞いてはダメよ？1人の歌なら貴方のネフシユタンの欠片はそこまで反応することはないけど、2人や3人になると一時的に貴方の体は超人に近づくけど、その分侵食は加速するから気をつけなさい』

？そんなことを思い返しながら俺は熱くなる体を抑えながら歌を聞き続けた。いや、まさかそんなことある訳がないやんツ！あれでエンディングじゃないのツ!?まさか……

「あの人は装者？」

？やがて、その不死鳥のフランメの歌を歌い終えた2人が次の歌を歌おうとした時、それは起きた。

「ノイズだあああああッ!!」

「へ？なツ!?ノイズッ!」

?その瞬間、俺はふとあることに気がついた。それは……

「ルナ・アタックで終わりじゃないのッ!」

彼はフラグ回収が早い

？改めて現状確認をしよう。俺は了子さんに翼さんからと渡されたライブのチケットをもらって、翼さんともう一人の歌手であるマリアさんのライブを聞きに来ただけのはずだったのだが、今のライブ会場はライブ席の横の通路に沢山のノイズが急に現れた。そして、俺の中のネフシユタンの欠片が反応したと言うことは少なくともマリアさんは聖遺物に関連したものに接触したと考えている。

「いやあッ！ノイズうッ！」

「助けてくれえッ！殺されるうッ！」

『……えるな』

「もうダメだ、おしまいだあ……」

「ごめんなさい……お父さん、お母さん」

『狼狽えるなッ！』

？いや、狼狽えますよ？隣に触っただけで人間を殺せるノイズがいるんだから無理に決まっていますよ。そう思いながら俺はそのままステージの方の翼さんとマリアさんを見てみると2人が何かを話しているように見えた。すると、マリアさんは急に胸の谷間

からあるペンダントを取り出して何かを唱えていた。すると……

「……………あれ？おかしいな、俺の見間違いかな？」

？そう思いながら俺は自分の目を閉じて、再びステージに目を向けた。シンフォギアじゃん。道理でネフシユタンが反応する訳だ……じゃないよッ！このパターン増えてきたなッ！つとそんなことを思っているとマリアさんがいきなり会場のファンに向けてこう叫んだ。

『私は……………私達はファイネ。そう、終わりの名を持つ者だッ!!』

「……………え？ファイネ？マリアさんは了子さんじゃないよね？……………マジで何が起きてるのッ！俺もう訳わかんないッ！」

？俺は今の状況が本当に訳わかんないままだ、客席に座ったままステージを見ていた。すると、ふとマリアさんと目が合ったような気がしてサツと顔を隠した。俺は了子さんの失敗から学んだ……とりあえず目を合わせなければ目をつけられない。これだな。

『……………会場のオーデイエンス諸君を解放する！ノイズに手出しはさせない。速やかにお引き取り願おうか！』

？すると、マリアさんが急にファンの人達を解放すると言い始めた。どうやら俺は目をつけられてなかったようでホツとしながらその場を後にした。多分俺がいても邪魔に

なるだけだろうし、向かう途中で緒川さんに合流したらいいか。

♪

「…………その後、俺は他のファンの人達と一緒にライブ会場から外に出る為に人が多い通路をなんとか抜けている時だった。俺が外に向けて邪魔にならないように一緒に進んでいると、関係者以外立入禁止区域に2人の少女がいて、そのまま更に奥に進もうとしていた。まずい…………このままじゃ、あの2人の少女が巻き込まれてしまう。」

「調、そろそろマリアと合流しないといけないデスよ」

「分かっているよきりちゃん。でも、通路はあっちだよ？」

「…………わ、分かっているデスよ。さ、行くデスッ！」

「ちよつと待ったッ！」

「ほえ（え）？」

「？俺は急いでその少女達の腕を掴んで奥に行こうとしている2人をなんとか止めて、その場に留まらせた。ふう、このまま行かせたらノイズと接触する可能性があるからなよかったよかった。」

「な、何するデスカッ！離して欲しいデスッ！」

「いや、そっちは危ないからダメだ。急いで外に出るぞ」

「…………私達は大丈夫。だから離して」

「ダメに決まってるでしょ。そもそもわざわざ危険な場所に行こうとする少女を止めるのは当たり前だ」

？そして、俺は2人の少女を連れて外に出ようとしますが、その2人は何故か抵抗してその場から動こうとしなかった。しかし、今の俺はネフシユタンのお陰なのか分からないが俺の方が力が強かった為、簡単に2人を担いで外に向かって走り始めた。

(ま、まずいデス。このままじゃ、マリアと合流出来ないデス……)

(今なら私のシウルシヤガナで……ダメ、私にはそんなこと……)

「もうすぐ出口だから急ぐよ」(これ絶対に今日はお泊まりコースだろうな。響が何とかしてくれることを祈るしかないな)

？やがて、出口が見えてきて俺は急いでそこに向かおうとしたのだが、急にノイズが現れて出口の道を塞いだ。

「うっそやんツ!?ノイズツ!」

「全く、仕方ない人達ですねぇ……」

「ツ!?ドクターツ!」

？俺は2人の少女を下ろして、後ろを振り向くと白衣を着た眼鏡の男がそこには立っており、見覚えのある杖を持ちながら眼鏡をかけなおしていた。……あれって、確かソロモンの杖だっけ?なんでここにあんの?

「ドクター……何しているデスカ」

「それはこっちのセリフですよ。何故貴方達がここで道草食ってるのかは知りませんが、このままではフィーネが危険ですよ？」

「ツ……分かつてる。行こうきりちゃん」

「ドクターの指示はあまり聞きたくないデスが仕方ないデス」

？すると、2人の少女は俺を置いて何処かに行ってしまった。てか、あの少女達って敵だったの？俺、巻き込まれ過ぎない？

「……行きましたか。さて、それじゃあ私も仕事を始めましょう……そうでしょう？融合症例2号」

「なるほど。つまり、俺またピンチなのね………逃げるんだよおおおおおッ!!」

「逃がすな、僕のノイズたちいっツ！」

？その瞬間、俺は横にあったガラスの窓に飛んで逃げた。高さは3階のビルぐらいの高さの場所から……

♫

「スンスン……ねえ、クリスちゃん。なんであの2人からりゆうくんの匂いがするのかなあ？……マタワタシノテキキ？」

「め、目が据わってるデスツ！怖いデスツ！」

「私達まだ来たばっかりなのに、これがルナ・アタックの英雄……」

「あの子、貴方達よりも凄い。実際、正直近づきたくないわね……もしかしてあれが平常運転なのかしら？」

（ああ、合ってるぞマリア）

（……今度、あいつにあのバカを抑える方法を教えて貰おう）

彼は意外としぶとい

? ライブの事件から1週間が経過した。俺はその後、何とかノイズを操っている眼鏡の男から逃げ切ることには成功したのだが……

「あー……暇」

? 家で絶対安静状態で過ごしていた。理由は、両足の骨折にネフシユタンの侵食、そして響と未来の過保護が重なって現状に至る。しかし、あの高さから落ちて、めちゃくちゃ両足が変な方向に曲がっていたにも関わらず、ネフシユタンの力によって再生されるのは嬉しい限りだ。

「しかし、侵食が少し進んだかあ……」

? あの後、もちろん了子さんに怒られた……つと言うよりは呆れていたのかもしれない。そして、了子さんに俺は事情を説明した後、病院に入院することになったのだが、ネフシユタンの再生で予定よりも早く治り始めて今は全然痛くないので退院を待つばかりだ。すると、俺のいる病室に誰か来たようだ。

「どうぞ」

「失礼しまゝす……いつくん元気?」

「未来か、もちろん元気だよ。ほら、足の怪我也治ってるし大丈夫だよ。響は？」

「響なら任務中だよ。なんか、響がウエルの顔を殴るとか言ってたけど……いっくん何か言った？」

「え？ いや、俺何も……あ」

「俺はその時あることを思い出した。実はあの時、了子さんに説明していると、了子さんはなんか凄い悪い顔になりながら何処かに行ってしまったのだ。あの後に了子さんは響に色々教えたんだろうな。……まあ、了子さんはフィーネであんなことされたら腹は立つよね。」

「……ねえ、いっくん。実は私の通ってる学校で秋桜祭があるんだけど」

「秋桜祭？ それって文化祭見たいな奴か。それがどうしたんだ？」

「その、秋桜祭を私と回らない？ も、もちろん響も一緒だよッ！」

「あ、ああ。分かったから落ち着いてな？ しかし、俺の文化祭もあつたんだよなあ……」
「確かダンスをするんでしょ？ 凄いキレのあるダンス」

「そうそう……ってなんで知ってるの？」

「ふふっ、秘密♪」

「すると、未来は自分の唇に人差し指を立ててイタズラが成功したような笑顔で優しく笑った。本当に俺はやはり親友には敵わないな……つとそういえば響は任務中って

言つてたけど大丈夫なの……いや、大丈夫だな。

♪

？あたし達は敵のアジトである廃病院に潜入していて、その中にいるノイズ達を倒している中、ノイズでない奴があたし達を襲ってきた。……襲ってきたのはいいんだが……
「邪魔だあああああッ！」

「……………」

「逃げるなノイズッ！りゆうくんを襲つたのはお前かッ！殺すッ！殺すううううううッ！」

「…………私達の出番はないな、つて雪音？」

「…………いや、もうこれが正常運転だったな」

？あのバカは黒いノイズのような奴をもものすごくボロボロになるまで殴っていた。その姿はまるで阿修羅のような何かを感じてもうツツコミを入れる気にもならなかった。
…………ん？誰かきて…………つてアイツはッ！

「お前はッ！ウエルッ！」

「流石は英雄…………いやはやすブヘラッ！な、何をするんだッ！この僕ゴフッ！」

「お前かッ！お前がりゆうくんを病院送りしたなッ！私はお前を許さないッ！」

「ちよっブヘラッ、ま、まっガッ！や、やめゲボラッ！」

？やってきたのはどうやらウエルのように、あたし達の様子を見にこっちにやって来たそうだが、あのバカに目をつつけられたせいかな、さつきからずっとウエルを殴り続けていた。あの黒いノイズ見たいな奴もあのバカを見たせいかな、さつきから1歩も動かないでいた。もしかして、本能的にあのバカが怖いのか？

「ぼ、ぼぐのがおが……ぎやあああああッ！」

「お前がッ！お前があああああッ!!」

「……雪音、あれを止める力は私達にはない。だが、これは……原型はあるのだろうか、つて雪音？」

「……もうあのバカだけでいいだろ」

彼はよく目立つ

？あれから少し経った。俺は前まではもう少し病院で入院する予定だったのだが、了子さんのお陰で早めに退院することが出来た。しかし、まさかネフシユタンの再生がここまで強力になっているとは思ってもみなかったが。

「まあ、お陰で秋桜祭に行けるからよかったよかった、つと着いたな」

？実の所、了子さんから話を聞いたのだが、結局響達はテロリスト達を捕まえることが出来ずに任務は失敗したようだったので仕方ないと言えばそうであろう。入院してから響はずつと不機嫌だったからなあ……

「さて、秋桜祭って意外と人が多いな。響達の教室は、何処だ？」

「……ねえ、あれって」

「立花さんの幼なじみの……」

「ちよつと話しかけてみようよ」

？……響達の女子校に入ってきてからさつきから視線が凄い。多分この学校の女子生徒なのだろうが、俺に用事でもあるのだろうか？すると、意外な人物が俺に話しかけてきた。

「あ、うん。響とは幼なじみだけど」

「はいはいッ！小日向さんとは本当に親友の関係なんですかッ！私凄いい気になるんだけどッ！」

「いや、ちよつ、ま」

「ビッキーとは恋人でヒナとは愛人なのかな？そこの所詳しくッ！」

「ちよつとそこオツ!？」

？結局、俺はこのまましばらくは沢山の女子生徒達に囲まれて質問攻めをくらい、響と未来の待つている教室に行くまでに1時間ぐらいかかったのだった……

♪

「それで遅れたんだ。ヘエ……」

「ひ、響さん？怒ってません？」

「全然怒ってないよ。ね、響？」

「あ、未来も怒ってらっしゃる。とりあえず……1時間遅れてすみませんでしたああああああッ！」

「……響、許してあげたら？今日の出来事はいつくんは悪くないし」

「……うん。確かにりゆうくんは悪くないね」

？あの後、俺は響と未来のいる教室に1時間遅れてやって来たのだが、やはり2人は

怒っていて何とか謝って許して貰えた。ちなみに今日は何故響と未来は教室で合流する予定だったのかと言うと……

「悪かった2人共。遅れたのは俺が悪いからな……後その、可愛いよ2人共」

「本当ツ！えへへ、りゆうくんに褒められた♡」

「いっくん……うん、ありがと♪」

「どういたしまして。……しかし、クラスの出し物がアニマルカフェって凄いな。なんて言ったらいいのか……部屋着感が凄い」

？実は、響と未来のクラスで出し物があり、その出し物がアニマルカフェだったのだ。なので響は柴犬のフード付きの服、未来は黒猫のフード付きの服と、とても可愛らしい服で接客をしていた。実際、こういった服を着ることは昔はあったのだが、昔とは違った可愛いさがあった。何故か俺が照れてしまった。

「りゆうくん本当にコーヒーだけでいいの？りゆうくんだったら私、全力で私なりのおもてな」

「響、それは家でやってね。あと、いっくんは私の耳を触ろうとしない」

「いやあ、ちよつと垂れ耳が気になって……」

「……ちよつとだけならいいよ」

「あッ！未来ずるいッ！私もッ！」

「いや、響さんちゃんと仕事してね？きつきから貴方仕事になってないよ」
？その後、アニマルカフェで俺は少しゆつくりした後に学校の中を色々と回っていた。
本当は響と未来とで色々廻りたかったのだが、まだ仕事が終わってなかったので仕方ないだろう。一応クリスの歌には間に合うと言っていたので、それまでしばらくブラブラ
している……

「響と未来可愛いかったな……よし。この写真をロック画面に……」

「このたこ焼き美味しいデスねえ〜調え〜」

「きりちゃん行儀悪いよ。ちゃんと前を見ないと……つてきりちゃんッ！前ッ！」

「ん〜♪つてフギユ」

「ん？あ、ごめん。前を見てなかった」

「うう……こつちこそごめんデス」

「すみません。うちのきりちゃんが……」

「あ……」

「デス？」

彼は餌付けする

「えっと……何してるのかな？」

「だ、誰のこと言ってるの？ 私は貴方と会ったことはな「あッ！ この前マリアのライブであたし達の邪魔をしたおムグツ」きりちゃんお口チャック」

「……なんて言え方がいいのだろうか。彼女達は眼鏡をして変装をしているのだが、はっきり言ってバレバレである。しかし、彼女達は一体何をしにやって来たのだろうか？」

「……まあ、その、この学校に何しに来たの？」

「……………」

「も、黙秘権を行使するデスッ！」

「やはり、彼女達は何か目的があつてこの学校に来たらしい。すると、金髪の少女が急に大きな声で叫んだ。」

「あーッ！ あたしのたこ焼きが落ちてるデスッ！」

「嘘、きりちゃんのとこ焼きが……今日の私達のご飯が……」

「あ、本当だ。つてよく見たら俺の服にもソースがついてる」

「ご、ごめんなさいデスッ！ えっと、その、あわわ〜」

「きりちゃん落ち着」

——キュルル〜

？その時、黒髪の少女から可愛いらしい音が聞こえた。どうやら黒髪の少女はまだ何も食べていなかったらしい。すると、黒髪の少女は聞かれて恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして俯いていた。

「……………えつと」

「い、今のはあたしデスッ！まだお腹が空いてたんデスよ〜」

「お、おう。そうか、そう言うことにしよう」

「……………」

？黒髪の少女は今度はプルプルしながら涙目でキツと睨んだ。いや、それ俺が悪い訳じゃないからね？でも、何故だろうか。この子達の今の表情が可愛いんだが……

「……………とりあえず何か食べる？お兄さん奢るよ？」

「て、敵に情けはいらないデスッ！」

「私達はちゃんとお金持つてるし、ちゃんと食べるから大丈夫」

——キュルル〜

「……………うん、とりあえずここで待ってて。ちよつと買ってくるから」

？結局、俺はいくつかの屋台でホットドッグやクレープ、焼きそばにクッキー等色々な

お店で食べ物を買って戻ってきた。けれど、何故この女子生徒は俺のことを全員知っているのだろうか。響さん俺のこと喋りすぎではありませんか？

「はいこれ。食べていいよ」

——ゴクリ

「……これは私達に同情でもしているの？なら私達は食べない」

「……じゅるり」

「ぎりちゃん？」

「ツ!?そ、そうデスッ！私達は食べないデスよッ！」

？そう言つて、2人は俺が買ってきた物を頑なに食べようとはしなかった。まあ、確かにそうかもしれない。俺はあまり二課でのことはあまり知らないが、この少女達が敵であるとは言われているがそう思えないのだ。……ならアレをやるか。

「本当に食べないの？」

「「食べない(デス)」」

「……食べないのか。なら捨てるしかないな」

「ツ!?た、食べ物を粗末にしたらいけないデスッ！」

「いやでも、俺こんなに食べれないし……」

「食べ物を粗末にするとバチがあたる。だから絶対にダメ」

「そうか……なら誰か食べてくれる人がいないかなあー」

「……ならあたし達が食べるデスッ！」

「うん、食べ物捨てるのはいけない。だから私達が食べるのを手伝う」

「…………やはりチョロい。そうして、俺は2人の少女と一緒に屋台で買ってきたものを一緒に食べ始める。まあ、正直お腹の空いている少女に何もするのは男としてダメな気がするからな。」

「ん〜♪このホットドッグ美味しいデ〜ス♪」

「このカレーパンもサクサクしてて美味しい……」

「確かに美味しいな。……所で2人の名前は？正直なあとか、おいとかでいいたくないんだけど……」

「…………どうするきりちゃん？」

「調がいいならあたしはいいデスよ？」

「分かった。私の名前は月読調、こっちはきりちゃん」

「暁切歌デースッ！よろしくデスお兄さんッ！」

「お、お兄さんッ!?…………ま、まあいいか。俺は赤間隆一だよろしく」

「分かりました、隆一お兄さん」

「この時、俺は何故かエロゲーのセリフと月読の言った愛称が重なってしまって、なん

かこう……いけない気がした。暁の方はなんかしつくりきたのでそれで良しとしよう。

「……隆一お兄さんはやめてくれ。せめて他の言い方してくれないか？」

「……お兄様？」

「犯罪臭がやばいからダメ」

「お兄ちゃん」

「より悪化してない？」

「なら……先輩」

「……それならまあ、いいか」

彼は巻き込まれやすい

？俺は2人の少女、調と切歌と一緒に屋台で買ったホットドッグや焼きそば等を一緒に食べてゆつくりしていた。正直、この2人がそんなに悪いことをしたとは思わないんだが……

「美味しかったデース……」

「うん、日本の屋台の食べ物がここまで美味しいとは思わなかった」

「俺も初めてきたけど、確かに美味しかったよなあ。あ、思ったんだけどどうして響達の学校にきたの？あのドクターって人はどうしたんだ？」

「ドクターは信用できないデース。それにそれ以上は言えないデース」

「んー……まあ、そうだよな」

？そう思いながら時計を見る。すると、もうすぐクリスが歌う時間が迫っており、俺は焦り始めた。やばい、このままでは響と未来に何言われるか分からないッ！

「ごめんッ！俺、ちよつと用事があるから急ぐよッ！」

「何処にいくの？」

「いや、ちよつとクリスの歌を聞きに」

「……調」

「うん、きりちゃん。あの、私達も行ってもいいですか？」

「へ？あ、うん。いいけどちよつと走るよ？」

「了解（分かったデースッ！）」

♫

「……とまあ、俺は何かクリスが歌う前にその場所には間に合ったのだが、開いている席が見当たらずにたまたま空いていた席が3席あったので俺と調と切歌は一緒そこに座ることにした。

「凄い人ですね」

「人が沢山デスよ。つておよよ？お兄さんどうしたデスカ？」

「いや、何……ちよつと愛的なオーラを後ろから感じてね？後ろは振り向いたらダメだよ？」

「分かったデス？」

「？そして、学校での歌うま的なイベントが始まった。その間の中で様々な歌が披露されて、会場は盛り上がりを見していた。しばらくして、クリスの順番がやって来て、そのままクリスはステージの上に立って恥ずかしそうにしていた。あ、こっち向いた。

「なッ!? 隆一お前なんでその2人と「それじゃあどうぞッ！」はアッ!? ちよつ、ま」

?すると、音楽が流れ出して始めた。クリスはすぐに俺のことキツと睨みながら、気持ちを切り替えて歌い始めた。あれはきつと何か言われるだろうなと思いつながらクリスの歌を聞いていた。しかし、なんとも綺麗な……

「いい歌だな……」

「はあ〜♡」

「凄いデ〜ス♡」

?俺もこのクリスの歌に心がドキドキしていたが、隣にいた調や切歌も同様にクリスの歌にうつとりしながらその歌を聴いていた。やはりシンフォギアの装者の歌は誰かの心を突き動かされる素敵な歌なんだと関心していた。やがて、クリスの歌が終わると同時に歓声が上がる。それを聞いたクリスは歌ってスッキリしたのか分からないが笑い顔をしていた。

「クリスの歌、よかったな」

「ん〜あたしも歌いたいデスよッ!」

「同感。私もアレを聴いたら私達も歌いたい」

?どうやらこの2人もクリスの歌を聴いて歌いたくなってしまうたようだ。ま、俺も歌いたくなってしまうから人のことを言えないのだが。すると、どうやら司会が挑戦者をこの観客達から探していた。まあ、こう言った催しではなかなか恥ずかしくて難

しいだろうけどね。

「誰かいませんかーッ！」

「ハイハイイッ！あたし達が出るデスッ！」

「お、切歌出るのか？頑張」

「私も出る。この3人で」

「……ん？」

「チャンピオンに」

「挑戦デースッ！」

「……俺もッ!？」

彼は歌が下手である

?……やばい、非常にやばい。

「さ、早く登るデスよッ!」

「いや、待ってッ! 何故俺も歌うことになったッ!」

「……隣にいたから何となく?」

「いや理不尽ッ!」

「いいから早く登るデスよッ!」

? と言われ、俺は切歌に引つ張られながらステージに立つ。すると、たくさんの人達が見ながら期待した目で見ていた。すると、切歌と調がクリスに向けてペンダントの要求を始めており、クリスもそれに応えていた。だが、俺にとってはそんなことどうでもよかった。

「さあッ! 歌うデスよッ! お兄さんッ!」

「……えつと、やっぱり俺が歌うのは無しの方向で」

「ダメ。もう始まつちやうでも、どうして?」

? すると、何故か調は俺が歌いたくないことに疑問を抱いていた。まあ、その理由は

たった1つなのだが、実は俺は……

「歌が超下手なんだよ」

「……本当ですか？」

「ああ、幼なじみと親友に呆れられたほどだ」

？俺はそれを言っつて響くと未来が座っている場所で2人の顔を確認する。2人の顔は怒っているような、やっつてしまったみたいなの複雑な顔をしていてちよつと悲しくなつた。実は了子さんに頼んでネシユフタンをシンフォギアとして俺を覚醒させることをやっつてみたのだが……

『……貴方歌下手すぎない？』

『そ、そんなことは……』

『確かに歌は才能とか色々あるけど、ここまで音痴だとは思わなかつたわ』

『（・ω・）』

『……そんな顔しないの。だから、貴方がシンフォギア装者になるのは諦めなさい』

？……とまあ、こんな感じで言われたのだが、それは仕方ないだろう。ただ、その間でも時間が一刻と迫つており、歌わざるを得ない状態だった。……仕方ない、今まで歌が下手だった今の俺には歌の変わりに練習したあれしかないッ！

「それでは挑戦者お願ひしますッ！」

?その瞬間、音楽が流れ始める。俺はエロゲーの歌以外はそれほど聞くことはないが、これは翼さんが歌っている歌だと分かる。そして、それは大体は家で響がよく聴いていたことがあったのでそれなりに覚えていた。だから俺は……

「♪」

「ツ!?!」

「いつくんツ!?!」

「これは……確かビートボックスだったか」

「りゅうくん凄いッ!」

「あいつ、あんな特技があつたのかよ……」

?俺がビートボックスを始めると、それを聴いていた人達はとても驚いていた。実は俺は昔、響や未来に歌が下手と言われてからしばらくの間動画を漁っていたらビートボックスを見つけたのだ。そして、響や未来に隠れて練習していたら出来るようになったのだ。

(お兄さん凄いデスッ!かっこいいデスッ!)

(なんだか私達も楽しくなっちゃう……)

?どうやら調と切歌は俺のビートボックスと流れてくる音楽に合わせて歌っている。2人の歌はとてもシンクロしていてそれを聴いていた人達は歓声を挙げていた。やが

て、歌が終わるとそれと同時に拍手が起こった。やばい、喉乾いた……

「びっくりした。まさかビートボックスなんて」

「お兄さんはあたし達と相性いいかもデスねッ!」

「いや、あれはたまたま……グエツ!ちよつ、2人共抱きつ……ヒイツ!」

?俺は抱きついてきた2人を剥がそうとしながら席の奥を見るとハイライトOFFの未来と響がニツコリとしていた。また、その隣にいた翼さんとクリスは2人から一歩離れた所で俺と目を合わせてくれなかった。

「……死なないことを祈ろう」

「どう言うことデスカ?ってママから連絡デスッ!?」

「きりちゃん私が変わる……うん……うん……え、融合症例……分かったママ。ねえ、先輩」

「ん?どうかした?俺はもう今の状況でかなりやばいんだが……」

「黙って私についてきてください。きりちゃん目的達成、今すぐママとマリアと合流」

「わ、分かったデスッ!」

?すると、調は俺の手首を掴んで走り始めた。そして、切歌も同じように走り始める。え?ちよつ、どうゆうこと?

「先ば……いえ、融合症例2号、赤間隆一さん。貴方を私達の計画の為に誘拐します」

「……
へ？
」

彼は決闘の報酬になる

「こつちデスッ！」

「早くマムと合流しないと……」

？調と切歌は俺を連れてこの学校から出ようとしていた。いや、正確には今は誘拐されていると言えば正しいのだろう。正直、俺は調と切歌が歌を歌ったお陰でネシユフタンが反応して通常よりも活発に動けて逃げることも可能なのだが……

——ヒュッ

「ちよつツ!?今何かカスったッ!つてこれシャーペンじゃんッ!」

「ドコニイクノリユウケン?」

「響さんッ!?!人にシャーペンを投げてはいけませんッ!」

「待てッ!逃がさんぞッ!」

「……困まれたデス」

？気がつけば調と切歌は響達によって逃げ道を断たれており、2人はペンダントを持って構えていた。すると、翼さんやクリスも同じようにペンダントを構える。響は隙あらば俺を奪い返そうとしていたが、俺は切歌に人質にされていて思うように動けなかつ

た。

「いっくんを返して……」

「ダメ、この人は私達にとつて大切な鍵だから」

「やめとけて。下手にそいつを刺激するとあのバカが飛びかかるぞ。あれを見て見ろよ」

「ガルルルル……」

「……もう犬デスね」

？こんな緊迫した状況の中、俺は正直どっちでもいいと思ひ始めた。もし、向こうの敵側に行ったら何されるか分からない状態になると思うし、逆に響達に助けられたとしても、響と未来が怖いのでどっちにしる地獄だった。

「……あーッ！もう分かったデスッ！決闘デスッ！」

「決闘……だと？」

「そうデスッ！勝った方にお兄さんを渡す……これでどうデスカッ！」

「ッ！それはあまりにも勝手な」

「私達は時間が無い。もしやるんだったらここで……」

「いいよ。私はりゆうくん以外に「立花、やめておけ。そんなことをしたら隆一が悲しむぞ」……分かりました」

「それじゃあ、場所は——」

♪

?……と言う訳で、結局調と切歌は響達と決闘をすることとなり、2人は俺を連れてアジト……と言うよりヘリに戻るとおぼあさんに2人はピンタされていた。その後、俺はもちろん人質と言うことで連れだされたのだが、さつきから凄惨な視線を送る1人の男性が……

「いやあくまた会いましたねえ。赤間隆一くん」

「うわ、俺を襲ってきたやべえ奴やん。俺になんか用？」

「冷たいですね。まあ、仕方ないと言えば仕方ないですが」

??そう言つてメガネをけけなのおすドクター。すると、調と切歌は悔しそうな顔をしながら俯いていた。何かあつたのか？

「……どうやらあの婆さんに説教をくらつたみたいですねえ」

「え?なんで?あの2人悪いことしてないやん」

「そうでしょうね。ただ、問題は彼女達があまり利益のない決闘を独自の判断で決めたことなんですよ。……仕方ないですねえ」

?するとやばい眼鏡はおさあのおぼあさんに話しかけて何か交渉を始めた。しばらく話していると、どうやら話が終わったのかこちらにやつて来た。

「まあ、こんなもんでしょう。しかし、これで僕のネフィルムが……」

「……なあ、眼鏡」

「眼鏡とは心外ですね。ウエルとでも呼んで貰いましょうか」

「俺、どうなるの？」

「とりあえず僕と彼女達2人で敵側のシンフォギアを倒します。そして君は勝った側の報酬ですから」

「この時、俺はまた変なことに巻き込まれたなあと思いつながら、その決闘までの時間を静かに過ごしていた。」

彼は食べられる

？あれから少し経ち、俺はあの眼鏡と調、切歌に連れられてカ・デインギル跡地にいた。辺りは夜で周りは月明かりによってある程度視認できるほどの明るさだったのだが、これは……

「……やはり、腹の足しにしかありませんか」

「俺、縛る必要がある？逃げないよ？」

「ごめんデスお兄さん」

「私達もあまりしたくなかったけど、命令だから」

？あの眼鏡が檻から出した黒い化物。確かネフィリムだったか？そいつがさつきからずっとカ・デインギルの破片をボリボリと食べていたのだ。ただ、そんな事を思っているかどうかやら響達が助けに来たようだ。

「りゅうくんッ！……またお前かッ！ウエルッ！」

「ヒイツ！……お、落ち着くんだ。僕が育てたネフィリムは最強なんだッ！いけ、ネフィリムッ！あのシンフォギア装者を食えッ！」

？すると、ネフィリムが響と交戦を始めると、それと同時に翼さんとクリスがお互いに

別れてこつちにやって来たのだが……

「させないデスッ！」

「クツ、やはり難しいか……」

「癪だけドクターには手を出させない。先輩は私達が貰う」

「悪いがあたしも引く気はねえんだよッ！」

？そして、両者引かない状態で交戦が続く中、俺はただそれを見ることしか出来なかった。でも、やっぱり相性なのか翼さんとクリスは押してる感じがするよなあ……ん？何かこつちに飛んできて……

「え、ちよつ、ま、ぎやあああああアッ！」

「ネフィリムうッ！どうしたッ！立てッ！」

「りゆうくんの邪魔をする奴は絶対にユルサナイ……」

「響さんッ!?殺す気ですかッ！」

「ごめんね？りゆうくん……まだ、このギアに慣れなくて。でも、大丈夫だよ。あの忌々しいノイズ擬きは私がぐちやぐちやに引き裂いてあげるから……アハ、アハハハハハッ!!」

？この時、俺が見た響のシンフォギアは何故か黒色のギアに変化しており、一方的にノイズをフルボッコにしていた。なんか響が新しい力に目覚めてるんですが……余計悪

化してるんですかッ！

「ッ！勝機ッ！」

「しまっ」

？すると、翼さんが隙を見て俺を救出しようとしてこつちにやって来た。そしたらあの眼鏡がソロモンの杖でノイズ達を召喚して防ごうとしたのだが、翼さんの前では無意味だった。つてうおッ!?

「大丈夫だったか。隆一」

「あ、ありがとうございます翼さん」

「逃がさな「させるかよッ！」クツ……相性が悪い」

？翼さんは俺を連れて急いでその場から離れようとしたのだが、急に緑色の鎌の鎖が俺の腕に絡まって引つ張られた。ああ……星が綺麗だな……

「お兄さんは返して貰うデスッ！」

「やはりそう簡単には……」

？そうして、翼さんと切歌はお互いに睨み合う。でも、今状況でこのまま行けばきつと響達が勝ってしまうだろう。すると、後ろから大きな足音がこちらに近づいているのが分かった。後ろを振り返ると、そこにはさつきまで響と戦っていたネフィリムがこちらに近づいていたのだ。

「ウエルツ！邪魔をするなあああああああアツ!!」

「させませんよツ！この僕の顔をあれだけ殴ったお返しですよツ！」

「なツ!?ネフィリムがどうしてここ」

?すると、ネフィリムは大きな口を開けて切歌を食べようとしていた。その時に調が何か叫んでいるようにも聞こえ、翼さんやクリスもネフィリムを攻撃しようと思えるが、このままでは間に合わないだろう。……そう、切歌の近くに誰かがいなければ……

「フンツ！」

「ツ!?お兄さ」

?その時、俺は切歌を庇ってネフィリムに食べられる。ネフィリムは俺が口の中に入ったことが分かると、俺をそのまま飲み込んだ。一瞬、響の叫ぶ声が聞こえたが、俺は飲み込まれた為にそのまま胃の中に入る。

「ツ!?い、痛てえ……俺が、溶ける……」

?ネフィリムの胃の中はまるで焼却炉のような熱を持っており、俺の体は足から段々痛みと共にゆっくりだが、溶け始めていた。それと同時に、ネフィリムの胃の中には強いガスが発生しているのか、俺の意識を奪ってくる。

「あー……今度こそ、死ん……だ……な」

?そして、俺は溶け始めてゆく足を見ながら静かに意識を失った。

？いつものように頭を撫でてくれるよね。リュウケン？

彼は目覚める

「——んう、俺は……」

「あら、目が覚めたかしら？」

？俺は目が覚めて、周りを見るとそこは研究施設の中だった。ここは何度も訪れていて、見覚えのある部屋だと理解出来た。そして、その部屋の中にいたのはやはり……

「了子さん……俺は一体」

「まあ、無理も無いわね。1週間は掛かっているけど問題はないとして、貴方が眠ってる間大変だったんだからねッ！未来ちゃんはこの1週間は悲しそうな雰囲気だし、響ちゃんも命も危ないし、貴方の命ももう……」

「……何が、あつたんですか？」

？すると、了さんは座っていた椅子から立ち上がって、ある映像を見してくれた。俺が眠っている間に一体何が……

「まずは……これを見て貰えるかしら」

『アッアッアッアッアッアッ!!』

『やめろッ！立花ッ！これ以上はッ！』

『おいバカッ！ネフィリムはもう肉片にしかなってねえからやめろッ！』

『リ、ユウク、ンッ！コ、ロスッ！コロス、ッ！』

『……雪音、私達で立花を止めるぞ。今、立花を止めるのは私達しかいない』

『ッ！確かに隆一は……クソツタレッ！あたしがもつと強ければッ！』

「……以上が1週間前の映像よ。何か質問がある？」

？俺はさっきの映像を見て、驚いていた。響はまるで獣のようにネフィリムをぐちゃぐちゃに引き裂いて、潰して、投げて、噛みちぎっていた。そして、それを止めようとして翼さんとクリスが響を止める為に一生懸命戦っていたのだ。そして、俺が1番に気になったのは……

「1つだけいいですか了子さん」

「いいわよ。後、あの子達にお礼を言っておきなさいよ？お陰で響ちゃんも隆一くんも生きてるんだから」

「分かっていますよ。俺が聞きたいのは……なんで俺、生きてるんですか？さっきの映像見たんですけど、あのネフィリムの腹の中から出てきた人型のドロドロした何かって俺ですかッ!？あれ、俺絶対死んでるだろッ!」

「……隆一くんはブレないわねえ。確かにあの映像に写っていたのは確かに貴方よ。ネフィリムは生きてる聖遺物だけど、実際ここまで消化が早いとは思わなかったわ。……

ただ、貴方が瀕死の状態でもネフシユタンのお陰でその体は再生されたから不幸中の幸いだったわね」

？そう言つて、了子さんは何か準備を始めていた。正直、確かに響や敵側の2人も気になることが沢山あつたのだが、あの映像を見てやはり自分がドロドロの溶けた状態の姿を見るとなんかこう……めちやくちや嫌になりそうだった。てか、やっぱり響は暴走してるなあ。

「話が変わるけど、今から響ちゃんと貴方の体について説明するわね。まず、最初に言えることは響ちゃんはそのままシンフォギアを纏っていたらガングニールの侵食によつて死ぬわ」

「……え？響が死ぬんですかッ！何とかならないんですかッ！」

「落ち着きなさい。響ちゃんはこのままシンフォギアをこれ以上纏わなければ死なないわ。だから貴方が響ちゃんを止めるのよ」

「……分かりました。響は俺か未来のことだったら絶対になんとかなので安心してください」

「……強いわね」

？俺は了子さんの話を聞いて……泣きたかった。もしかしたら響が死ぬと言う不安と何も出来ない思いが、俺の中でぐちゃぐちゃに混ざり合っていたからだ。……正直、い

ぎ、幼なじみが死ぬと言われても、実感が湧かなかった。

「そろそろ響ちゃんが診察に向かうわ。貴方の体はもうほぼ治ったけれど、今は動かない方がいいわよ」

「え？それってどう言う……」

？そうして、了子さんはそのまま部屋を出て、響の診察へと向かった。了子さんは俺に動くなどは言ったが、喉が渴いたのでベッドから立ち上がって自動販売機に向かおうとしたのだが、俺の腰に何かが巻きついていて離れなかった。

「さっきから生暖かいものがあるなどは思ってたけど、響じゃあないよな？」

？そう言って、俺はベッドの布団の中を覗いてみるとそこには……

「スウ……スウ……」

「……未来か。まあ、未来ならいいか」

？布団の中を覗くと、そこには未来がいて俺を抱きしめたまま、そのまま寝ていた。相変わらず未来は昔から不安になった時、いつも俺か響から離れなかったよなあ。

「……寝るか」

？そうして、俺はそのまま静かに目を閉じてゆっくりと眠り始めた。

♫

「……ふう。響ちゃんに何て言ったらいいのかしら？」

「了子くん何かあったのか？」

「あら？弦十郎くん。実は隆一くんの件だけど……」

「ああ、分かっている。隆一くんも響く人と同様に侵食が始まっていることにな。……響くんはまだ目覚めないか」

「ええ、絶唱の負担はかなりのものだから仕方ないわね。実の所、響ちゃんはもうシンフォギアを纏って戦うのは難しいと思うわ。それに、響ちゃんに……」

「隆一くんの侵食が響く人と同じペースで進んでいる……これを響くんが聞けばより隆一くんへの依存性が上がるだろうな」

「はあ、ままならないわね」

彼は違和感を感じる

？あれから少し経った。俺はあの後、ネフシユタンの再生能力が思った以上に高く、家に帰ることが出来た。二課ではまだ、慌ただしい状況が続いている中で、俺はいつもの日常を送ろうとしていた。ただ、1つだけそんな日常での変化があった。

「いっくん、ほらソースが付いてるよ」

「ん、ありがと未来」

「あーッ！未来だけずるいッ！私もりゆうくんにしてあげたかったのに……」

「響はいっくんのソースを取るより、自分の口元の米粒を取った方がいいよ。……はい、とれた」

「えへへー。未来ありがとー」

？ここ最近になって、響と未来が毎日家にやってくるのだ。前は1週間に1、2回程度だったのだが、今はよく家にやって来て一緒に過ごす時間が増えたのだ。……まあ、2人が心配になるのも分かる。今、この中で1番危ないのは俺と響なのだ。だから未来や響が毎日やって来るのも仕方ないのだろう。

「ねえ、りゆうくん明日はデートしようよー♪」

「デートって、俺は……」

「実は私が提案したんだけど、いつくんは嫌、かな……迷惑だよ……」

「……いくよ。とりあえずお風呂が沸いたから未来から入っていいよ」

「うん……よかった」

？そうして、未来がお風呂に入り洗面所に向かう。最近の未来はよく悲しい顔ばかりしている。まあ、了子さんから俺と響の容態を聞いて不安なのだろう。でも、実は未来だけがこんな調子ではないのだ。

「……未来お風呂に入っちゃったね」

「そうだな。って何してるの？」

「りゆうくんギューってして？寂しい……」

「……また、未来に甘えすぎって怒られるぞ」

「いーの。……わふうーりゆうくんの匂い好きい♡」

？響は未来とは打って変わって、俺に隙あらば甘えてくることが頻繁に増えてきた。響がここまで俺に甘えるのはやはり、自分の体の状態をまだ受け入れていないのだろう。実際、俺と響は余命宣告を受けているようなものなのだから……

「んっ♡……りゆうくん、今日一緒に寝てもいい？未来と3人で……」

「今更じゃない？響はいつも勝手に入ってくるから仕方ないとして、未来にはちゃんと

話をするんだぞ?」

「うんッ! それじゃあ、りゆうくんは明日のデート何処に行きたい? 私と未来はりゆうくんと一緒に何処でもいいよ」

「なら……昔行つたタワーにでも行くか」

「うん」

?すると、気がつけば、未来が風呂からもう上がっていた。俺は響に先に風呂に入るように言つて、ソファに転がる。やがて、俺は段々眠気が襲つてきたのでそのまま目をぶつて眠つた。なんだか最近はず2人に違和感を感じるんだよな……いや、気のせいか。(いっくん、響……)

♪

?そして次の日、俺達は3人で昔よく行つたタワーに登つて外を眺めていた。よくよく考えてみたら、響と未来と俺で出かけるのはかなり久しぶりではないのだろうか?

「高ーいッ! りゆうくん、未来凄いいよッ!」

「もう、響つたら……つてりゆうくん?」

「ん? ああ、ごめん。どうかしたか?」

「……ううん。大丈夫だよ」

?そして、俺達はタワーの最上階で外の景色を見る。すると、そこには絶景と言えるほ

どの景色が広がっていた。しばらくの間、俺達はその景色を堪能していたのだが、少しトイレに行きたくなってしまった。

「…………ごめん。2人共ちよつとトイレに」

「え、そうなの？なら私と未来はここで待つてるからッ！」

「分かった。すぐ戻ってくる」

？俺は急いでトイレに向かい、全てを済ませに行った。しばらくして、全てを終えた後にトイレから出ると爆発音が響き渡る。…………まさかッ!?

「響ッ！未来ッ！」

？俺は急いで響と未来の方に向かおうと、走り始める。もしかしたら響と未来がノイズ達に襲われているかもしれないと思いながら、急いで響と未来のいる場所に向かっていると、急に壁が破壊された。そして、そこに現れたのは…………

「ッ!?!な、なんだッ！」

「ママッ！大丈夫ッ！」

「ええ、なんとか…………」

「今すぐ脱出を…………なッ!?!融合症例ッ!?!」

「ま、マリアさんッ!?!」

彼は存在する

「どうして融合症例がここに……」

「マリアさんが何故ここに……」

「お、落ち着いて状況を整理しよう。俺と響と未来は久しぶりにこのタワーにやっつて来て、上から見る景色を楽しんでいた。しかし、俺は急にトイレに行きたくなって、未来と響から離れて済ませた後に合流しようとしたら爆発音が聞こえて、急いで向かおうとしたら壁が破壊されて中からマリアとおばあさんが出てきた……なんでッ!？」

「マリア、このままでは大変なことになります。早く避難を」

「分かっているわママ。でも……」

「すると、マリアとおばあさんが何かを話していた。何故マリアさんは壁から現れたのかは分からないが、今はそれよりも響と未来が心配だ。もしかしたら響は既にシンフォギアを纏って戦っているかもしれない。」

「いたぞッ! 逃がすなッ!」

「ッ!?! チッ、行くわよッ!」

「へ? ちよつとおおおおおッ!!」

「静かにしてなさいッ！舌を噛むわよッ！」

？そんな時に、壁の向こうから男の声がしてマリアさんは逃げ始めたのだが、何故か俺の服の首元を掴んで走り始めた。何故マリアさんがこんなことをするのか分からないが、その向こうから黒服の男達が現れて拳銃を撃ち始めた。あつぶねッ！今、頬をかすつたぞッ！

「マリア、今連絡が来ました。何とかして外に出てください」

「ええ、分かったわママ。……まさか融合症例がここにいるとは思ってなかったけど」

「ちよつ、クソッ！離せッ！」

？そして、マリアさんはシンフォギアを纏つたまま瓦礫が崩れた場所に向かい外に出る。すると、外には沢山のノイズが空を漂っており、マリアさんの上にはヘリが待機していた。

「……何とか間に合つたようですね。ッ！ゴホッゲホッ！」

「ママッ！……急がな「いっくんッ！」なッ！まだ一般人がッ！」

「未来ッ！お前響と一緒にじゃッ！」

？マリアさんが急いでヘリに向かって飛ぼうとすると、俺を呼ぶ声が後ろからした。後ろを振り返ると、そこには響といたはずの未来がそこには立っていた。未来は俺のことを呼んだ後に俺めがけて抱きついてきた。

「未来なんでここにッ！」

「いっくんは私が守るのッ！絶対にッ！」

「もうこの建物も限界ね。……ママ」

「……今は脱出が最優先です。そのまま2人を連れて行きましょう」

？その後、俺と未来はそのままマリアさんの手によって、敵側のへりに乗せられて人質となつてしまった。

♫

「ふんッ！くくくぐうッ！ゼエ……ハア……」

「いっくん、もうやめて。大人しくしてよう……ね？」

「でも……」

「大丈夫。きつと響とみんなが助けにきてくれるから」

？俺と未来はへりに乗せられた後、人が何人か入れる程度の檻の中に入れられて過ごしていた。俺はなんとかここを脱出する為に檻を破壊しようと頑張っていたが、やはり難しかった。それで今は壊すことをやめて未来に膝枕をされながら休憩していた。何故膝枕なのかは知らないが、未来が落ち着くと言っていたからあまり気にはしていない。

「響は大丈夫かな？」

「正直、荒ぶつてる気がするんだが」

「でも、それだけいっくんのが好きなんだよ。響も……」

？すると、急にドアが開きそこからマリアさん、調、切歌が現れてこっちにやって来た。しかし、マリアさんは疲れているのか顔色が優れておらず、調と切歌は落ち込みながらこちらを見ていた。俺はとりあえず2人に声をかけようとしたが、未来が前に立って話始めた。

「何の用ですか？私達に尋問でもする気ですか？」

「ッ!? 違うデスッ！ あたしはただ助けてくれたお礼を言いたくて……」

「先輩、きりちゃんを助けてくれてありがとうございます」

「私からもお礼を言うわ。ありがとう」

「ッ……でもッ！ そのせいでいっくんはッ！」

「未来、もういい」

「でも……」

「俺は許してるから大丈夫。俺の為に怒ってくれてありがとう」

？そう言つて、俺は未来の頭を撫でる。未来はそれでもまだ怒っているのか、俺から離れずにギュッと抱きしめていた。まあ、この場合は仕方ないが……

「それで？ここに来た理由は？」

「実は……」

？そして、マリアさんから事情を説明してもらってある程度のこと理解出来た。月が落ちること、その為にネフィリムが必要なこと、シエンシヨウジンの出力が足りないこと、ネフィリムの心臓が破壊されて深刻な状況だと言うこと、そして……それらで融合症例である俺が必要だと言うことだった。

「あなたに負担がかかるのは分かっているわ。でも、私達はそれでも月を止めなくてはいけないの。……出来れば私達と協力して欲しい」

「……マリアさん俺は「ダメツ！」未来？」

「そんなことしたらいつくんの体が持たないツ！そしたら……いつくんが死んじゃうよ……」

「ツ!? どう言うことデスカツ！」

「先輩が……死ぬ？」

「おやおやあ？君達は何を話しているのかなあ？」

「ツ!? ドクターツ！」

？すると、後ろからあの眼鏡が現れてこっちにやって来る。俺は必死に未来を守ろうとして、必死に庇っていた。俺、この眼鏡嫌いだよツ！

「私だけを除け者とは酷いですねえ？しかし、この融合症例が死ぬ……ですか」

「ウエル、あなたもしかしてこの子達を巻き込もうとしてるんじゃない……」

「随分勘がいいじゃありませんかフィーネ。いや、今はただのマリアでしたね。決定権は僕にありますから君達はこの部屋から出ていってもらいましょうか」

「ドクターッ！一体何を「あのババアの治療は誰がやつてると思ってるんですか？」ッ

……分かったわ」

？そして、マリアさんと調、切歌はこの部屋から退出する。部屋から出て行った後、あの眼鏡は楽しそうな顔をしながらとある注射器を取り出した。

「それでは融合症例、こちらにやって来てください。でなければその後ろの女の子を殺しますよ？」

「ッ!?……分かった」

「いっくんダメッ！その注射器はダメッ！」

？そう言つて、止めに入る未来。未来の感はよく当たるのであの注射器の中身はやばい物だと分かるが、それで未来が殺されるのは絶対にダメだ。俺は、未来の頭を撫でて掴んでいる手をほどいて、あの眼鏡に近づいた。

「……賢明な判断ですね。まさに愛を感じますよ」

「……なんでそこで愛なのかは知らないけど早くしてくれ」

「いいですよ。それでは、僕の英雄になる為の犠牲となつてくれ」

？その瞬間、あの眼鏡は俺の胸に向かって注射器を刺して注入した。

♪

? いったくんがあの研究員に注射器を刺された後、急にいったくんが暴れだした。よく見たら、胸には灰色と黄色の物体がいったくんの体の中から出てきており、いったくんの体は少しずつ変わっていつてるのが分かった。

「いったくんッ! どうしたのッ!」

「ぐつ、ガア、ギアカ……ミ、グ、ハナデロ」

「やつ……とネフィルムが復活したあッ! これで僕は英雄になれるうッ!」

「いったくんは何をしたのッ! 答えてッ!」

「おっと、興奮し過ぎてあなたのことを少し忘れていましたよ。今、その融合症例にはネフィルムの心臓の破片を入れました。このまま行けばあの融合症例は本当にネフィルムとして生まれ変わるでしょう」

「そ、んな……」

? 私はその言葉に絶望する。私のせいでいったくんは化物になってしまった。私のせいで……

「いいですねえ、その顔ッ! ただ、僕にも慈悲がありますからあなたにチャンスを上げましょう。……あなた、シンフォギア装者になりませんか? そしたらあの融合症例は助かりますよッ!」

「そしたら……いっくんは助かるの？」
「ええ、あなたから望めば……」

ものなのだろう。そもそもこんなことになったのはあの眼鏡のせいなのでこの状況を理解するのもかなり大変だった。あ、そう言えば……

「俺って確かあの眼鏡に注射器を胸に刺されて気を失ったんだよな？ならどうしてここに……」

「エサノカラダ、イマハオレガウゴカシテル。デモオレアレ、トタタカイタクナイ。アレ、コワイ」

「怖いって……もしかして響のことか？」

？すると、ネフィリムは頷く。ネフィリムは俺の知識を得たことによつてどうやら響に對してトラウマを刻まれているらしい。すると、ネフィリムは何もない空間から変な玉らしき物を取り出した。

「オレ、コイツニアヤツラレテル。ダカラウゴケナイ」

「コイツって……あ、眼鏡じゃん、ってこれは」

「オレガイマミテルコウケイ、ウツシテル」

「これって……海か？」

♪

？私達は海でマリアさん達のヘリがあつた場所に向かうと、そこでは米軍の人達がノイズに襲われており、それを助ける為に私達は現場に向かった。きつと未来もりゆうくん

も無事だと信じて私は今、戦っている……

「この量はあたしが適任だなッ！墜ちろノイズ共ッ！」

「立花ッ！この近くに敵の装者がいるはずだッ！」

「はいッ！」

？そして、私はジャンプしてノイズを倒す。すると、向こうにあの2人がノイズ達と戦っていた。ヤット、ミツケタッ！

「うおりやあああああああッ！！」

「ッ!?きりちゃん避けてッ！」

「デエスッ!?な、何事デスカッ！あたしに向けて何か突っ込んできたデスよッ！」

「りゆうくんと未来を何処にやったッ！答えろおおおおおッ!!」

？私はそのまま切歌ちゃんを調ちゃんに向けて絶え間なく攻撃を続ける。そうすれば、2人の守りが薄くなって捕まえることが出来るからだ。そんなことをしていると、翼さんが加勢に来てくれた。私の体もあまり持ちそうにない……

「立花ッ！これ以上は危険だッ！今すぐに下がれッ！」

「断りますッ！私はりゆうくんと未来の無事が確認出来るまでは絶対に」

「危ねえバカッ！」

「クリスちゃんッ!?ぐッ……」

？私が翼さんと喋っている時に、私の方に向けて光線が降り注いだ。それを、間一髪向こうのノイズ達を片付けたクリスちゃんを私を助けてくれた。まだ私達の他に敵が……

「なッ!?あれは……」

「嘘、だろ？」

「な、んで……未来が……」

「響……」

？私は急いで敵が攻撃した方向に視線を移すと、そこにいたのは未来だった。未来は私達の見たことの無い紫色のシンフォギアを纏って現れた。なんで未来がシンフォギアを纏ってるの、どうしてッ！

「響、私と戦って。そして、いっくんの為に消えて」

「未来ッ！なんでッ！どうしてッ！」

「大丈夫、響は死ぬことはないから。そこでじっとしててッ！」

？そして未来は私に向けて絶え間なく攻撃を仕掛けてきて、私はそれを何とか避ける。1回だけその光線が私の太ももをかすると、ガングニールが悲鳴を上げているように感じた。その光景を見たクリスちゃんと翼さんは何とか加勢に向かおうとしているが、それを調ちゃん切歌ちゃんに邪魔されて思うように動けないでいた。

『響ちゃんッ！もしかしたら未来ちゃんは外部から操られている可能性があるわッ！きつと、それはシンフォギアの体の何処かにある筈よッ！』

「分かりましたッ！未来ッ！今助けるッ！」

「お願い響ッ！じつとしてッ！」

？私は何とか未来の攻撃を躲して、未来に近づく。そして、私は未来に向けて殴って見ると未来はそれをガードして反撃してくる。未来の前の場所には何も無い……なら後ろッ！

「未来ッ！絶対に私が助けるからッ！待っててッ！」

「ッ……響ッ！いい加減、当たってよッ！もう、響といっくんを助ける方法はこれしかないのッ！」

？私はまだ一度未来に近づいて、未来を操っている物を見つける為に後ろを何とかとろうとして足掻く。後、少しなのに……

「もう響は戦わないでッ！ここからは私の、ッ!？」

「クリスちゃんッ!？」

「早く未来を助けるバカッ！危ねッ!？」

「これ以上はさせないデスッ！」

？クリスちゃんの機転によって、私は何とか未来の後ろにつくことが出来た。そして、

私は未来を操っている機械を見つけて破壊しようとして……

「嘘、ないッ！どうし、ガッ!?」

「響ッ!」

? 私は後ろから急に現れた灰色の化物に体当たりされて地面に直撃する。すると、体当たりしてきた灰色の人型の形をした化物が私を取り押さえる。

「何、あれ……」

「何……お前達はアレを知らないのか?」

「し、知らないデスッ! あんな人型の化物なんて知らないデスよッ!」

「クソッ! そこから離れろオッ!」

「ッ! クリスダメええええええええッ!!」

? クリスちゃんが発射したミサイルはそのまま私を抑えている化物に直撃する。しかし、その化物は悲鳴を上げずに私を取り押さえたままだった。

「なッ!?! 再生しているだッ!」

「ッ……このままじゃ……」

『おやあ? まだあの融合症例を戦意喪失させてなかったんですかあ? せつかく君の愛する人をわざわざ出してやったのに……早くしないとあの2人のどちらかが死にますよ?』

「ツ……Gatrandis babel ziggurat edenai」

?すると、未来がなんと絶唱を歌い始めた。私は何とか止めようとして必死に体を動かして、この化物から逃げようとするが逃げれない。その時、今はここに居ないはずの匂いがその化物からした。

「なんでツ！お前からりゆうくんの匂いがするのツ！答えろツ！」

「Emustolronzen fine el baral zizzl」

?化物はただ、それを答えずにただ私のことを取り押さえたまま微動だにしなかった。上を見上げると未来は絶唱をまだ歌っていて、フォニックゲインが高まっていた。けれど、未来は何故か……

「未来……どうして泣いてるの？」

「Gatrandis babel ziggurat edenai」

「まさか、この化物……違うツ！この人は」

「Emustolronzen fine el zizzl」

「りゆう、くん？」

?その瞬間、私は未来の絶唱に飲み込まれた。

♫

「……いやシリアス過ぎるだろツ！あれ絶対に響のヤンデレが悪化するじゃんツ！てか

巻き込まれたよなッ！響は大丈夫なのかよッ！」

「シラン。オレ、アレヲヨケルノデヒツシダッタ」

「いや、色々ありすぎだろ……ってどうした？」

「イマ、オオキイタテモノニオレガツナガツタ。デモ、オレモウカラダウゴカセナイ。ダカラ、オマエガヤレ」

「え？それはどう言う……うわッ!?ちよっ、眩しッ！」

「オレ、シンゾウモウナイ、タダノセイイブツ。オレ、キエルカラエサガオレノアラタナルジ。マタネ」

彼は人間を超越した

？俺が目を覚ますと、そこには変な建物が周りに沢山広がっていた。俺の左手を見るともうネフィリムの腕となつてているが、なんか丸い光っているものと繋がっていた。つてなんか頭の中に情報が沢山……

「グオ……グ？」（なんか頭に違和感が……ん？）

「グオグアガアググ」（あれ？喋べれない？）

？俺は近くにあつたガラスのようなものを見て、自分の顔を確認する。……うん、ネフィリムの顔になつてるな。……スウ

「グオオオオオオオツ!!」（なんかネフィリムになつてるんですけどおおおおおのおツ!!）

？すると、そこに映っていた姿はなんとひと型のネフィリムだった。いや、正確には俺だった。俺はこの真実を受け入れたくなくて、何度も確認をしたが、やはりネフィリムになつていてかなり落ち込んだ。い、いやッ！まだだッ！

「グカガギアアツ……グガアツ!」（クソツ！さつさと元に戻れえええツ！……この頭の機械が邪魔アツ!）

？俺は頭の機械を何とかぶっ壊して、自分の体を戻そうと踏ん張っていた。すると、奇跡が起きた。俺の体が段々完全な人型に戻ってきたのだ。

「グアバ……ガア、はあ、はあ……も、戻ったって訳じゃなさそうだよね。胸の周りの部分だけ灰色になつてる」

？俺は何とか自分が人間の体に戻れたことに安心して、丸い球体に体重をかけて座る。あれからどれくらい気を失っていたか分からないが、きつとあのネフィリムが俺の体を動かしていたのだろう。

「あれからどれくらい時間が経ったんだ？しかも、俺はネフィリムの姿だったせいで裸だし……てか、さつきから頭の中に情報が沢山入ってくるんだが……月の落下阻止？エネルギーが足りない？マスター権限を代理のウエルに移行？どう言うことだつてばよッ！」

？気がつけば、あらゆる情報が俺の頭の中に入ってくる感覚があることを感じた。そして、俺はそれを何故か制御出来ると本能的に感じて頭の中でマスター権限を自分に戻すことに成功した。

「なんか色々よこの建物……頭の情報だとフロンティアかな？これで今は月をマリアさん達が止めようとしたけどあの眼鏡に邪魔されて、逆に利用されたって感じか……よしッ！あの眼鏡ぶん殴るッ！」

?そして、俺はこのフロンティアの情報であの眼鏡の位置が分かっている為、走って目的地まで走り始めた。……途中で下半身を隠せるものあるかな?

♫

「クソツ!動けツ!動けってんだよツ!どうしてフロンティアが動かないツ!」

「フロンティアが……止まった?」

「このままじゃッ!あのババアを月に行かせられないじゃないかッ!」

?私はフロンティアで月を止める為にフィーネを偽って今まで頑張ってきた。しかし、ウエルの子で月の進行は早められて私達の今までの苦労も全て無駄となってしまう。そして、遂にはマムがウエルの子で月に飛ばされようとして、私はただ絶望するしかないと思っていたのだけど……

「クソクソクソツ!僕が英雄なんだッ!動けよおツ!どうして僕の思い通りにいかないんだよおツ!あのシンフォギア装者も、2人のガキも、どいつもこいつもツ!」

「一体何が……起こったっていうの?」

「ウエエエエルウウウウウウツ!!」

「ヒイツ!ど、どうして立花響がここにツ!お前はあのクソ愛が重い女に殺された筈じゃ……!」

「未来はそんなことしないツ!未来が血を吐きながらも、私を助けてくれたツ!あの優

しい未来がッ！私を傷つけない思いでッ！でも、私は GANG ニールを失った……それでも、私は未来を傷つけたことやりゆうくんをあんな風にしたお前を絶対に殺すッ！

？その時、あの GANG ニールの少女、立花響が私達の前に現れた。あの子の目はただただウエルに殺意だけを向けていて、今にもウエルを殺しそうな勢いだった。私はその光景を見て、これで私達の役目は終わると思っていたのだが……

「マリアッ！僕を守れえッ！僕が死んだらもう月を止める人物はいないんだぞッ！」
「ッ……」

「マリアさんどいてくださいッ！あのネフィリムもどきだって、もうすぐ未来達によって倒されます。だからその男をこっちに渡してくださいッ！」

「……ごめんなさい。今の私には私の心を押し止めても正義の為にやらないといけないの……だからッ！」

？そう言つて、私は GANG ニールを纏つて立花響に立ち向かう。すると通路の奥から他の装者達と切歌、調がやって来た。もう後には止まれないのね……ごめんなさいママ。

「マリアッ！もうやめるデスよッ！」

「こんなことをしても……きつと」

「分かつてるわよッ！でも、私は……」

「ウイツヒツヒ……英雄になれない世界なんて、いらなんだよオツ！」

「ツ!? あいつツ！」

「ツ……私のシェンシヨウジンでも、間に合わないツ！ つて、響ツ！ ダメツ！」

「ウエエエエルウウウウウウツ!!」

「ウエルはまた、このフロンティアに何かしようと、ネフィリムの腕を制御装置に触ろうとする。その時、誰もが間に合わず、このままウエルによつて世界が終わるのか……そう思っていた時、奇跡が起きた。

「見つけたぞ眼鏡ツ！ 必殺ツ！ ネフィリムパーンチツ！」

「なツ!? 何故融合症ゴフツ！」

そこに現れたのは……裸の融合症例だった。

彼は雄としては立派である

？俺は急いであの眼鏡の場所に向かつて、ただひたすらに走り続けた。体が一時的にネフィリムの体となっていたせいとか、体の疲れはほとんどなかった。ただ、せめて隠せるものはある程度見つけたのだが、ワカメや昆布、貝などのかぶれそうなものばかりだったのでやめた。そして、しばらく走っていると、通路の奥に眼鏡を発見した。

「お、見えたッ！あいつ絶対に許さんッ！あの眼鏡のせいで響は絶対にヤンデレが悪化したし、未来にもあんなトラウマらしきことしやがって……ぶん殴ってやるよッ！」

？すると、あの眼鏡が何かしようと制御装置に近づき始めた。あの眼鏡ッ！まだなんかやる気かッ！許さんッ！って、ん？

「あれ？気づかないうちにネフィリムの腕になってるし……これ伸びるかな？とりあえず……」

？俺はそのまま走り続けながら、あの眼鏡に向けて殴る。するとなんとということでしょう、ネフィリムの腕が伸びたではありませんか。

「見つけたぞ眼鏡ッ！必殺ッ！ネフィリム。パーンチッ！」

「なッ!?何故融合症ゴフッ！」

?そして、俺は眼鏡に向けてネフィリムの腕でぶん殴った。すると眼鏡はそのまま吹き飛ばされて壁に衝突して気絶した。やったぜ。

「ふう。スカツとしたぜえ……まさか眼鏡がこんな所にいるとは思わなかったけど、殴れたから……よし……し……」

「……………」

?…………い、いや待て。確かに俺はウエルを殴りたい一心で周りを気にしてなかったのは悪い。いや、もう……もういいヤツ!諦めよツ!

「や、やあ。お嬢様方、本日はお日柄もよ「へ、変態ツ!」ちよつツ!?未来さんツ!危ないツ!危ないからその剣みたくいなもので人を叩いた痛い痛い痛い痛い!!」

「いっくんのバカバカバカツ!心配したんだよツ!なのにこんな再会はおかしいよツ!いっくんのバカあツ!」

「おうふツ!」

（あ、あいつなんで裸なんだよツ!フィーネじゃねえんだぞツ!そ、それに……あいつのアレ、パパよりも……）

（あれが、殿方の……あのサイズが普通なのか?）

（お兄さんの、凄く大きいデス……）

（なんだろう。私、アレを見てドキドキしてる……）

(なんでここに融合症例が……つていやいや待て待て待ちなさいッ！なんで裸なのッ！おかししいじゃないッ！しかも、どうして下を隠してないのよッ！……もう、頭痛くなってきたわ)

(りゅうくん無事でよかった。でも、未来男の子にあの蹴りは痛いよ……)

?俺は未来に思いつきり股のあいだを蹴られて、男の痛みを味わいつつ響に何か服はないかと聞いた。すると、響はあの眼鏡の服の白衣を剥ぎとつて俺に着させてくれた。

「あ、ありがとう響……」

「りゅうくん顔真つ青だよ?大丈夫?」

「ああ。正直、かなり恥ずかしかったし、年頃の女の子に男の象徴を見せたらそりやあんな反応するよ……ほら、見てよ。みんな顔真つ赤だよ」

「あー。確かに……りゅうくんのアレはXLだもんねー」

((((X L ッ!)))

「まあ、そうなんだけ……ちよつと待て響。なんで俺のアレのサイズを響が知ってるんだッ!」

「……ナ、ナンノコトカナー」

?とりあえず、後で響に問い詰めるとして、現状が今どうなっているのかを聞いた。話を聞くと、どうやら眼鏡が色々やらかしていたらしくて、しかもエネルギーが足りなく

て月が落ちてくるとのことだった。

「フオニツクゲインは私達が何とかするとして、このままだとフロンティアはもう……」
「でも、ドクターじゃないと動かし方知らないデスよ？ どうするデスか？」

「とりあえず、りゆうくんと未来にあんなことした人は死刑」

「響、やつちやおつか♪」

「……よし、私達だけで話を続けようか」

？ 響と未来は気絶している眼鏡を連れて、通路のくらい奥の方に行ってしまった。あれではきつと生きてはいるが、かなりのトラウマを刻まれるだろう。しかし、フロンティアが使えない……ん？ 使えない？ いや、まさかな……

「——ん？ 何してんだよ隆一」

「いや、実はここに来る前にマスター権限が俺になつたって言うこと思い出して……まさかなーとは思うけ」

「あ、動いたデス」

「……………」

「……もうなんでもありね。今までの苦勞って何だったのかしら……」

「マリア、私はもう慣れた」

「そ、そう……」

？その後、俺はネフィリムの力を使ってフロンティアを動かして、月の落下は阻止された。フォニックゲインはマリアさんが全国の人々に歌を歌って、フロンティアには70億のフォニックゲインが集まったので、月の落下を止めた後もしばらくは使えるだろう。

「これで異変解決かな？」

『姉さんを助けてくれてありがとう隆一さん』

「ん？今何か……まあ、いいか」

♪

？こうして、マリアさん達の騒動は無事解決出来た。この事件は後にフロンティア事変と呼ばれるようになるのだが、そんなことはどうでもよかった。何故なら……

「えつと……りゆうくんーそろそろ部屋から出てこよう、ね？」

「いつくん……その、この前のアレはちゃんと反省してるからそんなに引きこもらないで一緒にご飯食べよ？」

『1週間前、排他的経済水域の真ん中で巨大な島が発見されました。そんな中、全域で流れたマリアの歌の前起きた謎の全裸の男性……あれは地球外生命体だったのでしょうか？それともただの……ん、変質者なんでしょうか。これから詳しい専門家にお聞きします』

「こんな……公開処刑は、あんまりだあああああッ!!」
「?ここ一週間流れるニュースに自分の裸が生中継された真実に家から出ることはな
かった。こんなオチかよおおおおおッ!!」

『エサ、フラグカイシユウ乙』

戦姫絶唱しない日常『隆一と言う男』

「女子会をしましょうッ！」

「女子会……ってなんだよ」

「クリス、女子会はね？女の子が集まって一緒におしゃべりすることを言うの。普段はなかなか言えないことや秘密なんかを聞いたり話したりするの」

「女子会か。私はそう言ったことをあまりやったことはなかったが、奏とよく話をしたことは覚えている」

「？私達は今、ファミリーストランで私を含めた雪音、立花、小日向で女子会を開こうとしていた。その前に何か飲み物を頼まなくては……」

「女子会ってもう始まってんのか？って言っても、何から話せばいいんだよ」

「それなら最近あった話ぐらいが妥当だろう。ただ、私も雪音もまだこの催しには慣れていないから出来れば立花や小日向から話してくれと助かるのだが……」

「分かりましたッ！それじゃあ、どっちから話す未来？」

「なら、私が話すね」

「？そう言っつて、嬉しそうにしながら立花を見ている小日向を見た私はその様子に違和感

を覚えた。仮にもし、これが重たい話ならば私や雪音の胃がもたない。

「響はなんでいっくんのアレの大きさを知ってたのかな？」

「……へ？」

（いきなり来るのかッ!?早すぎるッ!）

? 私はその瞬間、雪音の目を見る。どうやら雪音も同じような考えをしていたようだ。

ここは私や雪音は大人しくしていた方が吉だろう。

「い、いやあ……これはりゆうくんと洗面所で鉢合せた時にたまたま……」

「ならサイズなんて分からないよね? 少なくともサイズが分かるぐらいならもう何回も見てるってことだよな? 響、まさか……」

「わ、私まだ処女だもんッ! やったとしても口で……あ」

「……ヒ・ビ・キ?」

「ヒイツ!」

（雪音、これはどうしたものだろうか……）

（あたしに振るなよ。そもそもあのバカがそこまでやってるとは思わないだろッ! く、

口でとか……あ、あ、あ、あ、ッ!）

（ゆ、雪音ッ! お前が恥ずかしがってどうするッ!）

?そして、立花は私達がいる前で自分が今までやった行いを全て話し始めた。その内容

は私達にとってはとても刺激がある話だったので私も雪音も……そして、問いたただいた小日向も顔真っ赤でその話を聞いていた。

「い、以上が……私が、りゆうくんにし、したことです。うう……は、恥ずかしいよお……」

「……響のバカ。なんで先に告白よりも手を出してるのよ……私だつていつくんとキスがしたいのに……」

「だ、ダメツ！いくら未来でも私だつて譲れないものがあるのツ！」

「私だつて負けないもんツ！いつくんに絶対に振り向かせてみせるんだからツ！」

「……なあ、もしかしてだけども？2人は隆一のことです、好きなのか？」

？雪音が言った質問に対して、2人は静かに頷く。立花が隆一のことが好きなのは出会って直ぐにそんなことは分かってはいたが、それとは別に私の頭にあることが脳によぎった。

「2人は隆一に告白はしないのか？そしたら、隆一はすぐに答えを出すと思うのだが……」

「告白はまだ……」

「わ、私もそんな……心の準備が……」

？そう言つて、顔を赤くさせて恥じらう立花と小日向。そんな2人を見た雪音は少し思

い出したかのように喋り始めた。

「あいつの何処がいいんだ？あたしが知ってる限りエロゲーばかりしてる男ってあたしは思うんだが……」

「あ、それは……私達が悪いの。私と響が小学生の時に、いっくん始めて誕生日プレゼントをした時があつたの。それで、響とお小遣いを貯めてゲームを買ってプレゼントしたんだけど……」

「一応、中古で買ったゲームだったんだけど、中身が実はお店の手違いで中身がエロゲーに変わってて……それで……」

「どっぶりハマったんだな」

「翼さんの言う通りです。いつも、そのせいでいっくんの反応がわかりにくくて……」

「隆一も罪な男だな」

「いや、ただのヘタレだろ先輩」

？その後も、私達の女子会は続いた。2人の会話の内容はほとんどが隆一の話ばかりだったのだが、その分の対策を練ることが出来たのでよしとしよう。

『……ツ!? い、今なんか寒気が……』

戦姫絶唱しない日常 『未来のニヤン♪（前）』

「ただいまー」

「あ、おかえり。いっくん」

「ただいま未来。響はどうしたんだ？なんかこの前学校帰りに響と会ったら子犬みたいな表情をしながら泣きついてきたんだけど……何かした？」

「それは……少しの間、いっくんの家に行くのを禁止にしたからかな？ご飯の準備はもう出来てるから早く食べよ♪」

？今日、私は今いっくんの家でお泊まりをすることになった。その理由はもちろん響の抑止だ。最近の響はいっくんに対してエッチなことばかりするのでしばらくの間、私が泊まって響が来ないようにする為の監視としてしばらくの間お世話になる予定なの。

……それだけでもん。

「今日は……お好み焼きか？それだったらどっちの」

「いっくんの好きな広島風だよ。熱々のうちに食べて欲しいなー」

「未来の料理は美味しいからな。楽しみで仕方ないよ」

「そんな褒めたって何も出ないよ……くッ」

？私はそう言いながらも、いっくんに背を向けて少し赤くなっている自分の顔を隠す。いっくんはたまに自然に褒めてくる所があるから私も響も毎回ドキドキしながらいっくんと話している。わ、私顔に出てないかな？大丈夫かなッ！

「未来？」

「ッ!?な、なにッ！」

「お好み焼き冷めるよ？」

「う、うんッ！それじゃあいっくん食べようかッ！」

♪

？しばらくして、私達はお好み焼きを食べ終わって雑談をしながらゆっくり過ごしていた。私はいっくんの隣に座って、今日の起こった出来事のことを楽しく聞いていた。

「それで響が何かしたの？」

「何かしたって言うよりも周りの視線が凄かったよ。俺ってただでさえ全国放送されるのに、あんな道の真真中で泣きつかれたらもう色々大変だったよ」

「でも、そしたらどうやって響を振り切って家に帰ってこれたの？普通だったら響が来そうなのに……」

「とりあえずたまごアイスを買ってあげて頭を撫でながら甘やかしたら上機嫌で帰って行ったな。はあ……久しぶりにたまごアイスを食べたかったんだが……」

「どうやら響はいつくんにアイスを買って貰って、更には頭ナデナデしてもらったらしい。いつくんはたまごアイスを食べれなくて残念がっているが、私は私で響がそんな羨ましいことをされてることにちよつと嫉妬した。」

「……ふーん。そうなんだ」

「未来、なんか怒ってない？」

「別にー。響はいつくんに頭撫でてもらったんだ……ふーん」

「急に機嫌悪くなったな。……ってお風呂沸いたか。未来、先に入るか？」

「いつくんからどぞ」

「？いつくんは私の表情を伺いながらも「分かったよ」と言つて、洗面所の方に行つてしまった。そして、少し時間が経つた後に、私は段々いつくんに素っ気ない返事で答えてしまったことに後悔し始めた。また、やつちやつた……」

「いつくんが別に悪いことした訳じゃないのに……。私つて独占欲強いのかな？……でも、この後どうしよう。このままじゃあいつくんが不快に思うよね」

「？そうして、私は考える。本当はこの日のお泊まりを狙つて色々準備をしてきたけれど実際には、それがなかなか実行出来なくてため息をつくばかりだった。そして、私はお泊まり用のカバンの中を確認しながらこの後のことを考えている時だった。」

「あれ？私、こんな服入れてたっけ？下着も私のサイズは合ってるけど、こんなの買った

覚えは……」

「未来、何してるんだ？」

「ツ?! い、いっくんツ! もう上がったのツ!」

「ああ。もう上がったけど、その服は」

「な、なんでもないよツ! それじゃ私入るからツ!」

「私は急いでその服と下着を持って洗面所に向かう。まさか、いっくんがもうお風呂から上がっているとは思わなかった。私は一応、その急いで持ってきた服を確認してみる。」

「これって秋桜祭の奴だよな? どうしてこの服が私のカバンに……。で、でも、もうリビングにはいっくんがいるから気まずいし……。でも、これを着るしかないよね」

♪

「? 私はあの後、今日の疲れた体をお風呂でリラククスさせた後に下着を着けて、あの服を着た後にリビングに行くといっくんがソファに座りながら本を真剣に読んでいた。」

「い、いっくん上がった……。よ?」

「ん? 未来上がつ……。え? 黒猫フード付パジャマ?」

「う、うん……。その、持っていったパジャマがこれで」

「そ、そうか」

? いくつかはそう言いながらも私のことをジロジロと見ながら近寄ってくる。な、なんかいくつかの目が……

「い、いくつかどうしたの?」

「……つて言つて」

「え?」

「猫のポーズをとりながら語尾にニヤンを付けて欲しい。出来れば今すぐに写真取るから」

? どうやら私はもしかしたら何かいくつかの触れてはいけない性癖を刺激してしまったのかもしれない。

戦姫絶唱しない日常『未来のニャン♪（後）』

「猫のポーズをとりながら語尾にニャンを付けて欲しい。出来れば今すぐに写真取るから」

「い、いつくん？何言ってる……」

「あー……やばい。何この可愛い親友、めっちゃ癒されるわー」

「ちよ、ちよっといつくんツ!?は、恥ずかしいから離してツー」

「？いつくんは急に何を言い出すかと思えば、とんでもないことを言い始めて、私の腕を引き寄せて私が覆いかぶさるぐらいに抱きしめた。」

「親友の黒猫フード付パジャマをまた見れるとは思ってなかったから今のうちにしっかりと堪能しなければ……」

「い、いつくんツ！そんな急に触らアハハハハハツ!!」

「未来つてさあ、やつぱり猫っぽいからなんかこう……いじめたくなるんだよなあ。ここら辺をナデナデっ」と

「ひゃん♡ち、ちよっとツ！いつくんツ！だ、ダメえヒビ、アハハハハハハツ!!」

「私はその後もいつくんにひたすらに抱きしめられながら色々触られて、頭や足、肩、

お腹、ふくらはぎ等などエッチな所以外は触られて続けた。

「はあ、はあ………いつくんのバカあ♡もうやめてえ♡」

「んーッ！久しぶりに至高の時間だった………よし、このま「ッいい加減に」おうふッ！あ………う………」

？いつくんがあまりにも暴走していた為に、私はいつくんの大事な所に思いつき蹴りを入れる。すると、いつくんは蹴られた場所を抑えながら床をゴロゴロしながらもだえていた。

「いつくんやりすぎッ！反省してッ！」

「あ、あい………すいません、でし、た」

♪

？あれから少し経って、いつくんは私の前でずつと土下座をしながら謝っていた。どうやらいつくんは冷静さを取り戻して自分がやってしまった行いに対してかなり落ち込んでいた。

「未来………本当にごめん。かなりやりすぎたと思ってる」

「………フンッ！」

「正直、未来が可愛いくてやってしまった俺が悪い………本当にごめん」

「………そ、そんなこと言っても許さないんだからッ！」

？そう言っ、私はいつくんに背を向ける。まさかいつくんが私のこの姿で色々と暴走を始めたのはびっくりしたけど、正直私としてはあんなに可愛いつて言つてくれたいつくんに対して嬉しい気持ちもあるのだが、ここはやはりケジメはつけないといけないから私はいつくんがやつた行いに対して許していなかった。でも……

「……いつくんはなんで私にあんなことしたの？急に私を襲つてきて……」

「それは……まあ、俺の最近のストレスと言いますか、発散出来ないと言いますか……」

「それつてどうゆう意味？」

「……長くなるけどいい？」

？そして、いつくんは何故こんなことをし始めたのか説明を始めた。最近、いつくんは今の今までストレスを発散することが出来なかつたらしい。最近は特にルナ・アタックやフロンティア異変で体に負担もかかり、更には響へのスキンシップ、エロゲーを捨てるられるといつくん自身が発散出来ることが少なくなつたからだ。

「……最近のスケジュールだつて見ると、俺の1人の時間も少ないし、確保出来たとしてもメデイカルチェックとかあるし、全世界で俺の恥ずかしい映像が流れてストレス溜まるし、なかなか難しくて……」

「それで私を襲つたの？」

「別に襲つた訳じゃないけどさ、未来のあの姿見たらストレスが吹き飛んでちよつと暴

走りちゃって……」

「そう、なんだ」

？私はその言葉を聞いて、もう怒る気にもならなかった。確かにいつくんはまだ1年経ってないけど、この期間でいつくんは不幸なことばかりあって、しかもこの環境では逆にストレスが溜まるのは仕方ないことだと思っただからだ。だから私はとりあえずいつくんのことを許すことにした。

「……いつくん、もういいよ。許してあげる」

「ほ、本当か？よかったあゝ未来とギスギスした状態は嫌だったからなあー」

「ツ……つ、次は絶対に勝手にやったら許さないからねツ！」

「分かってるよ、未来」

？そして、私といつくんはそろそろ眠たくなってきたので、布団をひいて歯磨きを始める。それが終わると、いつくんはそのまま布団の中に入って横になったけど、私は……

「えつと……未来さん？君の布団はあっちだよ？何布団に潜り込んでいるのかな？」

「さっきの罰。今日は私と一緒にねるの……ダメ？」

「……語尾にニヤンって言ってくれたらいいよ」

「……はあ、反省してないでしょ」

「い、今のはな「いいよ、いつくん」え？マジ？」

？私はいつくんの布団に潜り込んで、いつくんの隣で横になった。よくよく考えてみたらいつくんは色々なことに巻き込まれ過ぎなことが多かったから私がいっくんのストレスを解消しようと一緒に寝ることになっていつくんの要望に少しは答えようと考えたのだ。別に私がいっくんと一緒に寝たい訳では……ないもん。

「……最近の未来の行動がよく分からない」

「いつくん酷いニャン。そんなことするいつくんにはこうだニャー」

「いてててて、未来めつちや可愛いけど首筋噛み噛みしないでくれ……」

「やーだ。さっきのおかえしニャー。ガプリ……ハムハムハム」

？そう言いながらも、私はいっくんの首筋を噛んだり、吸ったりして私もそれなりに楽しんでた。たまにはこんな仕返しも悪くないよね♪

「ちよ、ちよつと……いい加減に」

「ねえ、いつくん。猫って実はイタズラが大好きなんだよ？次からは気をつけてね？

……あ、ニャ、ニャンツ！」

「あ、やばい。俺の親友可愛いすぎ」

「……も、もうツ！いつくんのバカツ！おやすみツ！」

「……おやすみ未来」

？そして、私達は布団の中でそのまま眠りにつく。でも、私には響きたいなことは出来

ないなとそう思いながら目を閉じた。……でも

「……いつくん起きてる？」

「……スウ……スウ」

「もう寝ちやつた？……なら、これくらいならいい、よね？」

「いつくんだけだよ？こんなことするの……大好きだよ。いつくん」

G X 編

彼の記憶は不味い

? フロンティア異変からしばらくが経過し、俺は高校2年生になった。あの事件から半年以上は過ぎてているが、俺は元気で当たり前前の日常を送っている。ただ、少し違うと言えは……

「あッ! お兄さんデスッ! こんにちはデースッ!」

「先輩こんにちは。今日は本部に用事があるんですか?」

「2人共こんにちは。今日はちよつとメデイカルチェックを受けにきたんだよ」

「そうなんデスねー。あたし達はもうメデイカルチェックを受けたデスから先に帰らせて貰うデスッ!」

「あ、それならさつきクツキーを買ったんだけどよかつたら食べてくれ」

「ありがとうございます先輩。きりちゃんもお礼言つて」

「お兄さんありがとデスッ!」

? この2人……いや、正確にはF. I. S. 組の人達が司令のお陰で仲間となったのだ。司令は戦力の強化が出来たことに素直に喜んでいたが、それ以上に彼女達を救えた

方が一番嬉しいと言っていたので立派だと感じた。

「……さて、行くか」

？俺はその後、了子さんがいる研究室に向かつて中に入る。すると、そこにいたのは了子さんともう一人、あのおばあさんだった。いや、凄いいりラックスしてるな……

「あら？もう来たの隆一くん。予定よりちよつと早いじゃない」

「ちよつと早めに出て買物した後に来ましたからね。これ、クッキーです。よろしければどうぞ了子さん、おば……な、ナスターシャさん」

「気にしないでいいですよ。私の呼び方はその人にあつた呼び方の方が楽ですからね」

「なんか、すいません……」

「意外と隆一くんはその辺り気にするタイプだったのね……まあいいわ。それじゃあ始めましょう♪」

？そして、俺はメデイカルチェックを30分程度行った後に結果を待つ。正直に言えば、最近俺の体に変化が少しかだけ起きていたからまあ、仕方ないと言えば仕方ないだろう。なんせ、これは俺がネフィリムの心臓が入っている副作用みたいなものだからだ。

「結果が出たわよ、やっぱりネフィリムの影響を受けてるわね。最近空腹が多いでしょ？その時はどうしてるの？」

「その時は普通にご飯食べてるんですけど……なかなかお腹いっぱいにならないんですよね」

「それは仕方ありません。ネフィリムはそもそも暴食とも呼ばれていますから空腹状態になるのも無理はありません」

「唯一、フロンティアが隆一くんをマスターと認識してるから最悪フロンティアからエネルギーだけ吸い取れば問題ないわ。これでメディカルチェックは終わりよ」

「忙しい時間にわざわざすいません了子さん、おばあさん」

「まあ、二課がS・O・N・G. に変わったせいで忙しいのは仕方ないけど、仕事だから気にしないでいいわよ。気をつけて帰りなさい、隆一くん」

「そして、俺はその部屋を出て家に帰る。二課もどうやらフロンティアの件もあり、国と国が色々と話し合いの結果名前を変えて新たに国内から国外までに活動を広げるなど色々あったらしい。でも今は……」

「自分の体が大事だよな……」

♪

「しばらくして、俺は歩道を歩きながら家に帰っていると突然警報が町中になり響く。どうやら何かおきているらしいが、本部からは連絡がないのでそのまま家に帰る。仮にも、俺がヒーローぶって助けに行こうとすれば余計に邪魔になることだけは分かるの

で決して行こうとはしなかった。

「きつと、響と未来が人助けをしてるんだよな……次、泊まりに来た時にいい食材でも買って……ツ!?だ、大丈夫ですかッ!」

「俺は急いで倒れている人に近づいて意識がはつきりしているか確認するが……」

「……し、死んでる。こんなに髪も真っ白で、ヴツ……は、吐いたらダメだ。まだ安全とは限らない」

「?周りをよく見ると、この人の他にも何人かの人物が倒れており、この人と同じように死んでいた。は、早く本部に連絡しないとッ!」

「なーにしてるんですかあ?あ、もしかして警察でも呼ぶのかなあ?ガリイちゃん困っちゃう〜」

「ッ!?いつの間グツ……ガ……ア」

「残念でした〜。さて、どうしよつかなく〜」

「?俺の後ろに急に現れた女性はいきなり俺の首を掴んで強く握りしめる。その力はまるで機械に握り潰されているような感覚で俺はそのせいでだんだん呼吸が出来なくなってきた。」

「マスターが命令した思い出の収集もとりあえずこいつで最後にするか。それじゃあ……イッタダキマース☆」

「や、やめムグツ!!」

「……………ま」

「ツ!?ゴハツ!ゲホツ、ゴホツ……………な、なんだ?」

「まっずツ!!」

彼は最短で誘拐される

「マジマツズイツ！クソツツ！こいつの記憶も普通の奴と同じような思い出かと思つたら
フィーネに、フロンティアに、シンフォギアつてマスターの言つてた重要人物かよツ！
てか、その前の記憶のあれは流石のガリイちゃんでも引くわツ！」

「いきなりキスされて、そのまま酷いことを言われている気がする……」

「当たり前だろツ！てめえの思い出のほとんどにハイライトOFFの装者が出てきて怖
すぎるんだよツ！しかも、その記憶の中に監禁や粛清という名のおしおき……この思い
出が美味いとかそういう次元じゃねえよツ！」

「？そう言つて、怒鳴る女性。俺の記憶にはそんな記憶が一切ないが、その監禁や粛清の
言葉を聞いただけで体が震えたので、きつと体が覚えているのだろう。」

「えつと……それつて例であげるならどんな感じ？」

「中学3年生、たまたま久しぶりに出会つた女の子に話しかけられて少し話した後、家に
帰るとそこには……」「あーうん。分かつた、体が拒否反応起こしてるから俺の記憶だ」
「……今まで色んな奴見てきたけど、お前みたいなの初めてだよ」

「そつかー。まあ、昔の響はそりやもう大変だったからなあ……てか、人の記憶は奪つて

はいけないよ？それじゃあ、俺はこれで……」

「逃がすかバーカ☆」

？そう言つて、その女性は急に氷を作つて俺の体ごと凍らして動けないようにした。正直、俺は記憶が奪われたことには少し腹が立っていたが、それよりもまた巻き込まれるような気がしてさりげなく逃げようとしたのだが、無理だった。

「流石に思い出を見た後にはいそうですね。そうですかと逃がすバカはいねえよ。それじゃあー名様
ごあんない☆」

「ちよつツ!?下に魔法陣があるんですけどおッ！もしかして……魔法ツ!?!」

「残念、錬金術でした。はい、到着☆」

？その女性は赤い何かを俺の下に投げると、いきなり風景が変わつてオーケストラのコンサートのようなパイプが沢山並んでいる場所に立っていた。これはきつと、俺が思うにどうやら転移する何かだと分かった。……多分ル〇ラだろ。

「ここ、何処だよ……つて眠気が……」

「まだマスターが来てないからガリイちゃんがつかり牢屋に送つてやるよ。だからマスターが開発したこの睡眠香で眠つてな」

「また、このパター、ン……」

?しばらくして、俺は目を覚ますと俺は牢屋の中にいた。あれからどれくらい時間が経ったのか分からなかったが、自分のポケットにスマホがあったので見てみると、どうやら約3時間程度眠っていたようだ。てか、俺初めてキスされたんだよな。嬉しいのか、嬉しくないのか複雑だなあ……

「……………」圏外だし、響達に連絡は無理だろうな。……よし、せつかくだからゲームでもするか」

?俺はこの牢屋に誰かが来るまでゲームを1時間程度している、足音が段々近づいてくるのが分かった。しかも、それは1人ではなく2人であることもその時に分かった。

「おいガリイ、オレの言っていたフロントティアの男を捕まえたのは本当か?いくらなんでも早すぎるだろう」

「いやですよマスター。ガリイちゃんがそんな嘘をつくと思いますかあ?本当にたまたまマスターの言っていた男がいたんですってば。不安なら思い出の共有でもしますかあ?」

「いや、いい。ガリイは性根が腐ってるのは確かだが、オレが作り出したオートスコアラードだから嘘は言わないはずだからな……性根が腐ってるがッ!」

「仕方ないじゃないですかあ。だって、私達はマスターの思考パターンの一部が入ってるんですから仕方ないですよ」

「クソツ……何故他のオートスコアラーは性格はまだ大人しい方なのにこいつの性格だけか……」

「?まるで、上司が部下にからかわれているような会話が聞こえてくると同時に近づいてきて、そこに現れたのはさっきの女性と小さい女の子が俺のいる牢屋にやってきた。もしかして……」

「……幼女?」

「誰が幼女だツ!チツ……まあいい。オレの名前はキャロル・マールス・デインハイム。今日から貴様は人質としてしばらく過(こ)して貰(もら)う……いいな?」

「凄い。想像してたより物凄く威厳が見た目によつてかき消されて可愛いさしか残ってない」

「貴様ツ!このオレを誰だと思ってるツ!ガリイ笑うなツ!」

「ククツ確かに、マスターは威厳ないですねえアハハハハツツツ!!!」

「?思いつきり笑う女性に対して、プルプルと顔を真っ赤にしながら怒(こ)る幼女。まあ、実際に俺は了(り)子さんやあの眼鏡を比べるとどうしても見劣(お)りしてしまうし、そもそもとしてその容姿がましてや子供な為に仕方ないだろう。」

「ツ……オレは戻るツ!ガリイツ!後はお前が何とかしろツ!」

「ヒーツ……ヒーツ……分かりましたよマスター。ガリイちゃん頑張ちやいまーす☆」

?こうして、俺は新たな敵の人質となってしまった。これから一体どうなるのかはまだ、俺は知らない……

彼はシャトーに慣れる

？オレはパパの命題を解く為、日本にやって来た。日本にやって来た理由はエルフナイ
ンが盗んだダインスレイヴを利用して、呪いの旋律を集めることと、地球上のエネル
ギーの流れ道を記録した情報集積体であるレイラインマップの回収、そしてチフオー
ジユ・シャトーを制御する物が必要だった。

「レイラインマップはあの男から聞き出せば色々と情報が出てくるだろう。エルフナイ
ンも装者達との接触にも成功して無事に計画は進んでいる。……だが、これはおかし
い
だろツ！」

？本来、チフオージユ・シャトーは未だ建造途中であるが、あとは起動と稼働、制御に
必要なトリガーパーツを組み込めば完成することは分かっていた。なので、それなりに
は時間が掛かると分かっていたのだが、はつきり言ってオートスコアラー達がほとんど
仕事をしていた為に暇だったのだ。だから……

「おい貴様ツ！どうして人質で当たり前のように墮落に過ごしているツ！さつきから貴
様を監視していれば、泣きわめくとか、誰かが助けにくるとから信じて待つとか色々あ
るだろツ！」

「いや、そんなこと言われなくても……実際、助けもここから出ないと無理だし、それよりも前に酷いことされてるし、暇だし」

「だからって、オレの作ったオートスコアラーにフラメンコの教えを乞う奴がいるかッ！」

「意外と楽しいよ？ フラメンコ」

「知るかッ！」

？すると、その男はオレを無視してフラメンコの練習を始める。ファラに何を聞いているのかと思つたら、まさかダンスの練習をしているとは思わないだろう。こいつ……：バカなのか？

「フンッ、まあいい。それよりも貴様、フロンティアにあるレイラインマップをどうやって手に入れられる……：答えろ」

「レイライン、マップ？ フロンティアにそんなのあるの？」

「ああ、それがあればオレの計画はまた一歩進むからな。早く居場所を答えろ」

「ええ……：知らないんですけど。とりあえず知らないんで、俺は寝ますね」

？そう言つて、その男は自由気ままにオレのいる前で寝始めた。オレはあまりにも腹が立つたので無理矢理にでもたたき起こしてレイラインマップの場所を吐かせようとした時にガリイがやって来た……：片手と片足を失つたポロポロの状態で……

「あまりそのエロガキを無理矢理やらせない方がいいですよマスター」

「ガリイツ!? 何があったツ! 何故そんなにボロボロになっているッ!」

「あー……遂に始まったかあ。てか、エロガキって酷くない?」

「エロゲーやつてるガキなんだから十分だよ。マスター早く直してくださいよお」

「……チツ、また来るからな」

? オレは急いで研究室に向かった後、ガリイを台の上に乗せて修理を始めた。今までこんなことはあまりなかったが、まさかガリイがこんなボロボロで戻ってくるとは思わなかったからだ。

「……ガリイ、何があった」

「実はガリイ、ミカの分の思い出を集め終わった後に、シンフォギア装者と鉢合わせて……戦ったら負けちゃいました☆」

「なッ!? それはおかしいだろうッ! いくらシンフォギア装者でも、オートスコアラ―が負けるはず……」

「甘いですねえ、マスター。普通の装者なら負けるでしょうけど、あの男の幼なじみと親友の装者は別ですよ? ガリイ、あの男の思い出がある程度知ってるから早めに逃げてくださいけどお……ま、マスターに見てもらった方が早いです☆」

? そう言つて、ガリイはオレに思い出の共有を始める。そして、その思い出の中にあつ

たのは、暴走する立花響と阿修羅みたいなオーラを発する装者がガリイと戦っている姿と、あの男の記憶の一部だった。

「……………」

「マスター、大丈夫ですかあ？ま、あれは私も逃げるに決まっていますよねえ。あのエロガキの名前出しただけでここまで強いとは思わなかったですしい？」

「…………チツ！また面倒なことが次から次へと…………あの男を捕まえてからオレの計画は狂いっぱなしだッ！」

？まさか立花響があそこまで強いとは思っていなかった。もし、ガリイが思い出の共有をせずに戦っていたのなら、計画はほとんど失敗に終わっていたのかもしれない。オレは急いでガリイの修理を行うと共に、立花響ともう一人、小日向未来の対策を考えているとガリイがある提案を出してきた。

「マスター、実は私に考えがあるんですけどお……………」

「なんだ、言ってみろ」

「あのエロガキを上手く利用してみたらいいんじゃないですか？もちろんマスターにも手伝って貰って……………」

「あの男を利用するだど？どうやって」

「そ……は、私に考えがありますので……………」

「……分かった、内容次第でオレが手伝ってやろう。しつかりやれよ？ガリイ」

「分かりましたよマスター。ガリイちゃんにおまかせ☆」

♪

「……ねえ、1ついいかしら？」

「なんでしようマリアさん」

「また、私は立花響があゝの暴走状態を制御出来て敵を倒す所を見たのだけど……あの子も同じようになれるなんて聞いてないわよッ！あれはもう隆一しか止められないじゃないッ！」

「まさか未来さんもシエンシヨウジンの暴走を制御するとは思いませんでした。今は翼さんとクリスさんのギアが破損しているので、僕達は助かっているのですが……愛、なんでしようね」

「何故そこであ……いや、愛だったわ。……はあ」

彼は選択を迫られる

「ハイ、ハイ、ハイ、そこでストップッ！」

「フツ………はあ、はあ………」

「……及第点と言った所でしようか。隆一さん、あなたは筋がいいですからしばらく続ければ上手くなるでしょう」

「あ、ありがとうございますッ！フアラさんッ！」

「俺が人質としてこのシャトーで過ごし始めて1週間が経過した。シャトーでの生活は娯楽などはほとんどないが、食事も睡眠も出来て牢屋もそれほど酷いものではなかった。なので、実際に過ごしすぎて悪い気はしなかった。」

「フアラ、地味に食事の用意が出来た。ここに置いていて大丈夫だろうか？」

「ええ、構いませんわレイア。出来れば午後から隆一さんのフラメンコの練習を手伝って欲しいのですが……」

「私はフラメンコはしたことはないが……ダンスの基礎なら派手に教えてやろう」

「助かりますわ。それでは隆一さん、また後で」

「？そう言つて、フアラさんは行つてしまった。実はフアラさんから聞いた話によると、

どうやらフアラさん達はオートスコアラーと言って自動人形みたいなものだと
いた。なので、俺を誘拐したあの女性……もといガリイと言うらしいが、その人も
トスコアラーだと言うことだ。

「俺は人間でもない人にドキドキしていたのか。素直に喜ぶべきか、喜ばないべきか
……」

「食べないのか？それなら下げろが……」

「あ、レイアさん食べますから大丈夫です」

？俺はレイアさんが持つてきた食事を食べながら響達のことを考える。実は了子さん
に一応GPSなどの発信機を3つぐらい持つて過ごしているのだが、未だに助けに来る
気配がないのでこのシャトーではきつと電波が届かないのだろう。それにしても……

「このシチュー美味いな。中までしっかりと火が通つてて、肉も柔らかいし……」

「へえ、ガリイちゃんが作ったシチューが美味しいんだあ☆」

「……いつからそこに」

「さあ？いつからでしょうねえ」

？俺は後ろを振り返ると、そこにいたのはガリイだった。すると、ガリイはそのまま俺
の耳元に近づいてレイアさんには見えないようにあるものを見せた。……なん……だと
……!?

「……………」

？俺は今までで、本気で脳をフル回転させて如何に最小限で抑えられるのかを考えた。そして、俺が選んだ答えは……

♪

？私は師匠から連絡があつて、とある場所に向かつていた。ギアを纏い、未来と一緒にその場所に向かつているとアルカノイズ達私達の行く手を阻んだ。

「邪魔だあああツツツツツ!!!」

「消えて消えて消えてえええええツツツツツ!!!」

？私達はそのままアルカノイズ達をなぎ倒してただ真っ直ぐに最短でその場所に向かった。その場所は……フロンティアだった。

「ツ……はあ、はあ……りゆうくんツ！どこツ！返事してツ！」

「司令ツ！本当にいつくんはここにいますかッ！」

『ああ、了くんが作った発信機が響くん達の近くで反応している。だからそう遠くない筈だッ！』

？私と未来はまだ近くにいるアルカノイズを倒しながらりゆうくんを探していると、向こうに見覚えのある人影が見えた。あの顔、あの髪、あの匂い……あれはッ！

「りゆうくん（いつくん）ツ！」

？ 私達はそのまま走ってりゆうくんのいる場所に向かう。そして、私と未来はりゆうくんにもそのまま思いつきり抱きついた。ああ……りゆうくんの匂いだ……

「いつくん、よかつた……よかつたよお……」

「りゆうくんが無事でよかつた……ああ、りゆうくん……」

？ りゆうくんはそのまま抱きしめられたまま何も言わずに私達を見ていた。私はその時に一瞬間を感じたのだが、その前にりゆうくんに思いつきり抱きしめられて頭がパニックになった。

「ちよ、ちよつとりゆうくんツ!? 嬉しいのは分かるけどそういうのは家でやろう……ね？」

「だ、ダメだよ、いつくん。まだ翼さん達が私達の光景見てるから……」

「……ごめんな、2人共。ガリイ」

「え……」

「ハイハイイ。ガリイちゃんにおまかせあれ☆」

？ その瞬間、私と未来のギアは翼さんとクリスちゃんと同じようにギアを強制的に破損された。な、んで……

「これでいいか？ ガリイ……」

「上出来だよエロガキ。じゃ、目的は果たせましたマスターの所に戻りましょうか」

「いつ、くん？」

「りゆう、くん……どうして……」

「……ごめんな、響、未来」

?そして、りゆうくんは私達の前から消えた。

彼は恐れる

「響怖い未来怖い響怖い未来怖い響怖い未来怖い響怖い未来怖い……」

「ガリイ、派手にやったな」

「隆一さんが体育座りしたまま出てこないのはやはりガリイの作業でしたか」

「え〜……ガリイちゃんしくらない☆」

？俺はあの後、結局響達を裏切って何をするのかも分からないことの為に色々と仕事をしなくならなければならなくなった。正直、俺はあの時実は前者ではなく後者を選んで響達を裏切らずに社会的に死ぬことを選んだのだが……

「ツ……ガリイツ！これで響と未来にはアレを見せないんだよなツ！」

「ガリイちゃんは嘘つかないからそこらへんはしつかり守りますよ〜」

「ふっざけんなツ！それしか選べねえじゃねえかツ！何後付けのように2人の両親の所にアルカノイズぶちまけちゃうかもくだよツ！そんなの選択肢1つじゃねえかツ！」

「まあまあ、落ち着けよエロガキ。お前の懸命な判断によって救われた命があるんだからいいじゃねえか」

「分かってない……分かってないよツ！お前がやったこと本当に悪手だからなツ！分か

「……つてことでどうしましょうマスター」

「……お前は何をやってているガリイツ！あの時、転写して欲しいと頼まれて用意した後に、フロンティアで2人のシンフォギア装者の無力化した後のことを何も考えてないだどとッ……はあ、まあいい。今回はお前の功績が高いからな。次はしつかりやれよガリイツ」

「はい気を付けます」

？そう言つて、ガリイツは何処かに向かつていく。きつと、ガリイツが向かう場所はあの男がいる部屋に行ったのだろう。しかし、最近のオートスコアラ―達は少し変化が起きているとオレは感じた。ファアラはあの男に自分の得意なフラメンコを教えて、レイアはダンス、ガリイツは……分からないがああの男によつて少しずつだが、オートスコアラ―達は本当に変わつていた。

「……少し、様子を見てみるか」

？そして、オレはあの男がいる場所に向かう。本当ならあの男は牢屋で過ごすべきなのだ、ファアラとレイアが心配して牢屋から部屋へと移動させたのだ。やがて、オレはあの男がいる部屋に行つてドアを開けると……

「……おい、何をしている」

「……ヒイツ……なんだ幼女か」

「お前、まだそんな……」

？その時、オレはその男の顔を見て正直少しドン引きした。何故ならその男の目は死んだような目をして、ただひたすらに何処かをぼーっと見ていたからだ。ガリイからは少しやりすぎたとは言っていたが、ここまでだとは思わなかった。だからオレは……
「……その、ガリイがすまなかった。これはオレの落ち度だ。ガリイにはキツク言っておく」

「いや、あれはガリイがやったことだから謝らなくていいよ。あいつ本当に性根が腐ってやがる……お陰で幼なじみと親友のこの後が怖いよ」

「……お前も大変なんだな」

「そっちこそ、あのガリイがいたら色々大変だろう」

「……………」

「えっと、名前もう一度聞いても……」

「キャラルだ。お前の名前は」

「隆一だ、よろしく」

「隆でいいか？」

「それでいいよキャラル」

？この日、オレは初めて人を気にかけて気がした。

「ガリイ、あまり盗み聞きをするものではありませんよ」

「えー、ガリイちゃん色々頑張ったのにー」

「マスターに知られたらまた地味に怒られるのは確実だ。ガリイ、お前は一体何を考え

ている」

「私はただマスターの為に動いてるだけですよ。それに、後はマスター次第ですからあ」

彼はキヤロルと過ぐす

？俺が響達から離れてどれくらい経っただろうか。あれから、俺はキヤロルと仲良くなり、シャトーでの環境に適応していた。正直、響と未来と会っていないので恐怖でしかないのだが、どの道逃げることは難しいのでいつものようにダンスの練習をしていたのだが……

「アハハッ！鬼ごっこだゾッ！」

「鬼ごっこじゃねえッ！これもう狩る側と狩られる側じゃねえかッ！ちよつ、危なッ！」
「チツ……エロガキ、あともう少しで当たりそうだったのに。ミカツ！もつとよく見てエロガキに当てろッ！」

「分かったんだゾッ！これでバイならだゾッ！」

「ちよつ、ま、ぎゃああああッツツツ！！！」

？この通り新しいオートスコアラーが起動したらしい。名前はミカでガリイ達とは違い、戦闘型のオートスコアラーだとキヤロルは言っていた。しかし、ミカは起動した後俺に興味深々だったので何かと鬼ごっこをやるうとは言っていたが、デスゲームになるとは思っても見なかった。

「騒がしいぞッ！何をしているッ！」

「あ、マスターだゾ。今ミカはイッチーと鬼ごっこをしてたんだゾッ！」

「あつぶねえッ！ネフィリムの腕にしといて助かったく……ってガリイてめえ止めろやあッ！」

「マスター、ガリイは必死にあのエロガキを止めようとしたんですよお？でも、エロガキはガリイの話を聞いてくれなくて」

「ガリイツ！勝手な捏造やめろおッ！」

「はあ、お前ら……」

？結局、この場はキャロルが全て収めてガリイ達に指示を出した後、俺はそのままキャロルの後について行つた。ここ最近はよくキャロルと話すようにもなつたけれど、何故か誘導されているような……

「全く、ガリイは何をしている。これではオレが……」

「えつと、キャロル。今から何をするんだ？」

「ん？……ああ、あれからあまり目立つたことはせずに大人しくしていたからな。そろそろシンフォギア装者がダインスレイヴを身に付けて本格的に敵対しようとしているからな。少し発電所を破壊する予定だ」

「……ちなみに俺は行かなくても「行かなくてもいいが、オレは知らんぞ？」「デスヨネー」

「まあ、別に今日ではないからな。行動は明日からでもいいだろう」

「？そうして、キャロルは俺がある場所に連れてきた。それは……ただのキッチンだった。俺はキャロルにとりあえず座らせられままキャロルを見ていた。」

「隆、何か飲むか？」

「なら……コカ・コーラで」

「……無いからミルクでいいな」

「あ、ハイ」

「？そして、キャロルは俺の分のミルクと自分用のコーヒーを入れて一緒に席に着いた。俺は最近、キャロルと仲良くなつた後によく2人で喋るようになった。別に俺がキャロルに惚れたと言う訳でもなく、尋問をされている訳でもなく、ただ純粹にキャロルとの会話を楽しんでいたので。……ま、ぶつちやけただけの愚痴な訳なのだが。」

「キャロルも大変だな……この前レイアから聞いたんだけど大分前から生きてるんだよね？俺だつたら絶対に無理だわ」

「それはパパの命題が残っているからな。そう簡単には辞める気もしない。……ただ、何故お前はオレを止めようとしななんだ？立花響も他のシンフォギア装者も必死にオレを止めようとしたぞ？」

「いやー、俺は世界よりも今のことしか考えられないからなんとも言えないだけなんだ

けどさ。ねえ、知ってるキャロル……愛つてさ、重いんだよ」

「……いや、悪かった。あれは本当にガリイが悪いからな。オレもガリイにどれだけ苦しめられたか……」

「はあ……」

？そうして、俺達はお互いにため息を吐く。だが、それが俺やキャロルにとつてはきつと居心地がいい空間だったし、実際に過ごした時間はかなり短かったが俺はキャロルのことを友達だと思っていた。

「……そろそろ時間だ。オレは寝る」

「ああ、おやすみキャロル」

「おやすみ隆」

？？そう言つて、キャロルはそのまま何処かに行つてしまった。……さて、俺も明日のことを考えなければ……

彼は奥の手を見せる

「……………んう……………今時間は何時だ？」

？俺はそう言いながら起き上がって、辺りを見渡す。最近をよくガリイに起こしてもらっていたのだが、今日はそれがなかった。とりあえず顔を洗いにいくか。

「……………人の気配がしないな」

？俺は1度顔を洗って部屋を出たのだが、やはり人はいない状態で、とりあえずシャトーの中を散策してみることにした。……………しばらくして、俺はキッチン、研究室、人形保管室等を色々入って探してみたけれど、オートスコアラーのみんなは何処かに出かけてしまったのだろうか？

「とりあえずあのデカイパイプがある椅子の場所に行くか」

？そして、俺はそのまま玉座の間に向かうと、そこにはキャロルが目を閉じたまま玉座に座っていた。……………寝てるのかな？

「おーい、キャロル寝てるのか？」

「……………ん？なんだ隆か。何か用か？」

「いや、ガリイとかフアラとかレイアが見当たらないんだけど……………あ、そういえばミカも

「いないな」

「ああ、ガリイ達ならもう動き始めている。これを見ても」

「? そう言つて、キャロルはある映像を映し出してた。そこにいたのはガリイやアラ、レイアが発電所らしき場所を破壊している所だった。」

「これで、向こうの Project IGNITE はギリギリといった所だが……向こうにはファイネもいるし、エルフナインもいるから完成するだろう」

「エルフナインに Project IGNITE……知らない単語ばかりじゃないか。つてか、キャロルつて響達と敵対してたんだったわ。忘れてた」

「……お前はアホなのか? 昨日も散々言つてやっただろうが。まあ、いい」

「でも、あんまり無茶するなよ? その、人質が言うのもなんだけど……」

「……フツ、気にするな。気持ちだけ受け取っておく」

「? そうして、俺はその映像を見続けていると、ある映像が目についた。それはミカが切歌と調と戦っている様子だった。」

「あれは負けるだろうな、相手は戦闘型のミカだ。まだ立花響が戦ったら勝算があるだろうが……難しいだろうな。最悪、あの2人は死ぬだろうな」

「ツ!? 嘘だろツ! そんなこと……」

「お前もガリイがやった姿をみたことがあるだろう。だが、ミカはきつと無邪気にあの

2人を殺すだろう」

？そんなことを話している内に切歌のシンフォギアが強制解除されて、切歌が倒れた。そして、それを見ていた調もすぐに切歌を助けようと、ノイズ達を倒すが、ミカとノイズ達の連携によって調も同じようにシンフォギアを強制解除された。

「ッ……キャロルッ！頼むッ！あの2人を殺さないでくれッ！お願いだッ！」

「……無理だ、諦めろ。それに、犠牲はつきものだ……あれは、もう間に合わない」
「クソッ！」

？俺はあの2人を助けようとして、何とかシャトーから出ようとするが、その瞬間キャロルが俺に対して錬金術を発動させた。

「隆、仲間としてのよしみだ。これ以上は大人しくしている……オレもお前のことをあまり傷つけない」

「……キャロル、悪いがそれは無理だ。あの状況で助けに行かない奴がいらないと思うか？俺は……後悔だけはしたくないんだ。キャロルだつて」

「黙れッ！隆ッ！確かにオレはお前とは馬が合うとは思ったよ。だがな、オレにはパパからの命題を解く使命があるんだ。邪魔をしようと言うなら……」

？すると、キャロルは何か楽器のような物を奏でて、変身する。変身し終えたキャロルの姿は、もの凄いグラマスな体型をしていて、まるでシンフォギアをしているような姿

だった。

「お前を殺す。今ここで……」

(……幼女から美女に早変わりかよッ！しかも、ラスボス感が半端ないんだがッ！)

?俺はこの状況を何とかしようとして一生懸命考える。このままでは、確実にキャロルに捕縛されてタイムアップで切歌と調が死んでしまう。だから、俺は一生懸命考えに考えて考えぬいた結果……あの力を使うことにした。

「……これ使ったらクリスがめっちゃ怒るから嫌なんだけどなッ！フロンティア起動ッ！シャトーからバビロニアの宝物庫経由して本部にゲートを繋げッ！」

「ッ!しまッ」

?その瞬間シャトーの何もない場所からゲートが開き、俺はその中に急いで飛び込む。実は、フロンティア異変の時にソロモンの杖をどうするかと言う話になって、その結果フロンティアで管理することになったのだ。理由はフロンティアに入れるのは俺だけなので奪われる心配がないと言うことで置いていく筈だったのだが、了さんが調子に乗ってフロンティアから俺だけ任意にソロモンの杖が使えるようになったらしい。

「よしッ！初めてだけど上手くいったッ！よし、このまま本部のゲートにッ！」

?そして、俺はシャトーのゲートに入った瞬間にゲートを閉じて、バビロニアの宝物庫を通過し、本部のゲートを通過した。そして、そこにいたのは……

「なッ!? 隆一ッ! 何故バビロニアの宝物庫から……」

「おい隆一ッ! 何勝手にソロモンの杖使つてやがるッ! てか、何処から出てきてんだよッ!」

「あ、イツチーだゾッ!」

「ッ!?! お兄さんデスカッ!」

「これって……どういふこと?」

? どうやら何も無い空間からいきなりゲートを開けて現れたので、その場にいた装者達とミカは状況が理解できていなかった。それよりも、翼さんとクリスが2人を助けてくれたのか……よかった。

「おいッ! 隆ッ! 逃がさんぞッ!」

「ッ!?! もうキャロルきやがったのかッ!」

「何がなんでも貴様を逃がさんぞッ!」

? きつと、俺の戦いはどうやらこれかららしい……

「…………アハ、リュウクンダ♡ミク、イイカナ…………イイヨネツ！」
「響、ダメだよ？ いくくんはこれからじっくり調教しないと…………ネ♡」

彼はラスボスとヤンデレにサンドされる

？今、俺はとてもピンチな状態が続いていた。何故なら、急いで調と切歌を助けようとしてフロロティアにあるソロモンの杖を通して、ゲートを開き助けにきたのだが、それは翼さんとクリスの活躍によって助けられており、あまり意味はなかった。しかし……

「この程度かッ！シンフォギア装者よッ！」

「ッ！厄介だなッ！大丈夫か雪音ッ！」

「ああ、大丈夫だ先輩。だが……隆一ッ！お前がまたなんかしたんだろッ！あいつを何とかしろッ！」

「んな無茶なッ！キャロルはそもそも俺を逃がさないつもりだったんだぞッ！しかも必死に助けにきたら、それが無駄になるし俺の気持グフッ！」

「ッ!?隆一ッ！」

？俺はキャロルの弦のような糸によって腹は引き裂かれて、吹っ飛ぶ。2人は何とか俺を助けようとしてこっちに向かおうとしていたのだが、キャロルの邪魔によってなかなか向かうことが出来ないでいた。

「ッ………俺じゃなきゃ死んでるぞ。ゲホゲホッ！」

「邪魔だッ！どけッ！」

「クッ、やはり圧倒的に出力が違いすぎる……」

「……先輩、アレしかねえ」

「……ああ、このままではまた同じ二の舞になるだけだから」

「イグナイトモジュール、抜剣ッ！」

？その瞬間、翼さんとクリスが胸のペンダントを外す。すると、ペンダントは変形してそのまま2人の胸に突き刺さった瞬間だった。2人は急に体に溢れ出る闇のオーラのなものが現れて苦しみ始めた。

「があああああああッッッッッ！！！！」

「ッ!? 2人共ッ！どうしたんだッ！返事しろッ！」

「……もう、アレが完成していたか。だが、まあいい。今なら隆を簡単に捕獲できるからな」

？そう言って、キャロルはあの禍々しい2人のことを気にしないでこっちにやってくる。気がつけば、俺のお腹の傷はネフシュタンによって完全に回復したが何とか動けるぐらいにしか回復出来ていなかった。そして、キャロルは俺の目と鼻の先に近づいた時に手を差し伸べた。

「……隆、今この手を握ればあの2人を殺さずにお前も助けてやろう。だが、お前がオレ

を拒むならもう容赦はしない」

「ガッ……に、逃げ……ろ」

「早……く、離れギイツ……ろ」

「翼さんッ！クリスッ！」

「あれはダインスレイヴを使って意図的に暴走を制御するようにエルフナインが改良した所だろうな。もし、成功すれば更なる力を得るが、それでは間に合わない。さあ、どうする隆」

「俺はキャロルに言われたことを必死になって考える。もし断ればそれはきつと、翼さんとクリスは確実に殺されて、俺も死ぬだろう。だから俺もほぼーっしかない選択肢を選ぶ為にキャロルの手を伸ばそうとした時だった。急に俺の背中に生暖かい感触が感じられたのだ。」

「やつ……と、ツカマエタ♡」

「……え？」

「なッ!? 貴様ッ！立花響ッ！何故お前がそ「どいて……」ッ!? ガハッ！」

「いつくん、久しぶり……」

「その瞬間、そこに現れたのは響と未来だった。……そう、響と未来だったのだ。俺はこの時何が起きたのかわらなかつた為に一度質問を試してみた。」

「えっと……響?」

「もちろん。りゆうくんが知ってる立花響だよ?」

「それじゃあ、こっちは未来……だよな?」

「当たり前じゃん。いっくんもしかして寝ぼけてるの? もういっくんはいつも忘れっぱいんだから」

「そっか。そうだよね……えっと」

「ねえりゆうくん(いっくん)何か言うことは?」

「ヒツ!? す、すいませんッ! 本当、マジ調子乗ってすいませんッ! ごめんなぎやあああああああああッッッッッ!!!」

「とりあえず今はこれくらいに[!]しといてあげる。りゆうくん……私、許サナイカラネ?」
「りゆうくんは後でたーっぷり私達に染めてアゲルネ♡」

? 俺はある程度軽いお仕置きを食らった後に久しぶりのあの感覚を味わった。それは普段からはあまり見られないような2人の完全ハイライトOFFの響と未来だった。

「……やはり、立花響……貴様が1番の障害か。俺はお前達には用はない。そこをどけ」
「何を言ってるの? りゆうくんは私のだよ? やっぱり貴方がりゆうくんにあんな酷いことしたんだ……未来、これって許せる? 私は無理」

「私も無理かな。だって、いっくんは私達に対してそんな酷いことしない。でも、いっく

んからあんな言葉は聞きたくなかった。だから……」

「本気で殺してあげる。イグナイトモジュール、抜剣ツ！」

「……オレを殺すだど？……フフ、フハハハハハツツツツツ
!!!!!! 認めん、認めんぞツ！殺さ

れるのは貴様の方だツ！」

？そうして、キャロルと響&未来の激しい戦いが始まった。……さて

「この状況どうしよう……」

？俺はそう思いながらただ戦いを見ていた。仮にどちらをえらんでも地獄、待ち受けているのはお仕置と言う名のただの調教だった。そして俺はもう頭の処理が追いつかなくなつて……

「……うん。もう夢であつて欲しい」

？ただ、静かに思考を放棄した。

♫

「ガツ……はあ、はあ、クソツ！なんでイグナイト出来ねえんだよツ！」

「ツ……雪音、私達は立花や小日向とは違う」

「ツ……分かつてんだよ。分かつてんだよツ！だけどよ……あたしはさつき、アイツを守ることさえ出来なかった……出来なかったんだよツ！」

「……………」

「……先輩も少し焦った方がいいんじゃないか？ シンフォギアを長く使っているのはあたし達だ。今まであのバカに助けられてばかりだったけどよ、あたし達は何も……成長してねえ」

「……ああ。雪音の言う通りだ……私達は、弱い」

彼は許された

「海デースッ！」

「きりちゃんはしやぎすぎ。落ち着いて」

？唐突だが、俺は今みんなと一緒に海に来ていた。それは何故かと言うと、この前に響と未来がキャロルと激しい死闘の末、最終的には響と未来が勝利して、俺はS・O・N・Gに帰ってきたのだが……

「えつと……あなた大丈夫なの？」

「オレ、イキテル。モンダイナイ」

「遂に片言しか喋れなくなつたか。まあ、敵に何か吹き込まれてやつてしまったのは仕方ないが……あれはかなりキツそうだったな」

「あのバカと未来が怒るのは仕方ないけどよ、なんつーか……隆一、よくあれで耐えられたな」

「ハツハツハ。ヒビキサマ、ミク様ノオジヒデソノヒゲンテイデイチニチナンデモスルツテケイヤクラムリヤリムスピマシタ」

「……あなた、とんだ災難ね」

？俺はこの通り完全にあの2人に色々とお仕置され、ほとんど燃え尽きている状態だった。最終的には、とんでもない悪魔の契約をしてしまった気がするが、まあいいだろう。それに、俺の他にも了子さんが司令に怒られていた。やはり、ソロモンの杖がバレたのがいけなかったのだろう。

「りゆうくくん♡」

「ヒッ！ヒヒヒ、響さんッ!?許してください、許してくださいちやいッッッッッ!!!」

「……むう、そんなに怖がらなくてもいいのに」

「いや、あれは流石にトラウマになるからなッ！俺以外だったら絶対にウウッヒョアアッ!?み、未来さんッ!?何して……」

「いっくん……そんなに怖がる必要ないよね？それとも、私達のこと嫌い？」

「め、滅相ありませんッ！御二方はとても可愛いらしいですッ！幼なじみと親友最高ッ！マジ天使ッ！」

「よろしい。それじゃあ、いっくん……遊ぼ？」

「……ああ、そうだな」

「私もりゆうくんに何してもらうか楽しみ♪」

「……………」

？そうして、俺は響達と海で遊び始めた。本当なら俺達は次の襲撃に備えて待機する筈

だったのだが、司令が特訓だと言ってその場所を浜辺で行うことになった。多分、これは響達への休暇……司令のそれなりの優しさだろう。……翼さんはこれを普通に特訓と勘違いしてるけど。

「ねえ、隆一」

「ん？あ、マリアさん。どうしましたか？」

「それはこっちのセリフよ。何故エルフナインと砂遊びをしているのかしら？」

「それは、なんか意気投合しちゃって……」

「隆さんッ！砂遊び楽しいですッ！」

「そうかー。よかったなー」

「……あなた、心が完全にまだ治ってないわね」

「？こうして、俺達はしっかりと海を満喫して楽しんだ。」

♪

？あれから少し経ち、お昼頃を過ぎたあたりの時だった。いや、もうなんとなく分かってはいたが……

「ガリイちゃん登場☆」

「あ、ハイそうっすね」

「ッ!?オートスコアラーツ！何故ここにッ！」

「そりゃあ、もちろん仕事に決まってるだろバーカ」

？海から現れたのはなんとガリイだった。ガリイは現れたと同時にそのままアルカイズを召喚して戦闘態勢に入る。もちろんみんなも同じようにシンフォギアを纏って戦おうとしていたのだが、俺はガリイの右手に持つ紙が気になった。

「また……りゆうくんを連れて行こうとしているの。やっぱあの時すっかり破壊するんだった」

「いっくんはここで待ってて。私達があのおトスコアラ達と戦うから」

「えーガリイちゃんとか戦うんですかあ？あまりガングニールとシエンシヨウジンの装者はおすすめしませんよお？」

？そいいいながらガリイは余裕の笑を浮かべていた。い、いや……まさかそんなことする訳ないよな？まさかあの紙じゃないよなッ！

「りゆうくん、ちよつと行ってくる」

「すぐ終わらせてくるから。マリアさん、ここの周辺はよろしくお願いします」

「ええ、分かったわ」

「ちよッ!? 2人共ダメだッ！あれは俺的にも2人にもお互いダメな奴だからいくなああああッッッッ!!!」

「ッ!? 隆一ッ！それはどう言う事なのッ！」

彼はハートブレイクを起こす

「うおりあああああああああッッッッッッッッッッ!!!!」

「はあああああああああッッッッッッッッッッ!!!!」

? 響と未来はガリイを倒す為に全力で攻撃を仕掛けようとしてきた。だが、ガリイはそれを紙一重で躲して自分の持っていた紙を2人の目の前に突きつけた。

「え?これって……えッ!?何これッ!どういうことッ!私の写真でりゆうくんが、りゆうくんが……あわわわわ」

「ッ!?これって……いっくんッ!?い、いっくんが私の写真で……いっくんが……」

「ガリイッ!やりやがったなああああッッッッッ!!!!」

「な、何ッ!?一体何が起きてるのッ!」

「もう……死にたい。もう貝になりたい……ころして、ころして……」

? 俺が悶えながらめちやくちや後悔している時に、ガリイはただひたすらに楽しそうに笑っていた。ガリイがああの2人に見せたのは俺が中学生の時、2人の水着で(自主規制)をしていた写真であり、それは響達に対しても、俺に対しても必ずと言っていいほど精神的に大ダメージを受けていた。あれは……まづいよ……

♪

?その後、マリアさんとガリイの戦いは引き分けと言う形でガリイは去って行った。ガリイは多分キャロルに言われて目的を果たしに来たのだろうが、俺にとつては爆弾を持ってきたような感覚だった。そして……

「えつと……私達がアルカノイズを対処している間に何かあったんですか?」

「響さんが紙を見ながらものすごく笑顔で、未来さんも同じように紙を見ながら顔を真っ赤にしてるデスけど……」

「2人は何も知らない方がいい……いいんだ」

「……あいつ、本当に何があったんだよ」

「マリア、何か知っているのだろう。確かオートスコアラーと対峙していたと聞いていたが……」

「まあ、その……隆一も男の子つてことよ。あまり聞かない方がいいわ」

(((気になる……)))

彼は平穩を望む

？ガリイの襲撃があつた後から1週間後……俺は司令から何人かの護衛の人に影で護護してもらいながら在るべき日常生活に戻ろうとしていた。どうやら司令は俺が精神的ダメージが酷い為これ以上この事件に関わらせないようにするつもりだったらしい。まあ、了子さんはそれに対してあまり意味が無いわよって言っていたけど。しかし……

「確かに司令が言つてることも正しいし、俺が出来ることはあまり無いんだけどさ……どうしたの、響」

「……………」

「いや、しばらく俺本部の方に行けないし、色々と心のケアとかしたいからあまり響達に顔を出さないけどさ……当たり前のように家にいるのはどうかと思うよ？」

「俺は学校から家に帰ってきた後にリビングに行くよ、そこには当たり前のように響がいたのだった。ただ、あまり人のベットで横になるのは色々と困るんだけどな。」

「……………」週間は本当に何も無かったよ。ぶっちゃけまたキャロルが襲つてくるんじゃないかな……なんて思つたけれど何も無かったよ」

「……………」

「…………あのー立花さん？聞いてます？もしもームグッ!?ンーツー!ンーツー!」

「私…………お父さんにあつたの。りゆうくんに会わなかつたー週間の間に…………」

「ムググッ!ムグッ!ムググググッ!」（お義父さんに会つたのツ?!い、いやでも響さんツー!さつきから胸で、息がツ!息がああああツツツツツ!!）

「俺は何とか響が抱きしめている所から抜け出して、何とか呼吸することが出来た。しかし、響はやはり俺から離れることをせずつと抱きしめていた。」

「はあ、はあ…………お義父さんに会つたの?いつ」

「最初に会つたのは5日前…………そして今日も会ってきたけど、お父さんは私の知るかっこいいお父さんじゃなくなつてた」

「そうか…………」

「?俺はそう言いながら響の頭を撫でる。響はどうやらお義父さんに会っていてやはり関係は修復出来なかつたと見られた。…………本当にこの短期間で問題ばかり起こるのはやはり運命なのだろうか?」

「…………今日は泊めさせて…………りゆうくんお願い」

「…………はあ。未来に連絡しろよ?最近はもう俺の信頼と社会的なものがボロボロなんだから」

「ありがとうりゆうくん」

? こうして、この日は響が家に泊まることになった。その時、俺は気がつかなかった。俺のスマホに1件の不在着信があったことに……

♫

「いや、まあこうなるとは思ってましたよ。……で、響に何をやらかしたんですか?」

「あ、ああ……その、響にかっこ悪い所を見してしまつてね。正直助かるよ、隆くんはどんな時でも俺の話を聞いてくれたからね」

「だからって……色々大変だったんですよ? あの後もずっと不機嫌で……ずっと甘えてばかりでしたから」

「響はやっぱり隆くんには甘えてば「ヤンデレです」……え、えつと……「ヤンデレです」わ、分かったツ! 今回は俺が悪かったんだよツ!」

「はあ……久しぶりに連絡してきたと思つたら何してるんですか。ねえ……」

「響のお義父さん」

彼は響の幼なじみである

「……す、すまない隆一くん。響とは会ったのは本当に偶然だったから嬉しくて……」

「だとしても、まず俺に電話するかしてくださいよ。昔の響と今の響は待ったく違うんですよ？全く……」

「？俺はため息をつきながら少しだけ落ち込む。今更なのだが、何故俺が響のお父さんのことをお義父さんと呼ぶようになったのには理由があった。まあ、簡単に言ったら響の両親のことをずっとそう呼んでいたからなかなか直すことが出来なかったのだ。……まあ、直そうとしたら響が許してくれないのだが……」

「……それで？要件はなんですか？」

「実は、もう一度家族としてやり直したいんだよ」

「それで俺に手伝って欲しいと？」

「ああ、君には昔から色々迷惑をかけてすまないと思っている。だけど、俺は……響ともう一度やり直したいんだッ！頼むッ！」

「？すると、響のお義父さんは俺に思いつきり頭を下げる。正直、俺は響のお義父さんを昔はほんの少しだけ許せないと思ったことがある。でも、響のお義父さんの家族構成や

仕事状況を聞いた時には素直に怒れなかったからだ。

「……別に、俺はお義父さんが逃げたことは間違いないじゃないかと、仕方ないと思っ
ています。実際、俺だって逃げますし、嫌なことだったらやりたくないですよ」

「隆一くん……」

「でも、1つだけ約束してください。父親と言う役目から逃げないでください。それが
俺からの願い……と言うよりお願いです」

「ッ……ああ、ありがとう」

？すると、響のお義父さんは俺に対して深く頭を下げて、お礼を言った。俺は正直、少
しだけ恥ずかしかつたのだが、これで響の家族の関係が戻るのなら、それを願うばかり
だった。

「……さて、それじゃあ色々取り掛かりますかね。ただ、俺が直接介入する訳じゃない
ですからね？あくまで中立の立場で考えてくださいよ？」

「隆一くん……俺は君が響の幼なじみでよかったと思うよ」

「まだ始まってすらないから、それはちゃんと仲直りした時に言ってもらいたいですね」
「……そうだな。所で隆一くんは響と未来ちゃん、どっちが好きなのかな？ちよつと気
になつたんだが……」

「いや、それは……まあ、お義父さんならいいか。勝手に喋つたら思いつきお義父さん

の顔殴りますからね？俺は——」

♪
？あれから更に1週間が経過した。響のお義父さんは今日、響と改めて今までの謝罪これからのことについての話し合いを設けることに何とか成功した。もちろん、この間にも俺は一生懸命響をなだめたり、お義父さんとの話し合いをさせようとかかなり奮闘した。その時に何とか未来にも手伝ってもらって何とかこの1週間に間に合わせる事が出来た。

「ふう、これで響がお義父さんと仲良くなるならいいんだけどな……」

？俺は響とお義父さんが話し合いの場には学校の出席率の為に不去ることが出来ずに、学校で補講を行って帰っていた。

「一応、未来には確認してもらってるけど大丈夫かな……」

「何が大変なんですかあ〜？エロガキ」

「いやあ〜それが……」

「……………」

「何故そこにいるガリイ。護衛はどうした」

「ガリイちゃんがあつさり倒しちゃいました〜☆さてと……」

？その時、俺は全力でスタートダッシュを切るが……

「エロガキを再びシャトーにごあんない☆」

「ちくしよおおおおおツツツツツ」

「やはり、結果は変わらなかった。!!!!」

彼は予想外の人物に出会う

「アベシツ！」

「はいッ！到着。いやあ、エロガキがまたシャトーに戻るなんてガリイちゃん想像もしなかったよ」

「ツツい、てえじゃねえかつ！ガリイツ！くらいやがれツ！超必殺ネフィリムアタツクーツ！」

「遅いんだよッ！」

「あ、避けられた。グヘッ！……せ、背中痛ア……」

「俺はあろうことか、またガリイの手によつてまたこのシャトーに戻つて来てしまった。俺はもうシャトーに戻つてくるとは思つていなかったなので正直かなり困惑していた。」

「はあ……本当ならガリイが一番乗りで役目を果たす予定だったのに、色々大変だった私の気持ちに分からないでしょうね？」

「いや知らねえよッ！そもそももう俺必要ないだろうッ！人畜無害の俺をまた駆り出すとかおかしいだろうッ！」

「いや、まあ……私もエロガキはもう使い道はない予定だったんだけど、この1週間の間で私達の計画がパーになったんだよ。あのイチイバルの装者にな。お陰でマスターはキレルし、フアラもレイアもミカも逝っちゃったし……」

？　そう言いながら苦虫を噛み潰したような顔をしながらガリイは俺を見ていた。だが、俺はふと疑問に思ったことがあった。それは……

「……てか、なんで俺が必要なんだよ。別に俺じゃなくていいだろ」

「ん、そうはいかないのが現実なんだよ。僕のネフィリムツ！」

「……ツ!?はあツ！眼鏡ツ！なんでお前がここにいんだよツ！」

？　すると、シャトーの中にはあの眼鏡が当たり前のようにそこに立っただけでニヤニヤしていた。ただ、ガリイはあの眼鏡の方を見てももの凄く嫌な顔をしていた。まあ、似たような2人だから仕方ないが……

「余計なことをしたらシャトーから落とすからな」

「分かっていますとも。でも、君達もヤントラ・サルヴァスパが破壊されて困っていた時に偶然輸送中の僕を助けたのは正解ですよ」

「黙れ。マスターはお前がまだ利用価値があるから利用しているだけであって、目的が無くなればお前はお払い箱だよ」

「おー、怖い怖い」

？眼鏡はそう言いながらニヤニヤしていて、ガリイを見ていた。すると、俺はまたあの時の装置を無理矢理あの眼鏡につけられた。俺はまだ、意識が普通にあつたが、体だけは動かなくなっていた。

「ッ!?この機械……あの時のッ!」

「今度はちよつと改良して神経と接続してるのでね、前の失敗は起きませんよ?それじゃあ……赤間隆一、改めてこのシャトーを起動させるッ!」

「く、クソッ!体が動かないッ!」

「……ま、こいつの言つたことは本当だったし、しばらくはガリイちゃんが様子を見ますか。最悪の場合は私が殺せばいいし!」

？俺は頭の機械の命令によつて体を動かされて右手をネフィリムの腕にした後、シャトーを動かし始めた。ただ、シャトーを動かし始めたのにキャロルは何故ここにいないのかも疑問だった。

「ッ……が、ガリイツ!あの眼鏡を止めてくれッ!」

「いやー……そう言われてもマスターの命令だし……!」

「ならキャロルは何処に行つたんだよッ!なんでここにいないんだよッ!」

「マスターなら今はあの GANG ニールの装者の場所に行つた筈だけど……あー、顔から察するにヤバそうな感じ?」

?正直、俺はかなり焦っていた。ただでさえまだお義父さんと響の仲は完全に修復出来ていないのにも関わらずにキャロルがその2人の方に行ってしまったからだ。向こうには未来がいるから多少は何とかなると思うが、それもこれも……

「ん〜ッ!やはりシャバの空気は最高だッ!」

?この眼鏡のせいである。

彼は英雄を望まない

俺は今、ウエルの機械によつてシャトーを起動させられていた。正確には自分の体が動かずに意識だけがハッキリしていて本当に操られている感覚だった。そんな状態にも関わらずウエルはこの状況が楽しいのか狂氣的に笑い、ガリイはそれをただ見ているだけだった。

「やはり素晴らしいですねえ。本当ならこの僕があの時ネフィリムを使う予定だったのですが……ただ、私よりもネフィリムが選んだのは君だから仕方ないですけどねえ」
「いや、ネフィリムを一方的に差し出した奴にそんなこと言われたら余計に腹が立つんだが……」

「おい、早くマスターのいる場所と合流するからさっさと動かせ」

「人使いが荒いですねえ。それでは行きましようか」

？すると、眼鏡は俺を介してシャトーを動かしてゲートを開いた。そして、ゲートが開いた瞬間に映っていた場所は俺達の町だった。……いや待て。もしかして……

「外に出ましたねえ。さて、あの小娘は……ッ!? あ、あいつは立花響ッ! また僕の邪魔をするのかッ!」

「響ッ！未来ッ！……とキャロルッ！」

「おいエロガキッ！後付けのようにマスターの名前を言ってんじやねえよッ！」

「いやまあ……その、一瞬大人だったから分からなくて」

「エロガキ……あれはな、本来はお前よりも年上のロリババアなんだよッ！それがあのファウストローブを使うことによつて年増ババアに変わるだけなんだよッ！分かったなッ！」

『おいガリイッ！お前俺のことそんな風に思っていたのかッ！』

「あ、やべ。音声ONになつてた」

『りゆうくんッ!?またなのッ！またあの眼鏡なのッ！待つててッ！すぐにキャロルちゃんを未来と一緒に倒してそっちに向かうから待つててッ！』

？響がそう言い切つたあたりで急に音声が途切れた。その原因はやはりあの眼鏡でただひたすらに震えながら俺を操っていた。あー……これ、かなりトラウマな奴だな。

「クソクソクソクソッ！このままじゃあ僕が英雄になれないじゃなガハッ！……お、お前……この僕を」

「はあ？当たり前じゃん。そもそもガリイちゃんはお前を利用価値があるから生かしてただけで……シャツーがもう動かせるなら話は別なんだよッ！」

「が、ガリイッ！お前何眼鏡を……眼鏡を殺そうとしてるんだッ！」

を言うよ赤間隆一くん。これで……」

「僕が英雄だッ！」

？この時、ガリイが何かを言っていたが俺は気を失った。

彼はただ変化を与える

「ッ!? エロガキッ! 起きろッ! ……おいッ! エロガキに何をしたッ!」

「おやおやあ? あなたは赤間隆一のことをあまり良く思ってた筈だった気がしますが……まあ、別に特別なことではありませんからね。これを見れば分かるでしょう?」

「……ネフィリム、まさかッ! エロガキを分解して、再構築したのかッ! そんな高度な技術は……」

「それが出来るのがこの天才の僕ですッ! いやあ、流石僕が見込んだ男だけはありませんねえ」

「? そう言いながら眼鏡はニヤニヤとしながら私と倒れて意識を失っているエロガキを見下していた。だから私は、すぐに眼鏡を殺そうとしてもう一度胸を貫いたのだが……
「んく……素晴らしいッ! ネフシユタンによる傷の再生で僕は死なないッ!」

「なッ!? ガッ……!」

「お返しだよッ! ……やはりまだ制御が難しいですねえ。まあ、安心してください。この僕がきっちり壊してあげますから」

？あの眼鏡は不適な笑みを浮かべながらゆっくりとこちらにやってきていた。私の体はさつき受けたネフィリムの腕の攻撃を食らってしまつていくつかの場所を損傷してしまつた。このままだとシャトーは……マスターの命令がッ！

「おや？もう動けませんか。仕方ないですねえ……では、赤間隆一を殺しましょうか」

「ッ!?てめえッ！そんなことしたら分かつてるのかッ！」

「それはもちろん今の彼はただの人間……いや、正確にはまだフロンティアのマスター権限がまだ残つてるのでね。だから、今すぐ殺さないとフロンティアを手に入れられませんか……ねッ！」

「ッ……させるかッ！」

「おやあ？鬼ごっこですかあ？仕方ないですねえ。付き合つてあげますよ」

？私はエロガキが殺されそうになるのをギリギリで助けて、シャトーの中を逃げ始めた。本当なら私はエロガキを置いてでも逃げたかった。いつものようにさつきとやること終わらせてまた当たり前のように振る舞う人形になる筈で、一番ばかりをこだわっていた。けれど……

「ッ！……おい、おいッ！さつきと起きろエロガキッ！」

「……………」

「クソッ！最近には本当に調子狂うッ！ッ……足が」

？このエロガキをシャトーに連れてきてから少しずつ、少しずつだが何かが変わっていった。きつと、その影響は私達オートスコアラーにも関わっている筈だ。私は別にそんな影響を受けていない……ただ、私はエロガキが眼鏡に殺されることだけが許せなかった。

「ッ！行き止まり……」

「……………」

「おやあ？もう終わりですかあ？仕方ないですねえ」

？やがて、私達はあの眼鏡にいつの間にか窮地に追い込まれていた。私は壊れかけの体で後ろのエロガキを守るように構える。多分、私のする行動はただの時間稼ぎにしかないのかもしれない。ただ、私はそれでもマスターのいるシャトーを守らないといけない。エロガキはただのついでだ。……だから

「さて、そろそろ消えて貰いましょうか」

「ハッ！ガリイは諦めが悪いんだよッ！」

？私はこいつの未来に賭けてみようと思った。

♪

い

——起きなさい

「起きなさいと言ってるのよッ！」

「ゴフッ！……ここ、ここは……」

「よかった気がついたみたいね。間に合ってよかったわ」

「ま、マリアさん。あの、間に合うって……何が？」

「何って……いや、なんでもないわ。それよりもその……あのオートスコアラーに感謝しなさい。お陰で私達は何とかあなたと合流することが出来たわ」

「オートスコアラーって……ガリイッ！」

彼は保護される

「ガリイッ！マリアさんッ！ガリイは何処にッ！」

「ちよ、ちよつとッ!? 落ち着きなさいッ！ただでさえあなたはさつきまで気を失っていたばっかりなんだからッ！」

「？俺はマリアさんにそう言われてながらも必死に周りを見てガリイを探す。すると、俺がいる場所から2メートル辺りの所に上半身だけの人形……いや、正確にはガリイがロボロの状態で転がっていた。」

「お、おいッ！ガリイッ！返事をしろッ！」

「ちよつとッ！隆一 大人しくしなさいッ！このままだとまた気絶するわよッ！」

「ガリイッ！ガリイッ！」

「？俺が何度も呼びかけてもガリイは反応せず、ただガリイは本当の壊れた人形のように動かなかった。マリアさんは何とか俺を動かせない為に必死に俺を取り押さえてこれ以上動かないようにしていた。そんな……俺のせいでガリイは……」

「なんで……なんで俺を守ったんだよッ！お前は敵で俺とはなんの関係もなかっただろッ！なんで……」

「……………」

「こんなの……あんまりじゃないかッ！おかしいだろッ！」

「……………」

「なあ、返事をしてくれよッ！ガ「うるっさいわねッ！ガリイちゃんを少しぐらい休ませなさいよッ！」グフッ！な、なんで…………」

「体の下半分がなくなつたぐらいですぐには壊れないわよッ！それにさつきガリイは急処置するからそのエロガキにしつかり説明するつて言つたのに何してんだよッ！」

「ぐ、ぐめんなさい。思つたよりも彼の血が頭にのぼつててね…………最後まで説明するこゝとが出来なかつたわ」

「？いい感じに俺は殴られてそこで殴られた場所を必死に抑えながら、俺は2人の会話を聞く。どうやら、ガリイが壊れたことは俺の勘違いだつたらしい。まあ、勘違いなら勘違いでよかつたのだが…………」

「えつと、俺が言うのも何だが…………眼鏡と戦つたんだろ？大丈夫だつたのか？」

「…………ガリイちゃんの下半身がないことで察しろよ。まあ、それでもかなりギリギリでシンフォギア装者が来ないと本当にエロガキは死んでたからな」

「ええ、まさかウエルがあそこまで強くなつてゐるなんて思いもよらなかつたわ。今は切歌と調が何とか時間稼ぎをしているけど、もう終わるわよ」

「え？それってどう言う……」

「そのうち分かるわ。とりあえず今から私はあなたとオートスコアラーを連れてシャトーに出るわ。ほら、巻き込まれなくなかったら行くわよッ！」

？そして、俺はマリアさんに連れられて一旦シャトーから出るようになった。本当に俺が気を失っている間に何が……

♪

？あたし達は今、ドクターと戦っていたデス。まさかオートスコアラーがお兄さんを守っていたのはびっくりしたデスが、それ以上にドクターがお兄さんの力を使っていることに腹が立ったデスッ！

「イガリマアッ！」

「そんなチンケな刃が通ると思いましたがッ！お返しですよッ！」

「ぐあッ！」

「きりちゃんッ！ドクター、きりちゃん何をするのッ！許せないッ！ハアッ！」

「何度やつても同じことおッ！」

？すると、調はドクターに反撃されてあたしにぶつかる。まさか、ドクターがここまでとんでもなくなっているとは思わなかったデス。こうなったら……

「調ッ！抜剣をするデスッ！」

「分かったよ。きりちゃん」

「おやあ？もしかして新しい力ですかあ？だが、僕はそんな力には決して屈することはな—いッ！ですが、僕も心配性なので、ねッ！」

「デスッ!？」

「きりちゃんッ！」

？その瞬間、あたしが抜剣をする前にドクターが赤い火球を作って、あたしに飛ばしてきた。今、あたしは抜剣をしようとして無防備だったデスから、この一瞬で死を覚悟したデス。その時……

「閃光」

「……はああああッツツツ!?だ、誰だッ！いい所を邪魔しやがってッ！」

「あれは……」

「まさかッ！」

「未来、狙いバツチリだったよ」

「ありがと響。でも、まだ終わってないよね」

「ウンッ！早クリユウクンをタスケナクチャ……」

「ヒ、ヒイッ！た、立花響ッ！どうしてお前がここにいるんだよおッ！お前はキャロルと戦っていた筈じゃ……」

「オレが戦いをやめたからな。オレのオートスコアラーは優秀だからな。しっかりと映像で確認出来たからな。だから一時休戦だ……」

「……つてことで未来」

「うん。そうだね……」

「「殺っちゃおっか♪（殺ろうね♪）」」

彼は生き抜く

俺はマリアさんに連れられて、急いで本部に戻ることになった。マリアさんは俺のことを何かと巻き込まれやすい体質だと思っっているらしく、本部の方が安全と判断したのだろう。

「連れてきたわよッ！」

「ん？ おおッ！ 無事だったか隆一くんッ！」

「ええ、色々な人が助けてくれたので。それよりも俺じゃなくてガリイを……」

「それなら私とそのオートスコアラーを見るわ。それに、あなたも少しは休みなさい。また無茶をしたんでしょ？」

「まあ、その……はい」

「隆一くんはよくやってくれた。後は俺達大人の仕事だからな」

？ そう言つて、司令は黒服を連れて何処かに行き、ガリイは了子さんに連れて行かれた。もちろん、俺も流石に体の限界が来ていたのですぐにも横になって休みたかったのだが、とある映像が気になって足を止めた。

「……隆一、そろそろ医療室に……って何を見ようとしてるの？」

「なんですか？マリアさん」

「あの後、私は司令と一緒にウエルを捕まえに行くのだけど……あの2人をどうすれば止められるかしら」

「……最悪止められなかったら、俺が何かするとか言っただけです」

「……分かったわ」

♫

？そして、マリアさん達があの眼鏡を捕まえに行つて3時間が経過した頃、マリアさんを除いた響達が本部に戻ってきた。状態から見ると、相当暴れたことが目に見えてわかるくらいにみんなはボロボロだった。

「りゅうくん頭撫でて〜」

「響ッ！何いっくんに甘えようとしてるのッ！いっくんだってまだ疲れてるんだからッ！」

「わ、分かったよ未来……」

「つ、疲れたデス」

「まさかここまで強いなんて……」

「えっと、響？マリアさんは？」

「マリアさんなら司令と一緒に仕事を片付けるって言っただけだよッ！後、キャロルちゃん

を今後どうするか考えるだつて」

「どうやら、あの眼鏡は何とか生きていて司令が頑張つて捕まえたらしい。そして、同じくキャロルもあの時の響と未来が戦った姿をみたせいかな、大人しく同行したらしい。……ん？まてよ？」

「えつと……もしかしてもう終わり？」

「私もそう思つて色々考えたが……終わりだ」

「……嘘やん。こんなあつさり終わつていいのツ!？」

「別にいいんじゃないか？あたしはもう考えるのはやめた」

「？そう言つて、翼さんとクリスはお互いのため息を吐いて、疲れた顔をしていた。果たして、こんな終わり方が今までであつただろうか？俺はそう思いながらただひたすらにベッドに横になつて言つた。

「りゆうくん」

「あー……うん。もういいや」

「？こうして、俺達の戦いが終わった。まだ、キャロルは世界を分解することを考えているが、了子さんや司令が止めてくれるから大丈夫だろう。そんなことより今は……」

「……ゆつくり寝よう」

「？やつと迎えた平穩を楽しく過ぐそう……」

戦姫絶唱しない日常 『慣れって怖いよね』

？あのシャトーでの出来事から1週間が経過し、俺は久しぶりの日常を味わっていた。ただ、そんな俺にも嬉しい出来事があった。それは……

「……隆一くん、あなたの体に聖遺物の反応が全くないわね。何があったの？」

「何って言われても……あの眼鏡に確か分解だっけ？そんなのされて、その後に再構築したとか聞かれたんだけど」

「あのウエルも腐つても天才だったって訳ね。そもそも分解されてほぼ無事って……悪運がいいのか悪いのか」

「慣れですよ慣れ」

「？どうやら、俺の体には聖遺物が無くなったとのことだった。正直、今までもう人間判定かどうかも分からない状態だったので、人間に戻れて普通に嬉しかった。よし、これでもう巻き込まれないぞ。」

「にしても……隆一くんは私のいた時代よりも色々大変よね。〔先代文明期よりも酷いわ。女難的にはエンキと同じ物を持つてるのよね……〕はあ」

「えっと……了子さんその〔エンキ〕って誰ですか？」

「エンキのこと？それなら……」ちよつと待ちなさい。隆一くん、今私の言葉が理解出来たの？」

「え？あ、はい。そもそも了子さんは普通に喋ってたじゃないですか。何かおかしいことでもあったんですか？」

「まさかバラルの呪詛が解除されてるのツ!?……少し席を外すわ。今日は戻っていいわよ」

？すると、了子さんはそう言つて部屋を後にした。一体了子さんはどうしたと言うのだろうか。ま、大丈夫か。

「了子さん行っちゃったし、帰るか」

？そして、俺は本部を後にして家に帰ろうと通路に出た時に、後ろから冷たい何かが自分の服に入り、驚いた。な、なんだツ!?

「だ、誰だ……つてお前しかいないよな。ガリイ」

「やあねえ。ちよつとからかつてみただけじゃない。私だつてエロガキが出てくる間暇だったんだからこれくらいのこと驚く方も悪いと思うんですけどー」

「いや、ならせめてもう少しこう、驚かせるようなこと色々あるだろ。なんでこんな微妙な嫌がらせみたいなの……」

「ガリイちゃんを待たせた罰……的なの？」

「腹立つわぁー」

？俺の服に氷を入れた犯人はキャロルが作ったオートスコアラーであるガリイだった。そもそも、何故ガリイここにいるのかと言うと、あれからキャロルは急いでガリイを直して元通りの姿にはなつたらしいが、実の所キャロルは保護観察処分となつて、しかもシャトーを直す資金が必要な為にガリイを働かせているのだ。まあ、ぶつちやけると悪いことしてお金なくなつたから働いて稼ぐみたいなものだ。

「はあ、ガリイが俺の護衛つて……」

「何言つてんだよエロガキ。そもそも私はマスターが作った最高傑作なんだから有難く思え」

「ワー、ウレシイナー」

「……あの2人にエロガキの新しい写」

「よし、帰ろう。今すぐ帰ろうッ！」

「分かればいいんだよ」

？そうして、俺は本部を出てガリイと一緒に家に帰る。こうしてガリイと一緒に帰るのは護衛だから仕方ないが、俺はそつちよりも帰つた後のことが一番気になっていた。

「あ、響からLINEだ。なにになに……あー……うん」

「どうしたんだエロガキ。またあの GANG ニールの装者か？」

「正解。帰りに栄養剤と大根と卵とアイス買ってきてだつてさ」

「エロガキ、今栄養剤って言つてなかったか？」

「ああ、多分エナジードリンクだね。やばい時に飲まないと俺の体が持たないからさ

……やっぱり慣れてって大事だよ」

「……が、ガリイちゃんはこの辺で……」

「逃がさんツ！お前も道ずれだツ！」

「は、離せツ！エロガキツ！離せえええツツツツツ
!!!!」

?さて、今日も逝きますか。

戦姫絶唱しない日常『響と未来のささやかな願い：響』

？さて、話をしよう。あれは今から1週間……いや、もつと前のことだ。君たちはシャトーで俺が響と未来に酷いことをしてしまったことを覚えているだろうか？もちろん俺は覚えている。何故なら……

「さて、りゅうくんは何してもらおうかな〜♪未来は決めた？」

「えッ!?わ、私ッ!……私はまだ決めてないかな」

「そっかー。でも、私もりゅうくんに何をしてもらうかずつと悩んでるんだよね〜」

？この通り、響と未来に迷惑をかけてしまったのでなんでも1つだけ言うことを聞く、悪魔の契約をしてしまったからだ。楽しそうな2人に対して、俺はただ何を要求されるか全くわからなかった。

「あの、出来れば程々に……」

「じゃあ、今日が私で明日は未来でどう?そしたら、明日は未来の時間がかなり出来るし、りゅうくんの家でりゅうくんを独り占め出来ちゃうよッ!」

「響さんッ!?ちよ、ちよつと待っててくださいッ!今日なのッ!響が最初って嫌な予感しかしな「りゅうくん♪」あ、はい。黙ります」

「……分かったよ響。それじゃあ、私は寮に戻るね。いっくん……また、明日」
 ? 未来はそう言って、自分の寮に帰ってしまった。もちろん、その間は響と俺の2人つきりとなる訳なのだが、正直響が俺に対して何をやるのかが気が気じゃなかった。ん? カバンを取り出して何を……

「それじゃ、りゆうくん……目隠しして、服を脱ごうか♡」

「……はい?」

? その瞬間、響の行動は早かった。響はすぐさま俺の腕をリストバンドで縛り、俺の服を脱がせてパンツ一枚の状態にして目隠しをされた。こいつツ! 手馴れてやがるツ!

「ふう、出来た……じゃあ、りゆうくんこっちに来て」

「ひ、響さんツ!? マジで何をする気ですかツ!? やめ、やめろおツ!」

「だーめ。今日は私のお願いを絶対に聞いて貰うんだから。じゃ、入る♪」

「は、入るって……何に」

「もちろん、お風呂だよ♡」

♪

「……………」

「ふんふふーん♪」

? 現在、俺は今響と一緒に風呂に入っている。……うん、ここまででもう訳が分から

ないのだが、それ以上に何かすると本当に何をされるか分からなかったもので、今はとにかく黙って小さな椅子に座らせられていた。

「いやあー、りゆうくんと一緒にお風呂入るなんて久しぶりだねー」

「いや、久しぶりなんだけどさ……何この状況。もう訳が分からないんだが。そもそも響の願いつてまさか……」

「え？もちろんりゆうくんとお風呂に入ることだよ？だって、りゆうくんはだいたいは私とのスキンシップは最小限に抑えてるじゃん。だから、逃げ場を無くさないように……ね♡」

「ね♡じゃないわッ！お前はそろそろ俺に対しての恥じらいとか考えろッ！流石の俺だって高校生だからッ！色々アウトだからッ！」

「でも、りゆうくんこう言うプレイ好きだよ？この前見たエロゲーのタイト「やめろおッ！タイトル名を言うなあッ！」じゃあ、いいよね。体洗うよ〜」

「ひ、響さあんツ!？」

？そして、俺は響に流されるがまま体を洗われ始めた。もちろん、自分の腕はリストバンドで縛られ、視界は隠されている為により生々しさが伝わってきたのだ。お、落ちてけ……今までのエロゲーのプレイした内容を思い出すんだ。

「……今、他の女の子のこと考えたでしょ」

「ツ?!いい、いやそんなことは……いだだだだだッ!?響ッ!悪いッ!悪かったからもっと優しく洗ってくれえッ!」

「ふんッ!りゆうくんは私を見てるだけでいいのッ!……こうなったら今日は絶対に隅々まで体を洗ってやるんだからッ!」

「ツ!?響ッ!いい、今はダメだッ!今は絶対に……つて当たってるッ!柔らかいものが当たってるからあッ!」

「大丈夫だよ。私は水着だから」

「俺は裸ですけどねえッ!」

「結局、俺は何とか俺の絶対領域だけは死守し、狭い浴槽に響と一緒にいる。あの時、何とか太ももで俺の息子を隠せたのは正直よくやったと思っっている。

「ん……気持ちいいね♪りゆうくん」

「……俺はかなり色々と削れたがな」

「でも、りゆうくんはこんな羨ましい機会が出来て役得って思ってるでしょ?」

「正直、ムラムラして心臓が悪い」

「りゆうくんは正直だね」

「響と俺はそんな話をしながら浴槽でゆっくり過ごす。しかし、最近の響はどうしたと言おうのだろうか……響はあからさまにスキンシップが増えてきた気がするし、昔はこん

な恥ずかしいことをする女の子ではなかったはずだ。……やはり、彼女がヤンデレだからなのだろうか？

「……なあ、響」

「ん………なくに？」

「……いや、なんでもない」

「そう？あ、もしかしてギューってして欲しいの？いいよッ！はい、ギュー♡」

「ちよッ!?響さムグッツッ!ムグツムグググッ!」

?やはり、俺は響の考えていることが分からない。

(や、柔らけえ。今まで響を意識したことはそれなりにあつたけど、や、やばいッ!俺の息子がアアアツツ!!)

(りゆうくんは私を意識してくれたかな?もし、これで意識してくれたらいいけど……。それよりも、今日は久しぶりに未来もいないりゆうくんと2人つきりだからいーっぱい濃厚なりゆうくんのアレが飲めるんだよね♪……だから、いーっぱい、りゆうくんを興奮させなきや♡)

戦姫絶唱しない日常 『響と未来のささやかな願い・未来』

「……何故だろうか。昨日、響がいたのに何故かスッキリした感覚がある……もしかして、俺は遂にこの状況に慣れてしまったのだろうか？」

「もう、何言ってるの。そもそも私、響がりゆうくんは何したか知らないけど、響が朝に帰ってきた時に顔がツヤツヤしてたのはどうして？」

「ツ!?!い、いやあく……知らないな」

「むう、怪しい……」

？響のお風呂の件から次の日、昨日とは違って今度は未来の言ったことをしなければならなかった。正直、響とは違って未来はきつとそこまで酷いものではないと信じたい。本当に昨日は役得と言うよりも生殺しの方が正しいよな。

「……で、未来はこんな朝から来るなんてびつくりしたよ。響が俺の家を出てからそんなに経ってないのに……」

「それは……私だっけいっくんに色々して貰いたいことがいっぱいあるんだもん。だから、その……待ちきれなくて」

「まあ、俺からしたら……もう何が起きても素直に受け入れるわ」

「えっと……じゃあ、まずはこの服を着て」

？そうして、未来が渡してきたのは執事服と何やら台本らしきものを2つ渡された。この渡されたもので一体何をするのかは分からなかったが、未来が渡してきたと言うことはきつと着なければならぬのだろう。

「……これを着たらいいのか？」

「うん。私もいつくんが着替えた後に私も着替えるから早くしてね」

「まあ、分かったよ」

？俺は未来にそう言われた後に、俺は執事服に着替えてリビングに戻る。リビングに戻った時には未来は既に着替えに行っていたので、とりあえず台本を読んで見ることにした。……うん……へー……

「……マジでこれやるの？俺の性格的に絶対に似合わないんだが。なんで俺がドS執事なんだよ。しかも、何か撮影する気満々だし」

「い、いつくん……おまたせ」

「あ、未来。未来が俺にやって欲しいことって……」

「そうだよ。私がやって欲しいことはこの台本通りに1日かけてやって欲しいの。実は他の友達に参考で色々撮って欲しいって言われて……」

「……なら、仕方ないけど」

「? どうかやら、未来がやって欲しいことはこの台本通りに色々やって欲しいとのことだが、正直かなり安心した。昨日の響は響で色々ダメな所があったからやつぱりこう言う時は未来のことがとても安心出来る。」

「にしても、本格的だな。未来はドレスを着て綺麗だし、これなら全然いい」

「ツ……私、綺麗……そ、それよりも早く始めよッ! いくくんはちゃんと台本通りに言葉とセリフとその動作をやるんだよッ! 分かったッ!」

「お、おう。そんなに急かす必要があるか?」

「いいから早くやるのッ!」

「分かった。分かったから……」

「? そして、俺と未来は俺の家でこの台本通りに演じ始めた。だがしかし、この時俺は最後まで台本を読んでいればよかったかもしれない……」

♪

『ふう………ただいま。……隆一ッ! 何処にいるのッ!』

『未来様、おかえりなさいませ』

『遅いわよッ! この私を待たせるなんて……執事として恥ずかしくないのッ!』

『申し訳ございません未来様。少し、忙しかったもので……』

『私はそんなこと聞いてないの。いいから紅茶の準備をなさいッ! じゃないとあなた

はクビよッ!』

『……かしこまりました。未来様』

『ふんッ!分かれればいいのよ。全く、最近は本当にイライラしっぱなしだわ』

『……未来様、少しよろしいでしょうか?』

『何よ?話してみなさい』

『実は旦那様から私に命令をされて……もし、未来様がこれ以上物に当たるようなことが続けば罰を与えて欲しいと命令されてまして』

『お父様が?それって……キャッ!な、何をするのッ!やめてッ!離してッ!』

『ツチ、うるさいな。俺の指でも啜えてろ』

『ングッ!な、なにふるのよッ!りゆうひち、あなははくびよッ!』

『隆一?隆一様だろうがッ!』

『ひゃん♡ら、らめヒギイ♡い、痛いのはひゃうん♡』

『……もしかして感じてるのか?未来』

『ッ!わ、私は感じてなんひゃあ♡く、びいはだめえ♡すっちややあ♡』

『なら……耳はどうだ?』

『あ、だめえ♡そこよあいのお♡りゆうひち、ゆるさにやいんだからあ♡』

『だから隆一様って言うてんだろッ!』

『にやあつ♡や、だめえ……これ以上しばっちゃあ♡』

『未来、そんなこと言つて……自分の顔がどうなつてるか分かつてないのか？今、お前は
いじめられて喜んでるドMな変態なんだよ』

『ち、がうの♡わ、わたしは……♡』

『なら、これからじつ……くり俺に染めてやるよ。未来……』

『え？だ、だめにやあああああ♡♡』

『ああ、最高に美しいよ。未来』

『はあ♡はあ♡私は、ぜったいにくっしないんだからあ♡』

♪

「……未来さん、未来さん。俺、ここまでするとは聞いてないんですが？これマジで他の
人に見せるのツ!?なんか色々エッチじゃんツ！」

「……………」

「未来さん聞こえてますかー」

「えッ!?だ、大丈夫だよッ!ちゃんと聞いてるからッ!」

「あれから俺と未来は台本に書かれていたことを同じように演技したのだが、まさかこ
こまで過激だとは思わなかった。ぶっちゃけ、このままだと変なスイッチが入りそうで
怖かった。何か……内容もそうだったけど、最初から最後まで未来が喜んでいたような

……

「わ、私そろそろ帰るねツ！撮影もしつかり出来てたからツ！じゃあねツ！いづくんツ
！」

「えツ!?ちよ、ま……」

？すると、未来が急に帰る支度をしてさっさと家に帰ってしまった。……俺はもしかしたら開けてはならない扉を開いてしまったのかもしれない。

「今日は……本当に何だったのだろうか」

(あ、危なかった……私、このままいっくんに攻められ続けられてたら絶対にあの時絶対に落ちるって思ってた、ちよつと喜んじやった。……もしかして私ってMなのかな?でも……)

「DSのいっくん……よかったな。好きな人に支配されるってこんな感じ、なんだよね。後で私のビデオで確認しなくちゃ♪それから……」

(もし、出来るならもう一回……して欲しいな)

A X Z 編

彼は外国に行かない

? シャトーの事件からしばらくが経過した。今はあの事件は魔法少女事変と呼ばれるようになったらしいが、実際には何故魔法少女なのだろうかと少しだけ疑問に思っていた。そんな俺は今……学校にいる。

「あー……疲れた〜マジでこの時期の体育とか最悪だわ〜」

「分かる分かる。なんで1500m走らなきゃいけないんだよ……な、隆一って隆一ツ!？」

「んー……なんだ? どうかしたのか?」

「嘘だろ……有り得ねえ。あの隆一が……」

「「「「幸せそうな笑顔をしているだツ!」「」」」」

? 今、学校は6時限が終わり放課後でみんなが着替えている時であった。そんな状況の中で、俺は授業が終わった後もニヤニヤしながら学校を過ごしていた。え? 何故かって? その理由は……

「久しぶりに……久しぶりに俺だけの自由な時間だあツ!」

？すると、俺はあまりにも浮かれすぎて誰かとぶつかってしまった。おじいさんは俺がぶつかって謝っても、俺を見ながらまるで品定めをしているように俺を見ていた。

「……………」

「…………え、えつと、俺はこれで」

「待て」

「ツ!?な、何でしょうかッ!」

「財布を落とすでない。…………ではな」

「え?あ…あ、ありがとうございます!」

？俺におじいさんは財布を渡すと、そのまま何処かに行ってしまった。よく見ると、おじいさんの後ろに何人かの黒服の人達がいたので怒らせないでよかったと感じた。

「…………あの人が何処かの偉い人だったのかな?お、怒らせないでよかったです!…つてそれよりも早くエロゲーを買って家でやらないとツ!」

？そして、俺は急いでゲオで新作のエロゲーを買ってすぐに家でプレイしようと急いだのだが、俺はあまりにも浮かれすぎていて大事なことを忘れていた。それは……

「へ〜エロガキは随分マニアツクな物を買ってきたな!……ガリイちゃんちよつと引くわ」

「は?ちよつと何言ってるか分からない。え?何?このエロゲーの素晴らしさが分から

「ないの?」

「いや、急に早口で言ってくるとかどんだけガチなんだよ? 俺にはまだ護衛がいたことだ。」

彼は説教される。

「たつだいまゝッ！りゆうくん帰ってきたよゝッ！」

「ん？ああ、2人共おかえり〜」

「いっくんただいま……つてもう、また靴を脱ぎっぱなしにしてるの？」

「あ、ごめん。忘れてた」

？この日、俺は学校が休みで家にいると玄関のドアが開いて響と未来が家にやってきた。2人の服装を見るに、どうやらバルベルデから帰ってすぐにこっちにやって来たらしい。

「いっくん、片付け出来てるのはいいけどね？ゴミはちゃんと分別しなよ……」

「いやあー……ちよつと久しぶりで羽目を外してね？だから仕方なくふッ!」

「ああ〜……りゆうくんの匂いだあ〜」

「ちよつと響ッ！……もう」

？そして、未来はいつものように家の片付けを始めて、ある程度片付け終えたら響の反対側……つまり、俺の左隣に座って肩を寄せた。……何故だろうか、3日ぶりだからかなんかいつものって感じがするな。

「ん〜……りゆうく〜ん♡」

「響、そんなに抱きしめるなって……まあいいか。それよりバルベルデはどうだった？俺は行ってなかったから分からないけど大変だっただろ？」

「うん……大変、だったね」

「……未来？」

「ううん、なんでもないの。それよりもいつくんは大丈夫だった？日本で変な事起きてなかった？」

「いや、別に？普通に過ごしてただけだよ」

「？俺はそう言いながら響の頭を撫でて未来のことを見る。確かに俺はいつも通りの日常を過ごしていた……だから、別に新しいエロゲーを買って深夜までやった後にすぐに隠したからバレる筈がないのだ。

「……未来、りゆうくん嘘ついたね」

「ツ!?な、何を言ってるんだ響。今の何処に嘘なんて……」

「実はりゆうくんの家に隠しカメラを新しく設置してバルベルデでしっかり見てたからね。証拠もバッチリ残ってるよ♪」

「プライベートの侵害いッ！……ツ!?み、未来さんッ！は、話をしよう……あれは今か」

「これは……お仕置きだよね♪」

「み、未来さんッ！俺が悪かったッ！悪かったからはなぎやあああああッッッ
!!!」

♪

「結局、俺はあの後未来に2時間程度お仕置きをされながら説教をされ、新しく買ったエロゲーも没収となった。別にそこまでしなくても……はあ。

「りゅうくん未来にかなり怒られたね。大丈夫？」

「……大丈夫、夫だ。未来も別に許してくれてもいいのに……」

「あ、りゅうくん。もちろん私も許してないからね？りゅうくんはワタシダケダヨネ？」
「ッ!?ちよ、ちよつとコンビニ行ってくるッ！」

「あッ！りゅうくんッ！……ムウ」

「俺は何とか響から逃れてコンビニに行き始めた。ふう、危ない危ない……このままだった確実に何かされてたな。未来の説教の後からだど流石の俺も無理なんだよな。……あ。」

「そう言えばさつき未来があの時少しだけ間があったのは一体なんだったんだろうか？」

「そんなことを考えていると、いつの間にかコンビニに着いていた。そして、俺はそのままコンビニに入ってお菓子でも買おっかなと思っっている時だった。」

「君が赤間隆一くんだね？」

彼はどの状況でも誘拐される

「君が赤間隆一くんだね？」

「ッ!?び、びつくりしたあゝ。……えつと、あなた達は何ですか？」

「風鳴訃堂様がお呼びです。ご同行を願いたいのですが……」

「風鳴、訃堂?えつと、誰かは知りませんが知らない人について行くなつて親と幼なじみと親友に言われてるので……では」

??そうして、俺はそそくさと家に帰ろうとする。俺が話しかけられたのはS. O. N. G. とかでよく見かける黒服の人達だった。でも、俺に用事があるなら別に今じゃなくて良くない?てか、行つたらあの2人が絶対に止めに入つてくるし……

「……仕方ありません。散」

「「ハッ!」」

「えっ!?!ちよつ、ま、待てえッ!いだだだッ!掴むならもつと優しくッ!」

?すると、黒服の人達が俺を捕まえようと強硬手段にでる。まあ、俺は数人の大人に捕まえられたら抵抗出来る訳がないからな。……てか、なんでこの時にガリイがいないんだよおッ!ふざけん……あ、ガリイはキャロルにメンテナンスされてくるつて言つて

たっけ?……はい、詰んだ。

「赤間隆一の回収に成功。ただいまより帰還する」

「この、暴れるなッ!」

「今度はガチもんの誘拐じゃねえかッ! いやあッ! 誰かッ!」

「騒がしいワケダ」

? 俺が黒服の人達に誘拐されそうになっている時に女性の声が聞こえた。その声の方に俺は振り向くとかえるのぬいぐるみを持った幼女がそこにはいた。

「ツチ、錬金術師だッ! 早く車を出せッ!」

「えっ? 一体何が……」

「早く入れッ!」

? その時、黒服の人が俺を急いで入れて車を発進させる。残った黒服の人達はそのまま片手に拳銃を構えていて、そこからはもうその黒服の人達が見えることは無かった。

「クッ、もう錬金術師がこつちに……早く訃堂様の場所に行かなければ」

「あ、あのッ! いきなり何がッ! さっきの幼女は一体……」

「悪いが話は後にしてくれ。今は急いで君を安全な——」

「悪いけどこの子もらっていくわね♡」

「ッ!? いつの間にッ!」

「ど、どこから出てきフギユツ！」

？急に俺がいる車の中に現れたのは褐色の女性だった。褐色の女性は俺を抱えてテレポートジェムを使った瞬間、車ごと全く知らない場所に着いた。……てか、黒服のいいないんですけどおツ！だ、大丈夫なのか……

「は〜い、到着〜」

「えつと……もう訳わつかんねえ」

「サンジェルマン何処〜。彼を連れてきたわよ〜」

？俺が周りを見ると、よく見るとホテルのような間取りであり、とても落ち着いた部屋だった。すると、その部屋の手前のドアが開かれて白髪の女性がタオルを巻いた状態で現れた。……タオル一枚、だと？

「カリオスト口。随分早かったな」

「ちよ、ちよつとサンジェルマンツ！なんで服を着てないのよツ！」

「いや、私は少しシャワーを浴びてな。替えの服は誤って部屋に置いていつてしまつてな」

「えつと……」

「ツ!?!フンツ！」

「グホオツ！……お、俺悪くないやん……ガクツ」

「ふう、気絶したわね。……サンジェルマン、早く着替えて」

「……………」

「サンジェルマン？」

「だ、男性がいたのか……………」

「あー……………その、ごめんなさいサンジェルマン」

「ツ……………」

彼は勘違いをする

「……んう……ツい、痛い……」

「あら？起きちゃった？」

「ええ、いいストレートが腹にきま……じゃないツ！何誘拐してくれてんのツ!?いや、誘拐されそうだったけどさ……」

「えく、それはやつぱり貴方が持つてるアレが欲しくて」

「俺が目覚ますと、そこには褐色の女性が俺をずっと見ていてつい反射的に言ってしまった。よく見ると、その奥にはかえるの人形を持った幼女と風呂上がりの女性（今は服を着ている）がソファに座って何かを話していた。あ、こつちを見た。」

「やつと起きたワケダ。ただ、サンジェルマンの裸の姿を見たのは万死に値する」

「ぶ、プレラーティツ！一応あの時はタオルを巻いていたツ！裸では……」

「ちよつとサンジェルマン、自分から墓穴に入ろうとしてどうするのよ。それよりもまず、自己紹介をしましょう。私はカリオストロよろしくね♡」

「んん……さ、サンジェルマンだ」

「……プレラーティだ。よろしくなワケダ」

「え、ええっと、赤間隆一です。よろしく……」

？そうして、俺達は自己紹介をした後に少しの沈黙があった……いやいやいやッ！この人達誘拐犯ツ！何俺さらつとこの状況に馴染もうとしてんのツ！……いや、もう3回も誘拐されてる時点で今更か。

「……よし、寝るか」

「……ねえ、えっと……まーくんこの状況で寝ようとするってかなり凶太いわね」

「ま、まーくんツ!?!」

「カリオストロ、変なあだ名を付けるんじゃない。コイツのあだ名はレッドでいいだろう」

「いや、戦隊物のヒーローじゃないから」

「なら……無難だがイチでどうだろうか」

「イチって……犬じゃあるまいし……」

「サンジェルマンのあだ名で決定（なワケダ）」

「ええ……」

？俺は何故かこの人達に勝手にあだ名をつけられてしまった。最近はこういうのが流行っているのだろうか。

「……さて、話は戻るけど私達は貴方が持つてるアレが欲しいの」

「アレって……まさかッ！」

「あら？もう分かっちゃった？なら私達に早く譲渡して欲しいの。そしたら危害は加えずに貴方を帰してア・ゲ・ル♡」

「……何故そこまでアレにこだわるんだ」

「そりゃ、それを使った方が私達の計画が格段に上がるからよ」

「格段に上がる……アレは1人用なんだが……」

（……なあ、サンジエルマン）

（なんだプレラーティ）

（なんか話がズレていないか？あの……イチはフロンティアではないことを考えている気がするワケだ）

？さつきからこの褐色の女性……確かカリオストロだったか。何故彼女が俺の大切に保管している茶髪な子犬系女の子とドキドキ制服○を知っているんだッ！あれは俺のお気に入りだから隠している筈だぞッ！

「ッ……あれは……渡せない」

「あら？渡せないの？ならイチにはしばらくの間ここで過ごして貰うわよ。もちろんイチについていたGPSも破壊したし、渡してくれるまでは絶対に逃がさないからね♡」

「……分かった。ただ、俺は絶対に屈しないぞッ！アレは俺のお気に入りなんだから

なッ！」

「じゃあ、しばらくは私とカリオストロ、プレラーティの順番でローテーションで監視をしましょう。いいわね、プレラーティ」

「分かったワケダ」（お気に入り？コイツ、絶対に勘違いをしているな）

？こうして、俺はしばらくの間この部屋で過ごすことになった。俺はこの先どうなるの
であろうか……

彼はやつと真相に辿り着く

?あれから1週間の月日が流れた。俺はと言うと、未だに誘拐されてから何処かのホテルでずっと監禁状態だった。ただ、1つ違うとすれば部屋は綺麗だし、手錠とかされないし、美味しいご飯は出るわととても待遇が良くてびっくりしていた。そして今も……

「赤の2よ」

「スキップなワケダ」

「赤の8と青の8を2つ出してUNOよ♡」

「スキップなワケダ。あとUNO」

「いや、もう勝てる気しないんですが……酷くない?」

? UNOをしていた。いや、確かにここは誘拐されてから居心地はいいんだが、娯楽が無かった。だからこうして今はカリオストロとプレーティとUNOをしていた訳なんだけど。この2人なんなの?マジで強いんだが……

「はい上がり〜」

「UNOなワケダ」

「2人共強くない?俺、弱すぎて泣きたくなってきたんだけど」

「そりや、私は昔はこういったポーカーフェイスとか人を陥れるの得意だったし」
「私は普通にこうしたら勝つて分かってたワケダ」

「……マジかよ。でもなんか不完全燃焼だからもう一回」

？すると、この部屋の唯一のドアが開かれてサンジェルマンが現れた。カリオストロもプレラーティもよくこの部屋の監視以外でもない時があつたがやっぱり……今回の黒幕なんだろうなあ。

「あ、サンジェルマンおかえり♡」

「サンジェルマン何か成果はあつたのか？」

「ええ、やっとティキが動きだしたわ。……正確にはオートスコアラーとして完全に治つたと言えればいいかしら。それからもうすぐ局長もくるわ」

「……めんどくさいワケダ」

？サンジェルマンが帰ってきて、俺は一体何事かと思つたらなんかガリイとは別のオートスコアラーがいるのと、局長つて人がどうやらこの部屋に来るらしい。なんかプレラーティとカリオストロは嫌そうな顔してるけど……

「……で？局長はいつ来るの？」

「それは……「呼んだかな？」ッ!?局長ッ！……いつからそこに」

「たつた今さ。それよりも計画は順調かい？」

「はい。計画は順調に進んでいます」

「ねえねえアダムく。この弱そうな人間はだれく？」

「テイキ、少しだけ待ってくれないかな？後でちゃんと教えるから……」

？すると、いつからか知らないが急にベッドがある場所から白い服を着た男性とガリイと似たようなオートスコアラーがいつの間にかそこにはいた。き、気づかなかった。

「君が赤間隆一くんだね？僕はアダム・ヴァイスハウプト。このパヴァリア秘密結社の局長……まあ、言ってしまうえば社長的な地位の人間さ」

「は、はあ……」

「はいはいッ！私はテイキッ！テイキだよッ！」

「あ、テイキさん……ども」

「……君は随分この状況に落ち着いているんだねえ」

「ま、まあ色々ありましたから」

？……なんだろうか、この何とも言えない気持ち。普通、誘拐された俺に自己紹介をしているこの局長は大丈夫なのだろうか？いや、見た目で判断したら行けないって言われているけどさ……胡散臭い。

「そうか。でも、僕達にも時間が惜しいのでね。そろそろアレを渡して貰おうか」

「あ、アレって……こ、ここにはないし、俺は絶対に渡さないからなッ！」（あれは響と

未来が買ってくれた初めての誕生日プレゼントであり、俺の原点なんだ……簡単には渡さねえッ！」

「……僕としてはあまり争いは好きじゃないんだけど……仕方ない」

「局長、待つてください。彼を殺す気ですか」

「当たり前だ。それに、フロンティアは管理している人間が殺されたらその次の人物にマスターが渡る仕組みになっているんだよ。だから……」

「ッ……俺は絶対に渡さないからなッ！絶対にッ！」

「いや、渡して貰うよ。それに、君は人間だ……だから脆い」

「渡してたまるかッ！俺の茶髪子犬系女の子とドキドキ制服○を絶対に渡さねえッ！（さて、貰おうかッ！君が持っているフロンティアのマスター権限をッ！）」

「……………」

「……え？エロゲーのゲームじゃないの？」

「いや、そもそもエロゲーって判断もおかしいでしょッ！」

「やっぱり勘違いしてたワケダ」

「？なんかちよつとよく分からなくなつて来た……」

彼はまだマスター権限がある

「……改めて状況を整理しようか」

「……」

「？あの後、俺達はさつきから話し合いをしているのにあまりにも話が噛み合わないの
で、とりあえず状況を整理し始めた。」

「ねえ、アダムはどうしたの？」

「テイキ、今から大事な話をするからしばらく静かにしてもらえると助かるよ」

「アダムがそう言うならテイキいくらでも待つちゃうツ！」

「？……お互いの勘違いだった。いや、そもそも俺だけが勘違いをしていた……よくよく
考えたら敵がエロゲーなんて欲しいって思う訳ないじゃんツ！俺、ただのバカじゃんツ
！もうヤダツ！小生死にたいツ！」

「……そもそもイチが勘違いしなければこんなことにはならなかったワケダ」

「仰る通りで……」

「でも意外だわ。茶髪子犬系女の子とドキドキ制服○だったかしら？かなりマニアック
なゲームをしてるわね」

「面白いよ？エロゲー」

「いや、聞いてないワケだ」

「？そう言つて呆れるプレラーティ。すると、局長……アダムさんでいいだろうか？そのアダムさんがフロンティアについての話を切り出してきた。」

「君は面白いねえ。でも、話は終わつてない……フロンティアのマスター権限についてはどうなっているんだい？」

「え？フロンティア？」

「そうだイチ。私達は計画の為にフロンティアが必要なのだ……大人しく渡して貰えれば君をすぐに家に帰すと約束する」

「……いや、まあフロンティアは確かにマスター権限を持ってますし、渡したいのは山々なんですけど……」

「確かに俺の体の中……いや、正確には頭にはまだフロンティアのマスター権限が入っているとして子さんは言っていたが、下手にマスター権限を取り出そうとすると俺も死ぬし、フロンティアは二度と動かないとの事だ。……あの眼鏡、フロンティアのマスター権限を奪うならしつかり奪ってくれよ……はあ。」

「……まさか、フロンティア本体の方に行かないとマスター権限を書き換えられないとかじゃあないだろうな？」

「あ、プレラーティよく分かったね。俺も子さんに散々教えられてやっと覚えたからびつくりしたよ」

「……はあ」

「え？何そのため息酷くない？」

「サンジェルマンちよつといいかい？」

「はい、局長」

？すると、サンジェルマンはアダムさんと何かを話始めた。一体何を話しているのだろうと思っていた時に2人は話をやめて、俺の方に近づいた。

「それじゃあ、サンジェルマン後の方はよろしく。君達のファウストローブの姿を楽しみにしているよ」

「分かりました局長。お気を付けて……行くわよカリオストロ、プレラーティ」

「ええ、もう仕事？」

「早く準備するワケダ」

？サンジェルマン達はそう言いながらテレポートジェムで何処かに行ってしまった。俺も逃げ出したいけど無理だよな……

「では行こうか、隆一くん」

「デスヨネー」

彼は銭湯に行く

？ 私達は現在、シンフォギア装者との交戦の最中だ。……いや、正確には防戦一方の状態にあった。もちろん私、プレラーティ、カリオストロを含めてファウストローブを纏ってシンフォギア装者と戦っていた……筈だった。

「グツ……腕をやられたワケだ」

「ちよつとプレラーティッ！ 大丈夫なのッ！」

「カリオストロよそ見をするなッ！ 来るぞッ！！」

「うおりやあああああああああッツツツツツ！！！！」

「ツ!?……あつぶないじゃないッ！」

「……ツチ。次は顔面を狙う」

？ 本来、私達はここにある情報を処分する為にこの風鳴機関本部に向かい、局長から言い渡されたシンフォギアの破壊を目的としてこの場にやって来たのだが、詰めが甘かった。まさかシンフォギア装者がここまで強いとは計算外だった。

「立花ッ！あまり前に入るなッ！」

「……翼さん、無理です。だって、あの3人からりゆうくんの匂いがするんですよ？許さ

ない……許さないッ！」

「ッ……やはり、隆一から渡された立花を抑える方法にももう限界があるか……」

「立花響、か。このままでは埒が明かないな……ッ!？」

「サンジェルマンッ！」

「大丈夫、少しかすただけだ。……これはシエンシヨウジンの」

「ふふっ……光学迷彩って知ってますか？光の屈折と錯覚を利用して目には見えにくい状態に出来るんですよ。早くいつくんの場所を吐いてください……私は響よりも容赦はしませんよ？」

？すると、私の後ろから急に現れたのはシエンシヨウジンのシンフォオギア装者だった。私は何とかプレラーティとカリオストロとすぐに合流し、立花響ともう一人のシンフォオギア装者を警戒する。このままでは私達がシンフォオギアの破壊を行う前に私達が……狩られる。

「……プレラーティ、カリオストロ。一か八か、あの2人がダインスレイヴの遺産を使ったモードになった時が勝機だ。……いいいな？」

「分かったわ（ワケダ）」

「作戦会議は終わり？早くりゆうくんの居場所を答えてよ。答えないと私、もう止まらないから……」

「響、落ち着いて。まずはあの3人を捕まえてからじつ……くりお話をしたらすぐにいくんの居場所が分かるから……ね？」

「……分かったよ、未来。行こう」

「〔抜剣〕」

♫

「ふう……この銭湯もなかなか悪くないね」

「いや、何普通に銭湯行ってるの？……まあ、一緒に入ってる俺も俺もただけどき」

「あれから俺はアダムさんとフロンティアに行き、フロンティアのマスター権限を渡した後に何故か一緒に銭湯に行っていた。正直、フロンティアのマスター権限に関してはアダムさんが何故かフロンティアの使い方を知っていたので早く終わってしまったのだ。……いや、それでも銭湯はおかしいよ。」

「君がフロンティアのマスター権限を渡してくれたお陰で早く計画が進むよ」

「いや、渡さないと俺を殺すとか言ってますでした？」

「……なんの話かな」

「いや、惚けるなよ」

「？そうして、俺とアダムさんはしばらくの間銭湯を堪能していたのだが……」

「……おっと、そろそろサンジェルマンがやばそうだね。それじゃ、隆一くん。僕は今か

ら用事が出来たのでね、失礼するよ」

「え？あ、はい………つて俺はこの後どうなるんですか？」

「君はもう自由だからこのまま帰ってもいいし、少しの間銭湯を楽しむのもありだよ」

？すると、アダムさんはそう言っつて湯船からあがり、脱衣場の方に向かった。俺はそのままポツンと銭湯に残されたままただ一言言つた。

「……いや、解放の仕方が今までで一番雑やん」

彼はヒッチハイクする

？俺がアダムさんから解放されて3日が経過した。あれから俺は自分の家に帰る為にヒッチハイクを始めた。マジ鹿児島の人、優しい…優しすぎる。俺は家に帰るまでの間何人かの人に送って貰ったり、家に泊めて貰ったりしてやっと、やっと俺は帰って来たあッ！

「ここでいいかい？」

「ありがとうございます。わざわざこんな所まで送ってくれて本当に助かりました」
「行くついでだからいいってことよ。じゃあな」

？そう言つて、わざわざ俺を送ってくれたおっさんは少しだけ手を振つて来た道に戻つて行つた。やべえよ、鹿児島の人マジでいい人いっぱいいるよ……。

「……さて、これからどうしようか。響達に連絡しようと思つても携帯もないし、財布もないし、電話番号も登録するだけして忘れたからなあ……」

？俺はヒッチハイクをしながら3日かけて自分のいる街までやつて来ることが出来たのだが、ぶっちゃけると俺がいる場所から家までの距離は大体の感覚だが約20kmほどの距離があったので、この後のことを一切考えてなかった。……どうしよう遠い。

「歩くしかないよなあ……ん？なんだあの汚れたフードを着た人は？」

「？今から俺は歩いて家に向かおうとしている時に怪しい人物をたまたま見つけてしまった。よく見るとその服はまるで白衣のような服装がフードの隙間からチラッと見えた。すげえ怪しきプリンプリンだなあ……あ、目が合った。」

「凄いい怪しい人だなあ……ってあれ？なんかこっちに來て」

「？その瞬間、俺はそのフードの男に強く胸ぐらを掴まれて急いで払い除けようとして腕を掴むがその男の掴む強さは尋常じゃなかった。そして、俺はその男の声を聞いてつい驚いてしまった。」

「いやあく久しぶりですねえ……赤間隆一くん」

「ツ!?め、眼鏡ツ！」

♪

「？あの後、俺……つともう一人、フードを被った男のウエル……通称眼鏡はとりあえずその場を離れて小さな公園のベンチに座っていた。この状況がおかしい、おかしいよッ！なんで眼鏡おるんツ！」

「まさか隆一くんと会えるとは思いませんでしたよ。僕はまだ逃走中の身なものでね、なかなか逃げるのが大変でしたよ」

「いや、聞いてないんですけど……そもそもよく脱獄出来たな。もうびつくりしたわ」

「僕は天才ですからね。ネフィリムの力とネフシユタンの力を使えば逃げることもなんて容易いですよ。そう言う隆一くんもまた誘拐されましたか？懲りないですねえ……」

「うるせえッ！お前だけに言われたくないわッ！」

「まさかあの場で眼鏡と出会うとは思っても見なかつたよ。二度あることは三度あるとはよく言うけれど、本当におかしいだろう。このままだとまた巻き込まれそうだし、早く逃げようしよう。」

「隆一くん、今この僕から逃げようとしませんでした？」

「ナンノコトカナ。オレシラナイ」

「とぼけても無駄ですよ。まあ、僕は今は君に用事はないのでね……いや、待てよ」

「すると、眼鏡は急に何かを考え始めた。その様子はまるで悪巧みのようなそんな顔をしていたのだが、俺は早く家に帰りたいと願うばかりだった。まあ、このパターンは分かるよ？もうた巻き込まれるんだろ？」

「隆一くん、君はまた誘拐されたと言っていた。そうでしょう？」

「ええ、まあ……」

「ん〜ッ！素晴らしいッ！このチャンスを逃す機会は無いッ！悪いですが、君にはまた僕の手伝いをしてもらいますよ」

「拒否権は……うん、知ってた。……つてにぎにぎすんなッ！全く、で？目的は？」

「目的は簡単ですよッ！僕と一緒に英雄になろうじゃないかッ！」
？まだ家には帰れなさそうだ……

彼はやはり眼鏡に巻き込まれる

「ここが僕の拠点ですよッ！」

「……なんかガラクタぼっかりでただのゴミ屋敷に見えるんだが」

「贅沢言わないで欲しいですね。使える機材と雨を凌げる建物があるだけマシですよ」
「俺は今、眼鏡に連れられて眼鏡の拠点らしき場所にやって来ていた。本当は早く帰って響達の暴走を止めなければならぬが、相手はネフィルムやネフシユタンを取り込んだ眼鏡だ。逃げたらそれこそ何されるか分からないので大人しく従うとしよう。」

「では早速ですが、まずはこれを」

「……何これ？」

「僕が捕まっていた施設の物を奪ってきたものですけどね。一応ネフィルムを通じて色々調べましたが、僕が使っても効果がないようですからあげますよ」

「？そう言つて、眼鏡から渡された物は謎のブレスレットだった。いや、こんな渡されても困るし、いらなんだが……まあ、とりあえず付けるか。」

「……よし、おい眼鏡。この後どうするんだ？俺は今すぐ帰りたいんだが……」

「いい加減眼鏡は止めて欲しいですけどねえ……それじゃあ、作戦を言いますか」

？そして、俺は眼鏡が考えた作戦をしばらくの間聞いていたが、その作戦はほぼ博打に等しいほどに有り得ない作戦であり、誰も想像出来ない考え方だった。

「……いや、これ被害が尋常じゃないじゃんッ！絶対に怒られる奴じゃんッ！」

「だからこそそのチャンスなんですよッ！今、シンフォギア装者と隆一くんが言っていたパヴァリア秘密結社が対立している今こそがッ！僕達が英雄になれるチャンスなんですよッ！それでは始めましょうッ！」

「フロンティア奪還作戦をッ！」

♪

「計画は順調に進んでいる……しかし、私は……」

「何か困ることもあるのかい？サンジェルマン」

「局長……いえ、何も」

「いやあ……楽しみで仕方ないよ。もう少し、もう少しで……」

？そう言いながら局長は不敵に笑い、楽しそうな顔をしていた。それもその筈だ。私達はフロンティアを手に入れ、ティキを再起動し、それにより神の力を降ろす準備が整ったのだ。もし、このまま順調に行けば私達はバラルの呪詛を解放し、悪のない平和な……

「サンジェルマン」

「ッ……プレラーティイか。大丈夫だ、カリオストロはどうした」

「今は見張りを頼んでいるワケダ。だが、サンジェルマン……この計画には私的には反対なワケダ」

「……プレラーティイ、何故そう思う」

「あまりにもシンフォギア装者の戦力が強すぎるからだ。計画を始めるならシンフォギア装者の無力化が一番の最優先だと思うワケダ」

「確かにプレラーティイの言ったことも正しい。シンフォギア装者のあの2人……特に立花響、彼女は私達にとっての障害となり得る存在だ。なら……」

「た、大変よッ！」

「どうしたんだい。カリオストロ……見張りはどうしたのかな？」

「局長、そんなこと言ってる場合じゃないわよッ！サンジェルマンッ！急いでフロントィアに行く準備をしてッ！」

「フロントィア……まさかッ！」

「フロントィアが動き始めたのよッ！それも勝手にッ！」

「……フロントィアのマスター権限は僕が持っている筈だ。これは一体……いや、心当たりが1つだけある」

「……もしかしてイチ？」

「正解だカリオストロ、やってくれたねえ……隆一くん」
「? どうやら私達は彼を甘く見すぎていたようだ。」

彼は振り回さる

「やはり、フロンティアを動かすのは最高ですなえッ！」

「お前……なんで船酔い治ってん、うつぶ……」

「フロンティアを動かせるなら船酔いだって治りますよッ！素晴らしいでしょうこの景色、動くフロンティア、そしてこの僕をッ！」

「いやしら……あ、無理オロロロロ」

？現在、俺と眼鏡はただいまフロンティアを起動……ではなく、フロンティアの権限を眼鏡が俺から奪ったネフィルムを経由してフロンティアを移動し始めた。正直、また巻き込まれて早く家に帰りたい。すごく帰りたい。

「しかし、まさかここまで上手くいくとは思っても見ませんでしたよ。やはり、この僕は天才だッ！」

「……い、いや、普通にやってることがおかしいんだよッ！何が水蒸気爆発で池用のペダル式スワンボートでフロンティアまで来る奴があるかッ！」

「ん……分かっていませんねえ隆一くん。今は奇抜なアイデアと新しい取り組みが必要なのですよ」

「海上自衛隊の人達もビビってただろうがッ！そりゃスワンボートがいきなり超高速で移動出来る方がおかしいわッ！」

？ 今回の作戦で俺達がやったのはこんな感じだった。まずはフロンティアを奪還する為に海を渡るボートと推進力が必要となり、俺達はボートを探したのだが、やはり金も無い俺達にとつては無理だった。なので俺達は必死に探して探して……見つけたのが廃棄されたスワンボートだった。スワンボートと言えばペダルで漕げば進む簡単な仕組みで、よく大きな池で見かける奴だ。……しかし、いくらボートを見つけたとしても推進力があまりないスワンボートではフロンティアに向かうにもかなり危険だし、見つかる危険性があつたからだ。まあ、それは眼鏡によつて簡単に解決されたが……

「やはりネフィリムの力は素晴らしい……火球をこのような使い方をして一気に莫大な推進力を生み出す僕、最高ですねえッ！」

「いや、生きた心地しなかつたわ。マジで後でぶん殴つてやる……で、この後はどうするんだ？」

「ん？ ああ、隆一くんはこの後の説明をしていませんでしたね。今からは次に来る装者達と錬金術師の足止めを考えましょう。そうすればこの戦いも手早く終わりますから」「足止めつて……したらどうなるんだよ」

「もちろんッ！まとまった所をこのフロンティアの一撃で一網打尽ですよッ！フヒヒヒヒヒッツツツツツ！！！！」

「英雄になりたいとは思えないほどの外道ぶり……ん？そのまとまるまではどうするんだ？」

「……英雄に至るまでには犠牲はつきものですからッ！」

「いや、何当たり前のように俺を囮にしようとしてやがるッ！ふざけるなッ！ふざけるなッ！」

「やはり、眼鏡はいつも通りだった。でも、眼鏡によってフロンティアは動きだし、しばらくはサンジェルマン達はフロンティアを取り戻す為に戻ってくるだろう。……それと、サンジェルマン達が動くことは来るんだらうなあ……はあ。」

「噂をすれば何とやらですよ。前方にシンフォギア装者、後方に錬金術師。フヒヒ、楽しみですねッ！」

「俺はこの眼鏡を見ながらただ一言だけ……この一言だけが俺の頭の中に浮かんだ。もういいだろ、そろそろ限界だ。早く終わってくれ。たのむから——」

「誰かこの状況を何とかしてくれ。」

彼は焦る

「……なんで俺が囧に」

？俺はあの眼鏡に言われて、眼鏡がフロンティアを制御している間に囧をすることになった。もし、あの眼鏡が変なことをするかもしれないから念押しをしていたが……無理だろうなあ。

「……さて、もう少しで響達がこっちに来るって眼鏡が言ってたけど、確かに適材適所なのが分かるから余計に腹が立つな」

？そうこうしてるうちに奥の方から段々と足音が聞こえてきた。足音は多分分かるんだけども6人ぐらいの足音ってことが分かる。すげえ1人だけ足音がめっちゃ近づいてるんだよね。絶対に響じゃん。

「この後、囧をしろって言われてたけど何をすればいいか……まあ、なるようになるか？すると、黄色いシンフォギアを纏った装者が現れた。もちろん響だ。……ってあれ？響さんお目のハイライトはどうしたんですか？なんか息切れたみたいな呼吸になってますけどツツ!?なんかビーストになってませんかッ!？」

「はあ、はあ……あゝ……りゆうくんだあ♡りゆうくんの匂いがして全力で走ってきたけ

ど、やっぱり私のダーイスキなりゆうくんだあ♡……もういいよね？我慢しなくてもいいよね？私、頑張ったんだよ？アルカノイズ倒して、錬金術師を無力化して、サンジェルマンさんと戦って、いっぱいいっぱいいいーっぱい我慢したんだよ？なのに……なのになのになのにっ！りゆうくんは急に居なくなつて、そしたらサンジェルマンさんからりゆうくんの匂いがして、ここずっと一緒に過ごせなくて……私はいつもりゆうくんの部屋でりゆうくんの帰りを待つてっ！でも、でもっ！りゆうくんは帰つて来なくてっ！いっぱい自分で慰めたのに、それでも心は満たされなくて……ずっと……ずっとずっとなんか……私——」

？……あかん。今までで一番やばい状況なのかもしれない。前は1週間ではあったが、まだその時は響と顔を合わせていたからまだなんとかなつた。……しかし、今回は違つた。今回はもう1週間以上経過はしているし、響とは全く会つてはいなかった。そして、響がこの状態になつたのもやはりクリスマスに渡した響を暴走させない方法の本を実行していたのが原因だろう。

「もう我慢しない……りゆうくんにいっぱい、いっぱい愛して貰うんだ♡りゆうくんにいっぱいキスして、いっぱいご褒美もらつて、りゆうくんにいっぱい（自主規制）するんだ♡アハ、想像しただけで私……イッチやいそう♡」

？あ、ダメだ。これ今近づいたら絶対に食われる奴だ。よし、逃げよう。今すぐ逃げよ

か、壁ッ！い、いやッ！し、死ぬッ！

「し、死ぬううううツツツツ！！！！……ん？あれ？ぶつかってない。つてか浮いてるッ!?どどど、どうしてッ！」

「響はもつと冷静に物事を考えないと……ね？いつくん♡」

？……未来、ステルスはあかん。てか目ッ！ハイライトッ！

「いつくんは少しか私と一緒にいよう……大丈夫、ほんの少しかだから……」
？これは完全にあれだな……お前もか未来。

彼は撫でる

「いっくんだ……いっくんがここに……」

「ちよ、み、未来さん……く、苦しい……」

「だゝめ。もうちよつとだけこうさせて……」

？ただいま俺は現在、響達がサンジェルマン達と戦闘を行っている場所から少し離れた場所で未来にしばらくの間抱きしめられたままだった。正直に言えば未来のお陰で助かったことには感謝しているが……目が据わってらっしゃる。これ、絶対に2人つきりはダメな奴なんだよなあ……

「……あの、未来さん？」

「ん？なあに♡」

？これは完全にダメですね。男が興奮するような今までにないくらいのもろいボイスになつてらっしゃる。仕方ない、とにかく未来から離れて貰わなければッ！

「未来、そろそろ離れてくれないかな？今は一応戦闘中だろ？」

「大丈夫、響とみんなならきつとサンジェルマンさん達を倒してくれるから……私がいっくんを守るの。そう、私が……私だけがいっくんを守ってるんだよ。褒めて褒めて

♡」

「え？あ、うん。未来は凄いな……でもまだ他に問題が」

「あの眼鏡ならキャロルちゃんが止めに行つたよ。またいつくんにこんなことする奴はもつと罰を与えないとダメだからね。だーかーらー……色々裏で手回した私にいっぱい撫でてーいーっぱい褒めて欲しいなあ♡」

「なん……だと……!?まさかあの眼鏡がキャロルにッ！今すぐ助け……には行かなくていいか。よくよく考えたら俺巻き込まれただけだし、キャロルが何とかしているなら大丈夫だろう。ただ、未来は響と違つた意味でやばいよ。これが家だつたらやばかつたけどな。」

「未来は偉いなあ♡」

「ん〜♪いっくん、私頑張つたんだよ♡」

「完全に未来が小学生ぐらいに退行しているんだが……これ、どうしよう。このままじゃ動けないし、ここから離れないと本当に捕まりそうだし、いつ何が起こるか分からないからな。そうして、俺はすぐに立ち上がろうとしたのだが……」

「……あの、未来さん立てないんですが」

「……ダメ。まだいっくんと一緒にいる」

「でも、ここにいたら俺が危ないし……」

「いっくんは私が守るから大丈夫ッ！だから今は私の傍にいるのッ！」

「ちよつとツツ!!? 未来さんッ！分かったッ！分かったから落ち着いでででで
でツツツツツ!!!」

「……はあ、マスターの言った通り未来を監視してて正解だったわ。えい」
「!?!」

? 俺が未来の駄々こねをこの後何とかしなければと考えている時に、突然俺の下に謎の紋様が浮かび上がった。その時、フロンティアの景色から何処かの部屋に急に変わっていて驚いたが、それは俺が知っている物だとすぐに分かった。

「これって……テレポートジエムだよな？」

「当たり前だよエロガキ。まあ、本当に悪運だけは強い」

「が、ガリイッ！いや本当に助かったッ！マジで感謝ッ！」

「いっくんッ！私だけを見てよッ！」

「え？ちよ、未来さ、んッ！」

「あ……」

? この時、俺は未来に無理やり顔をガリイの方向から未来の方に首を曲げさせられて、とんでもない痛みが走った。あ、このパターン分か、る……また、気絶する、奴や……

彼は首をやる

「……首が動かないし痛い」

「大体1週間つて所ね」

「んー……怪我をしたのは久しぶりだな」

「折れてないだけマシよ。そもそも今までで1番怪我が軽い方なんだから我慢しなさい」

「いや、普通はこれでも結構な怪我ですからね？」

「あれから俺は未来の方に無理矢理首を曲げさせられて気絶しまい、しばらくして目が覚めるといつもの部屋で俺は横になっていた。幸い首の骨は折れてはなく、ただの首の曲げすぎらしい……。お陰でしばらくは首を動かせないのは……厳しいな。」

「未来ちゃんも悪気があった訳じゃないのよ。……実際、あなたがいなくならなかったらこんなことにはなっていないんだから」

「(ご)もつともで(ご)ざいます……」

「でも、収穫はあっただけまだ……いや、よく考えるとあなたにとってはいつも通りだったわね。後、そのブレスレットは返して貰うわよ」

「あ、はいどうぞ……つて了子さん酷くない？俺誘拐されただけだよッ！俺何も悪くないじゃんッ！」

「……あなたがいなくなつて、響ちゃんが暴れてかかった修繕費と人件費の金額……教えて欲しい？」

「それは本当にうちの響がすいませんでしたあッ！」

「冗談よ冗談」

？そう言いながら了子さんはコーヒーを飲みながら仕事に取り掛かる。……そういえば響達とサンジェルマン達はあの後どうしたのだろうか？今もまだ戦っているのだろうか？そう思いながら俺は、了子さんに俺が気絶した後のことを聞いてみた。

「……えつと了子さん」

「ん？何隆一くん。もしかしてフロンティアでの出来事でも聞きたいの？」

「ま、まあ……」

「気になるのも仕方ないと思うけど、今回は本当に収穫があつたわ。結構簡単に話すけど、まずウエルはキャロルが普通に捕まえたわ。実際彼自身がとても弱かつたからすんなり終わつたわね。……あの眼鏡はどうやってブレスレットを手に入れたか尋問しなければ」

「眼鏡エ……」

?なんか了子さんが小さい声でボソボソと何かを言っていた気がするが聞かなかったことにしよう……そうしよう。まあ、眼鏡の話は置いて問題は……

「あの、サンジエルマン達はどうなったんですか?」

「ん?あの錬金術師達か。それなら今アダムとテイキ以外は3人共拘束している。一念には念を入れて弦十郎くんとキャロル……それと響ちゃんに監視をさせてるわ」

「へー……司令とキャロルと響が……ん?今響って言いました?」

「言ったわよ?」

「えっと……大丈夫なんですか?その、色々暴走してたじゃないですか」

「ああ、それなら気にしなくてもいいわよ。今は響ちゃんも落ち着いているから問題ないわ」

「ならいいですけど……」

?どうやら響は完全な暴走状態は既に終わっていて、落ち着いているらしい。いやまあ……あの状態で会うのは流石にちよつとキツかったからな。不幸中の幸いと言えるだろう。

「いやーよかったー。響が暴走しなくて」

「そうね」(まあ、響ちゃんが大人しくなったのはあなたが寝ている間に色々してたからなんだけど……それは乙女の秘密ってことにしときましょう)

?こうして、俺は首の怪我をしてしまったが無事本部に戻ってくる事が出来た。かなり寝たお陰かなんだか色々とスッキリするし、まるで疲れが取れたようだ。

「隆一くん、あなたはしばらくの間はこの本部で過ごしなさい。弦十郎くんからの命令だから」

「あ、はい。わかりました」

?まだアダムのことや捕まったサンジェルマン達のこと、響達のが気になるが、しばらくはゆつくりとこの本部で過ごしそう。……過ごせるよな?」

「りゅうちん」
「♡」

んはそれで十分。だからさ、りゆうくん……私だけのりゆうくんになってよ。怖くないよりゆうくん。私達は1つになるだけだから……」

「うん。響、分かったからまず降ろして」

「なぜ響が覚醒状態になり、俺が響に捕まっているのかというところの時から2時間前に遡る――」

「……本部つて暇だなあー。あつキャラルもお茶飲む?」

「オレも飲むが……慣れてるな」

「まあ、監禁とか誘拐とか籠るとか慣れてるからね。キャラルもアダム搜索とか行かなくていいの?それともサンジェルマン達の監視?」

「今はサンジェルマン達の監視だが、ガリイに頼んで休憩中だ。後、オレはツツコまんで」

「俺はまだアダムが捕まってないことからもしかしたらまた狙われるんじゃないかと思われて、現在は本部の1つの部屋でしばらくの間ゆっくりと過ごしていた。」

「今はシンフォギア装者がアダムの搜索をしたり、フィーネが色々心当たりがある場所を行っているからな。アダムは必ず見つかるだろう……そろそろ戻る」

「ふーん。まあ、俺は戦えないからここにいてるけどさ、頑張つてねキャラル」

「ああ。お前はせいぜい攫われないように注意しろよ?ではな」

? キャロルがそう言って部屋から出てしばらく経過すると、部屋に誰かがやって来た。
……あーうん。 やっぱり来るよなあ。

「やつほーッ! りゆうくんッ!」

「響か。なんかめっちゃ元気だな」

「うんッ! だって本部に行けばりゆうくんに会えるからね♪ あ、お土産のおばちゃんのお好み焼きいる?」

「お、丁度お腹減ってたから助かるわ。今は本部にいるから家に財布も取りに行けないから自動販売機も飲みたいものが飲めないし……」

「え? りゆうくん本部の自動販売機って無料だよ? どうして?」

「それは響がシンフォギア装者で所属してるから情報端末で買えるからであって、俺は無いから無理なんだよ」

「……ちよつと師匠に話を「やめなさい」ムウ……」

? 響は少し頬を膨らまして少しだけ不機嫌になる。だが、俺が頭を撫でると響はふにやふにやになって、凄く幸せそうな顔をしながら笑顔で俺を見ていた。……本当、この幼なじみは可愛い。

「はい、りゆうくんあ〜ん♡」

「あー……むぐむぐ……うん、美味しいな」

「でしょッ！はい、あ〜ん♡」

「あ、もう割り箸を渡す気は……いや、折るなよ」

「あ〜ん♡」

？どうやら響は俺に食べさせたいだけなようで、俺にひたすらにお好み焼きを一口ずつ口の中に入れていた。そして、お好み焼きを半分食べきりそうな時に本部にある警報がなった。どうやらアダムが見つかったようだ。

「もう少しりゆうくんと過ごしたかったのに……」

「アダムが見つかったんなら仕方ないさ。響、早く行ってきなさい」

「……やだ」

俺は響があまりにもここから動かなかったので、響にご褒美を取り付けることにした。そしたら響もなんだかんでしつかりやってくれるだろう。……ま、未来に何言われるかは分からないけど。

「……はあ、全くわがままな奴め。……そうだな、もしアダムを捕まえたら今度2人つきりで何処かに行こうか」

「えッ!? 本当りりゆうくんッ！」

「ああ、もちろん。約束は破らない」

「約束だからねッ！じゃ、行ってきますッ！」

? そうして、俺は響に手を振った後、残ったお好み焼きを食べながらしばらく部屋で過ごしていた。部屋は意外と快適で過ごしやすく、リラククスして横になっていた。……そして響が行つてから40分が経過したあたりの時だった。

「大丈夫かッ! 隆一くんッ!」

「うわッ!?! び、びつくりしたあ……どうしたんですか司令?」

「ちよ、ちよつと……はあ、はあ、弦十郎くん早すぎよ。でも、まだ隆一くんはいたのが幸いね」

? 俺が部屋でくつろいでいると、急に司令と了子さんが俺のいる部屋に現れたのだ。しかも大急ぎで……一体何があつたんだ?

「隆一くん、今は時間がない。急いで早くこつちに来るんだ」

「え? 何? どういうこと?」

「話は後よッ! 早くしないと響ちゃんが……ッ!」

『ミイツケタ♡』

「ッ! 了子くんッ!」

「隆一くん早くそこから逃げなさいッ!」

? 了子さんが俺に対してそう言った瞬間、俺は自分のいた部屋から知らない街に来ていた。……いや、正確にはその街の空の上だけだね。そして、俺は気がつけば誰かに担が

れているのを肌で感じ、後ろを振り替えるとそこには……

「……what?」

「りゆうくん♡愛してるよ♡」

?俺の知らない覚醒した響がそこにはいた。

彼は愛される

「ちよつと響さん、これは一体何がどうなってるの？ いや、そもそも未来達は味方なのに敵対してんの」

「りゅうくん何言ってるの？ りゅうくん以外はみんな敵。誰であろうと私の邪魔するなら別に殺しても構わない……その何がおかしいの？」

「響さん物騒過ぎませんかッ!？」

「現在……俺は今、覚醒した響にしっかりと抱きしめられたまま身動きが取れない状態にいた。多分、俺から見た響の様子は狂化2：愛8の割合で今の状態になっていることが分かった。てか、そろそろなんでこんなことになってんのッ！」

「ああ……りゅうくんを私だけが独り占め。すごく嬉しい……」

「ちよつ!?! ひ、響さんッ! もうちよつと力をぬイダダダダダッッッッ!!」

「りゅうくんそんなにガッツかないでもいいのに。そんなに私の胸の感触を味わいたいのか？ フフツ……また後でね？ 今触られるとちよつと出ちやうから♡」

「ムグッ!？」（出ちやうつて何ッ!?! てか、そもそも押し付けてるのは響だけだなあッ!）

「ん♡……あつ♡……ダメだつてりゅうくん。でも、幸せ……」

？あ、ダメだ。これかなり言葉を選ばないと聞かないで無視される奴だ。そんなことを思い浮かべながら俺は未来達の方を心配して少しだけ響から目を離れたのだが、響がそれを許さなかった。

「……今未来の方を見てたでしょ？ダメだよりゆうくん。りゆうくんは私だけ見てないとダメなの。友人でも先輩でも後輩でも家族でも……そして、未来もみんなみーんなりゆうくんには似合わない。私だけでいいの。だから——私以外の女は全員殺す」

？その時、俺は今までに感じなかった殺意を感じた。それはまるで本能と言うべきものなのか、それともまた別の何かなのか……それを言葉に表すことが出来なかった。こ、怖えッ！響マジ怖いッ！えッ!?何ッ！響つて覚醒したらこんななのッ！もうお家帰りた——

「ふざけるなああああああああッッッッッ!!!」

「ッ!?あ、アダムッ！」

「……………」

「ありえないッ！バラルの呪詛を受けた人類が神の力を有するなどありえないッ！それは僕が受けるべき恩恵だったんだッ！その力で僕は完全体と慣れたのにッ！なのに……貴様がッ！立花響ッ！」

「……………くだらない」

「急に俺達の前に現れたのはボロボロのアダムだった。……てか全裸だった。今の話からするとどうやらなんか儀式らしきものやってたけど、その神の力が響に入って今の状態になったと……なんてことをしてくれたんだッ！ やりやがったなッ！ ちくしようッ！」

「立花響ッ！ お前だけはこの僕が殺すッ！ そしてッ！ その力で僕は完全体に——」
「邪魔」

「……は？」

「私の聖遺物って分かる？ ガングニールだよ？ しかもその神の力も入った人間に勝てる訳ないじゃん」

「ぎゃあああああああッッッッッ！！！！」

「？ アダムが急に謎の化物になって響を襲おうとした瞬間、響は一瞬でアダムの体を貫いた。その時、アダムは何が起きたかわからずにただ悲鳴をあげて絶滅した。……いや、正確には響がアダムを破壊したと言うのが正しいだろう。」

「ぼ、僕は……ただアン……又……」

——グシヤッ……

「お前は私の……私達の邪魔なの。……さて、りゆうくん♡残りの人達もサクツとヤッて私達だけの世界を作ろうか♡」

？　そう言いながら響は笑顔で俺にそう言った。しかし、このままでは本当に世界は響によつて滅ぼされそうな勢いだ。早く打開策を考えないと……

「りゆうくん私……もう疲れちゃった。だから、早くりゆうくんの家に行こ。そしたら毎日りゆうくんと（自主規制）して、このまま私とずっとずーっと……一緒に——」

？　あ、もうやばいかもしれない。俺がそう思った瞬間だった……

「響ッ！」

「……未来まだそこにいたんだ。でも、未来はあまり殺したくないの……それ以上近づいたら未来でも私は殺すから」

「させないッ！　私は響といっくんが一緒にいる世界が大好きなのッ！　だから……戻ってきて響ィッ！」

彼は助ける

「響イツ！お願いツ！いつもの響に戻つ、きやあツ！」

「無駄って言ってるのに……もう諦めてよ。私は……」

「ツ……私は絶対に諦めないツ！響がいつもの日常に戻る為なら私は諦めないツ！」

「……うるさい、うるさいうるさいうるさいうるさいツ！未来に私の気持ちなんて分からないツ！私は私とりゆうくんだけの世界を作るのツ！」

？現在、今の状況を説明すると覚醒した響に未来が必死に元に戻そうとがむしやらに挑んでボロボロになる姿が俺の目に映っていた。未来は涙を流しながら必死に響に叫んでいたけど響はそんな未来を見て何故か怒りに震えていた。ただ、1つ言えば何故戦闘になっているにも関わらずに響が俺を離さないのは疑問だったが、そんなことはどうてもよかった。早く響をなんとかしないと、そう思っていた瞬間だった。

「ツ、私は負けないツ！響といっくんの明日の為にツ！絶対にツ！」

「……未来、もう諦めて。未来はこれ以上戦えない……絶対に」

「そんなことな、ツ!?ゲホツゲホツ！」

「未来ツ！」

としたが、生身の人間がシンフォギアに簡単に追いつく訳がなく、俺は未来をすぐに助け、背中におんぶした後に響から少し離れた場所に移動した。

「はあ、はあ……未来、大丈夫か？」

「ツ……だい、じょう、ぶだよ。私は、平気」

「今すぐ本部に連ら「待、つて」……どうしたんだ、未来」

「……響を、助けて、あげ、て」

「ツ……でも未来」

「だいじよ、うぶだ、よ。私はここで、休んでるから……助けてあげ、て。だつ、て響は
いっくんの、事を……」

？そう言つて未来は俺の頭を優しく撫でて、そのまま静かに目を閉じた。……どうやら未来は気絶しているようだったが、何故そこまで俺を響の所に向かわせたいのか分からなかつた。でも、1つだけ分かるとすれば……

「……そうだな。響を助けなきやな」

？そうして、俺は念の為本部に連絡を取ろうとして未来の持っていた端末を拝借して連絡をとり始めた。他のみんなは大丈夫だろうか……

「えつと、隆一です。誰かいませんか」

『ツ!?隆一くんかツ！大丈夫なのかツ！』

「はい。ただ、未来がシンフォギアで無理し過ぎたから誰か未来の救助をお願いしたいんですが」

『分かった。しかし、今は他の装者達も響くんによってほとんどがボロボロの状態だ。このままだと……』

「俺が止めます」

『ッ!?……しかし『弦十郎くん。代わってくれないかしら? どうせ言ったって無駄よ。隆一くん、今から響ちゃんを元に戻す方法があるからおしえるわね』了子くんッ!』

「ありがとうございます了子さん。それで司令……」

『……仕方ない。だが、無理だけはするなよ隆一くん』

?そして、俺は急いで了子さんから響を元に戻す方法をおしえてもらった。説明の途中に俺だけにしか出来ないと言っていたが、それだけが少しだけ気になったが。

「……えっと、つまり響から神の力を吸い出せば響は元に戻るんですか?」

『ええ。ただ、吸うだけじゃダメよ。響ちゃんには絶対に力が漏れそうな場所を吸わないと力は抜けないし、最悪死ぬわよ。もちろん隆一くんが口で吸うのよッ!そこが大事なんだからッ!』

「……なんか変態じみてますね。でも、やりますよ」

『ならいいわ。しっかりやりなさい隆一くん』

? そうして、了子さんは端末の通話を切る。了子さんが言っていた作戦は俺が響に近づいて口で神の力の漏れている場所を吸うと言うちよつと変態じみた作戦だった。了子くんが言うには俺も神の力を耐えるだけの器があると云われたのだが正直あまりよく分かっていなかった。だが――

「これで響を元に戻せる」

? 俺はすぐに立ち上がって響のいる場所に走り始めた。……しかし、こんな作戦が上手く行くかどうかとも分からないが、そもそも響の弱点の場所を吸うということが出来るのだろうか? そもそも俺が見た限り響の弱点の場所なんて……ん? いやまてよ? 確か……

『りゆうくんそんなにガッツかないでもいいのに。そんなに私の胸の感触を味わいたいの? フツツ……また後でね? 今触られるとちよつと出ちやうから♡』

? 今触られるとちよつと出ちやう……出ちやう……いやいやいやま、まさかそんな訳ないよな? そんなことしたら変態どころか確実にアウトだよなツ!……嘘だろ。

「神の力が漏れてる場所って……ア、ア、ア、ア、アアアアアツツツツツ!!!」
? この瞬間、俺は神を嫌いになった。と言うより神の力を恨んだ。

「……探さなきゃ。そして……1つにならなきゃ」

？今の私は口も鼻も耳も体も全て本能のままに動いていた。いくら私が必死に抑え込もうとしても本能はただ、りゅうくんを愛してそれ以外は壊そうとしている。もう、嫌だよ。助けてよ……りゅうくん。

「りゅうくん……何処？りゅうく……みいつけた♡」

？気がつけば私はりゅうくんを見つけていた。きつと、りゅうくんもこんな私を嫌いになるし、またりゅうくんを傷つけるだろう。だから……私から逃げてッ！りゅうくんッ！

♪

「えー……マジでどうしよう。響の胸を吸うとか……もう変態じゃん」

？今俺は必死に頭の中で響の胸を吸うか吸わないかで葛藤しながら響を探していた。正直、了子さんの言った作戦を実行したくなかった。いや、普通に考えて幼なじみの胸を吸うやつがあるかッ！救い方が酷すぎだろおッ！

「やべえ……今すぐえ響に会いたくな」

「りゅうくうううんツツツツツ！！！！」

「ん？なツ！？ちよ、危なツ！」

「ああ……りゅうくんや……っつと見つけたッ！」

うこれでりゆうくんは私とずーっと一緒だよ。私とりゆうくんは死ぬまで永遠に——」
「悪いけど、響が絶対に俺を殺そうとせずに抱きしめてくれるのは分かった。これで俺は響に近づくことが出来た……が、頑張れ俺ッ！これは人助けだッ！響を助ける為だッ！今しかチャンスがないんだッ！お、俺の口を響のむ、胸にいいいいッッッッ！

「あむッ！」

「ッ?!えッ!り、りゆうく、あん♡ちよ、ちよつとりゆうくんにおおおお♡吸つちやダメえ♡」

「今は考えるなッ!今まで俺は何の為に生きてきたッ!今は考えるよりも吸うんだッ!思い出せッ!今までやってきたエロゲーの数々をッ!

「あつ♡ひあつ♡ふあああんっ♡り、りゆうくんっ、ん♡私の吸わなああああ♡だ、ダメえ♡コリコリやああ♡」

「?ただひたすらに手ではなく口と舌を動かせッ!恥じらうなッ!ただ響を助ける為に吸って、嘔んで、舐めまわして神の力を出すんだあああああッッッッ!!!」
「ダメダメダメッ!出ちやう♡出ちやうからあ♡このままだと、んひい♡本当に全部出ちや、あつ♡うううう♡」

「りりきッ!おれられつらいにへきひんほるからッ!もほにもぼっへくれえッ!」《訳:響ッ!俺が絶対に責任取るからッ!元に戻ってくれえッ!》

「ツ!?せ、せきにひいんっ♡あっ♡だめっ、りゆうくん♡、それ、ダメ、だつてばあ……
イツ……あああああっ♡」

?その瞬間、俺の口の中に神の力が流れていくのを感じた。それと同時に俺は頭の理解
が追いつかなくなり、意識がだんだん遠くなつていった。しかし、その前に俺はちよつ
とだけ思うことがあつた。

(なんか……懐かしい味だった)

彼は謝罪する

「……えっと、隆一くん？その……どんまい♪」

「……………」

「……了子くん、流石にあれはいくら俺でもフォロー出来ないんだが」

「し、仕方ないじゃないッ！まさか神の力が漏れてる場所が響ちゃんの胸とは思わなかったのよッ！」

「しかしだなあ……あれは正直いくら隆一くんが響くんの幼なじみだとしてもかなり精神的にくるものがあるからな」

「響を神の力から解放して2日後……俺は今、了子さんと司令と一緒に研究室にいた。

……いや、正確には目覚めてから俺が研究室から1歩も出たくなかったのが正しい。マジ響に会いたくない。俺、最低な男。クソ野郎……」

「ちよつと隆一くん聞いているの？」

「……………」

「……反応は無し、か。今の状態では面会すら厳しいだろうな」

「そうねえ……あ、いいこと思いついちゃった♪ねえ、隆一くん？」

「……………」

「響ちゃんの胸の味はどうだっ」「グフッ！や、めてください……お願いします……」あ、反応した」

「りよ、了子さん……今確実に俺のメンタルを砕きにかかりやがったッ！……なんだから、今久しぶりに人を殴りたいという衝動に駆られそうだよ。」

「……了子さん、あまりそれ以上言わないでくださいね？今本気であなたを殴りそうなんだ」

「じよ、冗談よ。だからそんなに右手に力を入れないで、ね？……ちよつとッ！本当に危ないからッ！隆一くん右手に神の力漏れてるからッ！弦十郎くん助けてッ！」

「……今回は了くんが悪い。諦めるんだ」

「俺が段々と了さんになじり寄っていると、研究室のドアが開いて誰かがやって来た。そこに現れたのはなんと装者全員がこの場にやってきたのだ。もちろんその中には響と未来もいて、俺はすぐ了さんになじり寄ることをやめて響達の方に向いてすぐに行動に移った。」

「響ッ！ほんつとに申し訳ございませんでしたあああああッッッッッ！！！！」

「うえッ!?ちよ、ちよつとりゆうくんやめてよお」

「これが……土下座デスか」

「かなり精錬された土下座だ……」

「俺がすぐに行つたことは響に対しての謝罪だった。いくら響を助けようとしたとしても女子高生の胸を吸うのは完全にアウトだったからだ。だから俺はただ響に謝罪し続けるしか無かつた。」

「マジすいませんッ！いくら響を助けるって言つても響の胸を吸うのは本当にダメでした。調子乗つてすみませんッ！生きていてごめんなさいいいいッッッッッ！！！」

「もうりゆうくんやめてッ！さつき、未来から怒られてこれで終わつたつて時に掘り返さないでッ！私が恥ずかしいからッ！」

「で、でも……」

「いつくん？」

「みみみ未来さんッ!? なななんでしょうかッ！」

「後で響と一緒にもう一回説教だからね？」

「み、未来……もう説教はこれで終わりつて「私、まだ終わりなんて一言も言つてないよ?」……はい」

「?そして、俺と響はその場ですぐに未来の説教が1時間程度続いた。そして、未来の説教が終わり、そのままため息をつきながら未来がある事を言った。」

「……で? いつくんはどうしたいの?」

「え? い、いや……どうしたいって……」

「責任」

「ッ!?!」

「響への責任はどうするの? そもそも女の子の胸を触るところか吸うっておかしいんじゃないの? 確かに響を助けてって言ったけど……違うよね?」

「ぐうの音も出ません。未来の言葉が正論にしか聞こえない……」

「……はあ。響はこれでいいの? 私はダメだって思ってるけど」

「わ、私は……」

「……なら来週、はっきりさせよう。私と響といつくんで」

「……分かった」

「? とりあえず、未来への説教が終わった後は何事も無かったかのようにみんなは接し始めた。しかし、俺はそろそろ覚悟を決めないといけない。この関係の最後を……」

(……修羅場)

(修羅場デス)

(ドロドロしてるわね……ドラマを見てるみたい)

(あのバカと未来が……いや、まあ何となくわかるが)

(これが三角関係と言うやつか)

(うーむ……やはり隆くんは色々と災難だな。いや、人災と言うべきか……)
(3人とも青春してるわね♪)

彼は告白する

「ねえ、いつくん？」

「な、なんでしようか未来さん……」

「いい加減、私と響……どちらがいいか決めて欲しいの」

「み、未来……」

「響も響だよ。今回で私も分かったの。本当ならいつくんは死んでもおかしくないほど酷い目にあつて……この先、何があつてもおかしくない。だから……いつくんの言葉で聞かせて」

「？ 現在、俺達は今俺の家の中で響、未来が座り、向かい側に俺が座る配置だ。……いや、流石に時間も合わせて3人だけで大事な話つて言つたらもう、アレしかないよな。」

「……えつと、今じゃないといけないか？」

「こうでもしないと絶対に引きずるでしょ？……私はどんな答えでもちゃんと受け止めるから」

「未来ッ！……それは」

「響ももう分かったでしょ？ 私、2人のあんな姿を見て耐えられなかったの……だか

らッ！……こうしていつくんにその答えを出して貰うの」

「きつと、未来は本気だ。正直に言えば、俺はまだその覚悟なんて一つも出来てないし、きつと響だつてそうだろう。でもここまでされて答えないのは一番ダメだと思つてゐる。だから……」

「……分かつた、正直に答える。だけど、俺はその答えに決して後悔はしてないから」

「りゆうくん……本気なの？私、まだ早いと思うけど」

「いや、俺も今回で流石に分かつた。だから正直に言うよ」

「本気なんだねいつくん……なら、私も準備するから」

「ああ。俺は本気だ……だから今ここで俺はッ！」

「響ッ！お前に告白するッ！（それじゃあ、いつくん婚姻届にサインして）」

「……………ン？」

「み、未来ッ！そんな、早すぎるよ……」

「ダメだよ響。こういうことはしつかりと外堀を埋めないとダメなんだから」

「……………ンンン？」

「で、でもおろ、私ドキドキしちゃつて……もう無理だよおッ！」

「大丈夫。私がちやんと見守つてあげるから……もし、響がいつく人を嫌いになったら

私が……「未来ッ！」なら響も覚悟して座るッ！」

「うう……はい」

?ンンンンンンンンンンンンンンンンンツ?!?!?!?

「ちよ、ちよつと待ってくれッ!てか、待つてくくださいお願いしますッ!ど、どう言うことだよッ!婚姻届?外堀?あ、ダメだ頭痛くなつてきた……」

「それじゃあ、いっくんそのままこの欄に名前を書いて……」

「あ、分かった。えつと、名前は赤間隆……じゃないわッ!」

?とんだノリツツコミをしてしまった。俺が訳もわからずに少しだけ落ち着いた後に状況をとにかく整理しようと考えた。……そうだそうだ、俺は2人の前で……いや、正確にはこれから響に好きだと告白する予定だったはずなのに、気がつけば未来に婚姻届を書かされそうになっていた……うん、やっぱりおかしい。

「ちよ、ちよつと状況を整理させてくれ……俺は今響に告白しようとしてたよな?」

「……そうだよ。いっくん」

「……なんか怒ってません未来さん?」

「そりや怒るに決まつてるでしょ。もし、他の女だったらいっくんを殺して私も死ぬ予定だったし……それに、私は響の親友だから好きな人と結ばれるなら応援したいの。……最悪、響に飽きちゃったら私が寝取ればいいし」

?……何かとんでもないことを言ったような気がしたが、それは置いて……そもそも

も何故婚姻届まで来てしまったのか、何故俺が好きなのが響だと分かったのか、それが一番聞きたかった。

「まあ、その……未来が俺のこと好きなのは嬉しいけど、俺は響が好きだしさ」

「ツツツツりゆうくんツ！」

「うわツ!? ちよ、響ツ！」

「えへへ♡りゆうくん♡」

「……響ばかりずるい」

「たく……でも、なんで俺が響のこと好きって分かったんだ？ 俺、数人程度にしか言っていないはずなんだが」

「あ、それならお父さんがお酒飲んでる時の愚痴で言っただけから」

「？ お義父さんかよ……一応1つは分かったけど、そもそも婚姻届はダメだろ。そもそもとしてこれはおかしいツ……いや、そもそもヤンデレの発想が俺に分かる訳ないか。」

「でも、どうして婚姻届なんて……」

「それはもちろんツ！ 私がりゆうくと結婚したいから……かな♡」

「……フツ、色々と過程をすつ飛ばしてるんだよねー」

「そうだね。いつくん……でも、私は愛人でもいいって思ってるの」

「未来はそのままの未来でいてくださいお願いしますッ！」

「ふふつ、冗談だよ」

「冗談に聞こえないんだよなあ……」

「?こうして、俺の……いや、今回の事件は本当に終わりを告げた。今回はまた捕まったり、眼鏡に会ったり、響が覚醒したり、俺が変態じみたことしたりと色々あったが、結果オーライだろう。でも、1つだけ違うとすれば……」

「えへへくりゆうくん♡」

「ん?何、響……」

「大好きだよ♡」

「……そうだな」

「?きっと、響との関係が変わったことだ……」

「あ、ちなみに俺、まだ17歳だから婚姻届出せないぞ？」

「えッ!? そうなのッ！」

「あー……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：。ちよつと忘れてた」

「……この先、前途多難だなあ……」

戦姫絶唱しない日常 『彼女達から映る彼』

？僕達は響さんに呼ばれて、とある家に集合していた。正確には隆一さんの家に集まっ
ていて、リビングで過ぎしていた。ここが……隆一さんの家なんです。大きいです。

「先輩の家に来るのは初めて……」

「でも、大丈夫デスか？勝手に入ったら怒られないデスか？」

「それなら大丈夫だよ切歌ちゃんツ！私達は合鍵持つてるから変なことしなかつたら怒
られないからツ！」

「それ絶対に隆一に許可貰ってないでしょツ！しかも、あなたさつきから隆一の服で幸
せそうな顔して……未来を見習いなさいツ！隆一が帰ってくるのを見越して晩御飯の
準備をしてるでしょツ！これが幼なじみと親友の差よツ！」

「……そ、そんなことないもんツ！私だつて未来がない時はやってるし、今りゆうくん
の彼女は私だもんツ！」

「だーツ！もう收拾つかねえじゃねえかツ！2人共いい加減にしろツ！」

「小日向、すまないが何か飲み物はないか？少し喉が乾いてな……」

「それなら確か冷蔵庫に冷たい緑茶があるので、それを入れますよ」

「皆さんとても楽しそうですね。僕はそう思いながら、出して貰ったお菓子を食べているとある事に気がついた。……そういえば隆一さんは何処に行ったんでしょうか？」

「あの、響さん。隆一さんは……」

「え？ りゆうくん？ りゆうくんなら今日は補習だからしばらくは帰って来ないかな」

「あいつは補習なのか？」

「うん。成績は大丈夫なんだけど……その、出席日数が足りないって」

「……確かに誘拐されて、本部でしばらくの間過ごししてたら足りないのも納得ね。彼は一応民間協力者だから仕方ないと言えば仕方ないわね」

「？ そう言ってマリアさんは少しだけため息をつけて緑茶を飲んでいると、ふと翼さんが皆さんに聞こえるようにあることを言ってきた。」

「……ふと思っただが、みんなは隆一のことをどのように思っているのだ？」

——バキッ

「つ・ば・さ・さ・さん……誰が何をオモツテルンデスカ？」

「ツ?! ちよつと翼ツ！」

「ご、誤解だ立花ツ！ 私はただ皆から見た隆一はどんな風に見えるのか気になっただなツ！」

「……そうですか。なら次からはちゃんと言葉を選んでくださいね翼さん。じゃないと

相手は勘違いしちゃいますから♪」

「あ、ああ……」

？あの時の響さんの目が凄く怖かったです……。で、でもッ！それは隆一さんが好きだから勘違いしてちよつと嫉妬したんですよねッ！すると、クリスさんが未来さんが持ってきたお菓子を口の中に入れてながら話し始めた。

「隆一のことか……あたしは隆一のことにはエロゲーオタクって印象がデカいな。隆一の奴出会う度にその話ばかりするんだよなあ……」

「クリスの口からそんな話が出てくるなんてな。驚きだ」

「流石のあたしも何回もその話をされたらな……」

「そうか。私の場合はそうだな……隆一はとても器用な人だと思う」

「真面目な回答が返ってきた。でも理由は？」

「かなり前の話にはなるが、隆一は手錠や縄を関節を外して抜け出していたからな。あれは流石の私も驚いた」

「……まともな話がほとんどないじゃない」

？すると、マリアさんはまたため息をついて頭に手を当てる。でも、僕も隆一さんとあまり関わることをしてませんでし、今度思い切って話しかけてみましょうッ！せつかくならキャロルと一緒ににお出かけしたいですッ！

「マリアはお兄さんのことどう思ってるデスカ？」

「私？私は……そうねえ、印象で言えば苦勞人って感じかしら？よく考えたら大体隆一が巻き込まれてる訳だし」

「そういえば……そうですね。大体それで暴走するのは響さんでしたし」

「そ、そんなことないよ調ちゃんッ！ね、みんなッ！」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「え、えつと〜……」

「……うう〜、後でりゆうくんに慰めて貰う」

「あ、響さんがいじけてしまいました。大丈夫でしょうか？」

「響は後でいっくんが帰ってきたら慰めて貰うとして……切歌ちゃんと調ちゃんはいいくんのことどう思ってるの？」

「ん〜そうデスね〜……あたしはお兄さんはお兄さんって思ってるデスよッ！」

「ふふつ、切歌ちゃんらしい。調ちゃんは？」

「私は、優しいちよつとエツチな先輩って思ってます」

「えつと……それはどうして？」

「先輩って結構私達のことよく見てるし、なんだかんだで響さんに色々さされてたり、したりとかその印象が強いからですかね」

「でも、それって一番原因を作ってるのは……」

？すると、未来さんがいじけている響さんを連れてきてニコニコしながら響さんに話しかけていた。……でも、未来さんが笑っているはずなのに笑っていないように見えるのはどうしてでしょうか？

「響ちよつとみんなでお話しようね♪」

「うえッ!?ちよ、ちよつと未来……落ち着こう、ね?」

「それは話が終わってからかなあ……」

「み、みんなッ!助け」

「あく疲れたく……ただいまって……なんでいんの?」

「ッ!りゆうくん助けてッ!」

「え、何と言うこと?てか、なんでみんな勢揃いして……まあ、いいや。未来、これちよつと剥いて貰えない?」

「えつと、いっくん私今から響に大事な話が……」

「今が旬の果物ばかりだから美味しいぞ。ほら、みんなも手伝ってくれ」

「果物デスカッ!調ッ!私達も手伝うデスッ!」

「そうだね、きりちゃん。未来さん行きましよう」

「……もう、わがままなんだから」

?すると、未来さん達はそのままキッチンに向かって行ってしまいました。隆一さん……凄いですッ!

「補習は終わったようね」

「ええ、一応早めに終わりましたから。後、響も離れて」

「えー……やだ〜♡」

「……たく、仕方ないな」

?そうして、隆一さんは響さんの頭を撫でる。その時、僕はふとその姿がパパの姿に見えたような気がした。……きつと気のせいですね。

「ふむ……やはり私も手伝い行った方が……」

「やめてくれ先輩」

戦姫絶唱しない日常『写真』

?とある日の日曜日、俺は今日は久しぶりに家の片付けをしていた。まあ、理由はマリアさんに「未来や響にやらせてばかりじゃなくてあなたもたまには片付けをしなさいッ!」つとわれて、久しぶりに奥の棚を片付けていた。……正直に話すと勝手に2人がやってるから俺がすることがほとんどなくなってるんだけどねッ!

「……ふう、こんなもんか。意外と隅々まで掃除されてるから楽だったな」

?俺は棚の奥の隙間や棚の下まで掃除をしたのだが、予想以上に2人が掃除していたので短時間で掃除は終了してしまった。改めて2人が家事能力が高いって感じたよ……

「さて、そろそろ3時になりそうだし、お菓子でも食べよつかなく……つてあれ?これは……懐かしいな」

?そう言つて、俺が手に取つたのは1冊の写真ファイルだった。その写真ファイルの表紙には『赤ちゃんく中学生まで』つと油性マジックで雑に書かれていた。多分親父だろうな……

「とりあえず中見てみるか。……うん、俺の赤ちゃんの時だわ」

?そこに映っていたのは赤ちゃんの時に変顔をしていた俺の写真だった。よく考えた

らこの時って大体1歳か2歳の時だったんだけど中身が小学生だったことを久しぶりに思い出した。……そういえば俺って転生者だったわ。すっかり忘れてた。

「確かこの時ってかなり神童とか天才って言われてたこともあったわー。でも、幼稚園からやばいって感じて普通に過ごして行こうって決めたんだったな」

？俺はそう言いながらファイルを次々に開いていくと、ある写真が目映った。その写真が幼稚園に入った時の写真で、映っていたのは泥だらけの俺と隣で楽しそうに砂遊びをしている響だった。

「まだヤンデレになっていない無垢な響だな。でも、やんちゃだったんだよなあ」

『りゆうくんツ！おうまさんごっこしよツ！』

『えッ!?お、おうまさんごっこ……』

『えつとね？わたしがうえでーりゆうくんがおうまさんなのツ！』

『い、いやあ……それはちよつと……』

『いくよ』

『え？ふぎゆツ！』

？……いや、やんちゃでも普通に考えたら危なかったわ。

「……よ、よしッ！小学生の時の写真でも見るかッ！」

？そして、俺はファイルの次のページを開いて、その写真に何が映っているか確認する。小学生の時に映っていた写真は幼稚園の時よりも様々な写真があり、特に3人と2人で撮ってある写真が多かった。

「やつぱり小学生になると写真も多くなるよな。俺って未来と初めて会ったのも小学生だったな」

『りゅうくんッ！私の親友を連れてきたよッ！』

『響。幼なじみだからある程度のこととは聞くけどさ……毎回俺のクラスに来なくてもいい気がするんだが』

『はいッ！この未来って子が私の親友なんだッ！これで私はりゅうくんみたいにぼっちゃやないもんッ！』

『え、え……その、小日向……未来です』

『話を無視された挙句にサラッと俺の心にダメージを与えてくるとは……やりたい放題だな。あ、赤間隆一です』

『じゃあッ！未来とりゅうくんもこれから昼休みに一緒に遊ぼッ！』

『話を聞きなさい』

「?……意外と俺って苦勞人? いや、まさかな……」

「……なんか中途半端で終わるのも嫌だし、もう少しだけ」

「りゆうくーん♪」

「ツ!? ひ、響。いつからそこに……」

「ちよつと前かな? もう、りゆうくん片付けしてたんじゃないの?」

「い、いやあ……久しぶりに写真ファイルを見つけてさ」

「あ、懐かし……りゆうくんは全部見たの?」

「いや、全部は見えないな」

「なら、一緒に見よッ!」

「え、でも掃除が……」

「後で私も手伝うからッ! 早く見るのッ!」

「……ハイハイ、分かったよ」

「? そうして、俺達は写真ファイルに入っている写真を見る。……俺と響と2人で。」

「あッ! 赤ちゃんの時のりゆうくんだ♡ 食べちゃいたい♡」

「そうだな……って今なんて言ったッ!」

戦姫絶唱しない日常『ハードプレイ』

「……すげえ久しぶりに手錠されたわ。いや、朝から普通は手錠とかしないんだけどさ」
「俺は今日……いや、正確には朝すぐ自分の手首に違和感があることに気がついてベッドから起き上がろうとしたが、両手足がガツチリと2重に手錠をされていて起き上がる
ことが出来なかった。」

「俺が何かしたか? いや、最近は響を怒らせることも何もしてないし、知らない女性からは常に離れることを意識して帰っている筈だが……」

「ベッドに横になったまま俺は、1週間ぐらい前のことを思い出しながら響に何かしたのか必死に考えたが、それらしい事は一切無かったと思う。てか、最近は学校とか了子さんの研究に付き合わされたりすることが多かっただけだしな……」

「何もしてないよな? なら、なんで……ってなんかさつきから変な匂いがするな」

「すると、俺の部屋のドアが開いた。そのドアを開けたのはもちろん俺が知っている彼女だった。まあ、響なんだけどね?」

「あ、おはようりゆうくん」

「おはよう響、朝からかなりハードなことしてくるな。俺、何かした?」

「りゆうくんは何もしてないよ？そもそも何かしたの？」

「いや、してないけどさ……なんで手錠されてんの？」

「それはりゆうくんが何もしなかったから……」

？俺は響の言っていることがあまりよく分かっていなかった。なぜ何もしなかったの
がわからなかったのか俺にはすぐには分からなかったが、響の行動で後々嫌でもその理由
が分かった。何故なら……響が俺の部屋のドアを閉め、突然服を脱ぎ始めたからだ。

「ッ!?ちよ、ちよつと響さんッ！服をなんで脱いでるんですかねえッ！」

「何って……もちろんりゆうくんとピーッ（放送・発言禁じられた音）する為だよ？」

「What?……いやいやいや、ちよつと待ってッ！何故そうなるッ！てか、なんで（自主
規制）なんだよッ！確かにそう言うのは家でやる奴だけ……まだ2ヶ月も経ってない
んだぞッ！」

「確かにりゆうくんの言う通り、まだ2ヶ月も経ってない……けど、りゆうくん1ヶ月の
間私に何かしてくれただ？」

？響にそう言われて、この1ヶ月間の事を必死に思い出す。確かに俺は何もしていない
が、響は付き合い始めてからかなりのスキンシップが多くなった傾向にあったことに今
更気がついた。

「確かに……何もしてないな」

ね?」

「ま、待てくれ……せめて落ち着いて話を……」

「そういえば私、この日の為に1週間も我慢したんだよ♡しかもこの部屋はお香を焚いてるからりゅうくんも私も興奮しっぱなしだよ?ほら、私の大事な場所……りゅうくんのXLを入れる為にいっぱい自分でピーツ（放送・発言禁じられた音）ピーツ（放送・発言禁じられた音）ピーツ（放送・発言禁じられた音）だよ?」

?響がなんか物凄く言っつてはいけないワードをたくさん言った気がするが、さつきから頭がクラクラして頭が回らなくなってきた……や、やばい。何とかして話の話題を変えなければ……」

「ひ、響……ちよつと、何か、飲む物を、くれ、ないか?」

「あ♡りゅうくんもいい感じに興奮してきたんだね♡でも、今部屋から出るとなんかちよつと嫌だし……あ、それなら……」

?すると、響は急に俺の顔に抱きついてきて俺の口に響の胸が押し付けられる状態になった。俺は何かかしてすぐに離れようとして顔を横にしようとしたが、ふと甘い味が口の中に入った。これは……まさかッ!?

「ん♡……やばい、ちよつと興奮し過ぎちやつてちよつと出ちやつた♡」

「ひ、響……これはまさか」

「うん、私の母乳だよ♡りゆうくんは胸を吸われてから力の副作用かな？そのせいで私……母乳体質になっちゃって♡毎回搾らないとすぐ胸が張っちゃって大変なんだよ？でも、りゆうくんにならないっばい吸わせてあげる♡」

「ぼ、母乳体質になっただとおツ!?あ、やばい……なんか……これ以上されたら理性がブツツンっていきそう……」

「……ひ、ひびき……も、もう……」

「りゆうくん♡私、もう我慢出来ないの……でも、りゆうくんも我慢出来ないんだよね♡手錠を外してから私といっばい獣みたいな（自主規制）しよ♡」

「?そう言っつて、響はすぐに俺の両手足の手錠を外して俺を解放する。よ、よしッ!これならまだすぐにッ!が、頑張れ俺の理^s」

「りゆうくんのアレで私の中をビュービューっつていっばい染めて欲しいな♡」

——ブツツン

「……響が悪いんだからな?」

「……りゆうくん?」

「響が泣いても絶対にやめないぐらいめちやくちやピーツ（放送・発言禁じられた音）ピーツ（放送・発言禁じられた音）してやるからな?」

「あつ♡りゆうくんっつてやつぱりDSだった、んぐっ♡んぐっ♡んぐっ♡んぐっ♡」

？そこからは俺はあまりその日の出来事を思い出さないようにしている。あれから俺は響とお互いの初めてを貰った後はひたすら励んだが……その、エロゲーの知識を使い過ぎるといけないってことだけは学んだ。……ただ、あれだけハードなことをしたのに
も関わらず幸せそうな顔をしていた響もきつと……うん、やめよう。……寝よう。

XV編

彼は寒いのが苦手

？あれから少しだけ時が過ぎ、俺は今も元気に当たり前の日常を過ごしている。少しだけと言っても、あれから数ヶ月が過ぎていたので長いのか短いのかよく分かっていない。……ただ、数ヶ月経過して確実に変わったことが世界では起きていた。いや、正確にはここは国ですらない。だってここは……

「さっぶいッ！し、死ぬほど寒い！！！！！！」

「……おい、大丈夫なのか？」

「無理無理無理無理無理イッ！お、俺はほ、本部に戻るッ！」

「エロガキ、そんなに寒い？私はオートスコアラードから体温も何もあつたもんじやないけど……あ、もしかして寒いのが苦手とか☆」

「当たり前だッ！しかも何で俺が……南極に来なくちやいけないんだよッ！ハ、ハック シュンツ！」

？そう、俺は今何故か南極に来ている。そもそも何故俺が南極に来る必要があつたのか……本来なら俺は日本で響達の帰りを待つ予定ではあつたのだが、響の提案によつて俺

も南極に来ることになったのだ。俺はもちろん寒い場所にも行きたくなかったし、学校の出席日数もやばいから断つたはずだったのだ。

「ま、別にいいだろ。それに一般人がなかなか来れる場所でもないしな」

「マスターの言う通りですよ☆でも、誘拐されそうだから近くで監視したほうがいいって上の判断で連れてこられた気持ち……どんな気持ち？ねえねえどんな気持ち？」

「こ、こいつ……ガリイは絶対にぶん殴つてやるとして、響達もそろそろ帰つてくるんじゃないか？」

「まあ、立花響は大抵の敵なら瞬殺だし、サンジェルマン達もいるから問題ないだろ……ん、引いてるな」

「あ、マスター早いですねえ。ついでに私も来ちゃった訳だけどエロガキは……あッ！まだ一匹も釣れてなかったんだ」

「よし……殴つてや「りゆうくんッ！」ダイナミックッ！……ひ、響……タツクルはし、死ぬ」

「えへへ〜ごめんね？でもりゆうくんに逢いたくてパパッと片付けて来ちゃった♡」

？俺がガリイに腹が立つてマジでぶん殴つてやろうかって時に響達が帰つて来た。もちろん響は俺に抱きつくように飛んできたので、いいタツクルを食らった。

「おいバカ、まだおっさんに報告がまだ終わってないだろ。早く隆一から離れて行くぞ」

「えー……ヤダ。私、もう少しこのまま……」

「ハイハイ行くよ響。りゆうくんとイチヤイチャしたいなら後」

「うえツ!? ちよ、み、未来ツ! 引つ張らないでッ!」

「……これは助かったのか? ……つてマリアさんお疲れ様です」

「隆ー……あなたも大変ね」

「まあ……慣れてますから」

「そうね。私も本部に行かないと……」

? そう言つてマリアさんは本部の方に向かつて行った。まるで嵐のようだったなあ……。俺はそう思いながら再び釣りを再開しようとしたが、キャロルとガリイがいないことに気がついた。ん? なんかポケットに紙が……

『エロガキへ。後始末よろしく☆』

「……………フンツ!」

彼はお世話になる

「……………」

「……………あの〜」

「……………」

「えっと、ちよつといいですか？」

「……………何だ」

「俺、家に帰りたいんですが……………」

「今、儂が貴様を直々に保護するのだ。行かせる訳にはいかん。もし、必要な物があれば儂の部下に用意させる。…………それ以外であれば貴様の家の物を部下達に持つてこさせるだけだ」

（……………マジ家に帰ってえ）

「？現在、俺は今風鳴家の家で翼さんのお爺さんと一緒に食事を行っていた。…………いや、よく考えて普通におかしいだろう。俺はついこの前まで南極にいて日本から帰って来たばかりだったのだ。しかし、帰って来てから次の日、司令から連絡があつて話を聞くと南極で見つかった棺がどうやら何者かの手によつて奪われたらしく、それが今の俺の

体の中にある神の力に繋がりがあある為に俺を保護し、しばらくの間過ごすことになった。

(でも、保護先が翼さんの実家って……大丈夫なのか?)

「……何やら不安そうな顔をしておるな」

「いや、不安って言うか……なんで翼さんの実家なのかなって思いました。それに、翼さんのお爺さんも毎回事ある毎に俺の近くにいますし」

「不逞の息子に任せるよりも儂の方が確実に守れると判断したまでだ。そんな心配をするなら貴様はその神の力を制御出来るようにせぬかッ！」

「ッ!?え、あ、は、はいッ!……ってなんで俺怒られてんの?」

?俺は何故か翼さんのお爺さんに怒られた後、に晩御飯を食べ終えた時にそのまま畳に寝転がった。その時にお爺さんにめちやくちや睨まれたが、これが俺のスタイルだったので譲らなかった。しかし……

「……この料理めちやくちや美味かったな……」

「当たり前だ。風鳴家に代々仕える料理人が毎日新鮮な食材で最高級の料理を作るのだ。そうでなければクビにする」

「そ、そうですか……」(こ、怖ええよッ!このお爺さんマジ怖ええよッ!)

?そうして、俺はしばらくの間お爺さんの目をなるべく背けながら過ごしていると、お

爺さんの方から俺に話しかけてきた。

「……赤間隆一」

「ツ!?びつくりしたあー……な、なんですか?」

「お主、世継ぎの娘はおらぬのか?」

「世継ぎ……ああ、響のことですか?まだそこまでは考えてませんけど、まあ付き合つてますし、お互いの将来がハッキリするまでは考えてます」

「……そうか。ならば近い内に翼とのお見合いを考えておけ」

「ああ、お見合いですか。……俺に死ねと?」

「片隅にでも考えておくといい……ではな」

? : そうして、翼のお爺さんはそのまま何処かに行つてしまった。……あのお爺さん一体何考えてんだ?

彼はライブに行く

？俺が風鳴家にお世話になり始めてから数週間が経った。その間、俺の周りでは何も起きなかったが、クリスの誕生日パーティーがあつたのでそれに行つた。みんなは誕生日プレゼントを色々を用意していてクリスは恥ずかしながらも喜んでいたが、響の場合は危なかつた……響はクリスの誕生日にマジでアメリカザリガニを何匹か獲つて行こうとしたので必死に止めた。……まあ、一応そのアメリカザリガニは外来種なので放流することも出来ないから食べるか。よし、鉄腕DOSHを見よう。そして現在俺は……

「楽しみだねりゆうくんッ！」

「ああ、でも響達は学校とか大丈夫なのか？」

「うんッ！りゆうくんがいるなら私は何処でもついていくよッ！」

「相変わらずなワケダ。しかし……大丈夫なのかサンジェルマンこいつらを連れてきて」

「問題ない。逆に今回はいてくれた方が助かる……始まるぞ」

？響、サンジェルマン、プレラーティ、カリオストロ、キャロルで翼さんとマリアさんのライブに来ていた。今カリオストロとキャロルは屋台の方で何か買いに行つていて

いないが、響以外は俺の護衛……との事だ。まあ、キャロル以外は別の目的で俺の護衛に入っているらしいが、なんだろう……護衛が強くなってる感じが……

「ただいま。買ってきたわよ♡はい、サンジェルマンとプレラーティの分」

「ありがとうカリオストロ」

「これが隆と立花響の分だ」

「あ、キャロル。ありがとう」

「別にいい。……そろそろ始まるぞ」

？すると、ステージの照明が暗転して2箇所スポットライトが集中する。そこに現れたのはライブ衣装を着て歌い始めた翼さんとマリアさんだった。おお……これがライブか。

「キャーッ！翼さんッ！」

「ッ!?び、びっくりしたあ。そういえば響は翼さんのファンだったこと忘れてたわ」

「……ファンって何だ？」

「あらキャロル長く生きていてライブのファンのことも知らないのお？」

「貴様……オレに喧嘩を売っているのかッ！」

「シッ！静かに」

「……………」

(い、今響の目がマジだった……これがファンか……)

? そうしている内にライブのボルテージは最高潮まで登ってゆく。俺も翼さんやマリアさんのライブを見てかなりテンションが上がって見ていたが、サンジェルマンとキャロルはブツブツと何かを言いながら錬金術を行使しながら周りをキョロキョロと見ていた。何してんだろ?

「最近、オレが作ったアルカノイズを使う奴が多いからな。下手にアルカノイズが多数で襲ってきたら困る」

「それでこの錬金術か……確かにこれは幹部並の知識がなければ難しいな」

「最悪立花響がいるから問題はないが……用意するに越したことはない」

? 2人が何をしているか分からなかったが、そうしている内にライブの最初の曲が終わろうとしていた。……まあ、そんなことはどうでもいいか。今はこのライブを楽しもう。スウー……

「翼さんッ! マリアさ」

「りゆうくん? 今何を言おうとしたの?」

「ヒツ……お、応援してるだけだろ……ハハ」

「……そうだよねッ! 翼さんッ! マリアさんッ!」

(……響にも注意しなければ)

♪ 「ど、どうしてなんだぜツ！なんでアルカノイズがでてこねえんだよツ！……あの爺さんに命令されたのにこれじゃあ意味ねえじゃねえかツ！」

彼は誘拐されていた

？ライブが終わり、俺はその後特に襲われる様子もなく風鳴家で過ごしていると、ある出来事が起きた。いや、正確にはいきなり翼さんのお爺さんが部屋に入ってきてびっくりにしただけなんだけど……

「赤間隆一、ついてこい」

「え？いきなり？俺、今からエロゲーの攻略を……」

「早くこい。異論は認めぬ」

「ア、ハイ」

？俺はそう言われて高そうな黒い車に翼さんのお爺さんと一緒に乗って何処かに連れて行かれ始めた。今までお爺さんはこんなことはして来なかったので、違和感はものすごくあり、正直めっちゃソワソワした。考えてみる？普通いくら翼さんのお爺さんだとしてもこんなに接近することってないだろ？

「……えっと、今から何処に行くんでしょうか？」

「……………」

「あの一……………」

「……………」

(だ、ダメだ。車に乗ると無口になる奴や……)

? そうして、車の中でしばらくの間沈黙が続いていると車が急に止まった。周りを見るとうとうやらよく分からない施設っぽい場所に着いたようだった。

「……………逝くぞ」

「え? 降りるの? ……つて何ッ!? ちよ、やめ、離せッ!」

「連れてゆけ……………いいな?」

? すると、俺は降りた瞬間に黒服の人達に手錠とアイマスクをされて何処かに連れていかれる。俺は今何が起きているのか全く分からないまましばらく歩かされると、歩くに連れて段々女性の声が聞こえてきた。

「例の物は何処だ」

「ここに……………」

「ならば早く起動させよ。時間はあまりない」

「分かっている、ツ……………」

「ヴァネッサッ!」

「大丈夫でありますかッ!」

「……………大丈夫よ、すぐ終わるわ。お姉ちゃんに任せなさい」

? どうやら、その女性は3人いることが分かる。声から考えるに、多分姉妹が翼さんのお爺さんに脅されてるのだろう。……あれ? これもしかしてもう攫われちゃったパターンですか? てか、手錠もされてるし確実に誘拐じやないですかヤダーツ!

「七つの星——繋ぎ——」

「これで護国を守る術は完成する……これだな」

「本当にこれで人間に戻れるでありますか?」

「分かんないんだぜ……あの男が本当に神の器なのかも疑問だからな」

? ……何か言われている気はするが、何か機械の音が大きくなって聞き取りにくくなってゆく。今から一体何をされるのか、どうなるか分からないと思っていた時に突然——

「ツ!? 伏せてツ!」

「ん?」

? その瞬間、ものすごい音と共に激しい衝撃波を体で感じた。アイマスクで外の様子は見えなかったのだが、これだけは分かった……爆発だ。しかし、その衝撃波は当たりはしたが、俺を吹き飛ばすほどではなく、強いて言えばその衝撃波でアイマスクが取れたことだった。その時、俺が見たのは……

「フン、生ぬるい……」

? 衝撃波をかき消していた翼さんのお爺さんの姿だった。……化物過ぎませんか?

「ゴホツゴホツ……み、みんな大丈夫？」

「ゲホツゴホツ……エルザ大丈夫か」

「だ、大丈夫であります……」

？ 周りを見ると、そこにいたのはさっきの声の主である姉妹の姿だった……ん？ あれ？
ケモ耳に羽に取り外し可能な手？……お、俺は今ファンタジーの世界でもいるのかッ！
特にあの子やばすぎないかッ！

「ふむ……腕輪は起動しとるか。ならば——」

「ッ！ 訃堂ッ！ まだ腕輪の確認が——」

？ 俺がケモ耳の子を気にしている時に翼さんのお爺さんが俺の腕に腕輪を付ける。あ、
なんか久しぶりの感、覚——

彼は神様に出会う

「……………んう…ハッ！……………ここは……………」

？俺が目を覚ますと、そこに広がっていた世界は白い空間の世界だった。多分、この世界はきつとあのネフィリムと同じような世界なのだろう。ただ、1つ違う点と言えば……………

「あれ？動けな……………え？何この下から伸びた黒い奴。てか、身動きとれねえッ！」
？何故か精神世界で身動きがとれない状態だったからだ。俺は急いでその黒い何かを剥がそうと必死にもがいたが、少しだけ時間が掛かりそうだった。よくよく考えれば、こういったロープ的な物で縛られる状態は何度もあつたので時間さえ掛ければ俺にとつては容易なことだった。

「響よりも縛るセンスは高いようだけど……………趣味は悪いな」

「我に美がないとでも？」

「だって黒って悪趣味じゃ……………って誰ッ!？」

「我か？我が名はシエム・ハ。アヌナキの人柱にして——」

「あ、そう言った厨二的な発言はいいで」

「……貴様、余程我を怒らせたいううだな。遺憾である」

「気がつけば、俺のいる精神世界の中には知らない女性がそこには立っていた。名前はシエム・ハと言っているが、普通そんな名前の人はあまりいないので仮の名前的なアレだろう。うん、分かるよ？ 厨二病を患ってからなかなか抜け出せなくて、たまに困ったら急に慌てて出ちやう人。

「厨二病……なんだそれは？」

「厨二病って言うのは……ちよつと今人の心勝手に読みました？」

「肯定。今我は貴様の体と精神が繋がった状態である。神たる我の器となったことを喜ぶがいい」

「へー……神かー……」（あー……そう言う設定なのね）

「我を愚弄するか人間ツ！」

「あ、そういえば心読まれてるんだったわ」

「俺はそんなやり取りをしながら何とか抜け出そうと体を動かしていた。しかし、何故この神……確かシエム・ハさんが現れたのが疑問だった。だって俺は翼さんのお爺さんに腕輪をつけられただけで……あ、それが原因だわ。」

「しっかし……毎回巻き込まれてんなー、俺」

「それは貴様の運命がそうであるからだ。いつ如何なる時も貴様の未来はそうやって過

「ごしてきた」

「え、何そのいらぬ情報。それに俺の運命を勝手に決められても……」

「貴様はこの世界の人間ではない。我はそれを知っている」

「ツ!?なんで知ってんのツ!」

「貴様の記憶を見た」

「いや普通かツ!つてあ、なんか黒い奴解けた」

「ツ!?我の束縛から逃れただとツ!……いや、貴様なら容易か」

「俺はやつと体が動かせるようになったので、思いっきり背伸びをする。……しかし、シエム・ハさんはまさか俺の前世がこんな簡単にバレるとは思っていなかったの、ちよつとドキドキしながらシエム・ハさんを見ていた。てか、何か俺にしてくる様子もないし、何がどうなってるんだ?とりあえず……」

「あの、シエム・ハさん」

「……人間ごときが我の名前を呼ぶか。遺憾であるぞ」

「勝手に入ってきてこの言われようはどうかと思うけどさ、そろそろ現実に戻りたいんだだけど……」

「無理だ」

「そうかそうか。無理か……なんで?」

「我が乗っ取りたいのが山々だが……今は我と貴様の意識はこの世界に閉じ込められた
ままだ」

「物騒だな。……つてえ？俺の体使っていないの？なら誰が俺を操ってるの？」

「我にも分からぬ。ただ、1つ言えることは……」

「言えることは？」

「体の意識を誰かが戻さない限り我らはこの世界から一生出られないだけだ」

彼は彼ではない何かがいる

？私達とはある場所で高エネルギー反応を確認されたので、そこに向かって急いでヘリを向かわせていた。私は、翼さんクリスちゃん、未来と一緒にヘリに乗っていて、マリアさん、調ちゃん、切歌ちゃんはもう一つのヘリに乗って向かっていた。

「もうすぐ目的地だ。叔父様から言われたことは分かるな？」

「ああ、今回奪われた聖遺物の回収とノーブルレッドの捕縛だろ？だけどよお……」

「響……いっくんから連絡がまだつかないの？」

「うん……もしかしてまた……」

「誘拐されたかもしれないと言うことだな。しかし、隆一を守っているのはお祖父様だ。問題は無いはずだ」

「先輩がそれだけ言うってことは……おっさんよりも強えのか？」

「……ああ」

？そんなやり取りをしている間に段々とその目的地が近づいてきた。しかし、その目的地からはものすごい衝撃波が何回もヘリを襲ってきて、これ以上近づけなかった。

「すいませんッ！これ以上は無理ですッ！」

「……分かりました、皆すぐに準備してくれ」

「翼さん準備するって……まさかッ！」

「ああ、ここで降りる。そちらの方は？」

『大丈夫聞こえてるわ。降りたら目的地で合流でいいかしら？』

「ああ、マリアそれで大丈夫だ。それでは皆ゆくぞッ！」

「二はい（ああ）ッ！」

？そして、私達はへりから降りてシンフォギアを纏い、地面に降りると共に体制を整える。体制を整えた私は一体周りを見て未来達がちゃんといるかどうか確認した。

「皆、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ先輩」

「私も大丈夫ですッ！」

「私も問題ありません。翼さんは……」

「私も問題ない。ではゆくぞッ！」

？私達は翼さんを先頭にその目的地に向かう。ただ、私は段々その目的地が近づくにつれてりゆうくんの匂いがしてきたことが分かり、私は走る速度を上げる。

「ッ!?!どうした立花ッ！」

「向かう先のポイントにりゆうくんの匂いがするんですッ！私、先に行きますッ！」

「おいバカッ！ 勝手な行動はッ！」

「響ッ！ ま——」

？ 私はそれ以上話を聞かないで急いでその目的地に全力疾走で向かう。だが、その目的地が近づくに連れて衝撃波は数を増し、威力も段々強くなつて行くのを感じた。

（待つててッ！ りゆうくんッ！）

？ そして遂に、私はその森を抜けて目的地であつた場所に着く。周りは爆発によつてかほとんどがボロボロになり、人がいる気配はなさそうに見えたが、その真ん中で激しい戦いをしている2人の人がいた。ただ、その内の1人の男性を私は知っている。その姿はまるでボディビルダーのような体をしていて髪は自身の破けているズボンぐらゐに長い、その人が誰なのかがすぐに分かつた。あれは……

「貴様ッ！ なにゆえこの儂に拳を振るうッ！ お主はこの国を守護することだけが貴様の

——」

「黙れ老いぼれジジイ」

「ぐふッ！ ……き、貴様」

「どうした？ 刀がなければただのジジイか？ 笑えるな」

「貴様ッ！ この儂を愚弄するかッ！ ハアッ！」

「ガハッ！ ……いい拳じゃねえかジジイ。だが、俺はそれ以上の痛みを何度も味わつてき

彼はドSである

「ん？あ、響じゃん」

「りゆう、くん……なの？」

「当たり前じゃん響。もしかして俺のこと忘れちゃった感じ？」

「わ、忘れる訳ないじゃんツ！で、でも……りゆうくんは……」

「？そこにいるのは確かにりゆうくん。姿は少し違えど、私の愛する彼だつてことは分かる。……ただ、りゆうくんは私の知っているりゆうくんじゃない。」

「ん……ああ、もしかしてもう一人の俺のこと言ってる感じ？」

「もう一人の……りゆうくん？」

「そうそうツ！もう一人の俺だよツ！いやあく自我が芽生えるといいこともあるもんだよツ！言ってしまうえば二重人格的な？」

「？そう言っているりゆうくんには私は理解がまだ追いついていなかった。りゆうくんは一体何を言っているの？それじゃあ、私の知っているりゆうくんは——」

「話聞いてんの、響？」

「ツ！」

「私がそんなことを考えている内にりゆうくんがいつの間にか私の目の前まで近づいていることに気がつかなかった。よく見たらさつきまでの傷も既になくなっていて、りゆうくんは私の目を見たまま話し始めた。」

「響は……ああ、多分まだ理解が追いついてない感じかな？」

「う、うん……でも、りゆうくんなんだよね？」

「確かに俺は赤間隆一だ。ただ、1つだけ言えるとすれば……俺は欲望の塊だ」

「欲望の、塊？りゆうくんに限ってそんなッ！」

「俺に欲望がないって？何言ってるんだよ……俺だって人間だぞ？あ、今はただの名無しの神だけだな」

「りゆうくんはそう言いながら私の頬を撫でてから、いきなり私の口に指を突っ込んできた。すぐに私はその指を抜こうとしたが、何故かうまく力が入らないでりゆうくんの指が私の口の中で暴れていた。」

「や、やへてえ……り、りゆうくん……」

「うんうん♪やっぱり今日の響も最高に可愛いよ……でも、まだ足りない」

「た、たりなひつて……んぐツ!?んっ……ちゅ、あ♡り、りゆうく……んくっ♡」

「私はそのままりゆうくんにいきなりキスをされる。すると、私の体にはどんな力がなくなっていくって、私の知らない何かが込み上げてきているのが分かった。……あれ？」

なんでこんなにゾクゾクして、キョクキョクしちゃうの？知らない……私はこんな感覚は知らないッ！

「ぶはあ……はあ、はあ……響、最高にエッチな顔してるなッ！」

「り、りゆうくん……にや、にやにをしたの……♡」

「何って……勿論響の躰だよ、し・つ・け♪」

「ふえ？」

「分らない？そりや今まで散々響に付き合わされてばかりだったからなく。今度は俺が支配する番なんだよ」

「や、やめようよッ！こんなこと……」

「響、シンフォギアを解除しろ。そして俺にもう一度キスをして服従するんだ」

「ッ……!？」

？この時、私はりゆうくんの言った言葉に逆らえなかった。いや、逆らえれなかった。いや、思い出したと言った方が正しいのか分からないが、あれは……あのりゆうくんには私は絶対に逆らえないからだ。ただ、それでも私には疑問があった。

「……よし、シンフォギアを解除したな響。なら、俺ともう一度キスしよう……ただ、次俺とキスをすればもう戻れなくなるからな」

「……1つだけ、聞いてもいいかなりゆうくん」

「なんだ？」

「りゆうくんはどうやって生まれたの？」

「生まれたってのは俺が生まれた日か？それとも……」

「ううん、今のりゆうくん」

「ああ、俺か。俺が生まれたのは……もう1人の俺と響がアレをした時だよ。あの時、ブツツンって切れた瞬間俺と言う欲望の塊が生まれたんだよ。だから分かるだろ？俺を知らなくても、響の体は覚えてる……そうだろ響？」

「ああ、やっと分かってしまった。その時に私の体はそれ以上の期待と高まりが私の抑制心を上回っていた。これは無理だ。このりゆうくんは言わばDSりゆうくんなのだ。だから、私はもう逆らえないし、逆らうことも出来ない……何故なら私は……」

「さあ、俺とキスをしよう響」

「あつ……」

「？既に私の体はりゆうくんと愛し合う度に……体も心も……」

「んあつ、んちゅつ♡んふうつ、はむつ、んんっ♡れろつ、んん♡……ぷはあ……はあ、はあ……」

「……いい顔してんじやん響」

「……しよ、しよんなことらいもっ♡」

「ならもう一度……」

「響イイイイイツツツツ
!!!!!!」

彼は名無しの神である

「あつぶねッ！」

「大丈夫響ッ！」

「え？未来？」

「おいおい酷いな未来。俺を攻撃するなんて——」

「せい（ちよせえ）ッ！」

「ッ!？」

？俺が響を躡ようとキスをしようとした時、それを未来が邪魔してきた。俺はすぐに響と未来を捕まえようとするが、それを翼とクリスが俺の邪魔してきた。

「響ッ！今は翼さん達に任せて逃げるよッ！」

「で、でも私は……」

「いいから早くッ！」

「ッ……悪いけど逃がさ——」

「はあ（デス）ッ！」

？何とか俺は翼とクリスに反撃して吹き飛ばした後ですぐに響と未来を捕まえようと

した時に今度は調と切歌が俺の邪魔をしてきた。

「調ちゃんツ！切歌ちゃんツ！」

「早く行つてくださいッ！」

「今お兄さんは響さんを狙つてるデスッ！今のうちに行つて欲しいデスッ！」

「あー………すげえ邪魔ッ！……あ？」

？俺の邪魔をしている2人に対して、俺はすぐに翼とクリスと同じように吹き飛ばそうとするが、それをムチのような剣が俺の体を拘束してきた。これは、そうかアガートラーム………つてことはマリアか。

「悪いけど逃がさないわよ隆一。………とは言ったものの、なんて言えばいいかしら？」

「黒一でもいいんじゃないやね？アイツの裏的なポジションだし。てか、話聞いてた感じ？」

「ええ、それはもうさっきの会話はバッチリと。だから………早く隆一の方を返して貰おうかしら？」

「神に勝てると思つてんの？ま、名無しだけどな」

「いいえ、今回は退散させて貰うわ。………だつて貴方世界滅ぼしたり出来ないでしょ？」

？その言葉に俺は少しだけ驚いた。実際、マリアの言う通り俺は世界を滅ぼそうとか世界を支配したいとか一切考えてなかった。やはり、それはオリジナルがそもそもそんな考えがなかったからだと思うが、それでも俺には目的があった。

「……確かに俺はそんなことはしたいとは思っていない。てか、よく分かったな」

「当たり前じゃない。そもそも隆一にそんなこと考える暇がないじゃない」

「あー……確かに。でも、俺にも目的があるからな。いずれはマリア、お前も俺のものにする」

「それは何故かしら？そもそも貴方は響と恋仲じゃないのかしら？」

「確かにそれはあるが、俺にも譲れないものがあるからな……だから早く行けよ。俺はそのケモ耳とヴァンパイアと機械女を連れていくから。じゃあな」

「俺はそう言つて、そこで気を失っている3人を持ち上げてとりあえず北に向かう。その時、クリスが俺に対して銃口を向けていたがそれを翼が止めていた。まあ、普通以後のこと考えたらやらない方が身のためだよな。……さて。」

「この3人をどう俺好みの女にしようかな♪まず人間に戻す所から始めるか」

「俺はこの3人をどのように変えていくか考えながら移動を続けていた。……そういうえば、オリジナルをなんかよく分からん神と一緒に閉じ込めてるけど、何してんだろ？……ま、いつかつ！」

♪

「……どうよう？」

「知恵が足りぬ。すぐに我が優勢になる……ここだ」

「うわっ、チエツクメイトじゃん。負けたく……しかし、精神世界って考えたもの何でも出てくるだな。ちようど暇も潰せるし」

「もう一度やるぞ。我に勝てるまでせいぜい付き合え」

「あれ？それ俺のセリフじゃね？」

彼は信用されている

「……この状況に子くんはどう思う？」

「どうって……かなり厳しいわね。隆一くんの性格が変わって裏の人格？が出てくるなんて思うなかつたし、私はてつきり——」

「てつきり……なんだと思つたんだ？」

「……何でもないわ。それより今はこの子達よね」

？あの日、隆一くんが消えてから4日が経過した。私はあの時、隆一が付けている腕輪……あれは本来あの方の未来を否定し続けたもう1人のアヌンナキの1人シエム・ハが付けていた物だ。本来なら隆一くんはシエム・ハに関連したことが起きる筈なのに、彼は私の予想以上のことばかりを起こしてきた。けれど今回は……

「立花ツ！何を言っているんだツ！」

「確かにその方が確実性があるけどよ……でも、お前の気持ちはどうなんだよツ！アイツを助けないんじゃないのかよツ！」

「……私だつて、私だつて助きたいよツ！でも……でも……でもツ！私は……りゆうくんにこの拳を握ることは出来ない。それに、みんなは私とりゆうくんとの会話を聞いたでしょ？」

もし、私がみんなと一緒に戦ったりしたら今度こそりゆうくんの言う通りに動くから。そんなの私が1番よく分かってるよ……」

「響……」

？状況が状況でかなり難しい所まで来ていた。響ちゃんが今回隆一くんを助ける為に戦闘に参加したと考えると、今回の異変はかなり危機的状況に陥ることが分かるからだ。今までは響ちゃんがヤンデレで隆一くんのことを思っているからこそピンチを救ってきたとも考えられる。しかし、今回の黒幕……いえ、ラスボスと言った方が正しいかしら？そのラスボスが隆一くんなら響ちゃんは戦闘面ではかなり弱くなるし、隆一くんの駒として扱わせられる可能性があったからだ。……本当に今回は難しいわね。

「……司令、貴方はこの状況をどう考えるのかしら？」

「そうだな……やはり、今回の任務は響くんの投入は難しいと考えてもいいだろう。だが、そう考えると神への……いや、隆一くんの対抗手段も少なくなりかなり厳しい状況になるだろう」

「な、ならキャロルかサンジェルマンさん達に何とか出来るように頼めませんかッ！そうすれば……」

「それは無理だ」

「ッ！キャロルッ！どうしてッ！」

「神がどういふものなのかの情報が少ないし、何よりも圧倒的に材料も人材も足りないからだ。エルフナイン……錬金術は等価交換で成り立つんだ。お前も分かるだろ？」

「……はい」

「確かにキャロルの言った言葉は正しい。神について詳しく知っているのは私以外にはもういないだろう。そんな中で未知の神に対しての対抗策を考えろと言われても難しい話だろうな。」

「じゃ、じゃあどうすればお兄さんは救えるデスカッ！」

「きりちゃん……」

「切歌、落ち着きなさい。それはみんなが……何よりも響がそれを一番よく分かっている筈よ」

「すると、マリアちゃんが切歌ちゃんを落ち着かせてそのまま頭を撫でている。私も昔に怒りで我を忘れていた時によく撫でてもらったわね……あら？確かその時に……ッ！そうだわッ！この手があったわねッ！」

「ちよつといいかしら弦十郎くん」

「……どうしたんだ了了くん」

「救える方法なら一っただけあるわよ」

「ッ!?!本当か了了くんッ！」

「ええ、ただその為にはとある必要な人材がいるわ」

「人材？心当たりはあるのか？」

「勿論よ。ただ、彼が隆一くんを助けるかどうかは分からないけどね♪」

彼は見てしまう

「あー……ひーまー……」

「……人間、墮落に床に転がりながら時間を潰すのはいい。だが、我の方に近づくな、遺憾である」

「いやだつて大体色々な遊びをやったじゃん。てかさ……本当にやることがないからさあー……あ、今から膝の毛でも数えようかな？」

「時間を潰すことに意味を見出そうとするな。しかもなんだ？その果てしない地味なことをしようとしている」

「俺は翼さんのお爺さんに腕輪をつけられて以来、この精神世界の中に閉じ込められていた。そして、俺以外にもシエム・ハと言う女性が俺の精神世界と一緒に閉じ込められていたのだが、彼女はどうかやらアヌンナキの柱の一人と言う訳なのだが、よくよく考えたらこの世界何でもアリだから今更かつて思う。」

「にしても、本当にやることないなこの空間。娯楽と言つても精神世界で生み出したすごろくとかけん玉とか古典的な物しか使えないしな」

「それはお前の想像力の問題だ。……強いて言うならばどんなにいいものでも使い方や

作り方が分からなければ難しいだろう。それと一緒だ」

「へー、何でも知ってるんだな」

「別に大したことではない。……だが、退屈なのは確かではある」

「まあ、やることほとんどやったしなあ」

「考えてみたらこの精神世界では本当に昭和に遊ぶような物ばかりで遊んでいた。なので、その遊びばかりしてくと段々現代でよくある遊びをしなくなってきた。あー……エロゲーしたい。せめてゲームかテレビでもあればなあ」。

「テレビ？ おい人間、テレビとはなんだ？」

「サラッと人の心を読まないでくれますかねえ。テレビといえば、遠くの人の見ているものを撮影して、編集した後映し出すもの、かな？」

「……水晶玉のようなものか」

「水晶玉って占いかでよく使われる奴だよな」

「占いではない。正確には相手の記憶媒体を映し出すものが正し……おい人間、今から水晶玉をこの精神世界の中で作れ」

「え？ あ、はい」

「すると、シエム・ハが俺に対してこの世界で水晶玉を作れと言われて、言われるように水晶玉をこの精神世界で生み出した。すると、その水晶玉をシエム・ハが手に取り、何

かし始めた。

「えっと……何してんの？」

「これで外がどのような状況になっているのか確認する。精神世界の水晶玉とお前の肉眼を連携させてどのような事態になっているのか確認する」

「え、そんなこと出来んの？」

「我を何だと思っている。神なら誰でも出来る」

「そんなことを言いながらシエム・ハは水晶玉に映像を映し出そうとしている。……何故だろうか、さっきの言葉と同時にドヤ顔したような風に感じたのは気のせ——

「我はドヤ顔などしない。次に変なことを考えれば消し去るぞ」

「あ、はい……すみません」

「普通にも心の声が聞かれてたようだ。……お？水晶玉に段々何か映し出されて——

『は、恥ずかしいでありますッ！こ、こんな格好……』

『うんッ！最高ッ！やつぱりいいわー。エロゲーのシーンに出てたこの学生服のケモ耳女の子……うわ、マジで可愛いッ！とりあえず写真100枚だなッ！』

『エルザになんて物着させてるんだセッ！しかもあたしの服もこ、こんな……露出が高すぎって写真を撮るなああああああッッッッッ！！！！』

『いいじゃんいいじゃんッ！異世界シリーズではよくある奴だから問題なしだッ！ほ

らッ！クビレのラインがいい感じエロいッ！」

『私は……なんでメイド服なのかしら？これは貴方の趣味なの？』

『まあ、趣味だな。いや、普通に考えて褐色系お姉ちゃんかメイド服姿つてめちやくちや
やば——』

「喰らえ超必殺飛鳥文化アタックッ！」

「ッ!?き、貴様何を——」

「何も見なかった……いいね？」

「……………」

？その後、俺とシエム・ハはしばらくの間沈黙が続いた。……うん、これは絶対に自分の体を取り戻さなければッ！

彼は赤間隆一である

? 昔から欲が無かった。

? これは俺が……いや、正確にはオリジナルが元々欲が無い人間だった。だから、俺達はこの世界に転生してから何か自分が欲する欲があると思つてこの世界で生きて行くと思つた。

? 最初は幼なじみの響に対してはそれなりにドキドキしていた。……まあ、実際に俺達が女性と話す機会なんてなかなか無かったから当たり前なのかもしれないが……でも、それを欲するとまでは行かなかつた。

? そして、時が経過して未来とも出会つて気がついた時にはいつも一緒だった。その時は毎日2人にドキドキしながら過ごしていたことを思い出すよ。……だけど、それでも自分が欲しいと思うまでは行かなかつたんだ。

? だけど、小学生の時の誕生日。俺は2人にあるプレゼントを渡されてその中身を見た。2人は間違つて渡したと言つていたが、この渡したプレゼント……ぶっちゃけて言つたらその中身はエロゲーだったのだが、当時の俺はこれをプレイしてドキドキが止まらなかつた。エロガキと言われても仕方なかつたのだが、俺はそのエロゲーをやつた

ことに後悔はしていなかった。だってそれは……俺が求めていた欲だったからだ。

♪

「……………ん？ああ……………俺としたことが、ちよつと寝てたわ」

？俺はベッドから起き上がって周りを見る。一応ここは使われていない廃墟を改築して使っていたのだが……………その部屋は下着にコスプレの衣装等様々な物が置かれていた。

「……………くすぐつたいでありますう」

「すう……………すう……………」

「人間に……………やつと……………」

「寝てんのか……………まあ、いいや」

？結局、俺は彼女達3人に対してコスプレやら写真など色々なことをしたのだが、彼女達に手を出すことまでは出来なかった。……………本来ならオリジナルではなく俺の夢のエロゲーの再現を色々やつては見たかったのだが、やはり俺も赤間隆一で響を裏切れないらしい。……………だから俺は——

「やっぱり響を強制的説得するしかないよな？……………さて、いくか」

？そうして、俺は彼女達を置いて響達を迎えに行く。別に彼女達は逃げてもいいのだが、もう人間に戻っているので身体能力も下がり、一般人に持っているで逃げることも難しいだろう。そして、しばらくの間響達を探しているとフォニックゲインが集まっ

ている場所があることに気がついた。……きつと俺をおびき寄せようとしているのだらう。……まあ。

「響を捕まえる為に頑張りますか♪」

？俺はそのまま響達がいる場所まで飛んで向かう。例えキャロルやサンジェルマン達が出来ても問題は無いと思うがまあ大丈夫だろう。……そろそろ見えてきたな。それじゃ――

「始めますかッ！」

？俺はそのままフォニックゲインが溜まっていく場所に向かって突っ込もうとした時に誰がいるかを確認する。そこにいたのは響と未来を除いたシンフォギア装者が知らないギアを纏ってここに敵対していた。

「皆、構えろッ！」

「なんか知らないギア纏ってるね。もしかしてそれが俺対策？ハッ、笑っちゃうね」

「なら」

「試してみろよッ！」

？すると、マリアの右腕のドラゴンとクリスの矢が俺に向かってくる。……これはカウナーかな？

「ほれ」

「……くっ、やはり私と隆一では力が違い過ぎて押し込めないか」

「ツツ吹き飛ばえッ！……この糸は」

「オレだ隆……流石にこの弦は中々強度が強いぞ？」

「俺はすぐに翼を吹き飛ばそうとしたのだが、地面から糸が俺の体に巻きついて俺の体を縛った。きつと、これが彼女達の作戦なのだろう。……フフツ。

「……確かにこの糸じゃ破るまでに時間が掛かるだろうな」

「当たり前だ。何の為にオレ達がここまでしたと思ってるんだ……まあ、隆だからこれくらいなら予想は——」

「出来るだろうな。だからここら一带を爆発しようか」

「ツ!?しま——」

彼は誤る

「——ふう。いや、普通に俺ごと爆発出来るかなって思ったけど……うん、やり過ぎたな」

「ガ、ハア……ハア……」

「立ってるのはキャラルだけか。ちよつと威力強すぎたかな？」

「俺があの時自分から爆発した後、体が元に戻った時に周りを見てみたのだが……周りのほとんどが吹き飛んでおり、キャラル以外の装者達は倒れて気絶しているか、怪我をして動けない状態になっていた。また、キャラルもその爆発を咄嗟に受け止めたせいかわアウストローブはほとんどボロボロの状態で立っているのがやつとのように見えた。」

「り、隆……やつて、くれたなっ……」

「これで分かっただろ？もう抵抗するなつて」

「ツ……隆は、何も分かつ、てない……な……」

「するとキャラルはそう言つて倒れた。キャラルが言った言葉が少し気になる所だが、とりあえず今戦つていた装者とキャラルは倒すことが出来たのでせっかくだから連れて行こう。……少し後でな。」

「そういえば……未来のシンフォギアは姿が消える奴だったよ、なッ！」

「ッ!? きやあッ！」

? 俺は近づいてくる気配にギリギリで気がついて何も無い所を掴んで取り押さえる。やがて、そこから段々と姿を現したのは未来だった。未来の左手には赤色の液体が入った注射器のような物を持っていてすぐに俺はその注射器を取り上げた。

「ッ……いつくん」

「もしかしてこの液体を俺に注入するつもりだった? ……未来、詰めが甘かったな」

——バキッ

「これで対抗策ももうないだろ? 諦めろ」

? そう言って、俺は未来に諦めるように促す。しかし、未来の目は諦めるどころかまだ負けてないかのようなそんな目をしていた。何故未来は目の前でこの注射器を破壊したのに諦めないんだ? ……まさか——

「いつくん、私には気づいたのは流石だけど……オートスコアラーには反応出来なかったね」

「ッ!? 後ろ——」

「エロガキは詰めが甘いんだよッ！」

? 俺の後ろにいたのはまさかのガリイだった。よくよく考えたらガリイも光の屈折を

利用して姿を消すことが出来ることを思い出した。俺はなんとかガリイ持っていた注射器を躲そうとしたが、間に合わずにその注射器が自分の腕に刺さった。

「ツククソツツ！ガリイてめえッ！」

「これも作戦だから諦めな♪」

「いいぜツ！やってや……ツ!?体の動きが鈍いッ！」

「了子さん特製のリンカーだよ。お願い……いつくんを返してッ！」

「痛ッ……まだだ、まだ俺の意識はあ——」

「Balwisyall Nescell gungnir tron——」

？すると、聞き慣れた声が何処からかして、俺は周囲を見渡した。その声は確かに響の声だったのだが、周囲を見渡しても響の姿は見つからなかった。周りにはいないッ！なら何処だッ！

「響が近づいてる筈なのにいない……そんな筈は——」

「はーい、氷漬け♪」

「ツ！チツ……今は未来とガリイが先だな。……いや待て、なんでキャロル達がいらない」

「そ・れ・は♡」

「私達が回収したからだ」

「まさかこの作戦がここまでうまくいくとは思っても見なかったワケダ」

「ッ!?危なッ!……まさかサンジェルマン達がいるとはな」

「気がつけばそこにはキャロル達ではなく、サンジェルマン達がいって俺をまるでそこから動かさないように俺に対して一斉攻撃を仕掛けてきた。……しかし、俺は現在名無しの神で現状了子さんの薬と響以外には影響はない筈だ。だが、何かがおかしい……この状況で何故まだ響は現れない。」

「クソッ!さつきからこの場所から動けないッ!」

「ガリイさんッ!いつくんをッ!」

「分かつてるわよッ!エロガキッ!大人しくしろッ!」

「してたまるかッ!ああッ!もうめんどくさいッ!このままもう一度爆発して」

「うおおおおおおおおおおおおッッッッ!!!!」

「この声……まさか上かッ!ッ……間に合わな——」

「俺がもう一度爆発しようとしてエネルギーを貯めようとした時に、上から声がした。その声はもちろん響であり、響は俺に向かって真っ直ぐに突っ込んらできた。俺はすぐに構えようとしたが、間に合わずにそのまま……」

「捕まえたッ!もう離さないッ!」

「クッ……まさかそのまま抱きしめるとは思わなかったが、響がこつちから来てくれるとは思わなかったよ」

彼はやっとう会おう

「俺のターン、ドロウッ……フツ、俺の勝ちだシエム・ハ。俺はコッコ○ピアをマナゾーンに置いて、勝○宣言鬼○「覇」を召喚ッ！こいつはトリプルブレイカーでスピードアタッカーだッ！これで逆転だッ！」

「……シールドトリガー。ザ・クロック」

「はッ!?いい、いや待て……まだガチンコジャッチが」

「コスト13……貴様の負けだ」

「……嘘やん」

「ダイレクトアタックだ。……なかなか面白いゲームだな、このデュ○ルマスターズと言うのは」

「意外と覚えてるもんだよね……って、俺達一体何してんだろ……はあ」

「俺はシエム・ハが見してくれた水晶玉を見た後から色々なことをやってみた。正直、やってみたとは言っても同じ遊びは嫌だったので俺が知っているゲームばかりをシエム・ハと一緒にやっていた。」

「結局色々なこと試したけど……行き着くのがやっぱりゲームなんだよね」

……」

「それは……愛ですよッ！」

「うわッ!?び、びっくりしたあ……ってなんで眼鏡いんのッ!」

「それはもちろんこの僕が彼女をここまで連れてきたんしだから当たり前じゃないですかッ！」

「……本当、響?」

「うん。でも、その作戦でみんなはボロボロに……」

「眼鏡ギルティ」

「ンン、辛辣ですねえ。しかし、この作戦を考えたのはあの年増ババアですからね。クレームなら年増ババアに言ってください」

「?どうやら響達を俺の精神世界に連れてくる為の作戦を考えたのはどうやら了子さんらしい。……とりあえず、眼鏡の悪口は後で俺が伝えとこう。」

「……で、響達はこの世界に何をしに来たんだ?」

「それはもちろんりゆうくんを——」

「やってくれたなあッ!」

「ッ!?!りゆうくん……」

「?そこに現れたのはもう一人の俺だった。そこにいた俺は何故かかなり怒っており、今

すぐにも響達に飛びかかってきそうな勢いで俺達を見ていた。……ああ、そうかそうかこいつが今俺の体を好き勝手に使ってる奴か……この――

「ふざけんな馬鹿野郎ッ！」

「グハッ！」

? : そう言つて、俺はもう1人の俺を殴つた。

彼は笑えない

「ツ……痛、くねえけど何しやがるッ！」

「うっさいわッ！この変態タラシ男野郎がッ！マジふざけんよッ！最近やつと俺の社会的な物が回復しつつあるのに悪化させてどうすんじやボケエッ！」

「知るかッ！そもそも俺はお前の欲望の塊の一部に過ぎないんだよッ！だからお前が普段やりたいこととか、やってみたかった後悔を今再現してるに過ぎないから実質お前が一番の原因なんだよッ！」

「そう言うのはなッ！再現よりも自分でその作品にどのような価値観を出すかが大事なんだよッ！」

「俺はもう一人の俺に対して思いっきり殴った後、水晶玉で見た光景での出来事について言及した。しかし、向こうも俺なので俺のせいにながら色々責め口調で言ってくるのだが、どちらも俺なので実質自分を自分で責めるみたいな光景が広がっていた。」

「お前は大体——」

「お前だつてこの前——」

「えっと……この状況どうしよ？」

「この世界でもネフィリムは食べれますよ?」

「……俺を脅す気か?眼鏡」

「いえいえ、隆一くん貴方が自分から本来の立ち位置に戻すなら僕はネフィリムの力を
使いませんよ」

「……おい、俺」

「え、何?」

「なんでお前……まあ、眼鏡は分かるとして神がそちの味方についてるんだよ」

「知らん。俺この世界でゲームしかしてないし……」

「俺には今何が起きているのが全くと言っていいほど分かっていなかった。てか、俺
シエム・ハさんと仲良くなったか?ゲームしかしてないよね?……それに眼鏡の場合は
本当に知らないし、って響さんツ!?ちよつと怖いからこの目やめてツ!

「……はあ、俺の負けだ。好きにしろ」

「つてことは……」

「体を返してやるつてことだよ。よかつたな」

「やったね、りゆうくんツ!これでみんなと会えるよツ!」

「あ、ああ……てか、なんかお前潔かつたな」

「勝てないなら逃げるし、負けるなら諦める……まあ、俺はお前だからな」

？何故かすんなり体を返してくれると言われて少しびつくりしたが、なんかこう……俺
対俺みたいな考え方をしていたので正直複雑な気分だった。……つてあれ？眠気が
……

「これは、精神世界が崩れて……貴様まさかッ！」

「俺は本来の俺に体を返したただけだ。なら目が覚めても問題ないだろ？どうせ、俺に入
れ替わったらそのまま——したんだ——」

「……本当——い男——」

？なんだか俺以外が凄いアニメみたいな展開をしているように見えるが、なんだろうか
……この置いてけぼり感は？まあ……眠いからいいや。

「せい——いヒ——ンしろよ俺。じゃあな」

？そうして、俺は眠った。

♪

「あの2人は弾き飛ばされたか……まあ、仕方ないけどさ。それで？神様はまだ俺を
狙ってるのかい？」

「我は我なりの考えがあるだけだ」

「そう？……ま、もう俺は消えるだろうけど。正直この精神世界に来たら絶対に消える
運命だったし。……ただ、夢くらいは叶えたかったな」

「夢は夢で終わるだけだ。……ただ、エンキは違ったがな」

「エンキって……誰だよ」

「私の宿敵……とも言うべきか？……いや、今はそれでいい」

「最初に見た時と今じゃ、ちよつと変わったか？俺が何かしたか？」

「ゲームをしただけだ……人と短い時間だが、こんなに長い時間話すことは無かったかな。我もエンキの考え方が乗り移ったのかもしれない」

「そうか……じゃあな神様」

「……遺憾である」

「ひつでえな。……まあ、それでいいさ」

彼のポジションは変わらない

ああ……なんだろうか。まるでこの体が揺さぶら感覚、これは久しぶりに響に起こされてる感覚だ。……うん。いや、起きたよ？起きたけど少しだけ細目で目を開けると

「ねえ、りゆうくん起きてよ。この写真って何かな？りゆうくんが起きてるのは知ってるんだよ？ねえ……ハヤクオキテ？」

「わ、私達は何もしてないんだぜッ！」

「でも、いっくんと色々なことしたんでしょ？」

「そ、それは違うであります——」

——ヒュッ

「……何が、違うのかな？」

「ゆ、許して欲しいであります……」

？ただ今、この空間で地獄が出来上がっている状況です。ハッキリ言いましょう……俺が眠っている間に何があったッ!?や、やばい……とりあえずこの状況で何とか逃げ出さねば——

「りゆうくん、起きたんだね？」

「……話をしよう。あれは今から——」

「ちゃんと教えてくれるよね？リユウクン？」

「……oh」

♫

？結局、あの後俺はそのまま響と向こうで尋問していた未来に説教とお仕置きをされた後にやつと解放された。そもそも彼女達を攫つて色々したのはもう一人の俺なのだが、それ以前にポケットやカメラに写真があつたのがいけなかつたらしい。あの野郎、マジでふざけんよ。その後、俺はお仕置きされてから研究室に行つて了子さんから色々といふまでのことやその後何があつたかなど全て聞かせてもらった。

「隆くん……今回は本当に色々災難だったわね」

「いやまあ……確かに今回は振り回されてばかりでしたけど、俺って何も出来なかつたんですよね。後、その金槌をどうする気ですか？まさかこの外せない腕輪をそれで外そうって魂胆じゃないですよねッ!？」

「何言つてるのよ隆くん」

「そうですねそんなことしな「私じゃなくて弦十郎にやつて貰うから」いや俺の腕死ぬうッ!」

(エンキの傍にいた巫女か……まあ、私の腕輪がそんなことでは壊せる筈はないが、衝撃は貴様の腕にいくだろうな。諦めろ)

(いや、シエム・ハさんツ!? ちよつと酷くないっすかッ! 俺の腕が死んじゃうからッ!)
「了子くん、俺を呼んで一体どうしたんだ?」

「あ、無理だこれ……」

? 実は後から分かることだったのだが、シエム・ハさんと了子さんには因縁的なものがあつたらしい……まあ、俺にはそんなことは実際どうでもよかつた。なんせ被害は俺にしか来ないのでもう普通に嫌だった。結局、あの後どうなつたかは分かるだろ?

「ふむ……この腕輪が外せないのか」

「弦十郎くん、せっかくだからこれで殴つてもいいわよ。少しの時間ならノイズでも倒せるアイテムよ。この金槌よりも弦十郎くんは拳で破壊する方が楽でしょう」

「本当か了子くん? なら有難く使わして貰う」

(……………)

(ちよつと、シエム・ハさん? なんか無言なんですけど、どうしたんですか? ……いやいや、まさかこの腕輪が破壊されて俺の腕が吹き飛ぶとか無いですよねツ!?)

(……大丈夫だ。貴様の体は我と同じ神であるから心配する必要はない)

(そ、そうだよな……そんなことないよ——)

(だが、我も痛いものは痛い)

(あ、そっかぁー……マジで?)

「それじゃあいくぞッ! 隆一くんッ!

「いや、ちよつと司令ま——」

?そして、その数十秒後……激しい破壊音が生じたのは言うまでもない。

彼の彼女はやはりヤンデレである

？あれから2週間が経過した。今回の事件は色々と様々な諸事情があつて色々と面倒だつたらしい。その理由はやはり、翼さんのお爺さんの件やパヴァリア秘密結社の件が絡んでおり、更には今回フイーネも関係性がありそうだとして色々と後始末が大変だつたらしい。後、結局腕輪は壊れなかった……ただむちやくちや痛かつたけど。

「ふう……」

？そして、現在俺は自宅待機という名の保護観察処分を受けている途中であつた。まあ、今回暴れたのは実質俺と言う形なので仕方ないと言えば仕方ないのだが、学校の出席日数がかかなり不安である。……冬休みと春休みも学校かなあ。

「はあ、めんどくさいなあ〜」

？あれからというもの様々なことがあつた。まず、俺の体についてだ。俺の体はまだ神の状態らしいが、その力を使わなければ問題ないと言われた。更に言えばシエム・ハさんの件も暇な時か最低限の用事以外は俺に話かけて来ないと言われた。実際、俺も話すのが嫌ではないのでちよつと寂しいぐらいにしか思っていない。

「……久しぶりにエロゲーしよ」

？他にもみんなに1人ずつ謝ったり、ガリイにちよつかい出されたり、司令にしごかれたり、キャロルとゲームしたり、未来に説教されたりと……いや、考えてみたら後半からかなりおかしいよな？俺、別にしごかれる理由もないし、ガリイやキャロルに関しては暇だけじゃんツ！未来は……あ、う、うん……俺が悪かったです。

——ガチャ

「ただいま。りゆうくん買ってきたよ」

「ん？ああ、響おかえり……つてうおあツ!?」

「えへへ、りゆうくん好き♡」

「いきなり飛び込んできたら危ないだろ……たく」

？俺は響にそう言いながら頭を撫でる。……よくよく考えればこうして響が甘えてくるのもかなり久しぶりな気がする。ついこの間までは風鳴家でお世話になることがあって、自分の家に帰ること自体が少なかったが、今考えればやはり自分の家が1番落ち着くと実感する。そして、響が俺に勢いよく抱きついてきてそのまま俺をギュっつと抱きしめていると急にピタッと動きを止めた。

「……ねえ、りゆうくん誰か女の人に出会った？」

「……そんな訳ないだろ？俺はそもそも保護観察処分で家から出れないこと忘れたか？出るとしても後3日は待たないといけな——」

「そうだよねー……でも、誰かがりゆうくんを監視してたら外に出るぐらいは出来ると思うんだよ。多分、ガリイちゃんでしょ？」

「……が、ガリイな訳ないだろッ！それに、もし俺が家を出たとしても別に女子と触れ合う機会なんて——」

「そうだよねー。私も最近色々あつて忘れてたけど、この時期はアレがあつたんだよね……」

？すると、響は自分のスマホを操作してとあるニュースを俺に見してきた。そこに書かれていたことは、冬のエロゲーが色々と集まるイベントについて書かれていた。そして、そこでデカデカと写っていた写真にはゲームの脚本を書いた女性とその男性が握手をしている所が映しだされていた。う、嘘だろ？これだけで分かる筈が……

「この写真に載ってる男性ってりゆうくんだよね？」

「……………は、話をしよう響。そもそも今日ニュースが出たからってそんなすぐに——」

「りゆうくんこれ以上の言い訳をするなら……分かるよね？」

「ヒエツ……………」

？響は段々と目の色が完全に濁っていき、ハイライトがOFFになる。そして、段々と俺に近づいてどこからか出した縄とアレを取り出してじわじわと迫ってくる。この感じも久しぶりだなあ。

????????????

……いや、俺の彼女はヤンデレである。
「完」

X D 編

原作組との出会い

? ある日のことだ。俺は今回、いつものように了子さんに今の体の状態を確認して貰う為に本部にやって来た時だった。

「こんにちは。了子さんいます——」

「あ、初めまして、こんにちは」

「あッ! りゆうくんッ!」

? 俺は了子さんに体の状態を定期的に確認して貰う為に本部にやってきたら響が2人いた。よくよく考えてみよう……2人だぞ? あの響が2人……これはもうアレしかないよな。いくぞ、久しぶりの——

「逃げるんだよオオオ——ッ!」

「うえッ!? な、なんで逃げるんですかあッ!」

「りゆうくん、そっちに行ったら……」

「響どうし、痛ッ!」

「ツ……い、痛てえ。す、すみませ……へ?」

「何? いっくん」

「なんだろうか……この落ち着かない感じ。この年で未来に初対面で話される感覚って違和感が凄いんだが。それに何よりも——」

「へー……やつぱりどこを見ても私だ」

「えつと……なんかちよつと恥ずかしいかな」

「あの響が初対面での会話にも違和感がありまくりでこう……なんだろうな、響じゃない感じが凄いんだよッ! ヤバイ、考えただけで訳わかんなくなつた……」

「確かにいっくんの言う通りだよ。私だつて未だに信じられないし……」

「俺はこの状況に理解するまでに少しだけ時間が掛かつてしまったが、それでも何とかこの状況に馴染もうと頭をフル回転させていた。……しかし、俺はそんな状況の中でも特に注意すべきことがあつた。それは——」

「えつと……響?」

「何(ですか)?」

「あ、並行世界の響の方ね。……俺を見てどう思う?」

「どうつて……普通の男性に見えますけど」

「シャアッ!」

「ッ!? え、何ッ! どういうことッ!」

？俺は並行世界の響に対して少しだけ質問すると、響は俺のことを普通の男性と言ったのだ。それはつまり、並行世界の響はヤンデレではないとの証明であることが確認出来たのだ。……ただ、俺はそんな中でつい喜んでしまったので、それを見ていた響のことをすっかり忘れていたのだ。

「……ねえ、りゆうくん。今の喜び方って……ナニ？」

「ひ、響さんッ!?こ、これには訳が——」

「こっちの私、急に怖くなったんだけどッ！み、未来どうしよッ！」

「大丈夫だよ響。こっちの世界ではいつものことだから」

「い、いつものことなんだ私……でも、その男性って誰なの？私達の世界にはいなくて」「いっくんのこと？いっくんは響の幼なじみで私の親友。名前は赤間隆一って言ってるんだけど、昔から私はいっくん、響はりゆうくんって言ってたから分からないよね」

「……なんか未来が俺についての話をし始めたのだが、今はそんなことよりもなんとしても響をどうにかしなければならぬ。こんな状況が続けばきつと帰ってからもめんどくさいことになるだろう。ならばッ！」

「りゆうくん、逃げるなんて酷いよ……次はニガサナイ」

「すまない響ッ！俺が悪かったッ！変わりに今日はいっぱい甘えてもいいから許してくれッ！」

「……わ、私がそれだけで揺らぐと思つて「今ならなでなでに俺からキスもします」……きよ、今日だけだよッ！」

「よっ」

？俺は何か響に許されたので少しだけホッとする。ただ、そんな思いも束の間、俺の背後からただならぬ怒りと嫉妬を背中から感じた。俺はゆっくり首を後ろに振り向くと、ただならぬ怒りを顔にした並行世界の未来と仕方ないと思いつながらニコニコしている未来、そして顔をトマトのように真っ赤にしながら頭をショートさせている響が見えたからだ。あ、これやばい奴や。

「隆一さん、ちよつとOHANASI……いいですか？」

「な、なんででしょうか？あッ！俺はそろそろ用事が——」

「なら一緒に行きましょう。後、色々聞きたいんですか……響と付き合っていて、響の純潔を奪つて、響の過ごした日々も詳しく教えてくださいね♪」

「ヒイツ！み、未来ッ！助けてッ！」

「いっくん……」

「未来……」

「ファイト♪」

「嫌だあああああああッッッッッ！！！！」

? その3時間後、了子さんが俺の様子を見にきた時には俺は燃え尽きていたらしい……

隆一の幼なじみはメンヘラである

? 並行世界の響達がこの世界にやってきてからしばらくが経過した。あの後、響達は向こうの並行世界の響達と連携して新たな敵と戦っているらしいのだが、俺は並行世界には行けないから当たり前の日常を過ごしていた……のだが――

「並行世界からの手紙? 俺宛に?」

「うん。私、並行世界の響から預かった手紙なんだけど……渡す相手がいつくんだったから」

? どうやら並行世界から俺宛に手紙が来ていたようだ。何故、並行世界から俺宛に手紙が来るのかが気になるが、とりあえず読んでみることにした。

♫

? 初めまして……と、言うべきなのだろうか? まあ、初めましてと言っておこう。俺の名前は赤間隆一。正確にはこの世界の赤間隆一だ。さて、いきなりだが本題に入ろう……お前はもし、幼なじみがメンヘラだったらどうする? 別に手紙を返して欲しい訳ではないんだが、この世界の俺について聞いてほ――

「何書いてんの」

「ツ!?び、びつくりしたあ……響か」

「その手紙……何?」

「べ、別に怪しいものじゃないぞ。ちよつと後で渡して欲しい人がいて……」

「彼女は幼なじみの立花響だ。多分お前の世界ではどうなってるかは知らないが、彼女は俺の幼なじみ兼同居人となっている。何故同居人になっているか分かるか?それは彼女が——」

「もしかして……女子に手紙でも書くの?この前来た私達とは違う世界の人達に」

「あ、ああ。ちよつと向こうの世界が気になってさそれで——」

「……嫌、嫌嫌嫌嫌嫌嫌あああああああツツツツツツ!!!りゆうくん私を捨てないでツ!置いていかないでツ!あっちの世界に行ったらやだよツ!」

「ちよつと響さんツ!俺、向こうの世界に行けないからツ!落ち着てツ!」

「私なんて人殺しなんて言われて、みんなから嫌われて、りゆうくんに迷惑かけて、いつもいつも——」

「完全にメンヘラになってしまっているからだ。正直、あのライブの件から響の性格も変わって、未来も遠くに引越してしまつたから完全に俺に対しての依存が高まつてるんだが、これが毎日だとかなり大変だ。」

「あ……もう、響おいで」

「……うん」

「ほら、ギユツと抱きしめていいから。響が落ち着くまで頭も撫でてやるよ」

「……いっぱい撫でてくれなきゃ嫌だよ？」

「大丈夫だって、俺はここにいるから」

「本当にりゆうくんは私の傍にいる？私の傍でずっと……」

「努力はするよ。なるべく響と一緒にいられるようにな」

「…………とまあ、これが今の俺が過ごしてる世界だ。もう一人の俺もきつと響がもしかしたらメンヘラかもしれないし、もしかしたらそうでないかもしれないが……俺自身が幸せであることを願っているよ。」

♪

「……………」

「どうしたのいつくん。何が書いてあったの？」

「いや、なんでもないさ。ただ……俺って呪われてないよな？」

「ふふっ……何響みたいなこと言ってるの？」

「そ、そうだよな」

隆一のアイドルは独占欲が強い

? ある日のことだ。俺は今日、翼さんに呼ばれてそのまま本部の方に向かった。翼さんのことだから何か大事な用事でもあるのではないかと思っていたのだが……

「来たか隆一。そこに座ってくれ」

「は、はあ……つで、翼さん用事って一体何ですか?」

「……実は並行世界の奏から隆一宛に手紙を任されてな」

「……あの、この出来事前にもあったんですが。そもそも奏さんって——」

「それは私も分かっている。ただ、その渡された手紙が私も気になってな……出来れば教えてくれると助かる」

? この前も同じようなことがあった気がするのだが、実際何が書いているのかが気になっていたので、俺はとりあえずその渡された手紙を読んで見ることにした。

♫

? あ、どうも。初めまして赤間隆一っていいいます。手紙を読んでくださって本当にありがとうございます。多分、この手紙を読んでいる人はきつと僕と同じ赤間隆一だってことも多分分かります。……話は変わりますが、実は僕には彼女がいるんですが、その彼

女が天羽奏って人なんですすよね。けれど、僕の彼女には秘密があつて、実は――

「なーに書いてん……だッ!」

「あッ!ちよつと奏ッ!今僕宛の手紙を書いてるんだから邪魔しないでよッ!」

「悪かつたよ。それよりもご飯出来たぞ」

「ッ!……わ、分かつたよ。ただ、その前にさ……」

「ん?なんらあ?」

「僕の耳を毎回甘噛みしないでよッ!」

「アハハッ!悪かつたよ。食べ終わった後にしとくよ」

「?こんな感じで毎回からかつてくる奏だけど、実はその秘密は毎回奏が作る料理にあるんだ。僕でも奏の体を心配して正直かなり……いや、絶対にやって欲しくないのだが、それでも大分マシにはなった方だ。それで、いつも奏が作る料理なんだけど……」

「ほら、出来たぞ、今日はオムライスだ。あたしの愛情たっぷりに含んだスペシャルなオムライスだからゆっくり噛み締めて食べて欲しいな♡」

「う、うわあーい。嬉しい、な」

「……どうしたんだ?食べないのか?」

「ッ!た、食べるよッ!ただ少しだけでもつたいなくて……」

「そ、そうか。なら、あたしも嬉しいよ」

？普通の人なら何も知らずにそのままオムライスを食べるだろうが、僕は違う。僕はいつも奏の料理を食べる時には絶対に覚悟を持って口の中に入れる。そして、僕はオムライスをすくって口の中に入れる。そして、そのオムライスの味は普通にオムライスなのだが、たまに薬品と鉄みたいな味がするのだ。……もう分かるでしょ？

「う、うん……美味しいよ」

「本当かッ！よかったよ……あたしのが美味しかったのなら嬉しいよ」

「……か、奏……今日も指怪我してるね」

「ん？ああ、今日もちよつと失敗してな。……それよりも、あたしも実は小腹が空いててな？ちよつとだけいいか隆？」

「ッ!?ちよつと奏ッ！いい、今はやめ——」

「大丈夫だつて。今日は午後からレッスンもあるから口だけにしといてやるよ」

「……まあ、僕はいつもこんな感じで日々を過ごしています。もし、奏が向こうにいたらそれなりにですが気をつけてください。それでは……逝ってきます。」

♫

「……………」

「隆一、何を書いてあったんだ？」

「……………翼さん」

「何だ？」

「料理って……普通が一番ですね」

「……本当に何が書いてあったんだ、隆一」

RYUICHIの義理の妹は天使である

?とある日の午後、俺はこの日は休日であった為ゆっくり部屋で過ごそうと考えていたのだが、スマホでマリアさんから連絡が来たのでとりあえずファミレスで合流することになった。……あれ?このデジャブ感……まさかな。

「……来たわね隆」

「あの、用事って……あー……はい、もう分かりましたよ。手紙ですよ、手紙」

「……一応説明すると並行世界のセレナ、私の妹よ。その子が貴方宛に手紙を渡して来たの。もちろん中身は見えてないわ」

?今までの経験上、並行世界から手紙が来ることは度々あった。だが、その中身のほとんどが普通ではなかったのだ。考えてみよう、響はまだ分かる方だ。一応幼なじみである事件があったことは分かる。だが、俺はまだ会ったことのない奏さんの場合はどうだろうか?てか、俺はどうやって奏さんに出会ったんだよ。そして、何よりも――

「……マリアさん、俺はマリアさんの妹さんと全く接点がないですよ、ね?」

「ええ、私だってあの時が初めて見たのがライブの時だったんだから」

「……とりあえず手紙、読んでみますか」

「え、ええ……」

?そして、俺はその手紙の封を開けて中に入っていた紙を読み始める……

♫

?やあ、初めて。私は赤間隆一だ。と言っても君の世界とは少しだけ時間のズレがあるようだね。私の年齢は今は23歳だ。実はこの世界に来た時にズレが生じたらしくてね、今は私はもう大人になっているんだ。話は戻るが、私は実は誘拐されてアメリカのF. I. S. で働いてるんだけど、もちろんその施設から育ってナスターシャ……そちらの世界にいるかどうかは知らないが、その人に厳しく育てられたんだ。話は戻るが、実はね——

「隆一兄さんッ!」

「ん?ああ、セレナか。どうしたんだい?」

「最近、隆一兄さんとあまり会ってないから……寂しくて」

「……そうか。なら今から少しだけ休憩しようかな」

「え、でも仕事は……」

「仕事は後でまとめてやるよ。今はセレナとゆっくりお話したいからね」

?この子が僕の妹と言っているのか分からないが、名前はセレナ。俺と時期が違うがこの施設で過ごしているシンフォギア装者の1人だ。この子には姉が昔はいたんだけど、

ちよつと少し前に亡くなってね……それで、今はナスターシャと私でセレナの一応保護者の立ち位置だったんだ。けど、最近は――

「ねえ、隆一兄さん」

「どうしたんだい、セレナ」

「私、隆一兄さんの赤ちゃんを産みたいのッ!」

「グフツ!?……ど、どうしてかな?」

「あのね、私他の研究者の人達にどうやってたら隆一兄さんに好きになって貰えるか聞いてみたの。そしたらね、一人の研究者さんが『既成事実を作っちゃえば万事解決よッ!』って言うってたの」

「?……とりあえず、これはセレナの教育上良くないからナスターシャによく言つて貰おう。しかし、その前にまずこの知識を何とかしないとイケないな。」

「セレナ、赤ちゃんはどうやって産まれるか知つてるかい?」

「……分かりません」

「赤ちゃんはね? 大人になってからじゃないと産まれないんだよ」

「どうして、ですか?」

「セレナの体はまだ子供だから、大人にならないと危ないんだよ。だから今はダメなんだよ。分かった?」

「……………」

「私はその言つて、セレナに言い聞かせる。よく考えてみれば、まだセレナは子供で大人になるまでに様々な経験を知っておかなければならない。だが、このF・I・Sの研究者は何を思ったのか、やたらとセレナと俺をくつつけたがっているのだ。しかも、そんな状況がいつまでも続けば、ロリコン認定間違えなしである。……でも。」

「……私が子供だからダメなんですか？ 私は隆一兄さんのことが大好きなのにッ！」
「……セレナ？ うおあッ!？」

——ガシャーンッ！

「せ、セレナッ！ ず、ズボンを脱がそうとするなッ！ こんなの見られたら……」

「ヤダヤダッ！ 私は隆一兄さんはいつも私の気持ちをはぐらかして、今日は絶対に私のことも好きになつて貰うもんッ！」

「だからつて、何ズボンを脱がそうとするんだッ！」

「男の人はここを触ると気持ち良くなるつて研究者の人達が言つてたもんッ！」

「何故だろうか……とんでもないことになつてしまった。いや、最近はどういったことが多いのだが、こんな状況を見られれば確実に……あつ。」

「ま、まあッ！ な、何してるのッ！」

「い、いや……これには訳が……」

「隆一兄さんは他の人を見ちゃダメッ！」

「ちよ、セレナッ！や、やめ……」

「こ、これは……セレナ見守り隊に報告しなければッ！」

「いや、それは本当にやめろおおおおおおおおおおッツツツツッ!!!」

「……と、まあ……最近はこの感覚で社会的な物が穢れた研究者の手によつて天使が少しずつ小悪魔に変わっています。もし、貴方の周りにそんな穢れた大人がいないことを祈ります。」

♪

「……………」

「……えっと、どうしたのかしら隆一」

「マリアさん、貴方は素晴らしい人です」

「え、あ、ありがとう……」

隆一の姉弟子達は依存する

?とある日の放課後……俺はいつも通り学校の掃除を終えて、家に帰ろうと北口の門に向かっている途中だった。普段なら毎回響が迎えに来てくれるのだが、その日は違った。何故ならそこにいたのは……

「よお、隆一。元氣だったか?」

「……えっと、クリスマス?どうしてここにいるんだ。そもそも響は——」

「あのバカなら家で夕飯作って待ってるってよ。あたしの用事はこいつだ」

?すると、クリスマスがポケットから取り出したのは1枚の手紙だった。……もうお分かりだろうか。アレである。

「……うん。ありがと」

「ちなみに渡してきた相手は……あたしだ」

「……えっと、読む?」

「ま、まあッ!一応あたしが渡した手紙だからな。仕方ねえから読んでやるよッ!……気になるし」

?また、こんな感じで並行世界から新しい手紙が届いた。次はクリスマスに渡されたとクリ

スが言っていたが、何が書いてあるやら……

♪

？オツスツ！ワイの名前は赤間隆一やツ！多分手紙を読んてる相手も同じ隆一だと分かるぜツ！実はワイな、日本にいないで様々なテロや聖遺物を破壊する組織に入ってるな、今はまだ子供やけどきつちり仕事してるってワケや。ただ、そんなワイにも最近面倒なことがおきてな？実は——

「隆、ただいま」

「ん？なんや翼姉かいな。今日はなんでそんなポロポロやねん」

「今回はちよつとその組織の警備が厳しくてさ、ちよつと大変だったんだよ」

「それで、クリス姉は何処に行った——」

「ただいま、隆ちゃん。……やっぱり隆ちゃんの傍は落ち着くね」

「……クリス姉、足音消して近づくのやめようって何度も言ってるだろ？」

「ふふつ、ごめんね隆ちゃん。けど、隆ちゃんの近くにいるとあつたかいなあ……」

？最近、クリス姉と翼姉の距離感が格段に近くなったんや。何故こうなつたかは大体検討はついてるんやけど、やっぱり弦十郎師匠が亡くなつてから2人は大分変わったと思うで？せやけど……ワイももう思春期の男や。下手に近づかれるとその……色々と

……

「く、クリス姉……そろそろ離れて」

「ダメ。しばらくの間任務ばかりだったから隆ちゃんと過ごすの」

「……クリスばかりずるいぞツ！オレも隆にくつつくツ！」

「ちよツ!?翼姉、や、やめ、グフツ！」

「あく、やつぱり隆はいい匂いがするな。しかも体は筋肉質でいいし、オレは……」

「?そう言つて翼姉はワイの服を脱がせ始めて胸を舐め始める。言つては何だが、翼姉は汗フェチなんや。お陰で最近は何回訓練の後にはワイに近づいて匂いを嗅いだり、舐めたりしてる。ただ、それが翼姉だけじゃなくてクリス姉も……」

「つ、翼姉ツ！こんな所でそんなことやめ……つてクリス姉もなんで脱ぎ始めてんやツ
！」

「……翼ばっかりずるい。私だつて隆ちゃんの体を触りたいのに独占するから触る体積を増やしてるだけ」

「いや、そう言う問題じゃ……つて翼姉も何故脱ぐツ！」

「クリスには負けられないからな。オレだつて——」

「?そう言いながら2人はほぼ下着状態でワイの体を舐めたり触ったり、体で触れたりしてるんや。それにクリス姉は翼姉とは違うフェチだが、クリス姉は筋肉フェチだつてことは分かる。だつて、ほら……上腕二頭筋つて言いながらハアハア言ってるし。」

「ちよ、ちよつとクリスマス姉ッ！翼姉ッ！そう言うのは好きな人が出来てからやるもんやッ！」

「ッー……」

「……えつと、クリスマス姉、翼姉？」

「……もしかして、隆ちゃんは分からないの？私達の気持ち」

「え、え？」

「それとも何だ？もしかしてこの前来たあのバカみたいな装者の方がお前的には好みなのか？」

「い、いや、ちよつとワイの話を——」

「……翼」

「なんだクリスマス」

「この際だから隆ちゃんを2人だけのものにしようか」

「ああ、それがいい……」

「へ？ちよ、クリスマス姉、翼姉、一体何を……あつ」

※この先は手に力が入らなかつたのか分からないがこの先は字がまともに書かれていなかったのので読めなくなっていた。

「……………」

「えっと、俺もう帰りますね」

「あ、ああ……なんかわりいな」

「後、このことは翼さんには内緒で」

「それがいいよな……うん」

RYUICHIの博士はデレが可愛い

「……………」

「どうしたんデスカ？お兄さん」

「いや……………なんかもう慣れてきちゃってさ。手紙だろ？」

「な、なんで分かったんデスカッ！もしかしてお兄さんは預言者デスカッ！」

「ハハ、ソウカモネー……………」

？とある日の帰り道、俺は学校から家に帰る途中に切歌と出会った。切歌が俺の方に近づいて白い紙のようなものが見えた時点で大体は分かっていたが、今度は一体誰なのだろうか？

「……………えつと、ちなみに誰に渡されたんだ？」

「調デスッ！……………あ、ち、違うデスッ！確かに調は調なんデスけど……………そ、そうッ！並行世界の調から貰ったデスよッ！」

「まあ、そんなことだろうとは思ったよ。……………とりあえず読むか」

？そして、俺は近くにあったベンチに座って、その手紙の内容を読み始める。隣に何故か切歌がチラチラと覗き見しているが気にしない気にしない……………

♪

「?よ。隆一だ。……なんだ?今、適當つて思つただろ。仕方ねえだろ、俺は今この施設の管理や博士の手伝い、お姫さんの介護と色々忙しい中で手紙を書いてんだよ感謝しろ。まあ、その手紙を書ける時間があるのもLOVE眼鏡のお陰だけだな。あいつは愛について色々俺に教えてきてめんどくせえんだよ。話は戻るが俺の世界ではそこまで悪いことは起きてない……ただ、最近は一——

——ドカアーンツツツツツ

「ツ!?!おい何事だよツ!?!……まさか爆発かツ!?!」

「?俺は急いで爆発した場所に向かつて走り始める。爆発した場所はどうやら調理室で起きた爆発のようだ。しかし、調理室を使う人物は大体限られてくるので、その爆発させた人物は大方予想が出来る。今、お姫さんは目覚めたばかりで歩くのもやつとな状態だ。それに博士も普段から料理をしないので調理室に近づくことはない。なら、やはり

「てめえの仕業かツ!LOVE眼鏡ツ!」

「ツ!?!……あ、赤間助手」

「……えっと、なんで博士が?」

「?俺が勢い良く調理室の部屋のドアを開くと、そこにいたのは、白衣を着た博士が何故

か様々な薬品を持って料理をしている姿だった。博士は見られたらまずいものでもあったのか、顔を赤くしながらワナワナと震えていた。……てか、博士はなんで料理なんかしてんだ？

「な、なんで赤間助手がこの部屋に……ま、まさかさっきの小麦粉の爆発音が聞こえて……」

「……博士」

「ッ………何？」

「普段からエナジードリンクやらカロリーメイトしかとっていない博士が何故今料理をしているんですか？」

「……赤間助手には関係ない。これはただの研究材料を作っていただけ」

「へー………そうですか」

？博士は何事も無かったかのように涼しい顔をしながら、再び料理？をし始めたのだが………完全に説得力が無かった。なにせ、必死に隠そうとしているが、近くには玉ねぎの残骸や人参の悲惨な状態、壁に刺さっている包丁などどう足掻いても料理を失敗したようにしか見えなかった。

「はあ、博士。これ、研究材料を作ってた訳じゃないですよ？これは流石に言い訳は難しござ」

「赤間助手。私の言ってることに間違いがあるとも?」

?いや、間違いだらけなんだが……

「なら、せめて何を作って——」

「ば、爆発音が聞こえたのですが大丈夫ですかッ!」

?すると、遅れてやって来たLOVE眼鏡が調理室に入って来た。その瞬間、博士はすぐに俺の背中に隠れた。俺はまるで、博士がこの出来事をやったのを知られたくないように見えた。……仕方ねえな。

「LOVE眼鏡。大丈夫だ、ただちよつと小腹が空いていたんだが……ちよつと失敗してな」

「……いい、いやちよつとどころではない気がするのですが」

「最近、ちよつと疲れてたんだ。少しくらい暴れたくなるさ」

「そ、そうですか……ッ!……いや、そう言うことにおきましよう。では、私は仕事に戻りますね」

?そう言つて、LOVE眼鏡はそのまま仕事に戻つて行つた。多分、あいつは誰がやつたかは理解してそうだし、なんか今察したような顔をしていたのでまあ……とりあえず2割ほど仕事を押し付けよう。

「……行つた?」

「ああ、行ったよ博士。……それで、何故博士は料理を？」

「……別に、ちよつとその気になっただけ」

「研究材料を作るって言つて無かつたか？」

「ツ！……ツ！……隆一のバカ」

「痛ツ！ちよ、博士ツ！蹴るな蹴るなツ！」

「はあ、はあ……」

「いや、体力無さすぎだろ。そもそも料理は誰に作るつもりだったんだ？俺の予想だとお姫さんしかいない……その所はどうなんだよ調」

「……こんな時に名前を言うのズルい。しかも、なんで分かるの……バカ」

「？そう言いながら博士は……いや、調は今度は俺の腕を思いつきりつねりながら少しだけ頬を膨らませて怒っている。まあ、可愛いからいいのだが。」

「そんなつねんなつて。痛いから……そろそろお姫さんの為に料理作らないとお姫さんがお腹空くだろう？」

「私もお腹空いた。隆一、何か作つて」

「はいはい、分かつたよ」

「……と、大体俺はこんな感じで日々を過ごしている。仕事はまあ……ほぼブラック企業に近いが、好きな女がいると悪くねえな。ま、俺の話はこれで終いだ。……じゃあな。」

♪
「普通……だと……!? そんな……馬鹿な」
「ど、どうしたんデスカッ！ お兄さんしつかりするデスッ！ お、お兄さああああ
んツツツツツ
!!!!」

RYUICHIの義理の姉達はお節介すぎる（前編）

?とある日の日曜日、俺はこの日了子さんに体の点検と言えば正しいのだろうか。……いや、違うな。正確には神の力の現状と今の自分の体の状態を診て貰う為に本部にやって来たのだが……

「こんにちは。了子さんいます、か……」

「えッ!? いーくんなのッ!……やっぱり並行世界なのね。私達のいーくんとはやっぱり時間軸が違うのね」

「……えつと、マリアさん。なんで子供になってるんで「ヴッ……」えッ!? ちよ、マリアさんッ! 急に膝から崩れ落ちてどうしたんですかッ!」

「いーくんが……私のこと、マリアさんって」

? 現在、本部の司令塔に向かったら子供のマリアさんがいて、急に膝から崩れ落ちたと思ったら、なんか絶望し始めたんだが……え、何? どういうこと?

「姉さくん。こっちの姉さんとの話を終えまし……」

「ん?……えつと、どなたですか?」

「ッ!?!?……え、あ……いい、いーくんが反抗期……うぐつ、ひっぐ……」

「えッ！ちよ、どうなってんのッ!? てか、マリアさんが2人ッ!」

「あー…そう言えば隆一は今日だったわね。他のみんなは向こうの隆一と一緒に遊んでるだろうし…私しか説明する人がいないわね。はあ、こうも隆一が色々なことに関わると、ろくなことにならないわね」

「いーくんが反抗期…いーくんが反抗期…」

「いーくんが、私のこと、知らないって…私、いーくんのお姉ちゃんなのに…」

「…ああッ！もうッ!」

♪

？その後、俺とマリアさんは何とか子供マリアさんともう1人の女性を落ち着かせた後、マリアさんから話を聞いた。どうやら、この2人は並行世界のマリアさんとその妹であるセレナさんとのことだった。…普通、逆じゃね? こう…体のスタイルと身長的なアレが。てか——

「遂に手紙ではなくこの世界に介入してきやがったか…もう何でもありだなこの世界」

「びつくりしたわ。まさか、いーくんもこの世界にいるのは分かってたけど、こんなに大きくなってると」

「姉さん、いつかいーくんも大きくなったら私達から…」

「ツ!!それは絶対にダメよツ!それはこの私が許さないわツ!」

「私もいーくんを花婿になんて許しませんツ!」

「……いや、これももう」

「完全にアウトね……しかも、それが並行世界の私だとちよつとくるものがあるわね」

「すると、マリアさんは少しだけ頭を抱えてため息をつく。しかし、並行世界のマリアさんはまだしも、その妹のセレナさんに出会うのは始めてだ。きつと、このセレナさんがあの時の手紙の人物なのだろうか?それにしてもはかなり大人びてるような……ん?そう言えば響達がいらないような……」

「うわあああんツ!マリア姉ちゃんツ!セレナ姉ちゃんツ!」

「いーくんツ!」

「……え?アレが俺?……完全に小学生の時の俺やん」

「?すると、奥から現れたのは子供の時の俺だった。いや、正確には並行世界の子供の俺なのだが。まあ、そんな些細なことは問題ないだろう。1番の問題は……」

「うぐつ、ぐすつ、ひつぐ……」

「どうしたのいーくん。何かあったの?」

「あ、あのね……ぐすつ、茶髪のお姉ちゃんとオレンジ髪のお姉ちゃんと小さいセレナお姉ちゃんが僕で遊ぼうとするの」

「ツ!! 隆一ッ! 今すぐここから離れなさいッ! 修羅場になるわよッ!」

「え? それって一体……」

? その瞬間、本部の司令塔に繋がるドアが開き、大勢の人達がそこに現れた。

「りゆうくくん。お姉ちゃんと一緒にもつと遊ぼつか♡」

「大丈夫だぞ〜隆一。怖くない怖くない♡」

「怖かった? ならこの私が隆一兄……隆一くんを慰めますから、きて♡」

「ヒイツ……」

「小学生の俺が嫌がるほど何したんだよ……てか、なるほど。これが——」
? 修羅場か。……いや、違うな。

RYUICHIの義理の姉達はお節介すぎる（後編）

「3人は反省してください。いくら子供のいっくんが可愛いからって、それ以上はダメ……分かった？」

「「はい……」」

「やつぱり、未来がいると丸く収まるから凄いやな……流石だな」

「いや、そもそも未来を相手してる時点でお前がいらない限り絶対負けねえだろ」

「あれから少しだけ時間が経った後、俺達は場所を移動して広い食堂スペースにいた。本当なら、子供の俺は襲われそうになっていたのだが、そこはやはり並行世界のマリアさんとセレナさん、そして未来が止めに入って現在に至る。ただ、何故食堂なのかと言うと、子供の俺がお腹空いたからである。」

「はい、いーくんあ〜ん♡」

「あーん……美味しいよッ！セレナお姉ちゃんッ！」

「いーくん、ちゃんと野菜も食べるのよ」

「うんッ！マリアお姉ちゃんッ！」

（（（（（可愛い……））））））

？並行世界のマリアさんとセレナさんと子供の俺と一緒に食事をしている様子は微笑ましい姿に見えて、俺以外の女性達はほっこりしながらその様子を見ていた。……しかし、そんな中で俺はただ一つ疑問に思ったことがあった。それは――

「えつと……なあ、子供の俺」

「……お兄ちゃん誰？」

「俺は……そうだな、りゆうくんって呼んでくれ」

「うんツ！りゆうくんお兄ちゃんツ！」

「……なんかややこしくなったな。まあ、いいや。それよりも一つ聞くぞ？清原拓斗って名前の奴を知ってるか？」

「知らないよ。どうして？」

「いや、気にしないでいいさ。それよりもまだご飯が残ってるぞ？早く食べないとな」

「うんツ！」

？そして、子供の俺は再びその料理を食べ始める。今、俺が質問したのはこの世界に来る前の小学生の時の友達の名前だ。もし、子供の時の俺がそれを答えられていたのなら普通は肉体と精神での誤差……少なくともボロらしき物が出てくる筈だったのだが……俺の予想だと多分――

（生まれた日に転生……そんなのあるか普通？でもなあ……）

「なあ、並行世界の隆一」

「ん？……えつと、確か奏さんでしたよね？」

「ああ、あいつからの手紙を読んだから大体分かるだろ？」

？すると、話かけてきた人物は並行世界からやって来た奏さんだった。後ろにはちよんとセレナさん……いや、セレナちゃんって言った方がいいか。その2人が俺の近くにやって来たのだ。

「こうしてみると……やつぱり隆一だな」

「いや、まあ……隆一だし。てか、俺に何か用？」

「えつと、並行世界の隆一お兄さんッ！ちよつと教えて欲しいことがあるんですッ！」

「……………」

？考えてみよう……あの並行世界の俺が手紙で危険と判断するほど、この2人は何かやらかす可能性があるのだ。そんな俺にまさか用事があるなんておかしいだろう……これは、やつぱり。

「……えつと、何してんだ？そんなに少しづつ後ろに下がって」

「いや、何か襲われそうだったんで……」

「……ああ、それなら気にしないでいいさ。あたしが好きなのはあいつだけだから並行世界の隆一を襲うなんてことしないよ。な、セレナ」

「私も、確かに並行世界の隆一兄さんはかつこいいですけど、やっぱり自分の世界の隆一兄さんが私は好きなんです」

「そ、そうか……ならなんで子供の俺を襲おうとしてたんだ？」

「それは、子供の隆一（兄さん）が可愛かったから」

「まさかのこの発言に、俺は少しだけ驚いた。ただ、逆に言えばその世界の俺はその世界の俺しか愛されない。これが正しいのか正しくないのかは分からないが、確かにどの世界の俺も愛されていることがよく分かった。」

「それで、襲わないのは分かったけど……用事って何なんだ？」

「それは……あいつの誕生日プレゼントを決めたくてさ」

「誕生日プレゼント……そう言えば、俺の誕生日が近かったな」

「そうなんです。だから私も隆一兄さんにプレゼントをあげたくて……」

「確かに考えてみれば、もうすぐ俺は誕生日だったことをすっかり忘れていた。俺も色々なことがあつて大変だったから仕方ないと言えば仕方ないのだが……誕生日かあ。」

「なあなあ、教えてくれよう。なんならお礼に何かしてやるぜ」

「え？ちよ、ちよつとッ！」

「わ、私も隆一兄さんを喜ばせたいんですッ！」

「ふ、2人共……ちよつと近い——」

「ねえ、りゆうくん……ナニシテルノ？」

「……ひ、響さん？い、いやッ！これは違——」

「歯食いしばってね。……りゆうくん」

「あつ……ぎやあああああああッッッッッ

!!!!!!

」